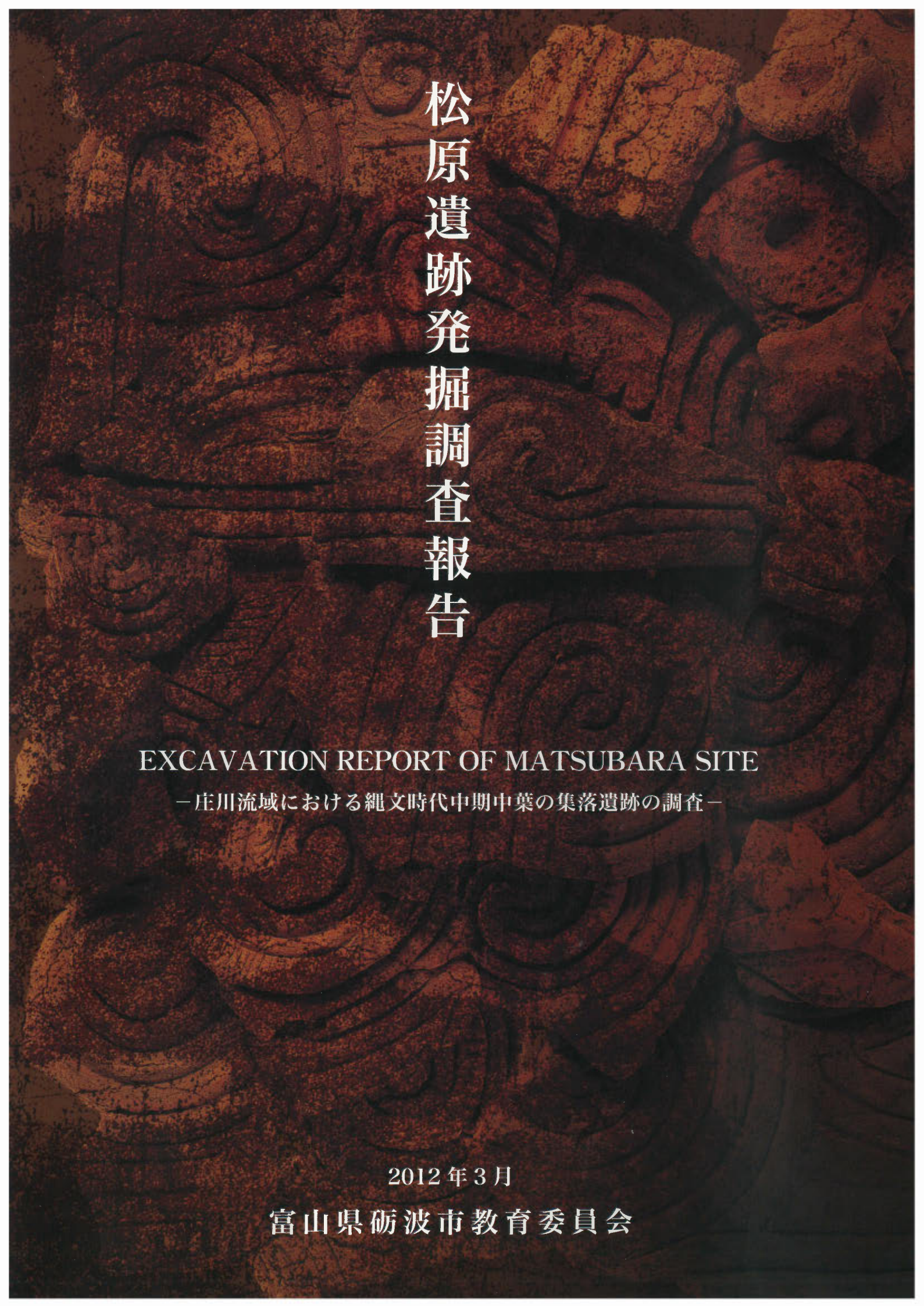


松原遺跡発掘調査報告

EXCAVATION REPORT OF MATSUBARA SITE

－庄川流域における縄文時代中期中葉の集落遺跡の調査－

2012年3月

富山県砺波市教育委員会

松原遺跡発掘調査報告

EXCAVATION REPORT OF MATSUBARA SITE

2012年3月　富山県砺波市教育委員会

上：調査区全景（縄文時代中期）　　下：竪穴建物（SI01）の石組炉

序

庄川の流域にある松原遺跡は、縄文時代中期の集落遺跡として学史的に有名です。大正時代に鉄道敷設の際に発見され、これまでに幾度となく発掘調査が行われてきました。多くの先学の研究から、本遺跡は漁労を主体とする大集落であったことが分かっています。また、出土する土器の量が非常に多く、縄文時代中期では県内屈指の遺物量を誇ります。

今回は個人住宅建設に先立ち、記録保存のための発掘調査を行いました。調査では縄文時代中期中葉の竪穴建物や川原石を伴う土坑群の存在が明らかとなりました。また、建物内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、紀元前３千年前後という年代値が得られたことも大きな成果です。

このような成果をまとめた本書が、地域の歴史資料として活用いただければ幸いに存じます。最後になりましたが、土地所有者をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成２４年３月

砺波市教育委員会

教育長　舘　　俊博

例　言

1　本書は、平成22年度に実施した富山県砺波市庄川町示野地内に所在する松原(まつばら)遺跡の発掘調査報告である。

2　調査は、国庫補助・県費補助を受けて砺波市教育委員会が実施した。発掘調査は、個人住宅の建設工事に先立ち、砺波市教育委員会が主体となり、株式会社アーキジオ（富山県高岡市西藤平蔵581）に業務委託し実施した。約2ヵ月かけて本調査を行ない、平成23年度に整理作業を実施し、報告書を作成した。

〔平成22年度・本調査〕　株式会社アーキジオ（富山県高岡市西藤平蔵581）　現場代理人：阿部将樹

〔平成23年度・遺物整理〕　同　上

3　調査面積及び調査期間は、下記のとおりである。

〔平成22年度〕　面積：156.39㎡　　現地調査期間：2010年8月20日～2010年10月18日

4　調査に関するすべての資料は砺波市教育委員会で保管している。なお、遺跡の略記号は、市名と遺跡名の頭文字（**T**onamisi **M**atsu**B**ara）と、末尾に西暦を付し「**TMB-2010**」とした。

5　調査事務局は砺波市教育委員会内に置き、事務は主任野原大輔が担当し、事務局長白江秋広が総括した。

6　調査事務局および調査担当者は以下のとおりである。

砺波市教育委員会	事務局長	白江　秋広
	生涯学習・スポーツ課課長	小西　清之（平成22年度までは生涯学習課）
	文化芸術係長	平木　宏和（平成23年9月30日まで）
		古澤　孝之（平成23年10月1日から）
	主任（学芸員）	野原　大輔　＊調査担当

7　本書の編集、執筆及び図版作成は野原と阿部が担当し執筆分担は各文末に記した。遺構写真は野原・阿部、遺物写真は野原が撮影した。遺物撮影では、高岡市教育委員会の撮影スタジオをお借りすることができた。記して謝意を表したい。

8　本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。ただし、現地調査の遺構検出時点で略記号を付したため、本文中では略記号と遺構の性格がことなる場合があることを断っておく。

掘立柱建物－**SB**、溝－**SD**、土坑－**SK**、ピット－**SP**、性格不明遺構－**SX**

9　また、本書で使用している方位は真北で、標高は海抜高である。

10　土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2001年前期版）に準拠している。

11　本文中の遺構アイコンは、考古学solution遺構アイコン標準化委員会が作成したものを使用している。

12　調査期間や整理作業期間を通じて、下記の方々から多大なるご教示・ご協力を得た。記して衷心より謝意を表する。

小島俊彰（金沢美術工芸大学），酒井重洋（富山県埋蔵文化財センター），新藤正夫（砺波散村地域研究所），
神保孝造（富山県埋蔵文化財センター），菅沼　亘（十日町市博物館），但田勇一（郷土史家），
西井龍儀（富山考古学会），町田賢一（財団法人富山県文化振興財団），

以上、五十音順・敬称略

目　次

序　文

例　言

目　次

序　章　調査と経過

1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の歴史 …… 1
3　調査の方法 …… 5
4　調査日誌抄 …… 5

第２章　地理と歴史

1　地理的環境 …… 6
2　歴史的環境 …… 9

第３章　発掘調査の成果

1　基本層序 …… 14
2　検出した遺構 …… 14
3　出土した遺物 …… 32

第４章　自然科学分析の成果 …… 63

第５章　総　　括 …… 73

報告書抄録

図版目次

Fig.1.2.1 松原遺跡の発掘箇所と住居址 昭和43年
Fig.1.2.2 遺構配置図 昭和49年
Fig.1.2.3 遺構配置図 平成10年
Fig.1.2.4 松原遺跡の範囲と発掘調査位置
Fig.2.1.1 松原遺跡の位置
Fig.2.1.2 砺波平野周辺の地形
Fig.2.1.3 芹谷野段丘の模式図
Fig.2.1.4 庄川扇状地を中心とした地形分類図
Fig.2.2.1 芹谷遺跡の石器
Fig.2.2.2 福山大堤遺跡の石槍
Fig.2.2.3 厳照寺遺跡の竪穴住居跡と土器
Fig.2.2.4 松原遺跡の 04号 竪穴建物
Fig.2.2.5 松原遺跡出土の縄文土器
Fig.2.2.6 松原遺跡出土の土製品
Fig.2.2.7 久泉遺跡の大溝と建物群
Fig.3.1.1 基本層序
Fig.3.2.1 松原遺跡遺構全体図（縄文時代中期）
Fig.3.2.2 遺構実測図 SI01 周辺遺物出土状況 ・ 遺物標高断面図
Fig.3.2.3 遺構実測図 SI01・SI 84 周辺遺構平面図 ・ 断面図
Fig.3.2.4 遺構実測図 SI01 炉 平面図 ・ 断面図
Fig.3.2.5 遺構実測図 SI01 周辺遺構断面図
Fig.3.2.6 遺構実測図 SK02・SP67 平面図 ・ 断面図
Fig.3.2.7 遺構実測図 SK06・SK07・SP60 平面図 ・ 断面図
Fig.3.2.8 遺構実測図 SK15・18・19・40
Fig.3.2.9 遺構実測図 SK20・21・37・39・70
Fig.3.2.10 遺構実測図 SK50・51・52・58・72
Fig.3.2.11 遺構実測図 SK59・65
Fig.3.2.12 遺構実測図 SP
Fig.3.2.13 遺構実測図 SP
Fig.3.2.14 遺構実測図 SP
Fig.3.3.1 遺物実測図 (1) SI01
Fig.3.3.2 遺物実測図 (2) SI01
Fig.3.3.3 遺物実測図 (3) SI01
Fig.3.3.4 遺物実測図 (4) SI01
Fig.3.3.5 遺物実測図 (5) SK02・06・07・37
Fig.3.3.6 遺物実測図 (6) SK06・07・21・37・40・50
Fig.3.3.7 遺物実測図 (7) SK20・72・73・SP26・35・36・51・53・54・64・66・71・72・75
Fig.3.3.8 遺物実測図 (8) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.9 遺物実測図 (9) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.10 遺物実測図 (10) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.11 遺物実測図 (11) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.12 遺物実測図 (12) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.13 遺物実測図 (13) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.14 遺物実測図 (14) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.15 遺物実測図 (15) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.16 遺物実測図 (16) 遺物包含層出土遺物
Fig.3.3.17 遺物実測図 (17) 石器
Fig.3.3.18 遺物実測図 (18) 石器
Fig.3.3.19 遺物実測図 (19) 石器
Fig.4.2.1 植物珪酸体含量
Fig.4.2.2 花粉化石 ・ 微粒炭
Fig.4.2.3 炭化材(1)
Fig.4.2.4 炭化材(2) ・ 植物珪酸体

表目次

Tab.1.2.1 松原遺跡における既往の調査一覧
Tab.2.2.1 栴檀野窯跡群一覧
Tab.3.2.1 遺構一覧表(1) 竪穴建物・土杭・ピット
Tab.3.2.2 遺構一覧表(2) ピット
Tab.3.3.1 遺物観察表(1) 遺構内出土遺物
Tab.3.3.2 遺物観察表(2) 遺構内出土遺物
Tab.3.3.3 遺物観察表(3) 遺構内出土遺物
Tab.3.3.4 遺物観察表(4) 遺物包含層出土遺物
Tab.3.3.5 遺物観察表(5) 遺物包含層出土遺物
Tab.3.3.6 遺物観察表(6) 遺物包含層出土遺物
Tab.3.3.7 遺物観察表(7) 遺物包含層出土遺物
Tab.3.3.8 遺物観察表(8) 遺物包含層出土遺物
Tab.3.3.9 遺物観察表(9) 石製品
Tab.4.1.1 放射性炭素年代測定結果
Tab.4.1.2 暦年較正結果
Tab.4.2.1 花粉分析・微粒炭分析結果
Tab.4.2.2 植物珪酸体含量
Tab.4.2.3 炭化材同定結果
Tab.4.3.1 土壌理化学分析結果
Tab.5.1.1 縄文土器編年表

写真図版目次

PL.1 空中写真 (1)
PL.2 空中写真 (2)
PL.3 全景（縄文時代中期）
PL.4 全景
PL.5 竪穴建物(SI01)
PL.6 竪穴建物 (SI01)・ 土坑(SK02)
PL.7 土坑
PL.8 土坑
PL.9 土坑
PL.10 土坑
PL.11 縄文土器（集合）
PL.12 縄文土器（立面①）
PL.13 縄文土器（立面②）
PL.14 縄文土器（俯瞰①）
PL.15 縄文土器（俯瞰②）
PL.16 縄文土器（俯瞰③）
PL.17 縄文土器（俯瞰④）
PL.18 縄文土器（俯瞰⑤）
PL.19 縄文土器（俯瞰⑥）
PL.20 縄文土器（俯瞰⑦）
PL.21 縄文土器（俯瞰⑧）
PL.22 縄文土器（俯瞰⑨）
PL.23 縄文土器（俯瞰⑩）
PL.24 縄文土器（俯瞰⑪）
PL.25 縄文土器（俯瞰⑫）
PL.26 縄文土器 ・ 石製品（俯瞰⑬）
PL.27 石製品

序　章　調査と経過

Investigation and progress

1　調査に至る経緯

今回の本調査は、個人住宅建設に先立つ発掘調査である。調査地は松原遺跡の中央部にあたる。

平成22年1月、土地所有者が依頼する不動産鑑定会社から個人住宅建設に際し、埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。照会の土地が埋蔵文化財包蔵地に該当するため、文化財保護法93条の1に基づく発掘の届出を行った。

同年2月に富山県教育委員会から発掘調査実施の旨の通知が届いたのを受けて、3月25・26日の2日間をかけて試掘確認調査を行った。調査対象地が宅地であり、周囲が住宅密集地であることから、人力による坪掘りを行い、1m四方の試掘ピットを6箇所、計14㎡を掘削した。その結果、明確な遺構は確認出来なかったが、厚さ30cmに及ぶ遺物包含層と大量の遺物（土器・石器類計3461点、整理箱19箱分）が見つかった。このことから開発に際し、埋蔵文化財の保護措置が必要と判断した。

4月、試掘の結果を受けて、土地所有者と工事業者、市教育委員会の3者で協議を行ったところ、土地所有者から記録保存による保護措置を求める申し出があり、本調査に向けて調整を進めることで合意した。5月、富山県教育委員会と市教育委員会が協議を行ない、国庫と県費の補助を受けて本調査を実施することになり、8月から本調査に着手する運びとなった。

2　調査の歴史

松原遺跡は、学史的に著名な縄文遺跡である。**縄文時代中期の集落遺跡**としては、県内では代表的な存在として知られる。

遺跡の発見

遺跡発見の端緒は、大正2年（1913）に遡る。砺波鉄道（加越線）敷設の際、松原地内から土盛り用の土が運び

Tab.1.2.1　松原遺跡における既往の調査一覧

No.	調査の種類	調査年	内　容	文　献
1	本調査	1968.7.17 -1968.9.15	初の本格的調査。富山考古学会会員であった岡崎卯一氏指導のもと、当時の庄川町美術協会会員が主体となり、発掘調査を実施し、住居跡を1棟を確認された。	庄川町教委 1968『庄川町松原遺跡発掘調査中間報告』 岡崎卯一 1968「庄川町松原遺跡の調査」『大境』第4号
2	試掘	1973.7.18 -1973.7.28	周辺の開発と調整のため、遺跡の範囲を把握することを目的に富山県教育委員会の指導のもと試掘を実施。松原全体を第1～3地点に分類。	小島俊彰 1973『富山県庄川町松原遺跡試掘調査報告書』富山県教育委員会
3	本調査	1974.10.11 -1974.12.13	第3地点において、遺跡の性格を把握することを目的として富山県教育委員会の指導により本調査を実施。縄文時代中期の標識遺跡として設定された。	庄川町教育委員会 1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』
4	本調査	19954.17 -1995.4.25	国道156号の拡幅で移築される住宅敷地を本調査。炉跡。土坑等の遺構を確認した。	富山県埋蔵文化財センター 1996『年報 平成7年度』
5	本調査	1998.5.18 -1998.8.10	国道156号の拡幅に先立ち、富山県埋蔵文化財課センターの強力を得て本調査を実施。住居跡3棟、溝2条など。	庄川町教育委員会 2001『富山県庄川町松原遺跡』
6	試掘	2006.3.22 -2006.3.23	個人住宅増設のため、試掘確認調査を実施。有孔鍔付土器が出土。	
7	試掘	2010.3.25 -2010.3.26	個人住宅建設に先立ち試掘確認調査を実施。大量の遺物が出土。	
8	本調査	2010.8.20 -2010.10.18	個人住宅建設に先立ち、本調査を実施。住居跡2棟、土坑・ピットなど。	砺波市教育委員会 2012『松原遺跡発掘調査報告』

出され、その時に数多くの遺物が出土し、注目された。遺跡の所在地は加越線[i]の庄川町駅と東山見駅の間に位置する。『青島村郷土史』には次のようにある。

大正二年、砺波鉄道線路工事ニ着手セル際、坪野松原ノ桑園ヲ開墾シテ其土砂ヲ線路ニ運ベリ、而シテ斯ル桑園ヲ発掘スルヤ、石器時代ノ遺跡タル石鏃・石斧及ビ土器ノ類、地中ヨリ発見セラレタリ

大正 15 年（1926）刊行の早川荘作著『越中石器時代民族遺跡遺物』において、以下のように紹介されている。

東砺波郡東山見村金屋
砺波鉄道の終点青島駅より二、三町、井波町の北約一里、俗にポンポン野と称する場所で、近く庄川の清流に接して居る。
発見遺物（摘要）

大石棒	**異色片麻岩製で頭部のみであるが一見鍔の頭部に似て、両側面に文様のあるもの**
疑問の石器	**人類学雑誌第三十三巻第八号にある同郡平村田向発見の石器の破片の如く思はるゝが一見楕形、内面は刃部で脊部は四、五分の厚味で側面に線状の模様のあるもの（図参照＊省略）**
石斧	**打・磨共普通のもの　土器　発見少なし**

早川の報告で「ポンポン野」とあるように、松原遺跡は近年まで、ポンポン野遺跡・金屋遺跡・青島遺跡などと混同される状態であった。この報告で注目すべきは**「土器発見少なし」の一文**である。本遺跡は県内屈指の土器量を誇る遺跡であるが、大正期までは石器類が主たる遺物だったのである。

乱掘期

昭和 38 年（1963）、松原墓地の西側が一部台地を削って水田化された際、多量の遺物が出土し、人々の関心を呼んだ。一部の郷土史家や美術愛好家などによって個人的な発掘・採集が行われる状態が続いたが、これは記録を伴わない発掘であり、資料は残されず、出土遺物は散逸した。市指定文化財の土器群はこの時期に発掘されたもので、出土遺物が保管されている数少ない事例である。

1968 年調査

加えて道路新設、住宅造成、水路改修などの開発が急激に進むにつれて「焦眉の急務」として文化財保護の気運が高まり、昭和 43 年（1968）、庄川町美術協会・庄川中学校・町内有識者らが、富山考古学会理事の岡崎卯一の指導で初

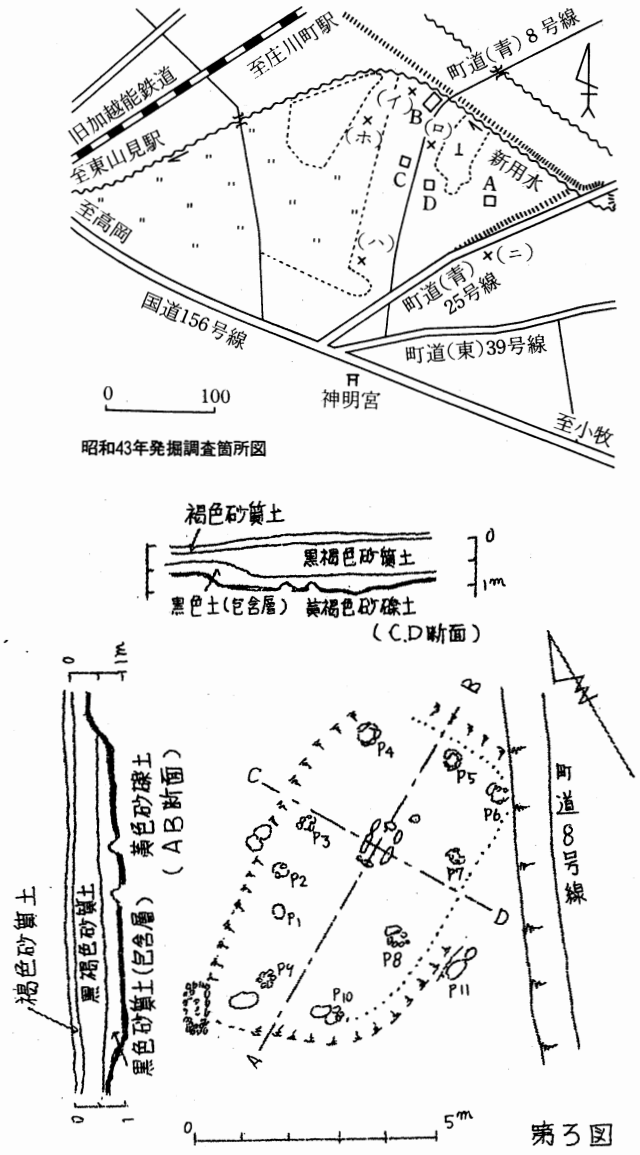


Fig.1.2.1　松原遺跡の発掘箇所と住居址　昭和 43 年

めて組織的・本格的な発掘調査を行った[ii]。この調査では、石組炉を伴う竪穴建物 1 棟と黒色の遺物包含層などが見つかるとともに、小島俊彰によって出土遺物が「古府式」に比定され、松原遺跡が**縄文時代の中期後半に帰属することが初めて示された[iii]。**

1973 年調査

続いて昭和 48 年（1973）、試掘調査が行われた。これは遺跡の範囲確認を目的に富山県教育委員会と庄川町教育委員会が

i　加越線とは庄川から石動までを結ぶ路線で当初は砺波鉄道と称したが 1919 年に加越鉄道に改称した。1915 年に福野駅－青島町駅（のちの庄川町駅）間が開通し、1922 年に全線開通した。1943 年に富山地方鉄道に合併し、1972 年に全線廃止となった。

ii　庄川中学地歴クラブ 1967「庄川遺跡について」『砺波地方史研究』第 2 号、稲垣不二男・前田淳 1968「－庄川松原地内－縄文遺跡の発掘調査に参　加して」『砺波地方史研究』第 6 号、庄川中学校地歴クラブ 1970『縄文とわたしたち』

iii　現在は古府式は北陸の土器編年において中期中葉に属するが、68 年の調査報告段階では中期後半という扱いだったものと推察される。

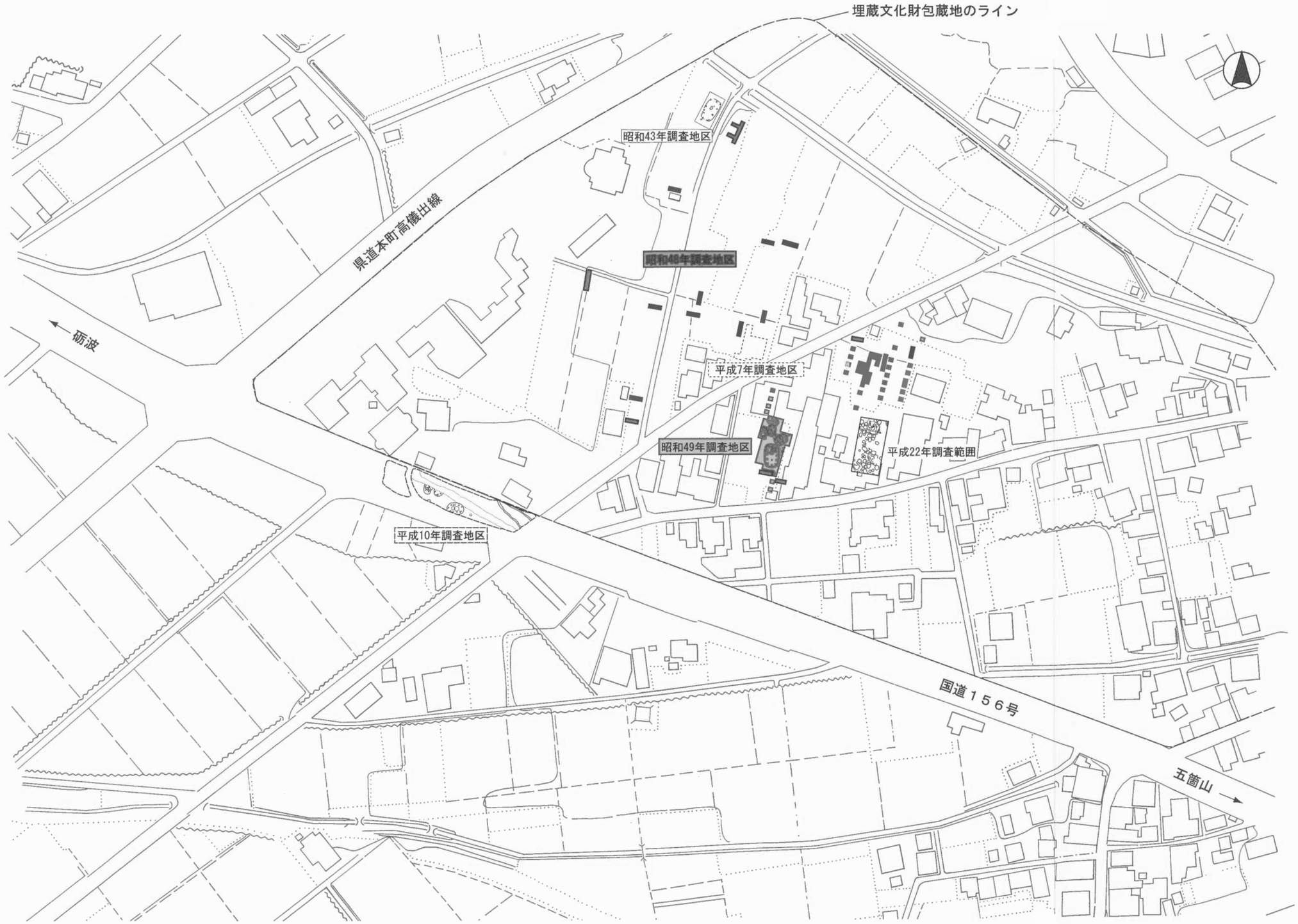


Fig.1.2.4　松原遺跡の範囲と発掘調査位置　1:2,000

行ったもので、結果として遺跡の範囲が確定し、**遺跡の主体が３地点**（第１～３地点）に分散することを把握した[i]。

1974 年調査

昭和 49 年（1974）には遺跡の性格を明らかにし、遺構・遺物の遺存状態を確認するために、第３地点を選んで本調査が行われた[ii]。調査の結果、土器は中期前葉（上山田古式）から中期後葉（串田新Ⅰ式）の範囲にあり、大半が**中期中葉**に属すことが明らかとなった。報告では遺跡の時期をⅠ～Ⅲ期まで設定し、古府式に続く串田新段階を含むⅢｂ式が資料的に充実することから**「松原式」と編年設定された。**集落全体は弧状集落と推定され、建物跡は大型竪穴建物を含めて 13 棟、ピットが５基検出された。大型竪穴建物（第４号住居跡）は長軸 11.2 m・最大幅７mを測り、平面は長楕円形である。円筒形の柱穴が 12 基検出され、地床炉が１基、南側で見つかっている。

また、石器類では石錘が膨大な量が出土したが、石鏃や打製石斧は少なく、報告では**生活基盤が川での漁労に依存**していた可能性を指摘している。

この調査によって、松原遺跡は豊富な遺物と特異な集落構造をもつ新形式遺跡として「標識遺跡」のひとつに定められた。本調査によって遺跡の学術的価値が定められた、記念碑的な調査であった。

1995･1998 年調査

その後、しばらく調査はなかったが平成７年（1995）・10 年（1998）に国道 156 号の拡幅に伴う本調査が立て続けに行われた。７年の調査では縄文中期の炉跡や土坑、土器などが見つかったが、削平が激しく、遺存状況は不良であった[iii]。10 年の調査では、縄文中期の竪穴建物３棟・溝２条のほか、土器・石皿・磨製石斧・打製石斧・磨石・凹石・石錘が出土した[iv]。３棟のうち、もっとも規模が大きい竪穴建物（住 01）は長軸７m・短軸５mを測り、74 年調査の第４号住居跡よりやや規模が劣る。

2006･2010 年調査

個人住宅に伴う調査であるが、いずれも 73 年調査の第３地点の南端にあたる。平成 18 年（2006）の試掘では有孔鍔付土器（Fig.3.3.8-78）が出土した。平成 22 年（2010）の本調査が今回の報告分である。　（野原大輔）

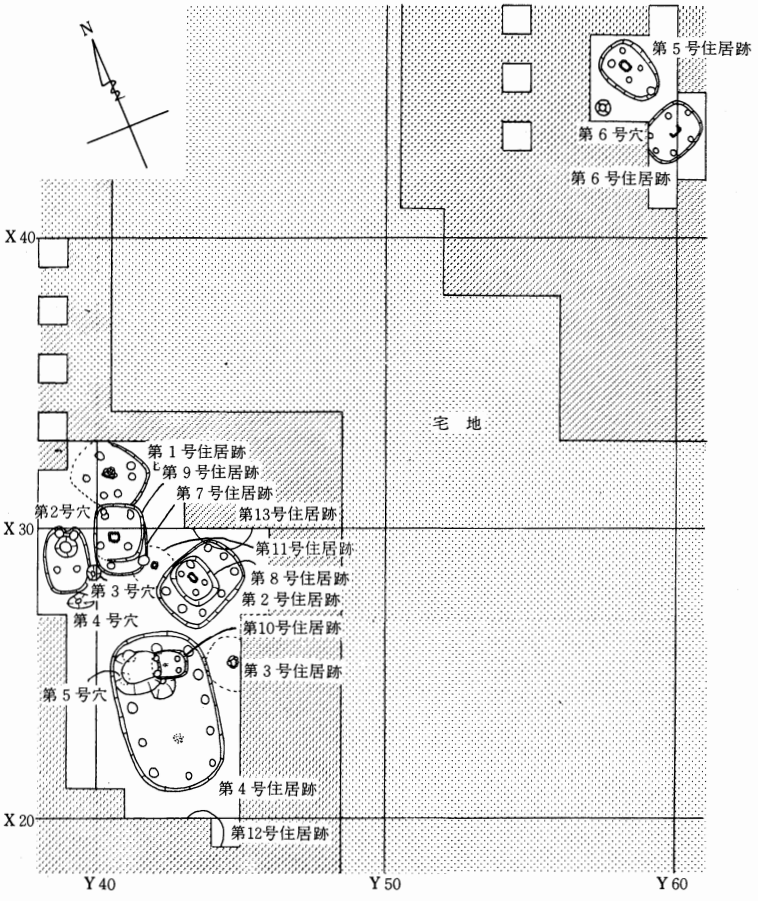


Fig.1.2.2　遺構配置図　昭和 49 年　1:500

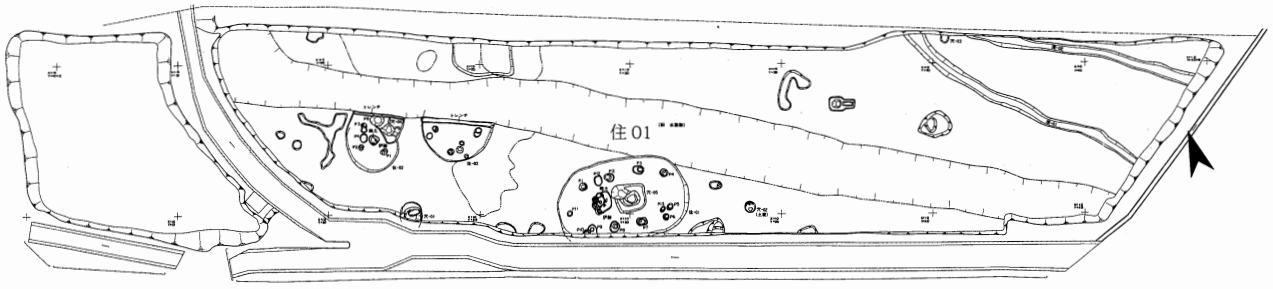


Fig.1.2.3　遺構配置図　平成 10 年　1:500

i　富山県教育委員会 1974『富山県庄川町松原遺跡試掘調査報告書』
ii　庄川町教育委員会 1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』
iii　富山県埋蔵文化財課センター・庄川町教育委員会 1996『平成７年度庄川町松原遺跡調査報告』
iv　庄川町教育委員会 2001『富山県庄川町松原遺跡』

3　調査の方法

調査の経過　現地調査は平成22年に約2ヶ月をかけて実施している。翌23年に遺物整理を行い、報告書を刊行した。

調査方法　現地調査は、文化庁文化財部記念物課編『発掘調査のてびき』[i]の発掘作業の工程に基づき、実施した。試掘成果に基づき、調査員立ち会いの下、重機による表土を除去し、残土を調査区の周囲に仮置きした。その後、人力によって黒色の遺物包含層を掘削し、遺物を取り上げながら出土状況図等の記録も行った。遺構検出を行ったのち、SI01をはじめとする遺構の掘削を行い、記録作業等を行った後、完掘となった。

調査参加者　調査には、以下の方々の協力を賜った。記して謝意を表したい。

発掘作業　上坂清三、上村良弘、中田和雄、湯浅とみこ、柳田ともえ、中川稔、野原四郎、桃井飛鳥、佐々木一男、舟木藤夫、石田哲雄（㈱アーキジオ）

整理作業　真田恭子、橋真理子、新田三喜子、渡辺賀世子、佐野睦美、新保利恵、畑シノブ、水巻麻里、宮口美香（㈱アーキジオ）

4　調査日誌抄

2010年8月20日～10月18日

8.17	基準点測量・調査範囲測量
8.20	表土掘削開始
8.21	グリッド杭設置
8.24	表土掘削完了
8.25	排水溝掘削・包含層掘削開始
9. 2	一部遺構検出開始
9. 7	包含層の遺物出土状況図のための写真測量実施
9. 9	包含層遺物の取り上げ
9.10	遺構検出全景写真撮影
9.13	SI01遺構掘削、SP完掘・写真撮影・断面図作成
9.20	SI01遺物出土状況撮影・写真測量
9.25	調査区南側・遺構検出・写真撮影・遺構半裁作業
9.27	SI01炉検出
10.12	遺構全体清掃
10.13	完掘全景写真撮影（タワー設置）
10.14	発掘作業終了・残務処理
10.18	埋め戻し完了・現地作業終了

i　奈良文化財研究所編 2010『発掘調査のてびき　集落遺跡発掘編　整理・報告書編』文化庁文化財部記念物課監修　同成社

〔2010年12月27日付け　北日本新聞〕

第2章　地理と歴史

Geography and history

1　地理的環境

松原遺跡の所在する砺波市は、富山県の西部中央にある。面積は 126.96 k㎡、人口 49,457 人（平成 24 年 2 月末現在）であり、東経 136 度 54 分～ 137 度 04 分、北緯 36 度 33 分～ 36 度 41 分に位置している。

砺波市は、地形的に 3 つに大別できる。①庄川の堆積作用によって形成された砺波平野（庄川扇状地）、②平野と山地の間に南北に細長く存在する河岸段丘・芹谷野段丘と庄川左岸段丘、③東部に射水丘陵から続く丘陵性の庄東山地で構成される。

砺波平野は、その大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地である。庄川扇状地は県内の三大扇状地（庄川・神通川・常願寺川）に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇る。扇頂部である庄川町青島から扇端部である高岡市南部の湧水帯までの距離は 13 ～ 15km、面積は 146k㎡に及ぶ。源を岐阜県荘川村に発し、高岡市を経由して日本海に注ぐ。流路延長 115km、流域面積 1180k ㎡、平均河床勾配 1/120 ～ 1/800 の規模をもつ 。庄川扇状地の勢いに押されるようにして小矢部川は平野西端部を流れ、庄川の排水河川の役目を果たしている。庄川扇状地には、地理学上著名な散村（Dispersed Settlement）が広がっており、点在する孤立荘宅とそれを囲む耕地が調和し、長閑な田園空間を形成している。

庄川は現在扇状地東部を北流しているが、かつて西にあった流れが時代とともに東に移動してきたという、いわゆる「庄川の東遷」説がある。もっとも古い主流と考えられるのは野尻川であり、中村川、新又川と移り、天正 13 年（1585）の大洪水で千保川・中田川（庄川）に移り、寛永 7 年（1630）の洪水で現在の流れとなったとみるのが定説化している。

庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成（河岸）段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までには低位段丘が存在しており、隆起扇状地堆積物が形成されている。頼成・権正寺・東保では、庄川右岸に沿う帯状の自然堤防の微高地上に集落が発達している。

高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は

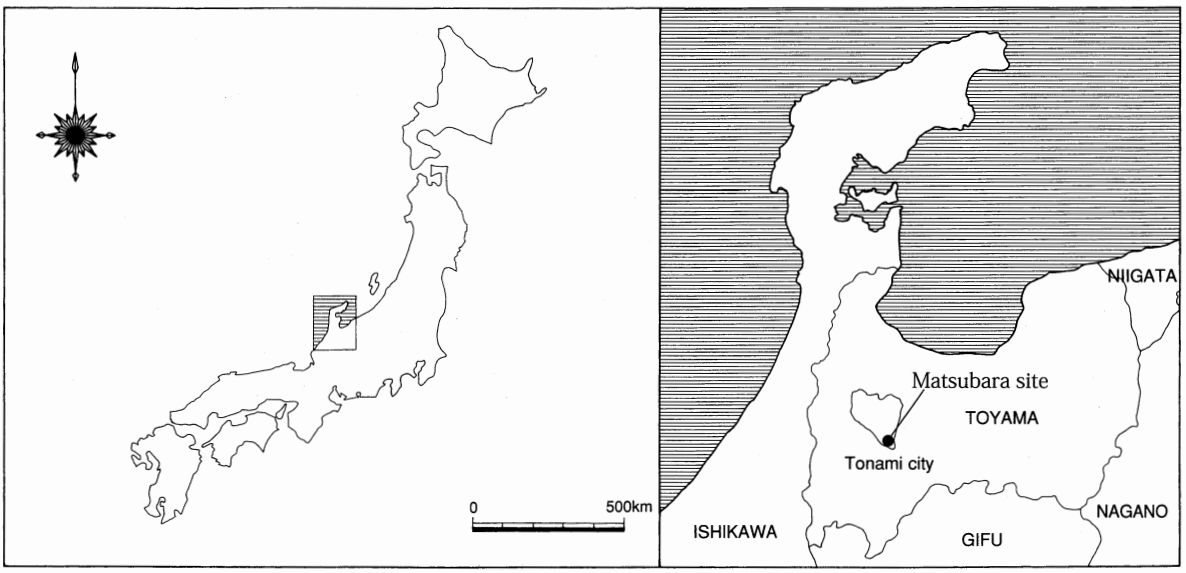


Fig.2.1.1　松原遺跡の位置

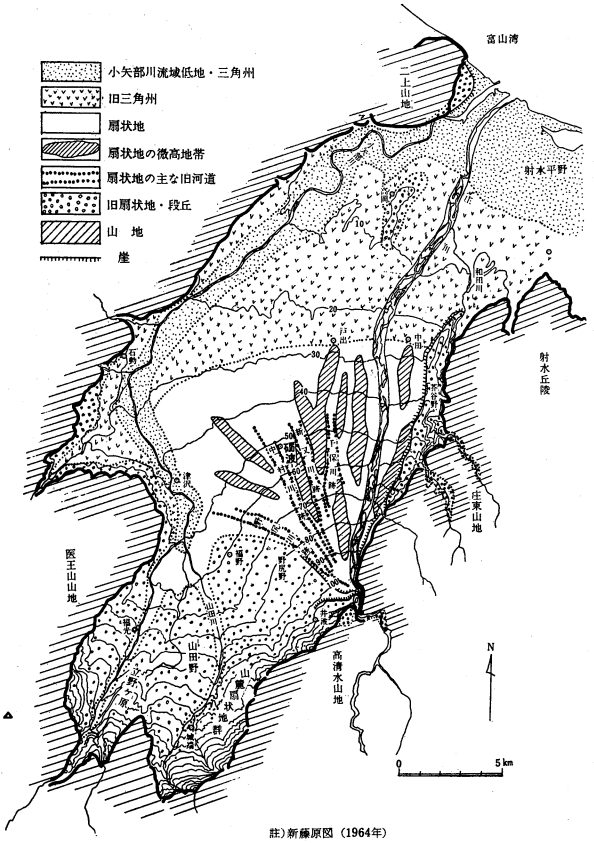
安川付近から北は大門町串田付近まで約 10km に広がり、福岡周辺では海抜 80m、段丘崖約 30m を測る。段丘南部の福山の山麓丘陵地はこの段丘地形面と同時期もしくは前後に形成された扇状地性の堆積層である。寛文３年（1663）に庄川から芹谷野用水が引かれ、段丘上に集落が展開した。

芹谷野の旧扇状地の東側と庄東山地の縫合部の凹地に和田川が発達し、両岸を侵食して低い段丘帯を形成しており、和田川流域段丘帯と呼ばれる。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長 23.5km、庄川の支流である。昭和 43 年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、川が堰き止められて増山湖ができた。

牛嶽山麓以北の丘陵性の山々は、富山県を東西に分断する射水丘陵帯の一枝群を成し、一般に庄東山地と呼ばれる。概して谷内川・和田川の流域に含まれる地域をさす。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層が基盤となる。この山地の西北に位置する天狗山（標高 192m）の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成る。

扇状地上には微高地が島状に点在し、その間を縫うように旧河道が蛇行する。そこにはマッドという植土や壌土が分布し、黒土層の堆積がみられる。黒土層は、①黒ボク層で自然堤防・中州状微高地から縁辺部に分布するもの、②湿地帯で生成される有機質層、③埋没微高地から縁辺部で生成された黒土層で、畠地土壌化・水田土壌化したもの、の３種に分類される 。

（野原大輔）



註）新藤原図（1964年）

Fig.2.1.2　砺波平野周辺の地形

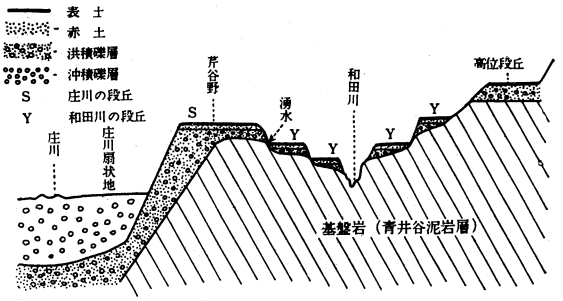


Fig.2.1.3　芹谷野段丘の模式図
（砺波市史 1984 より転載）

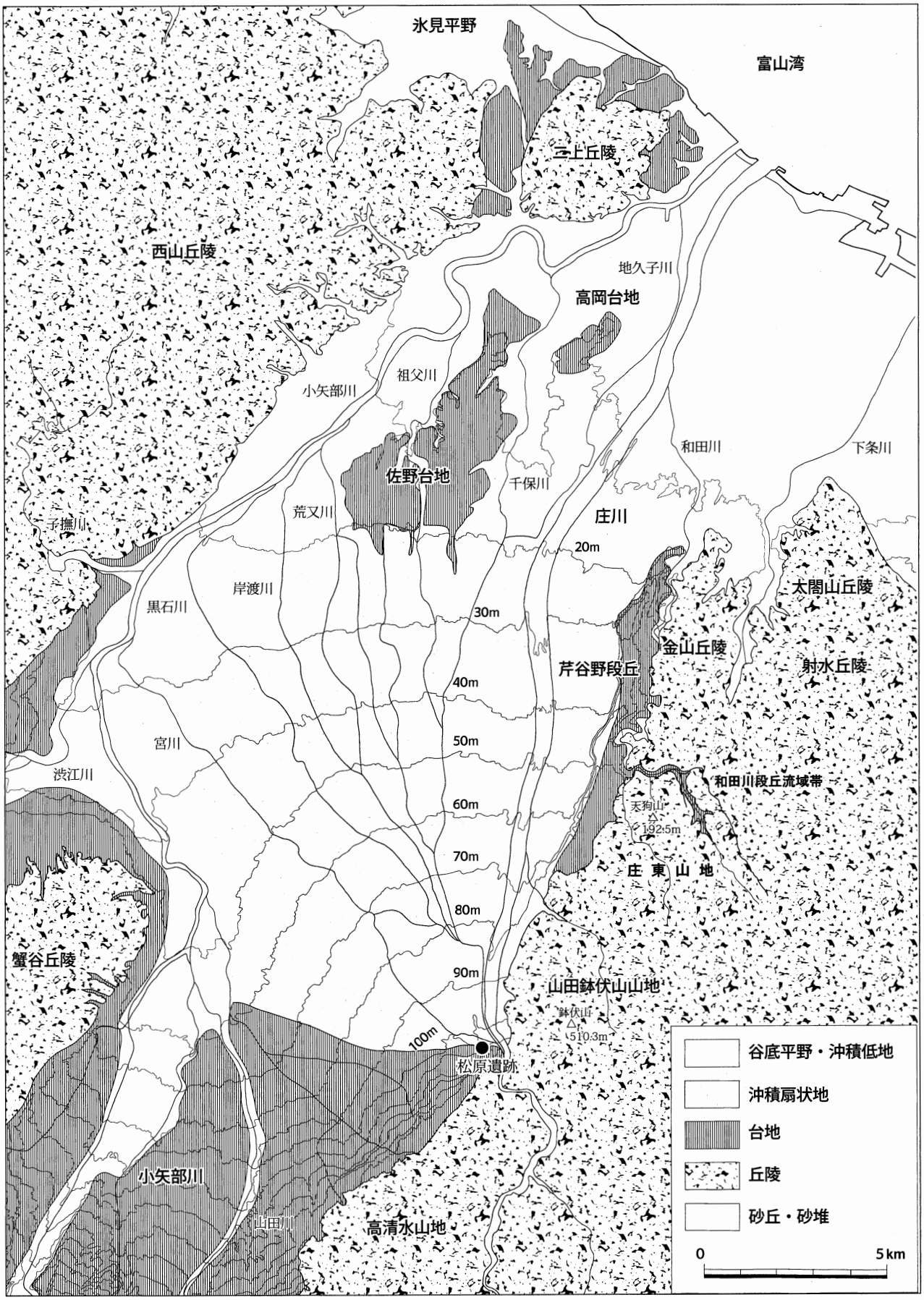


Fig.2.1.4　庄川扇状地を中心とした地形分類図　1:150,000

2　歴史的環境

本遺跡を理解するために市内の歴史的環境について概観する。

旧石器時代　旧石器時代の遺跡は庄川右岸の庄東山地や芹谷野段丘に分布し、庄東山地の芹谷遺跡・池原遺跡・増山外貝喰山遺跡・頼成Ｄ遺跡、芹谷野段丘の高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡などがある。旧石器が注意されたのは、昭和 48 年頃の芹谷遺跡が初めてであり、住蔵久雄氏の業績による。氏の発見以来、これまで 100 点以上の石器が表面採集された。それらは「立野ヶ原型ナイフ形石器」[i]と呼ばれる鉄石英・玉髄でできた小形剥片と、濃飛流紋岩類・溶結凝灰岩によるナイフ形石器や彫器で構成され、姶良丹沢（AT）降灰期に相当する。

縄文時代　芹谷野段丘以東を中心として縄文遺跡が濃密に分布する。高位段丘である芹谷野段丘では、上和田遺跡、厳照寺遺跡、宮森新天池遺跡、宮森新北島Ⅰ遺跡、頼成新遺跡、三合遺跡があり、中位段丘の和田川流域段丘帯には、高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡、増山遺跡などがある。福山大堤遺跡で表採された石槍は、濃飛流紋岩類の半月形石槍で草創期に属する。

前期は宮森新北島Ⅰ遺跡、増山遺跡でわずかに出土例があるが、県内の遺跡動態と同じく中期段階で遺跡数が増加する。芹谷野段丘縁辺の厳照寺遺跡は、松原遺跡と並び市内の縄文遺跡として最も著名である。名越仁風氏ら地元研究家や富山考古学会の働きかけで周知されるようになり、梅檀野地区圃場整備事業に先立ち昭和 50・51 年に試掘調査、昭和 51 年に富山県埋蔵文化財センターによって本調査が実施された[ii]。出土土器群は、「厳照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として中期前葉の標式であった

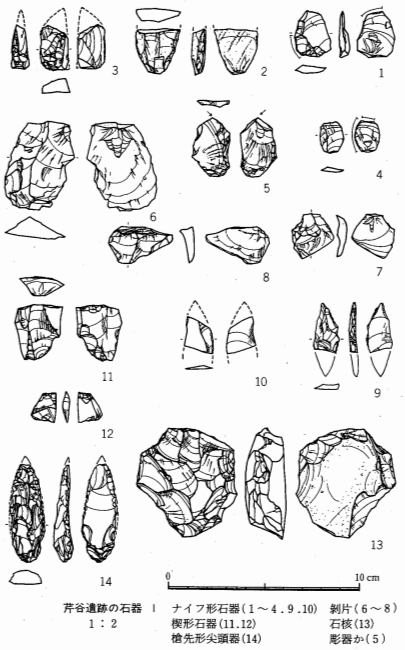


Fig.2.2.1　芹谷遺跡の石器　S=1:4
（砺波市史 1984 より転載）

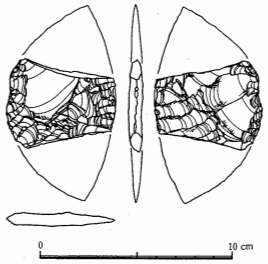


Fig.2.2.2　福山大堤遺跡の石槍　S=1:4
（砺波市史 1984 より転載）

i　奥村吉信　1987「立野ヶ原石器群と米ヶ森技法」『大境』第 11 号　富山考古学会

ii　砺波市教育委員会　1977『梅檀野遺跡群予備調査概要』（富山県埋蔵文化財センター編）

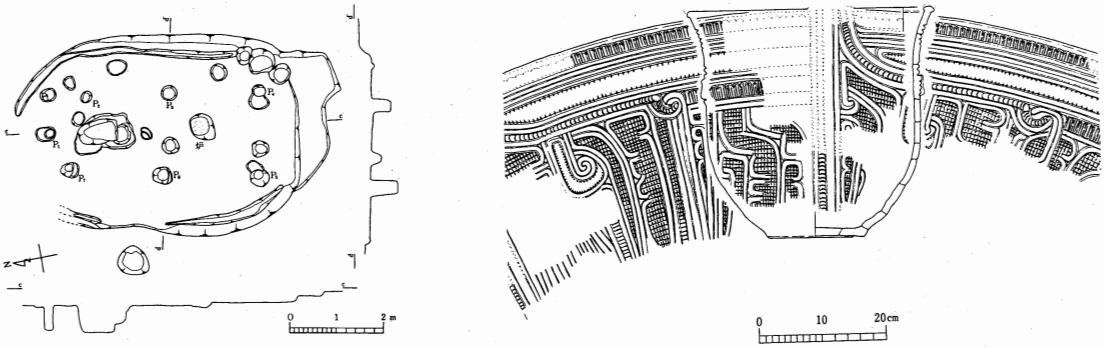


Fig.2.2.3　厳照寺遺跡の竪穴住居跡と土器　（左図）S=1:160,（右図）S=1:12
（砺波市史 1984 より転載）

が、現在は新保・新崎式に包括され扱われている。遺構では、竪穴建物跡 11 棟・埋甕 1 箇所・穴などが検出され、典型的な弧状集落であることが判明した[i]。近接する宮森新北島Ⅰ遺跡では、厳照寺Ⅰ式土器群と中期の竪穴建物跡 1 棟を確認している[ii]。

低地では平野東部の低位段丘上に宮森遺跡、徳万遺跡、東保石坂遺跡、東保遺跡（東保高池遺跡）など芹谷野段丘を抉る谷口付近に存在する。扇状地扇央部で発見された久泉遺跡は打製石斧を主体的に出土する遺跡である。低地における集落は未発見であり、縄文期の遺跡動態を把握できていない。

扇状地扇頂部には中期前葉から中葉の大規模集落、松原遺跡がある。庄川左岸の最下位段丘上にあり、遺物・遺構の質・量ともに豊富である。竪穴建物は、方形石組炉を伴う建物や長軸 11m を測る大型建物（04 号）など 10 数棟が検出されている[iii]。04 号竪穴建物からは、多くと土器とともに打製石斧、磨製石斧、石錘、擦石、石鏃が出土している。松原遺跡は土器が多く出土し、中期前葉から中葉（新崎式～上山田・天神山式）が主体を占める。庄川での漁労活動で生計をなしえたこと、そして五箇山、飛騨に抜ける交通の要衝に位置したことが大集落を形成できた要因と考えられる。

大正 13 年頃、孫子の上原地内において県内でも稀少なバナナ形石器が出土している。中尾遺跡から出土した御物石器は、市指定文化財となり福岡の厳照寺で保管されている。

弥生時代と古墳時代　弥生から古墳時代にかけては空白の時代である。社会基盤の稲作経営移行に連動し、生活圏が湧水帯（扇端部）に移動したのであろう。わずかな資料として福山大堤遺跡や安川野武士Ａ遺跡Ｂ地点、増山城跡出土の弥生土器がある。婦負郡や射水郡に連なる丘陵地帯や低位段丘上、扇状地に点在するマッド上などに未発見の遺跡が存在する可能性がある。古墳時代資料としては、高沢島Ⅲ遺跡がある。古墳時代後半の土師器の甕や高杯の一部が出土している。増山城跡内の又兵衛清水付近から内面に刷毛目調整を施した土師器片が出土している。池原には“丸山古墳”やかつて県指定史跡であった“狐塚古墳”があるが、現在古墳と見る研究者は少ない。周辺では小矢部川左岸流域から扇端部、佐野台地に遺跡が分布する傾向にある。平野東部は閑地である。

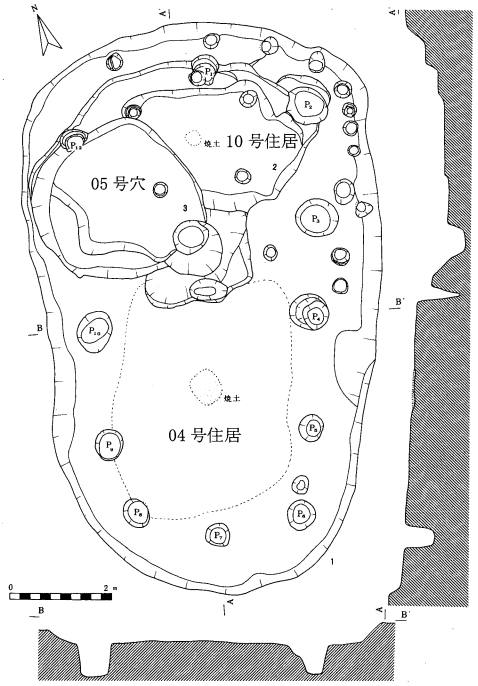


Fig.2.2.4　松原遺跡の 04 号竪穴建物　S=1:150

Fig.2.2.5　松原遺跡出土の縄文土器　S=1:10

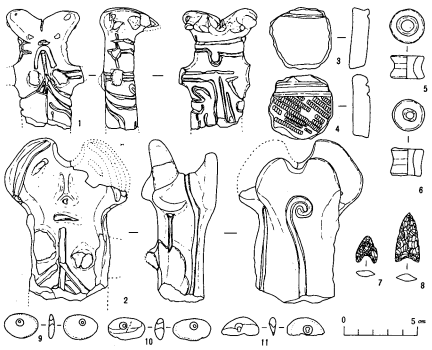


Fig.2.2.6　松原遺跡出土の土製品　S=1:5

i　富山県教育委員会　1977『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』
ii　富山県教育委員会　1978『富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』
iii　庄川町教育委員会　1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』

奈良・平安時代　考古学的な空白期間ののち、市域では扇状地から段丘上にかけて古代の遺跡が出現しはじめる。いずれの遺跡も８世紀後半以降であるのは天平 15 年（743）に発布された墾田永年私財法に端を発し、庄川扇状地東部に展開した四荘の東大寺領荘園（石粟荘・伊加流伎荘・井山荘・杵名蛭荘）の成立に連動したものと考えられる。

芹谷野段丘縁辺の宮森新北島Ⅰ遺跡[i]では、桁行３間×梁間２間、面積 32 ㎡の掘立柱建物が検出されている。平野部において高道向島遺跡、安川野武士遺跡、安川山下遺跡、薬勝寺遺跡、徳万遺跡、太田遺跡、秋元窪田島遺跡、宮村遺跡、千代遺跡、油田大坪遺跡、小杉遺跡がいずれも微高地のマッド上に存在する。

久泉遺跡では、長大な大溝と建物遺構群が検出されている[ii]。帰属時期は８世紀後半から９世紀前半と短い。建物は規則的に配置された掘立柱建物４棟と大小さまざまな規模の竪穴建物 14 棟で構成される。桁行 10 ｍを超える掘立柱建物の規模や配置には官衙的色彩も強く、竪穴建物には鍛冶工房と思われる建物も含まれ、単なる一般的な集落と評価することはできない。大溝は、溝底から８世紀第Ⅲ四半期に帰属する須恵器の有台杯が出土しており、開削時期を示すと考えられる。幅 6.9 ～ 10 ｍ、最深部 1.55 ｍ、発掘により延長 120 ｍを検出したが、地中レーダ探査により約 2.0 ㎞を確認している。久泉遺跡は、東大寺領伊加流伎荘の比定地の南西に位置しており、大溝は荘園方向に流れている。

荘園成立と期を同じくして芹谷野段丘上で大規模に須恵器生産を行っている。窯跡群は、射水郡・婦負郡に隣接する芹谷野段丘から庄東山地にかけて分布し、総称して栴檀野窯跡群という。これまで計 16 遺跡で窯が確認されており、多くは平野に面する丘陵西側斜面に立地している。もっとも早く操業されたのは８世紀第Ⅱ四半期といわれる宮森窯で、８世紀後半から９世紀にかけて生産が盛行し、10 世紀頃に衰退期を迎えるとされる。

Tab.2.2.1　栴檀野窯跡群一覧

支群	遺跡名	種別	時代	編年
福山支群	安川天皇窯	窯	奈良	8c2/4
	福山1号窯	窯・製鉄	奈良	8c3/4
	福山2号窯	窯	奈良	8c3/4
	福山小堤窯	窯	奈良	8c3/4
	福山大堤窯	窯	奈良	8c3/4
増山支群	宮森窯	窯	奈良	8c2/4
	増山団子地窯	窯	奈良・平安	8c3/4
	増山妙覚寺坂窯	窯	奈良・平安	8c4/4
	増山亀田窯	窯	奈良・平安	8c4/4
	増山池ノ平等窯	窯	奈良・平安	—
	小丸山1号窯	窯	平安	9c1/4～2/4
	小丸山2号窯	窯	平安	9c1/4～2/4
	増山外貝喰山窯	窯	奈良・平安	8c4/4～9c1/4
	増山赤坂窯	窯	平安	9c2/4～3/4
	増山外法蓮山窯	窯	平安	9c4/4
	増山笹山窯	窯	平安	9c4/4～10c1/4
	正権寺後島窯	窯	平安	9c4/4～10c1/4
	東笹鍬野1号窯	窯	平安	9c4/4～10c1/4
	東笹鍬野2号窯	窯	平安	9c4/4～10c1/4
	計19基（福山支群5、増山支群14）			

i　富山県教育委員会　1978『富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』

ii　金田章裕　2007「久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ』砺波市教育委員会

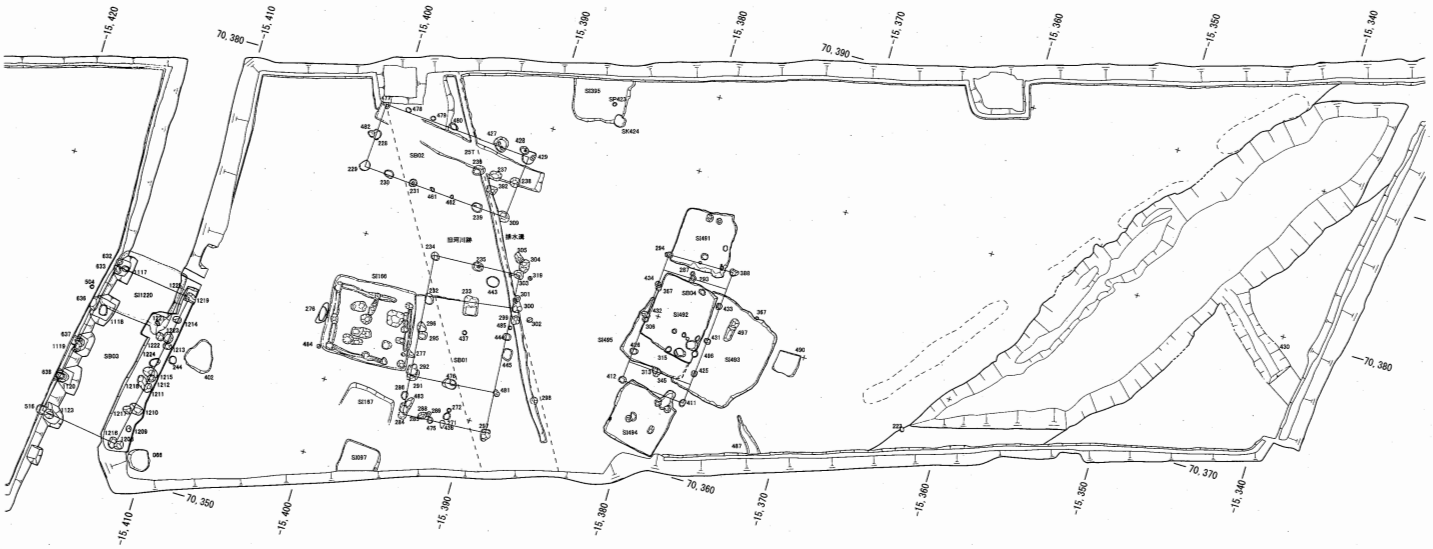


Fig.2.2.7　久泉遺跡の大溝と建物群　S=1:500

窯跡群は南北の二つの支群により成り、増山支群と福山支群で構成される。増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯がもっとも古く８世紀第Ⅱ四半期に位置づけられ、８世紀第Ⅲ四半期から第Ⅳ四半期にかけて増山支群の増山亀田窯、増山団子地窯、増山妙覚寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。９世紀前半に入ると、小丸山一・二号窯が操業され、９世紀後半から10世紀にかけて正権寺後島窯、増山外貝喰山窯、増山笹山窯、東笹鎌野窯が操業をし、以後梅檀野窯跡群では須恵器生産が衰退する。

梅檀野窯跡群が成立した８世紀後半は、「一郡一窯的」体制ともいうべき律令的土器生産体制、つまり須恵器と土師器の一体生産が確立する時期にあたる。この窯業上の画期は、律令国家の経済政策と連動するものであり、古代前半期（７世紀初頭から９世紀初頭）の手工業生産政策は行政単位ごとの集約的な手工業センターを作ることを目指した。砺波郡では、小矢部川左岸の安居・岩木窯跡群において７世紀前半から須恵器生産を始めており、その後７世紀後半から窯場が増加し、８世紀代には小矢部川左岸や芹谷野段丘上に窯跡群が展開する。それまで小矢部川左岸に生産域が集中していたが、突如として砺波平野東部に窯場が作られる。

鎌倉時代　徳大寺家領般若野荘は平野東部に広く展開し、現庄川両岸に沿って南は三谷地区から北は中田地区に及ぶ広大な荘域であった。徳大寺公能が越中国守となった大治元年（1126）頃に荘園の成立したと推定できる。般若野荘では治承・寿永の源平争乱や承久の乱で戦闘が行われている。

嘉吉元年（1441）の「薩戒記」によると徳大寺公有が越中の荘園経営の不振に陥っている。庚永元年(1342)に般若野荘の南にある三谷寺が鎌倉覚園寺塔頭蓮華院領となっていることや、武家方の地頭方により押領が起こりやむなく領地を折半する（下地中分）という事態に起因する。明応３年（1494）にあっては越中国の徳大寺家領荘園が不知行となっている。天文14年（1545）、越中に下向した徳大寺実通は、知行分にて殺害される。雄神荘の庄城（壇城、壇ノ城）に拠る石黒氏や神保氏、在地荘民のいずれの手によるものか不明であるが、家領荘園での混乱状況をうかがうことができる。安川の般若山薬勝寺の南にある公卿九人塚と呼ばれる五輪塔の墓地は、実通に関係があるのかもしれない。

荘域にある遺跡としては、東保遺跡（東保高池遺跡）、久泉遺跡、秋元窪田島遺跡、正権寺遺跡、狐塚遺跡などが存在する。12世紀後半から13世紀前半の東保遺跡(東保高池遺跡）では土師器が多量に出土し、墓地もしくは祭祀跡と考えられる集石状遺構が検出されている。秋元窪田島遺跡、正権寺遺跡は、ともに15世紀に位置付けられる。

南北朝時代　観応元年（1350）、室町幕府将軍足利尊氏と弟の直義の対立が激化、いわゆる観応の擾乱が起こる。越中守護桃井直常は反幕府勢力として各地で幕府方と抗戦し、これを鎮圧するために斯波高経が派遣された。二宮次郎左衛門入道円阿（貞光）は、越中守護職にあった斯波高経・義将父子に従い、各地で南朝方と戦っている。貞治２年（1363）の二宮円阿軍忠状に「和田城」を警固した記されている。和田城は、増山城の前身とみる説や増山城に先立ち構築された亀山城という説がある。現在の亀山城は、戦国時代前期に修築された可能性が高いが、郭が同心円状に配置していることや全体的な規模などから増山城より古い構造をもつと考えられている。応安２年（1369）、桃井直常が能登・加賀に攻め入り、桃井方が籠城する一乗寺城を幕府方の吉見勢が攻略している。吉見氏らの能登勢は、その後砺波郡の井口城、千代ヶ様城、をはじめ、新川郡の松倉城を攻めている。赤祖父川左岸にある井口城は桃井直常に属した井口氏の拠点であり、後に一向一揆方により修築され、天正９年（1581）に佐々成政により落城したと考えられる。三条山山頂に築かれた千代ヶ様城は、庄城（壇城、壇ノ城）の詰城とみられる。

室町時代　南北朝時代末期の康暦２年（1380）、越中守護は斯波氏から畠山氏に替わる。河内・紀伊・越中の三国の守護を兼帯した畠山氏は、守護代として砺波郡の遊佐氏、射水・婦負郡の神保氏、新川郡の椎名氏の三氏により統治する支配体制を組んだ。畠山氏支配期の15世紀は、中核的な居館が形成される時期であり、砺

波郡では平野西部の蓮沼城が知られる。方形単郭式の居館であり、倶利伽羅峠を越えた越中西口に位置する。冷泉為広の「越後下向日記」に「遊佐加賀守館」として登場する。

増山城郭群の北に位置する亀山城は、放生津城に本拠を置く神保氏の支城として修築したと考えられる。標高は城郭群内でもっとも高く射水・砺波郡内を望み、和田川によって放生津と結ばれるという軍事的利点も大きい。

応仁元年（1467）に勃発した応仁の乱以降、越中国内も情勢が不安定となる。文明13年（1481）には福光城主石黒右近光義が加賀の富樫正親と謀り、瑞泉寺を中心とする一向一揆と交戦する事態となる（田屋川原の合戦）。この合戦には般若野荘の百姓も参加している。以後、瑞泉寺は要害化が進み、勝興寺に比肩する勢力を誇るようになる。

長享２年（1488）、加賀の一向一揆が起こる。蜂起した一揆勢力は、加賀守護富樫正親を討ち、天正８年（1580）織田勢に滅ぼされるまで約百年間加賀国を支配することとなる。永正３年（1506）には北陸の一向一揆が一斉蜂起する。蓮沼城に本拠を置く守護代遊佐新右衛門慶親が一向一揆と対決、これを幇助するため進軍した越後守護代長尾能景は、射水・婦負の守護代神保慶宗の援護を得られず、芹谷の合戦で討死している。合戦は増山城の眼下で行われ、このときの軍事的緊張の高まりによって亀山城の整備が行われ、現在の姿に近い形になったと考えられている。

能景への非協力に強い憎悪の念を抱いた子為景は、仇討ちの名分で越中に侵攻、永正17年（1520）の新庄の戦いで神保慶宗を自害に追い込み、自らは翌年新川郡の守護代となっている。為景死後、天文12年（1543）、神保長職は富山城を築城する。このとき富山城を中心に支城群を展開、増山城は天文年間頃に神保長職によって構築されたと考えられる。

永禄２年（1559）夏以来神保・椎名両氏に反長尾の動きがあり、甲斐武田氏と結ぶ情勢があった。これに応じた長尾景虎は翌永禄三年に越中に侵攻し、神保長職の籠る富山城を攻める。敗走した神保長職は増山城に逃れたが、景虎は「越中国味方衆」を差し向けたが落城せず、景虎自ら増山に赴き陣を張ったが長職は城を捨て脱出し落ち延びた。その後、長職は神保家中の内訌に乗じて上杉輝虎（長尾景虎）と結び、永禄11年（1568）に本拠としていた増山城から出兵し、一向門徒を焼き払い、討ち捕らえている。そのことに本願寺（一向宗）は激怒し、勝興寺（安養寺）に厳重な対処を求めている。

越中中郡を支配してきた神保氏は、元亀２年（1571）頃は放生津城・増山城などを拠点としていたが、越後上杉氏や一向一揆との関わりの中で権力を失いつつあり、翌年には神保長職は没している。元亀３年（1572）頃、増山城には一向一揆勢が拠っていたと考えられる。

安土桃山時代・江戸時代　天正４年（1576）に上杉謙信は、越中をほぼ制圧するに至る。増山城に残る反上杉方の神保勢力が抗戦するも落城、謙信はさらに西に進み湯山城（森寺城）を攻撃、翌年には七尾城を攻略している。上杉謙信は天正６年（1578）に没している。

足利義昭を奉じて上洛を果たした織田信長は元亀元年（1570）、姉川の戦いで越前朝倉氏、北近江浅井氏を撃破、天下布武を目指し戦国期最大の宗教的武装勢力である石山本願寺を攻撃する。織田勢の北陸侵攻はその後、越前朝倉氏を滅亡させ、越前一向一揆勢を破り、天正８年（1580）には加賀一向一揆の拠点である金沢御堂を攻めている。織田勢の攻撃は増山城にも及び、天正９年（1581）に焼き払われ、のちに木舟城をも落としている。天正10年（1582）の本能寺の変で織田信長が没した後、翌年に佐々成政が越中を平定している。天正11年（1583）以降、越中統一を果たした佐々成政によって修築された増山城は、この時もっとも城域が広く構造的に完成していたと考えられる。天正13年（1585）、前田利家は佐々成政と交戦状態にあり、今石動城を築城して前田秀継・利秀父子に守らせている。秀継は同年、木舟城に移るが11月の大地震により城が崩壊し圧死した。成政ののち、増山城は前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したと考えられる。

（野原大輔）

第３章　発掘調査の成果

The result of excavation investigation

1　基本層序

調査区は比較的狭く、近代の井戸や埋設物による攪乱が見られたものの、調査範囲内で基本層序の大きな変化はなかった。報告書を見る限り、1974・1975 年調査の基本層序とほぼ同様と考えられる。

Ⅰ層は表土である。黒褐色 (10YR3/1) を基本とするシルト質の土層である。しまりは強く、礫や近世の廃棄物、整地のための砂も混ざっていた。耕起などでⅡ層上部が削平され、Ⅰ層には遺物を多く含む。Ⅱ層は黒色 (10YR2/1) シルト質の有機土壌であり、縄文時代の遺物包含層である。遺跡が形成された生活文化層である。縄文土器･石器が大量に出土する。Ⅲ層は黄褐色の砂層で、いわゆる地山である。Ⅲ層上面が遺構検出面で、標高が 102.60 ～ 102.90m である。調査区の南西側はⅢ層中に礫が多く含まれていた。Ⅳ層は礫層である。一部の遺構は、Ⅲ層下のⅣ層まで掘り込まれていた。

2　検出した遺構

遺構面はⅢ層上面での一層である。遺物包含層であるⅡ層中から遺構が掘り込まれているが、Ⅱ層と遺構内覆土との色調・色相が近似しており、遺構の掘り込みを判別することは出来なかった。近世の寛永通宝がⅠ層上面から１点出土しているが、Ⅰ・Ⅱ層（黒色包含層）から出土した遺物は縄文時代中期後半を主とする土器・石器であった。遺構はⅠ層から掘り込まれているものは確認されず、松原遺跡が形成されていた縄文時代中期の遺構であると考えられる。

竪穴式住居（SI）が２基、土坑（SK）が 19 基、柱穴（SP）63 基を確認した。調査区の中央から北側に住居跡、南側は土坑が多く存在する。

（阿部将樹・野原大輔）

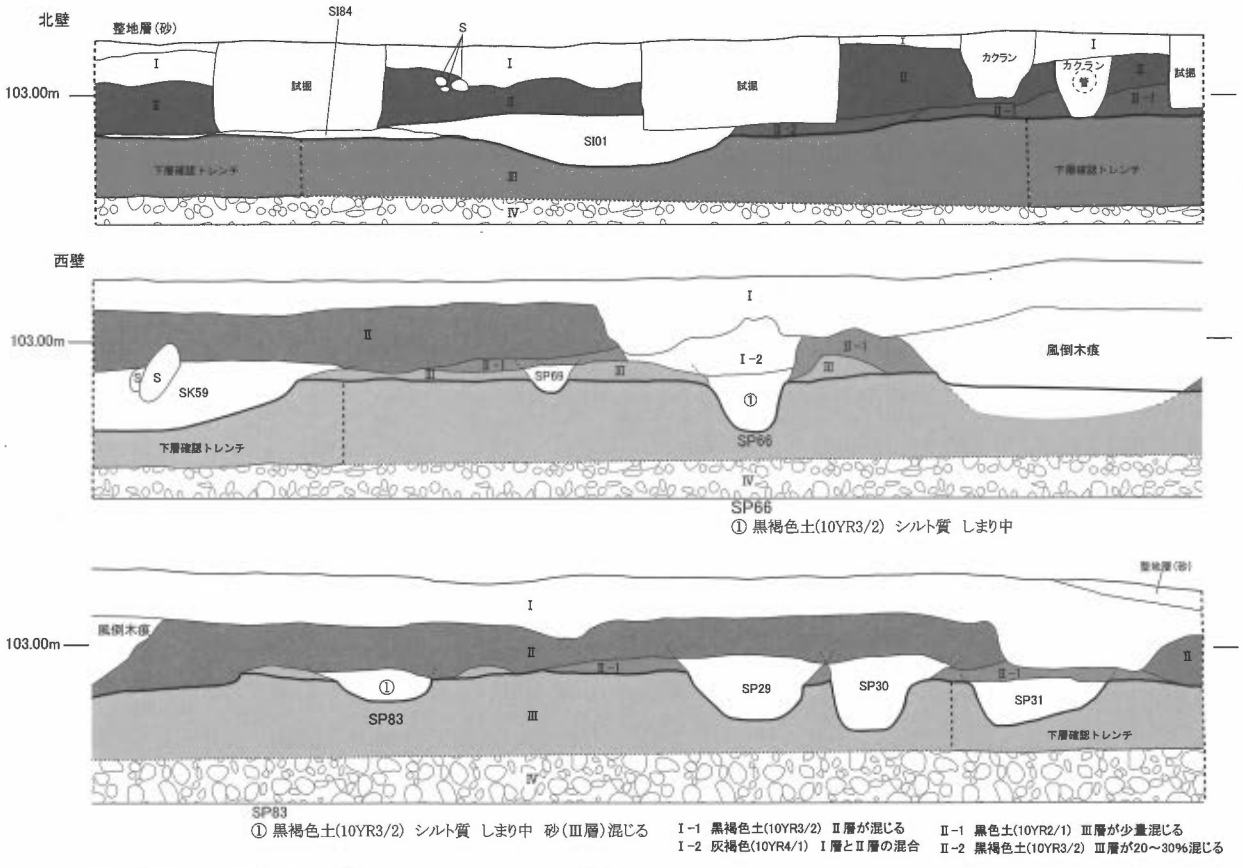


Fig.3.1.1　基本層序

Ⅰ　竪穴建物　〔Pit dwelling〕

■ＳＩ０１　〔Fig.3.2.2 － Fig.3.2.4　PL.5 － PL.6〕

規　　模　北側が調査区域外に及ぶため、全体は未検出であるが、検出できた部分での計測値では**長軸5.23m、短軸4.02m**を測る。南北方向に長い楕円形状を呈する。遺物包含層であるⅡ層（黒色包含層）掘削時から遺構範囲の上面付近で遺物が集中出土したので、**遺構の掘り込み面がⅡ層中にある**との認識を得たが、Ⅲ層との層界まで掘り下げないと掘り方を確認出来なかった。

覆土①層の黒色土層から多くの遺物が出土している。昭和50年（1975）の調査時も住居址の黒色覆土から大部分の遺物が出土しており、同様のパターンが伺える。完形に近い土器は少なく、いわゆる「吹上パターン」[i]を確認することは出来なかった。

構　　造　中央に長軸0.9 m短軸0.5 mの長方形の**石組炉**がある。石組の内部に土器片が平らに敷き並べてあったが、石組の周囲にしか土器片が残っていない。本来は炉内全体に土器が敷かれていた可能性がある。何故ならば、炉石には被熱の痕跡が見られるので明らかに火を燃やしているが、炉内部の覆土の黒色土には少量の炭化物が含まれる程度で、焼土が全く検出出来なかったからである。炉の底面の土に焼土がないのは、火の使用後に焼土を削り取った可能性もあろうが、もともと火と土の間に熱を遮断する物が存在したと考えるほうが自然である。とすれば、炉の床面に土器片が敷き並べてあったものを、使用後に他に移したと推定するのである。

覆土は炉の上面まで①層が埋没しており、短時間もしくは均質な状態での堆積が続いて埋没したと考えられる。遺物の出土範囲は炉の周辺と炉の東側周辺に集中している。遺物はⅡ層段階からSI01周辺で多く出土しているが、大半は破片であるので廃棄された遺物かも知れない。炉の周辺に相当量の土器が出土しているが、完形品ではなく多くが部分破片である。覆土には大型の川原石が含まれていた。

炉とほぼ同じ高さの②層は炭化物を少量含む。最下層の④層は、掘り込み面直上の層位である。③・④層からの遺物は少なく、③・④層は貼り床の形成層としたいところだが、③層上面での硬化が確認出来なかったので断定出来ない。また、炉を中心に長軸3.2m短軸2.6mの楕円形の掘り込みが見られる。炉の下層になるため、炉の構築以前の段階の遺構である。つまり、SI01の掘り込み造成した後、④層が堆積した後に楕円形の遺構を造り、その後に③層堆積し、貯蔵穴と思われるSK02が形成され、その後に②層堆積過程で炉が構築されている。SI01は使用期間の間に数度の改変を加えていることが判明した。

SI01の周辺には7基のピットがある。SP35・74・75・71・49・33・23であり、配置や規模から柱穴の可能性が考えられるが、平面・断面観察から柱根痕跡を確認することが出来なかった。SP74 ・33は長軸が1mを超え、柱穴としてはやや規模が大きいが、これは改築の際に2つ以上の柱穴が重複している可能性もある。

覆土の土壌分析からはSI01の**周辺には二次林や河畔林が分布し、草地環境にあった**ことが判明した。

年　　代　土器量の割に年代決定の手がかりとなる土器は少ないが、概ね**上山田・天神山式の範囲**に収まる。No.1（Fig.3.3.1）は上山田・天神山Ⅱ式に相当すると考えられるが、器形は古相を呈する。出土炭化材の放射性炭素年代測定では試料2点を分析し、それぞれ**①calBC3,084-calBC2,931、②calBC3,011-calBC2,918**の年代値を得た。

■ＳＩ８４

SI01の西側に位置する。Ⅲ層上面を床面とするため、掘り込み面は浅い。SI01同様に巨大な川原石が出土している。調査区域外に及ぶため、規模や形状は不明であるがSP31・36・61・22が付属する柱穴の可能性がある。切り合いの面ではSI84はSI01より古い時期になるが、遺物の出土がなく明確な時期は掴めなかった。

（阿部将樹・野原大輔）

i 庄和町教育委員会1965『米島貝塚』において、小林達雄が提唱した説。竪穴建物の埋没と土器廃棄の過程を人間の行動パターンから読み取ろうとしたものである。

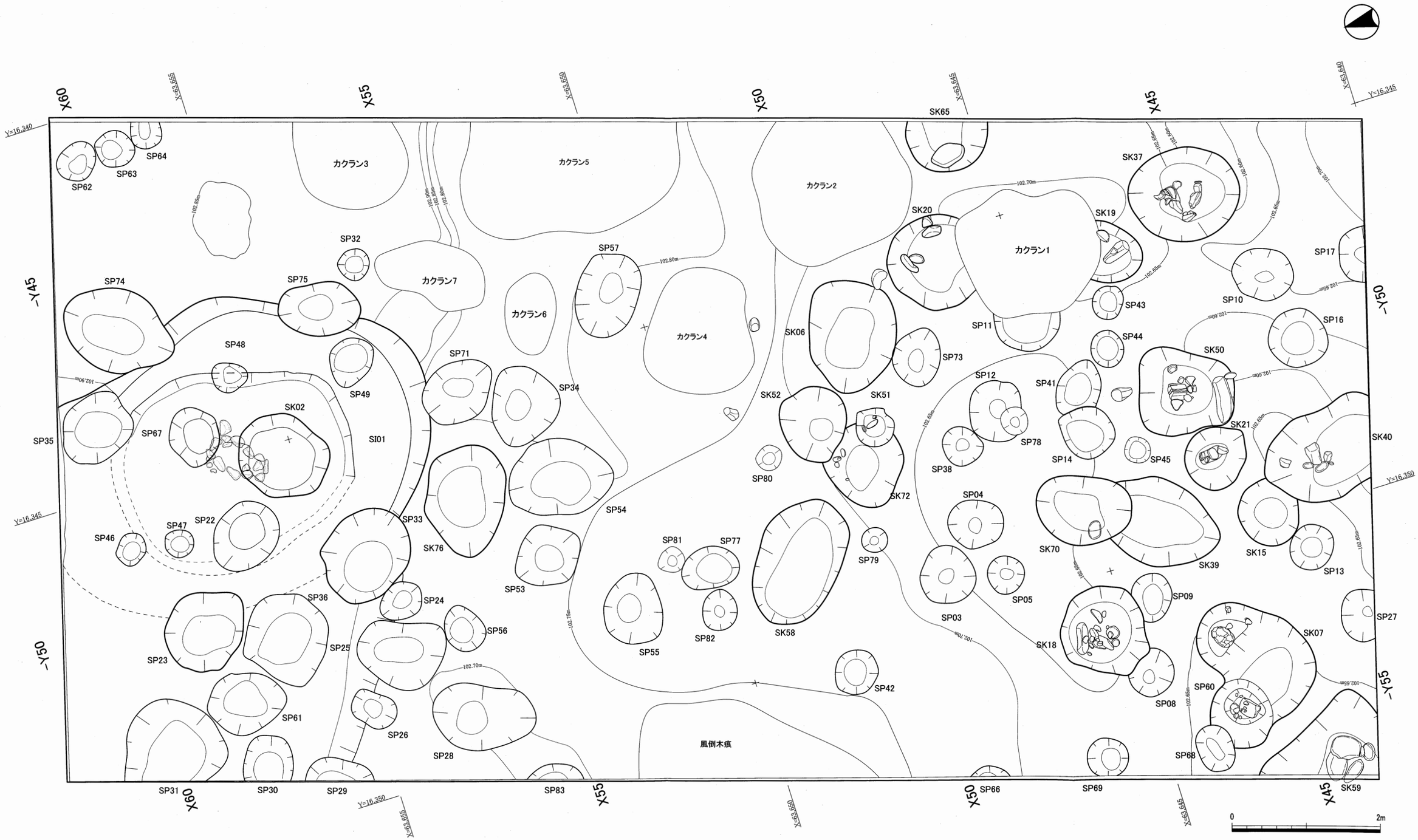


Fig.3.2.1　松原遺跡遺構全体図（縄文時代中期）　1:50

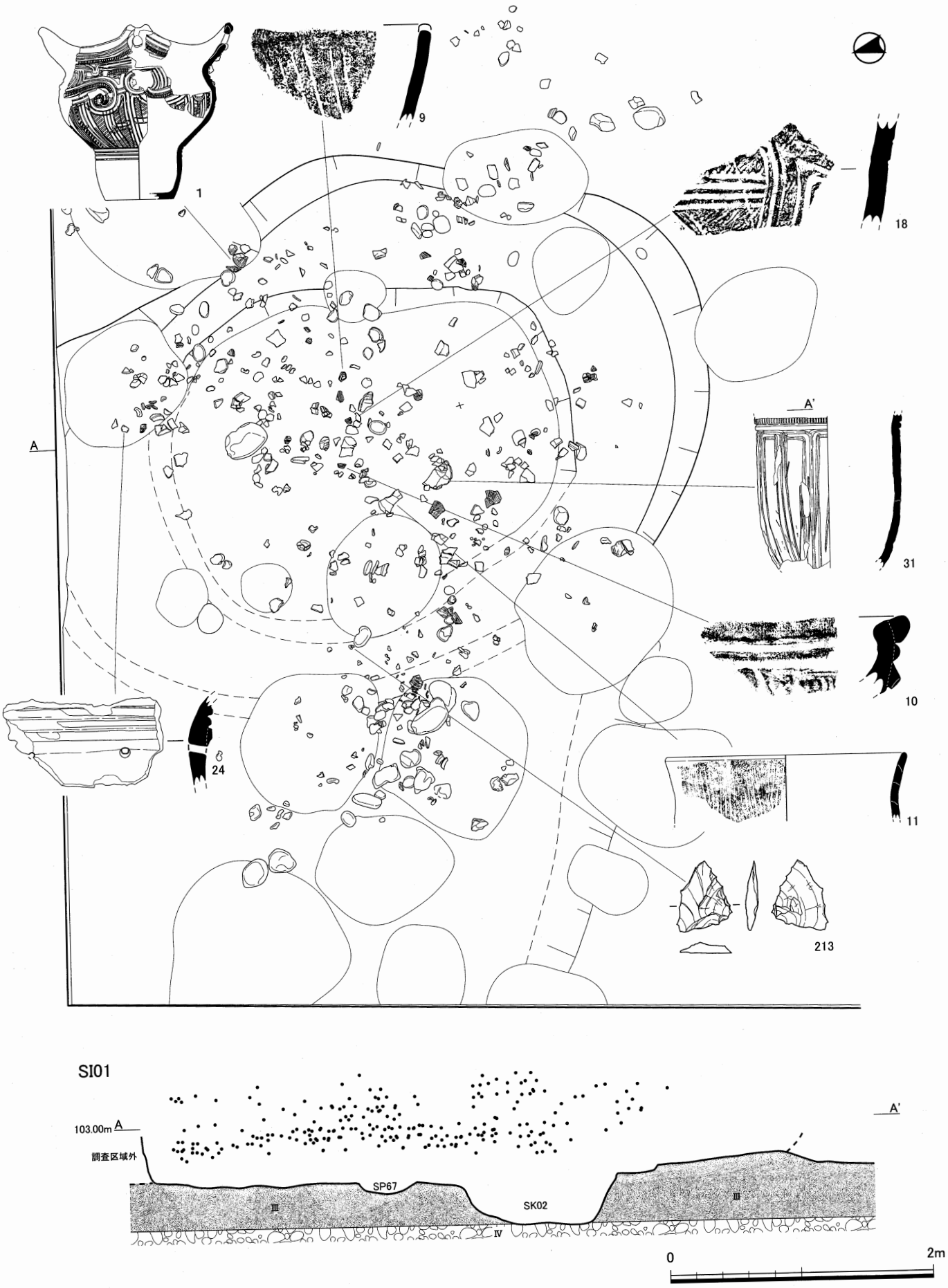


Fig.3.2.2　遺構実測図　SI01 周辺遺物出土状況・遺物標高断面図　S=1:40

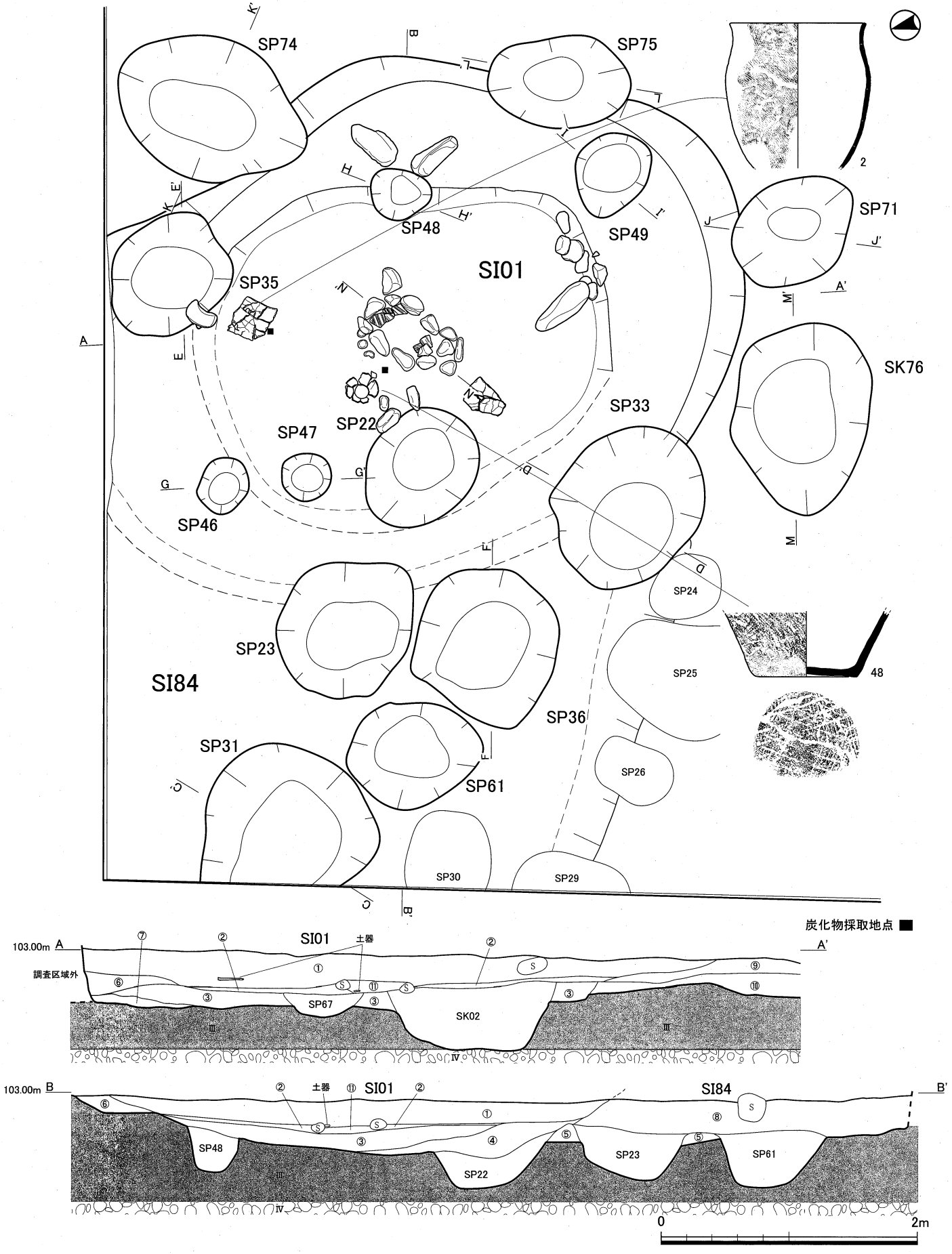
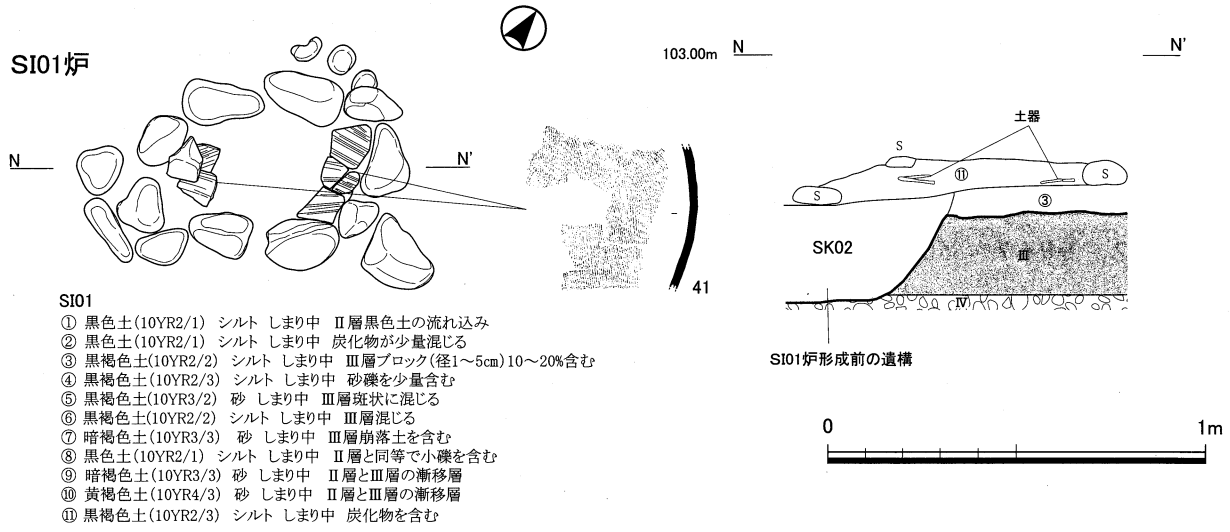
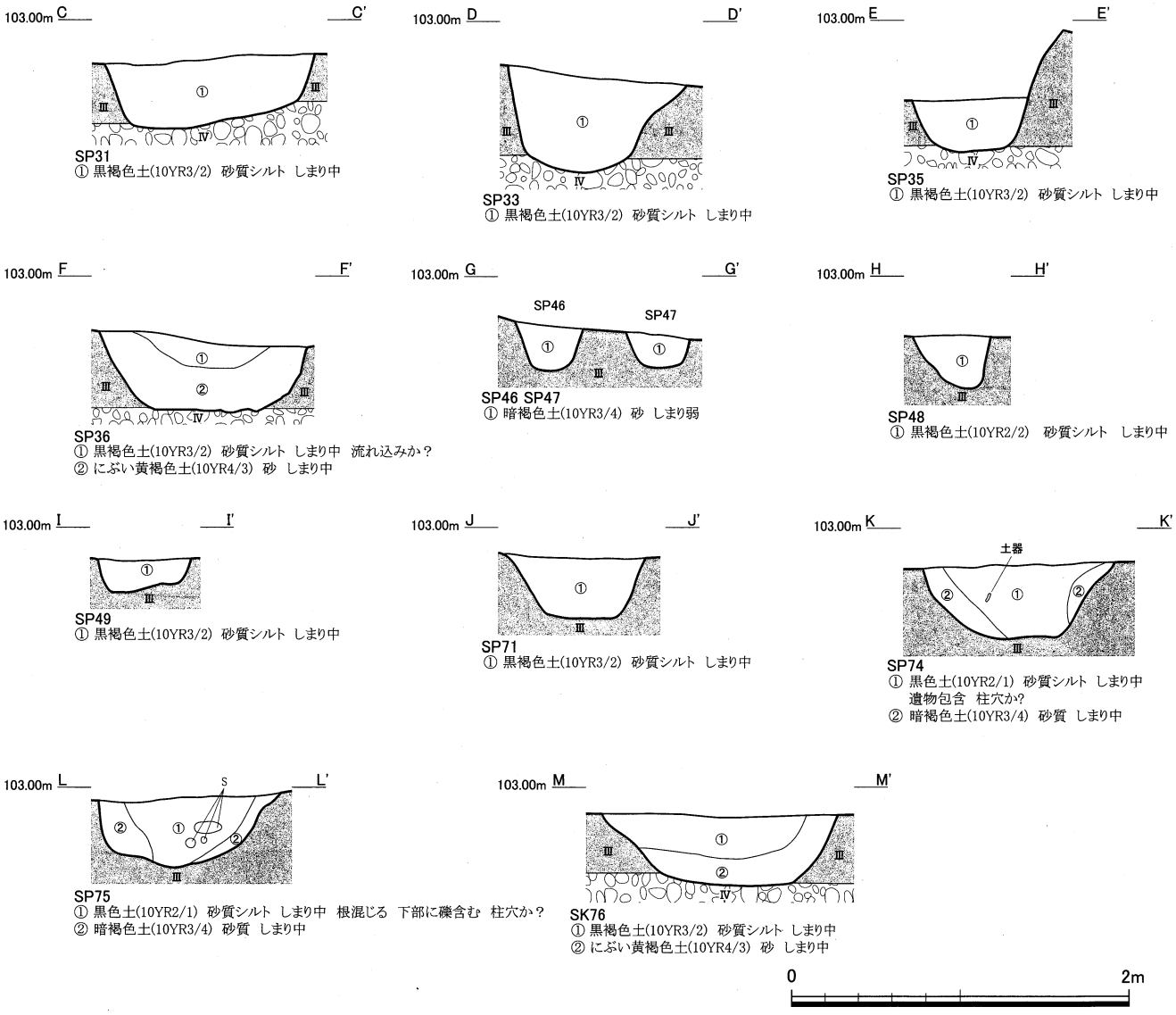


Fig.3.2.3　遺構実測図　SI01・SI84 周辺遺構平面図・断面図　S=1:40



SI01
① 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 Ⅱ層黒色土の流れ込み
② 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 炭化物が少量混じる
③ 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり中 Ⅲ層ブロック(径1～5cm)10～20%含む
④ 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中 砂礫を少量含む
⑤ 黒褐色土(10YR3/2) 砂 しまり中 Ⅲ層斑状に混じる
⑥ 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり中 Ⅲ層混じる
⑦ 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中 Ⅲ層崩落土を含む
⑧ 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 Ⅱ層と同等で小礫を含む
⑨ 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中 Ⅱ層とⅢ層の漸移層
⑩ 黄褐色土(10YR4/3) 砂 しまり中 Ⅱ層とⅢ層の漸移層
⑪ 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中 炭化物を含む

Fig.3.2.4　遺構実測図　SI01 炉　平面図・断面図　S=1:40



SP31
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中

SP33
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中

SP35
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中

SP36
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中 流れ込みか？
② にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂 しまり中

SP46 SP47
① 暗褐色土(10YR3/4) 砂 しまり弱

SP48
① 黒褐色土(10YR2/2) 砂質シルト しまり中

SP49
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中

SP71
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中

SP74
① 黒色土(10YR2/1) 砂質シルト しまり中
遺物包含 柱穴か?
② 暗褐色土(10YR3/4) 砂質 しまり中

SP75
① 黒色土(10YR2/1) 砂質シルト しまり中 根混じる 下部に礫含む 柱穴か？
② 暗褐色土(10YR3/4) 砂質 しまり中

SK76
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中
② にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂 しまり中

Fig.3.2.5　遺構実測図　SI01 周辺遺構断面図　S=1:40

Ⅱ　土　坑　〔Earthen pit〕

Fig.3.2.5 — Fig.3.2.10　　PL.5 — PL.10

■ **SK02・SP67**　SK02は、SI01の石組炉の構築前に作られた、円形の土坑である。SI01の石組炉の南西部分の直下に位置し、長軸1.18m短軸1.12m、深さ0.50mを測る。SI01の炉を検出した段階で掘り方が確認でき、炉石の底から数cm下のから一括で土器（No.49）が出土した。一括土器の一部は炉の下に入り込んでいる。炉石を外した後、遺構の掘り方が明瞭に確認できたので、SK02は炉が構築される以前に造成されたことが明らかになった。土器は大型の深鉢がほぼ一個体分出土しており、貯蔵穴の可能性がある。SI01の③層が埋まったのちに掘り込まれ、Ⅳ層上面まで達している。出土土器（No.49）は上山田・天神山式に属するものと思われ、SI01出土土器と型式的に時期差はあまり認められない。また切り合い関係から、SK02はSI03③層堆積後に構築され、SK02が埋まったのちにSI01の石組炉が構築されるという変遷が辿れるので、両者の関係は密接であると推測できる。

SP67はSI01の炉の北東部分直下に位置し、長軸0.82m短軸0.68m、深さ0.18mを測る。SK02同様にSI01構築前に造られた土坑である。遺物は出土していない。

■ **SK06**　長軸1.45m、短軸1.19mの不整円形。遺構検出段階で一括で土器（No.51．55）が出土。遺構内には土器片が数点出土しているが、礫は含まない。覆土に炭化物が混入していた。Ⅳ層上面まで掘り込んでいる。

■ **SK07・SP60**　切り合い関係からSK07よりSP60が新しい。SK07は南北方向に1.74m、東西方向に1.90mの楕円形状である。検出段階で遺構内北側の礫や土器片（No.52・53）が出土した。この付近の深さは0.34mと浅くなっている。ほぼ完形で出土した土器（No.60・上山田・天神山式）とSP06上の礫はほぼ同じ高さである。SP60の掘り込みはⅣ層上面まで達している。

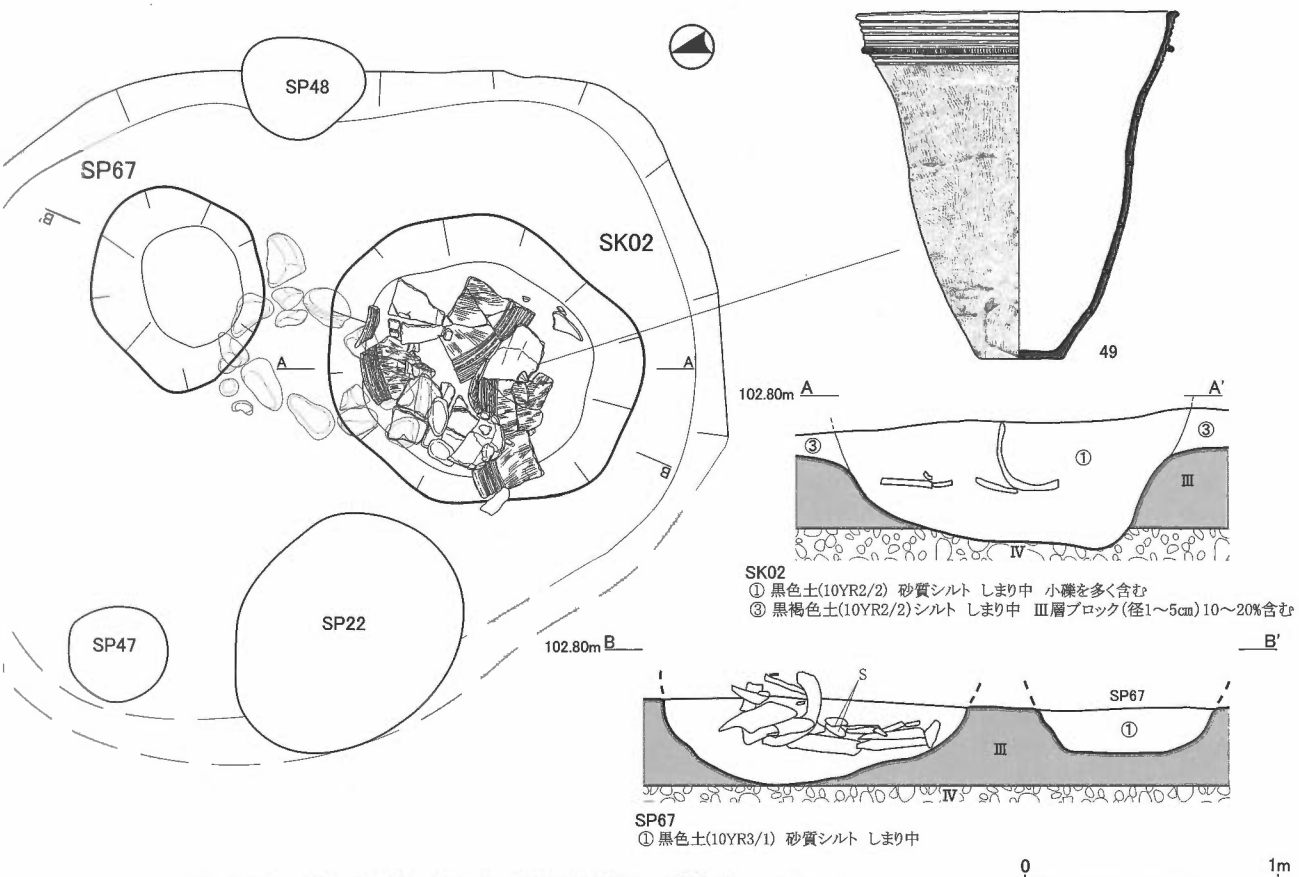


Fig.3.2.6　遺構実測図　SK02・SP67平面図・断面図　　S=1:30

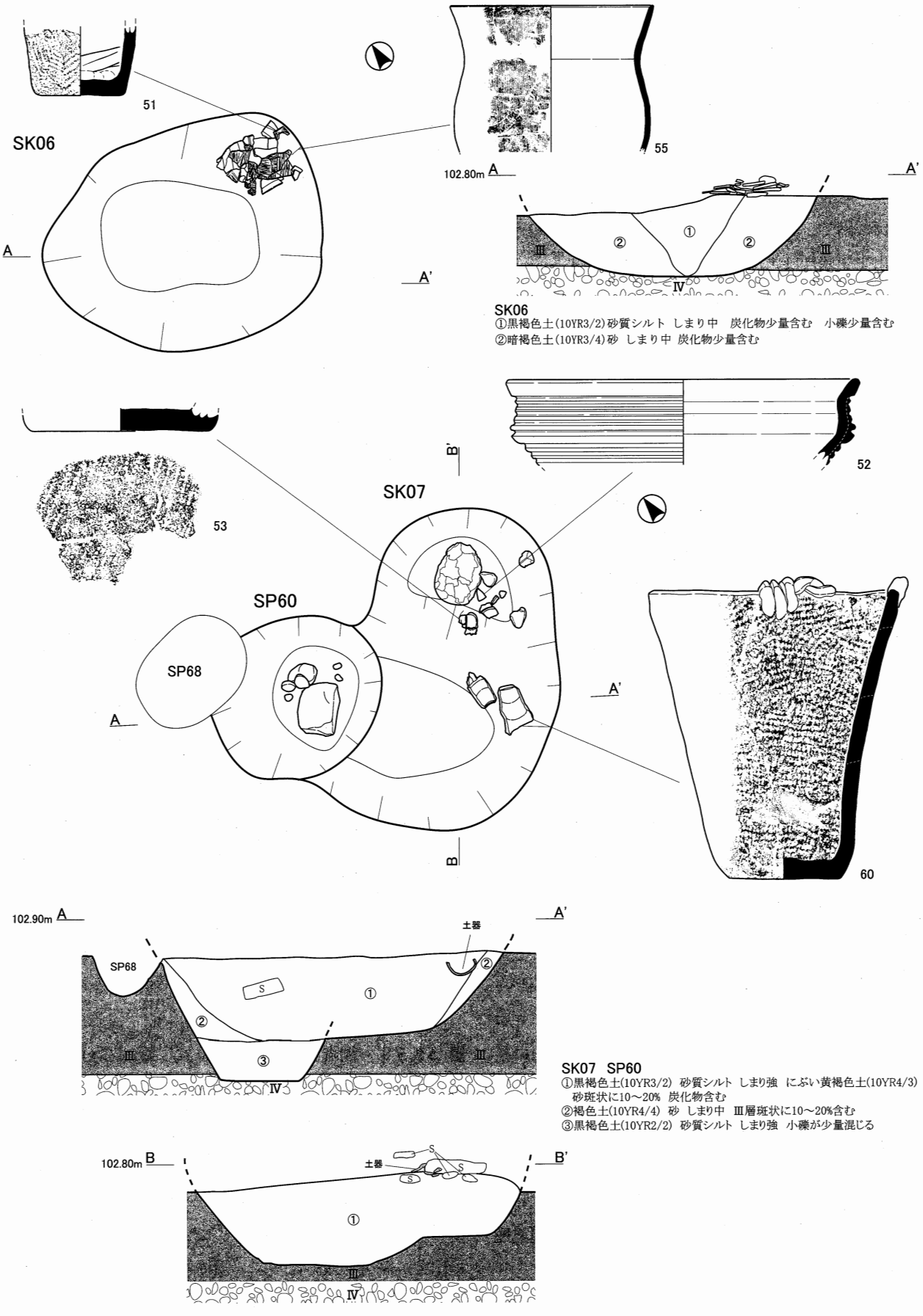


Fig.3.2.7　遺構実測図　SK06・SK07・SP60 平面図・断面図　　S=1:30

■ **ＳＫ１５・ＳＫ４０**　SK15は直径0.8ｍほどの円形土坑であり、SK40に切られる。遺構の底面から、縦方向に分割した礫（河原石）が立った状態で出土しており、立石の可能性がある。土器は出土していない。SK40は全体を検出できず、調査区域外に及ぶ。長軸が1.5ｍ以上、短軸は1.13ｍ、深さ0.74ｍでⅣ層上面まで達する。遺構検出段階で、礫・土器が出土し、覆土に多くの礫を含む。出土土器片は古串田新式・古府式に属する。

■ **ＳＫ１８**　直径が約1.15ｍ、深さ0.56ｍの円形である。掘り込みはほぼ垂直であり、Ⅳ層上面まで達する。覆土には大型・小型の礫が累重的に含まれている。最上部の礫は細長く、立石の可能性がある。底面から摩耗した土器片が数点出土した。

■ **ＳＫ２０**　撹乱で一部切られているが、長軸1.23ｍ、短軸0.97ｍの円形である。深さは0.50ｍ、掘り込みはほぼ垂直にⅣ層上面まで達している。覆土に土器片や大型の礫が含まれる。最も浅い所に細長い礫であり、立石状に据えられていた可能性がある。

■ **ＳＫ２１**　直径0.81ｍ、深さ0.61ｍの円形である。覆土内に大型の礫（No.244・河原石）が、横になった状態で出土した。礫は人為的に割り、整形を加えた痕跡が認められたため、非常に粗い作りであるが**石棒**として扱う。

■ **ＳＫ３７**　長軸1.44ｍ、短軸1.25ｍの楕円形である。深さ0.63ｍ、掘り込みはⅣ層上面まで達している。遺構検出面で土器片・礫が出土している。礫は１ヶ所に集中している。上層の礫を取り上げ後、覆土内に長軸50㎝短軸20㎝の礫（河原石）が埋まっており、立石の可能性がある。大木式及び上山田・天神山式の土器片が出土している。**放射性炭素年代測定ではcalBC2,881-calBC2,708**の年代を得ている（第４章参照）。また**リン酸とカルシウム含量の分析を行い、動物遺存体や植物遺体などが埋められた可能性は低い**との結果を得た。

■ **ＳＫ３９・ＳＫ７０**　SK39は長軸1.28ｍ、短軸1.22ｍ、深さ0.35ｍを測る。SK70は長軸1.20ｍ、短軸0.91ｍ深さ0.53ｍの楕円形である。SK39をSK70が切っている。SK70は掘り込みがⅣ層上面まで到達している。

■ **ＳＫ１９**　撹乱に切られる。短軸0.85ｍ以上、短軸0.85ｍの楕円形である。深さ0.28ｍの比較的浅い遺構である。検出面で大型の礫（川原石）が斜めに立った状態で出土しており、立石の可能性を指摘できる。また、遺構底面に赤色の礫（河原石）が出土している。覆土からは土器片が出土している。

■ **ＳＫ５０**　長軸1.31ｍ、短軸1.11ｍ、深さ0.29ｍの楕円形である。立石の可能性がある大型の礫（河原石）と中央に径20㎝ほどの礫を中心に小礫が出土している。礫付近から滑車状の土製耳飾り（№62）が出土した。

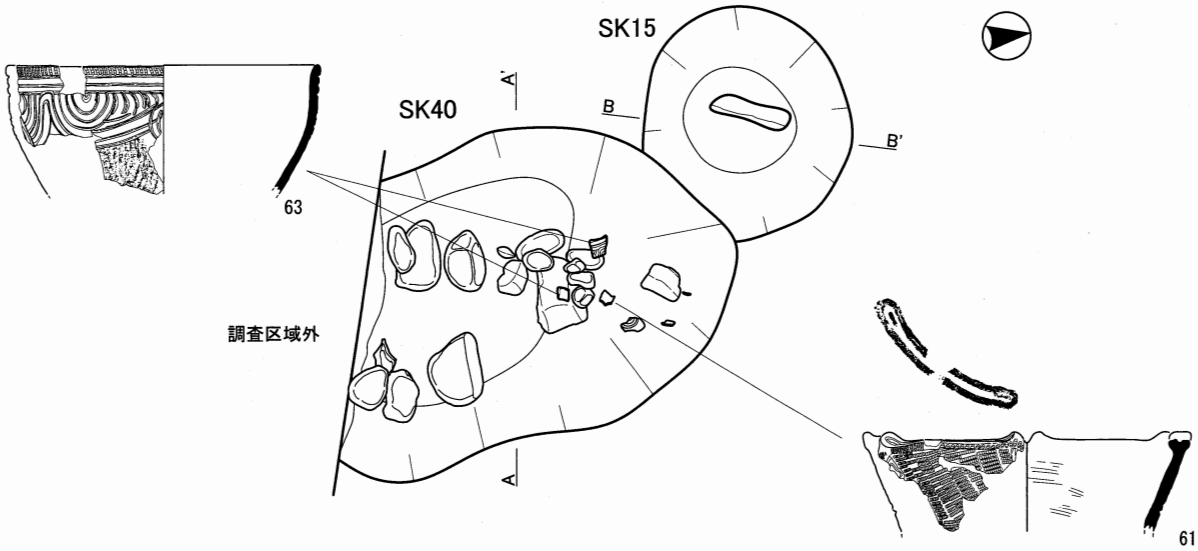
■ **ＳＫ５８**　長軸1.48ｍ、短軸1.07ｍ、深さ0.29ｍの楕円形である。比較的浅い遺構で、土器片が数点出土しているが、礫は含まない。

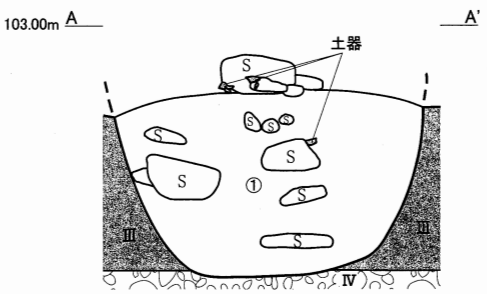
■ **ＳＫ５２・ＳＫ７２・ＳＰ５１**　SK72をSK52とSP51が切っている。SK72は長軸1.14ｍ、短軸1.11ｍの楕円形である。深さは0.29ｍと浅く、覆土内から土器片・礫が出土している。SK52は長軸0.98ｍ、短軸0.87ｍ、深さ0.54ｍの楕円形である。覆土内からは土器片が数点出土している。SP51は直径約0.5ｍの円形で規模から柱穴の可能性がある。底面から口縁部から胴部にかけての土器片が出土している。

■ **ＳＫ５９**　調査区の南西隅に位置し調査区区域外に及ぶ。確認できた範囲から最大長1.61ｍ以上の大型の遺構と考えられる。大型の礫（川原石）が重なるように出土した。立石の可能性が考えられる。

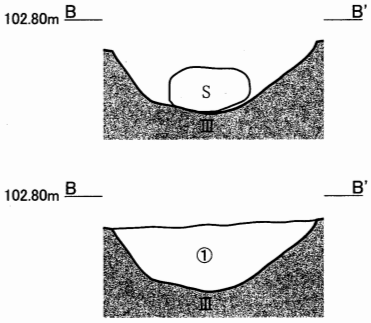
■ **ＳＫ６５**　径1.07ｍの円形と推測される。全体を未検出で、調査区域外に及ぶ。遺構検出時に風化の激しい扁平形の大きな礫が出土した。立石の可能性がある。覆土からは土器片が数点出土している。

（阿部将樹・野原大輔）



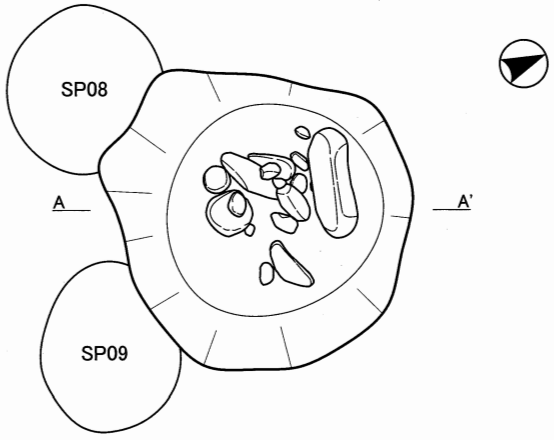


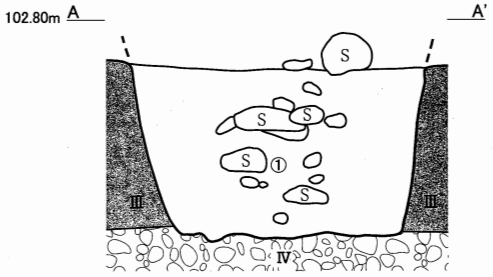
SK40
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中 炭化物少量含む
暗褐色土(10YR3/3) 斑状に20%含む 小礫・遺物を含む



SK15
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中
暗褐色土(10YR3/3) 砂斑状に20%含む 小礫を少量含む

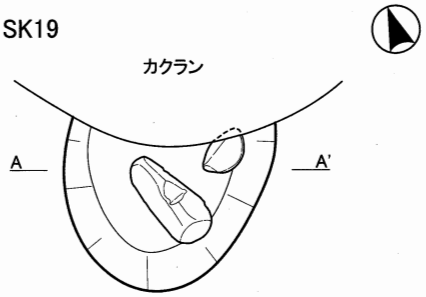
SK18

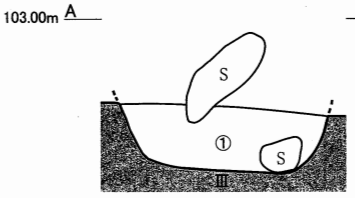




SK18
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中 炭化物を少量含む

SK19





SK19
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂質シルト しまり中

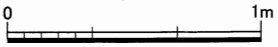
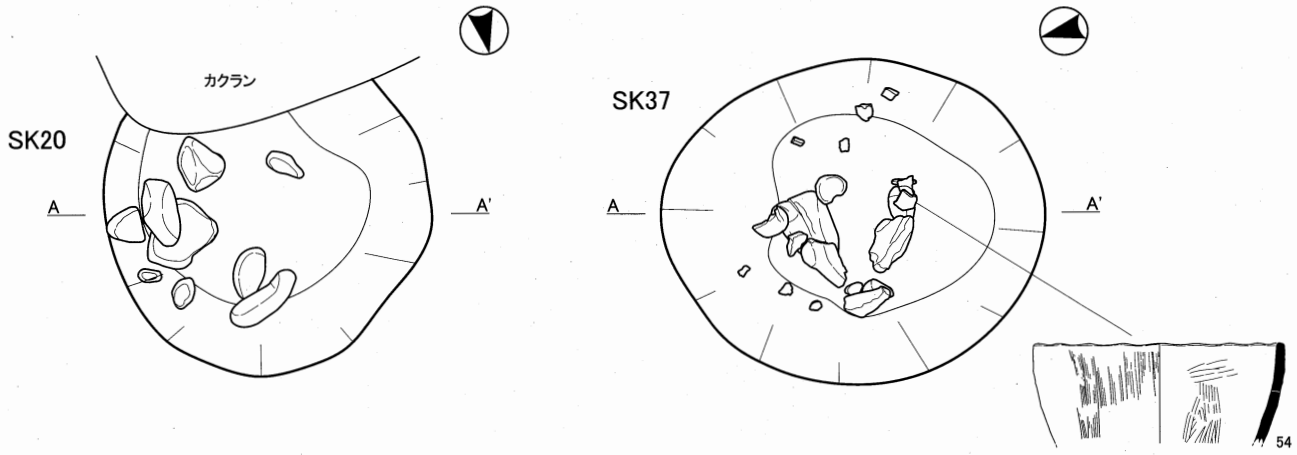
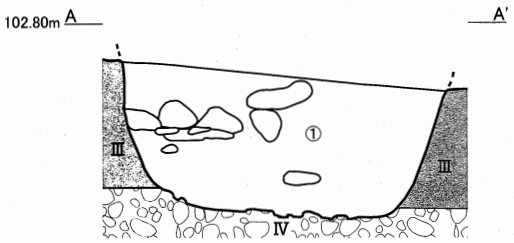
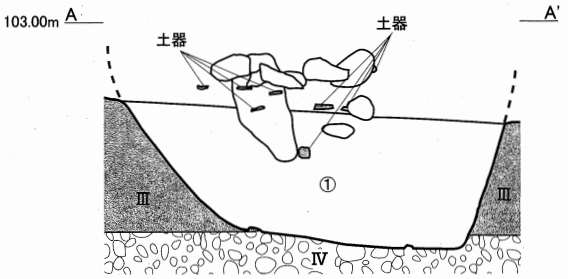


Fig.3.2.8　遺構実測図　SK15・18・19・40　S=1:30

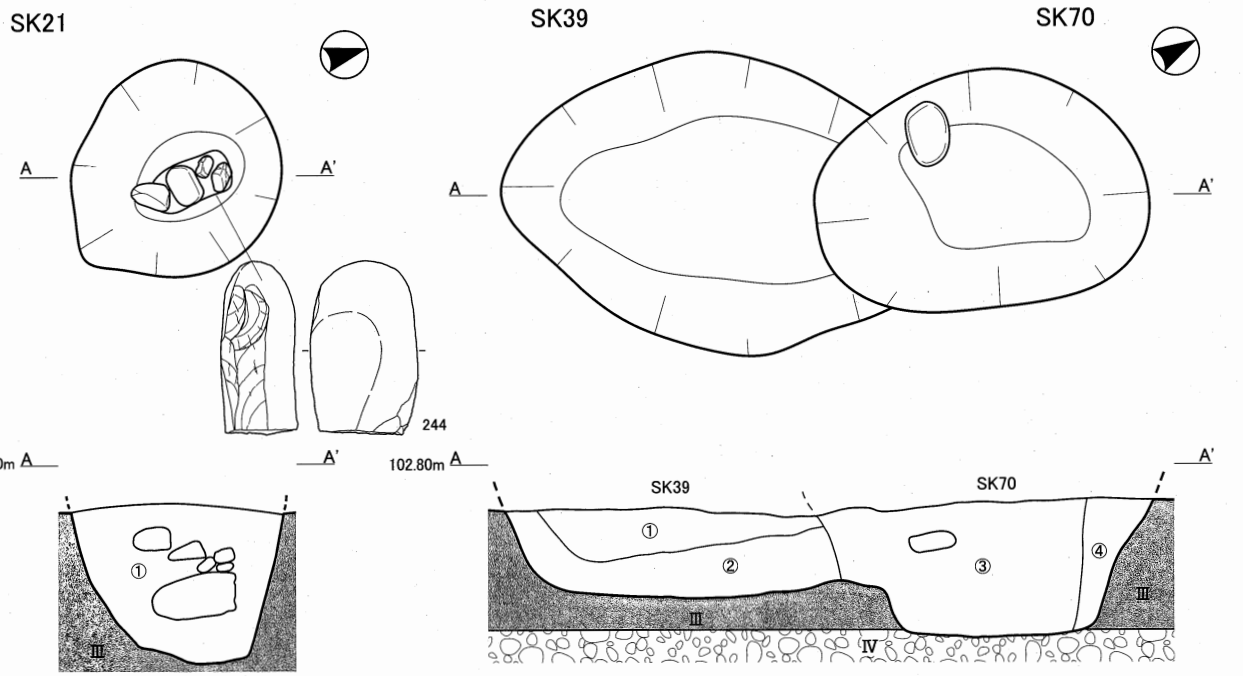




SK20
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂質シルト しまり中 礫少量含む 炭化物少量含む



SK37
① 黒色土(10YR2/2) 砂質シルト しまり中 炭化物・土器片を少量含む



SK21
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂質シルト しまり中
褐色土(10YR4/4) 砂斑状に5～10%含む

SK39
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中
にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂斑状に10～20%含む
② 褐色土(10YR4/4) 砂 しまり中 Ⅲ層の流れ込みか

SK70
③黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中 小礫少量含む
④暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中

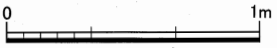


Fig.3.2.9　遺構実測図　SK20・21・37・39・70　S=1:30

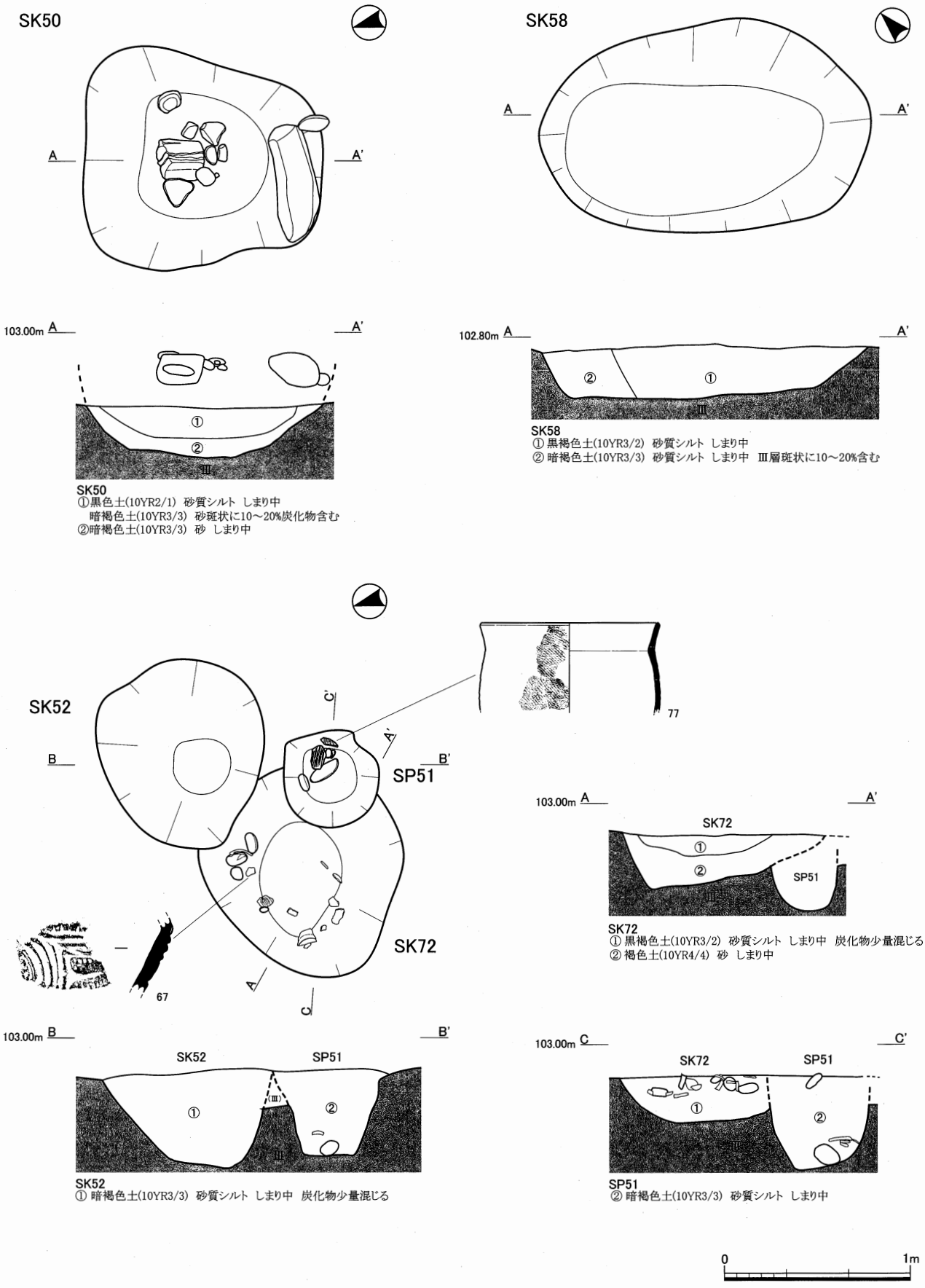


Fig.3.2.10　遺構実測図　SK50・51・52・58・72　S=1:30

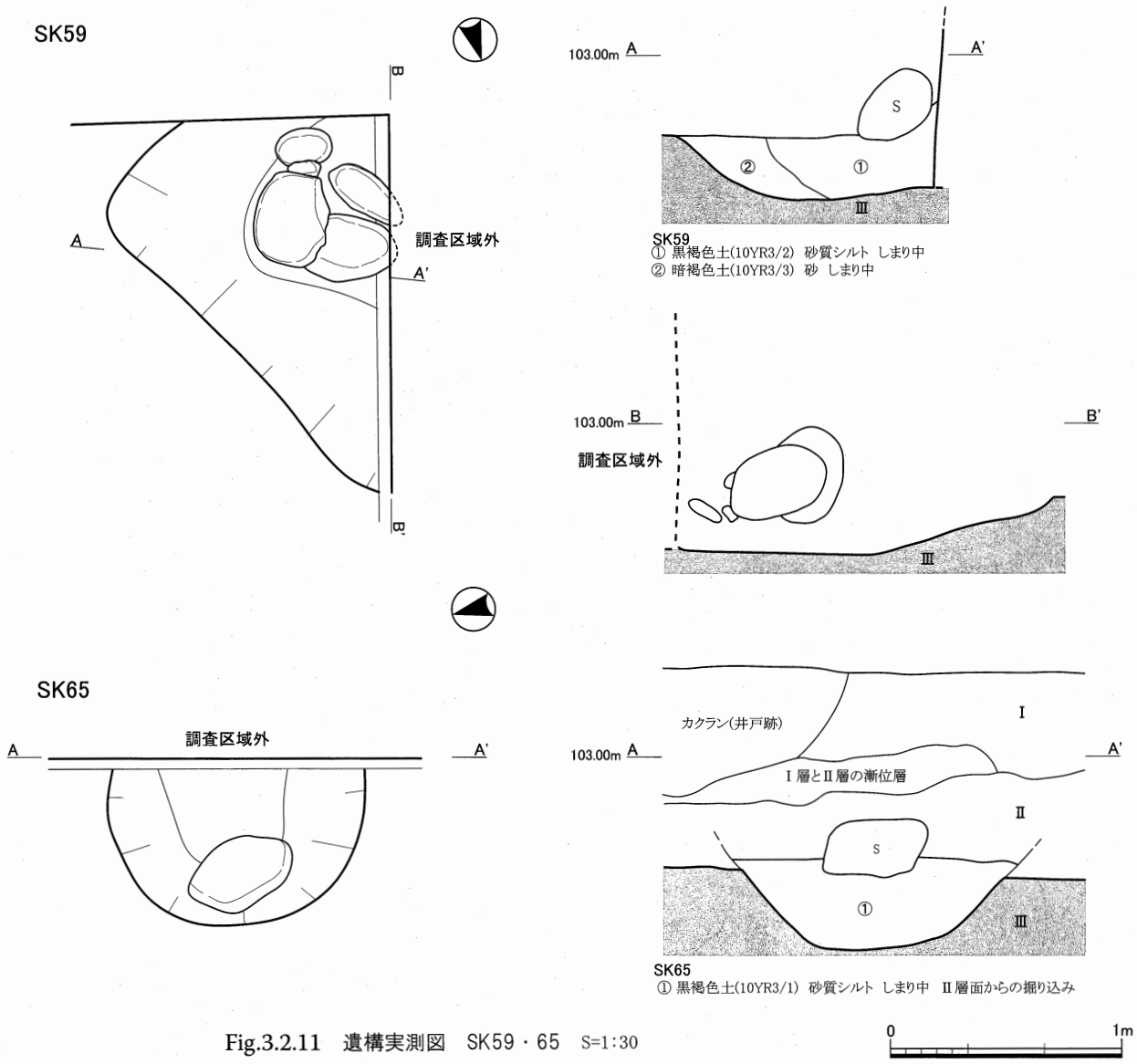


Fig.3.2.11　遺構実測図　SK59・65　S=1:30

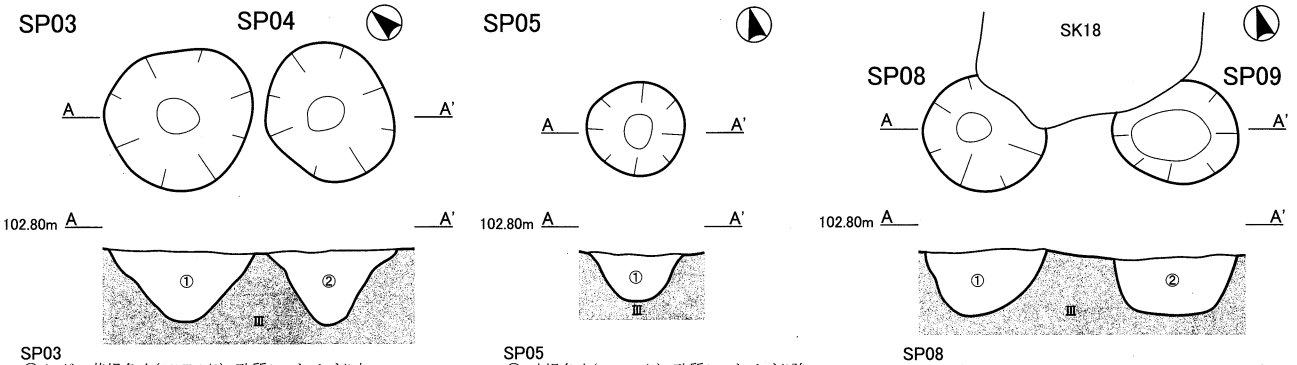
Ⅲ　ピット　〔Pit〕

Fig.3.2.11・3.2.12・3.2.13

ピットは総数で 63 基見つかっている。遺構の配置に規則性などは見られなかった。平面形状は円形から長楕円形まで区々であり、深度も様々である。大きさは平面の直径が 20cm から大きいものは 1 mを越えるものある。用途については、竪穴建物の柱穴を構成するピットを除いては、単独のものの用途を推定することは困難である。この中で、底面の断面形状が平らになっているものは、柱穴の可能性も考えられる。柱を据えるために底を平らにする必要があるからである。ただし、打ち込み式の柱は想定していない。

検出のピットの中で柱穴の可能性があるのは、SP11・24・30・42・43・44・45 あたりである。いずれのピットも覆土が単層であり、柱穴で見られる柱根痕跡を示す土層がなく、埋土（うめつち）に相当する土層もなかったので、柱穴と即断することは出来ない。しかし、SP24・30 などは掘削が地山砂礫層であるⅣ層まで到達しており、柱の沈下防止のために敢えて掘削したことも考えられる。

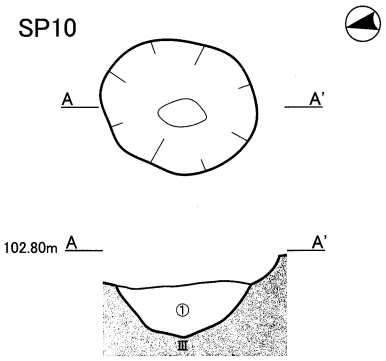
（阿部将樹・野原大輔）



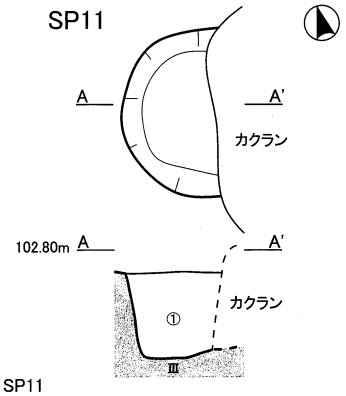
SP03
① にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質シルト しまり中
暗褐色土(10YR3/3) 砂斑状に5%含む
SP04
② 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり強
暗褐色土(10YR3/3) 砂斑状に10～20%含む

SP05
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂質シルト しまり強
暗褐色土(10YR3/3) 砂斑状に10～20%含む

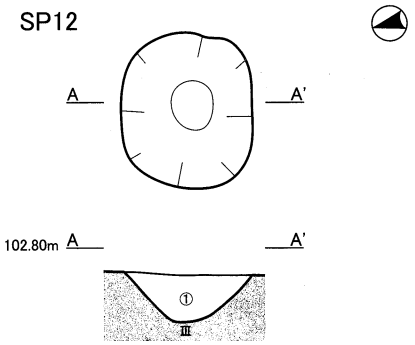
SP08
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり弱 Ⅲ層斑状に5%含む
SP09
② 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり弱



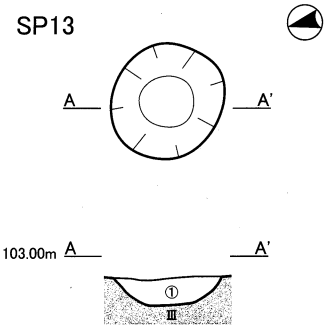
SP10
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中
暗褐色土(10YR3/3) 砂斑状に10～20%含む



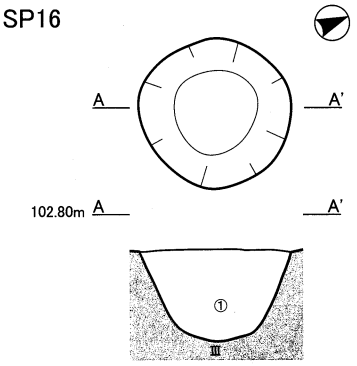
SP11
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中



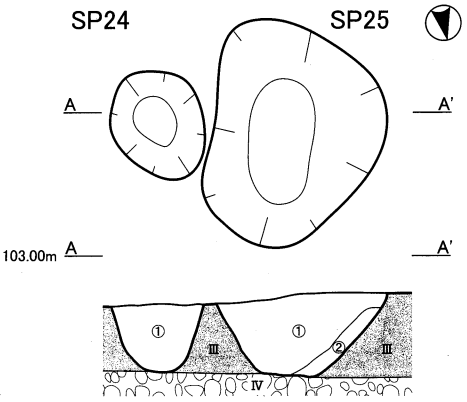
SP12
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中



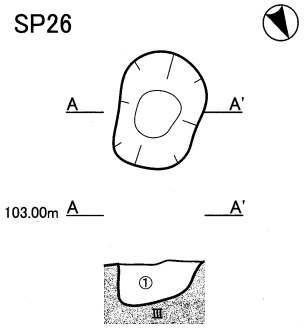
SP13
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中
褐色土(10YR4/4) 砂斑状に5～10%含む



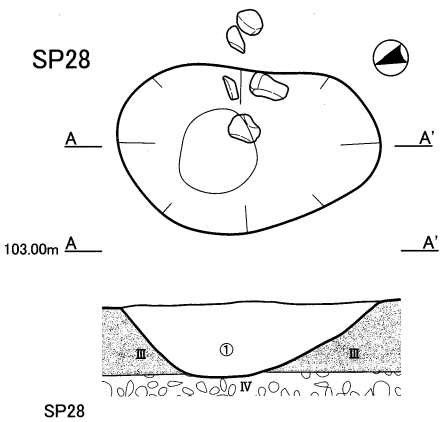
SP16
① にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質シルト しまり中
暗褐色土(10YR3/3) 斑状に10～20%含む



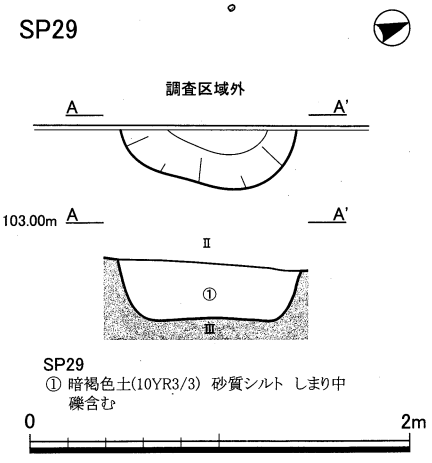
SP24
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中
SP25
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂質シルト しまり中
② 暗褐色土(10YR3/3) 砂質シルト しまり中 Ⅲ層斑状に含む



SP26
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中



SP28
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中



SP29
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂質シルト しまり中
礫含む

Fig.3.2.12　遺構実測図　SP　S=1:40

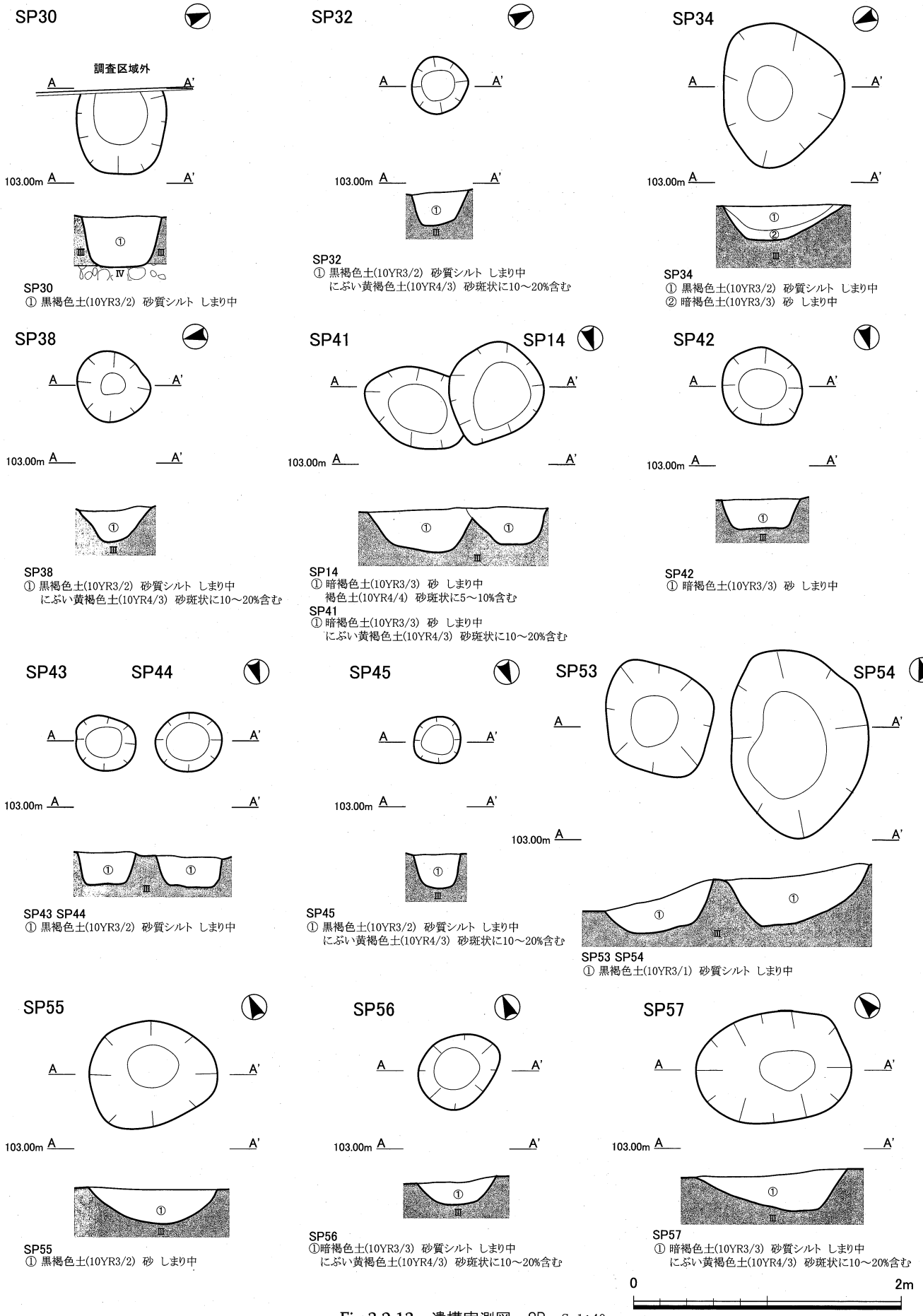
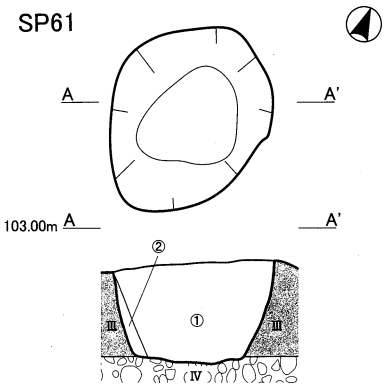


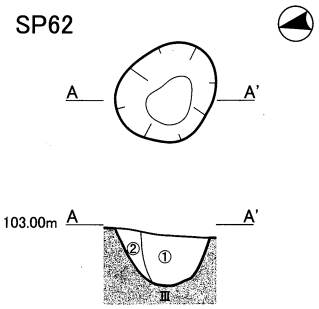
Fig.3.2.13　遺構実測図　SP　S=1:40

SP61



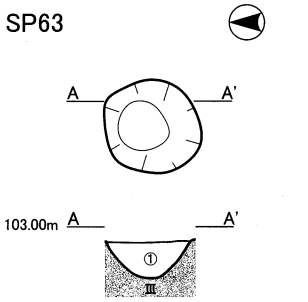
SP61
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中 礫含む
② 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中 Ⅱ層土含む

SP62



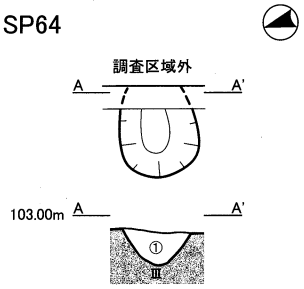
SP62
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中
② 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中

SP63



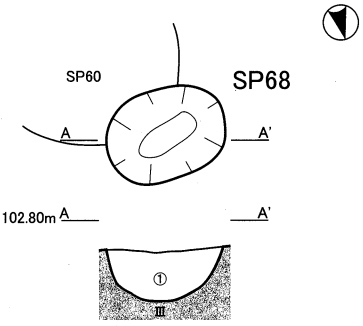
SP63
① 黒褐色土(10YR3/1) 砂質シルト しまり中

SP64



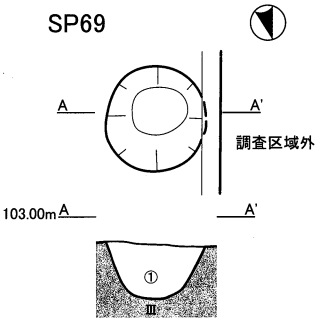
SP64
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂 しまり中

SP68



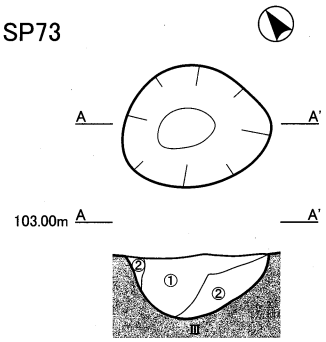
SP68
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中
Ⅲ層斑状に10～20%含む

SP69



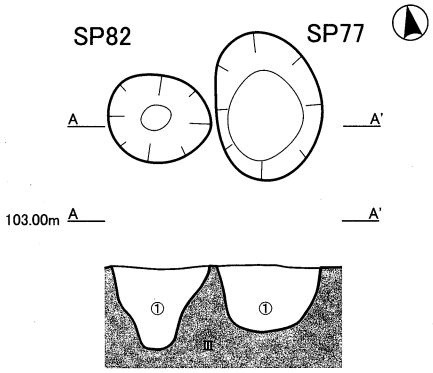
SP69
① 暗褐色土(10YR3/3) 砂 しまり中
Ⅲ層斑状に5%含む

SP73



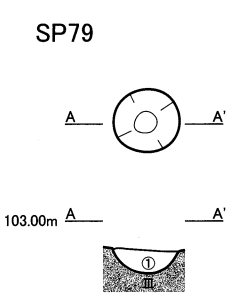
SP73
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中 根混じる
② 褐色土(10YR4/4) 砂質 しまり中

SP77 SP82



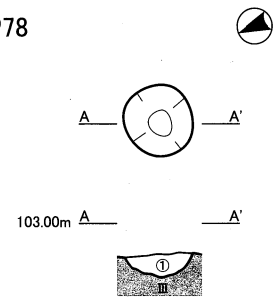
SP77 SP82
① 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり強
暗褐色土(10YR3/3) 砂斑状に10～20%含む

SP79



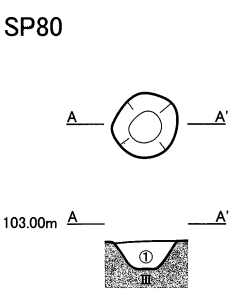
SP79
① 黒色土(10YR2/1) 砂質シルト しまり中
包含層(Ⅱ層)の埋土

SP78



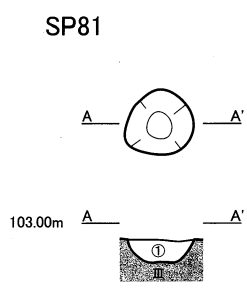
SP78
① 黒色土(10YR2/1) 砂質シルト しまり中
包含層(Ⅱ層)の埋土

SP80



SP80
① 黒色土(10YR2/1) 砂質シルト
しまり中 包含層(Ⅱ層)の埋土

SP81



SP81
① 黒色土(10YR2/1) 砂質シルト しまり中
包含層(Ⅱ層)の埋土

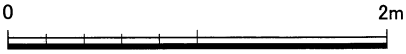


Fig.3.2.14　遺構実測図　SP　S=1:40

Tab.3.2.1　遺構一覧表（1）　竪穴建物・土坑・ピット

遺構番号	地区（グリッド）		平面形	遺構計測値（cm）			備考
	X	Y		最大幅	最小幅	深さ	
SI01	60 55	-50 45	円形	523	402	42	時期差あり
SI84	60 55	-50	不明	(420)	(210)	29	
SK02	60 55	-50 45	円形	118	112	50	SI01 下層
SK06	50	-50	楕円形	145	119	44	
SK07	45	-55	楕円形	159	130	47	切られる
SK15	45	-50 55	円形	88	76	26	切られる
SK18	45 50	-55	楕円形	21	110	66	
SK19	45	-50	楕円形	85	(60)	28	撹乱に切られる
SK20	50	-50	円形	123	(97)	50	撹乱に切られる
SK21	45	-50	円形	81	81	63	
SK37	45	-45 50	楕円形	144	125	63	
SK39	45	-50 55	楕円形	128	122	35	
SK40	45	-50	楕円形	(149)	113	74	調査区域外
SK50	45	-50	楕円形	131	111	29	
SK52	50	-50	楕円形	98	87	54	
SK58	50	-50	楕円形	143	107	29	
SK59	45	-55	楕円形	(161)	(115)	27	調査区域外
SK65	50	-45	円形	107	(66)	33	調査区域外
SK70	45 50	-50	楕円形	120	91	53	
SK72	50	-50	円形	114	111	29	
SK76	55	-50	楕円形	135	111	40	
SP03	50	-50	円形	77	71	38	
SP04	50	-50	円形	69	62	40	
SP05	50	-50	円形	48	48	25	
SP08	45 50	-55	円形	59	58	36	切られる
SP09	45	-55	円形	59	(49)	30	切られる
SP10	45	-50	円形	71	77	28	
SP11	50 45	-50	楕円形	86	(48)	46	撹乱に切られる
SP12	50	-50	円形	80	70	26	
SP13	45	-55	円形	58	57	14	
SP14	45 50	-50	楕円形	69	67	28	
SP16	45	-50	円形	75	66	49	
SP17	45	-50	円形	74	(36)	22	調査区域外
SP22	60	-50	円形	92	(85)	30	SI01
SP23	60	-50	楕円形	108	107	30	SI01
SP24	55	-50	円形	56	47	36	
SP25	55	-50	楕円形	115	96	44	
SP26	60 55	-50	楕円形	56	55	22	
SP27	45	-55	円形	67	(43)	32	調査区域外
SP28	55	-50	楕円形	25	89	40	
SP29	60	-50	楕円形	84	(32)	32	調査区域外
SP30	60	-50	楕円形	67	(62)	38	調査区域外
SP31	60	-50	楕円形	136	112	38	調査区域外

Tab.3.2.2　遺構一覧表（2）　ピット

遺構番号	地区（グリッド）		平面形	遺構計測値（cm）			備考
	X	Y		最大幅	最小幅	深さ	
SP32	55	-45	円形	48	40	24	
SP33	55	-50	円形	117	112	58	
SP34	55	-50	楕円形	97	92	26	
SP35	60	-45	楕円形	95	88	30	SI01
SP36	60	-50	楕円形	126	117	46	
SP38	50	-50	円形	51	47	22	
SP41	45 50	-50	楕円形	65	(59)	32	
SP42	50	-55	円形	57	56	22	
SP43	45	-50	円形	44	42	24	
SP44	45	-50	円形	49	45	22	
SP45	45	-50	円形	35	34	26	上層
SP46	60	-50	円形	41	42	26	SI01
SP47	60	-50	円形	38	37	18	
SP48	60	-45	楕円形	47	41	32	SI01
SP49	55	-45	楕円形	58	56	20	SI01
SP51	50	-50	円形	50	48	46	
SP53	55	-50	楕円形	88	77	28	
SP54	55	-50	楕円形	136	100	34	
SP55	55	-50	楕円形	90	77	26	
SP56	55	-50	円形	61	50	18	
SP57	55	-45	楕円形	105	91	30	SI01
SP60	45	-55	円形	91	81	65	切られる
SP61	60	-50	楕円形	102	81	54	
SP62	60	-45	円形	55	48	26	
SP63	60	-45	円形	48	48	18	
SP64	60	-45	円形	41	(34)	18	調査区域外
SP66	50	-55	円形	66	(13)	26	調査区域外
SP67	60	-45	楕円形	82	68	18	
SP68	45	-55	楕円形	60	47	26	
SP69	50	-55	円形	55	53	28	
SP71	55	-45 50	円形	94	77	36	
SP73	50	-50	円形	68	67	34	
SP74	60	-45	楕円形	120	115	44	SI01
SP75	55 45	-45	楕円形	103	69	42	SI01
SP77	50 55	-50	楕円形	76	54	34	
SP78	50	-50	円形	36	37	12	
SP79	50	-50	円形	32	32	12	
SP80	50	-50	円形	33	33	14	
SP81	55	-50	円形	31	32	12	
SP82	55	-50	円形	49	45	42	
SP83	55	-55	円形	78	(22)	40	調査区域外

3　出土した遺物

Ⅰ　遺構内出土遺物
〔Relics excavated from structural remains〕

Fig.3.3.1 ― Fig.3.3.7

■ **SI01**　1は深鉢。波状口縁で４つの波頂部を持つ。波頂部に二つの山を作り、穿孔する。頸部・胴部の隆帯には爪形文を施し、胴部は渦巻文を施す。胴部から底部は縄文が施文され縦位の沈線を行い胴部のくびれが底部まで直線に変化する位置に３条の沈線を平行に施す。**上山田・天神山Ⅱ式**と考えられるが器形は古相を呈する。２は深鉢で全体に撚糸文を施す粗製土器。３・７は口縁の装飾部分。３は口唇部の粘土紐を蕨手状に貼付し、沈線を施す。７は波頂部の下に渦巻文の隆帯を貼付する。４は円形の隆帯を貼り、軽く指頭圧を行う。横方向に半隆起線文と隆帯を施す。**上山田・天神山式**か。５・８は平縁口縁で細めの縄文が施されている。９は口縁のわずかな突起が確認できる。縦位に沈線を引く。10は口縁に隆帯を施す。11は口縁の立ち上がりが直線的で条線痕を縦位に施している。12は撚糸文を施す。13は波状口縁で口唇部を肥厚させ若干中心部を窪ませている。口縁部から胴部は縄文である。14は摩耗しているが条痕が施されている。15・16・17・18・25・は**新崎式**に相当すると考えられる。15・16・25は沈線で区画し短沈線を施す。21は口縁部に３条の沈線を行い胴部に縄文を施す。22はボタン状の添付を行っている。23は**玉抱き三叉文**が見られる。24は穿孔が２か所あり、**有孔鍔付土器**の可能性が高い。27は全体に煤が付着する。28は蓮華文を施す。29は台付鉢で台部と胴部の境の隆帯に指頭圧痕を行う。31は横位に半隆起線文が行われ、縦長に３条の沈線を行っている。41は炉内部の土器。33～39・42～48は底部。38は台付鉢の台部。39は浅鉢の底部でわずかに赤彩が残る。45はミニチュア土器。42～48は網代痕が残る。

■ **SK02**　49は出土土器中で**最大の深鉢**。一括出土した土器。口唇部を隆帯の様に外側に押し出す。上から４条の沈線、爪形文を施した隆帯を１条、３条の沈線を施す。胴部は絡条体の撚糸痕。**上山田・天神山式**か。50は口縁部が外側に開き、頸部に縄圧痕文を１条入れ胴部に縄文を施す。

■ **SK06**　51は深鉢の底部。55は深鉢で縦位に条痕文を施している。

■ **SK07**　52は深鉢の口縁部で断面がＳ字状に外反する。横位の半隆起文を施し、頸部に隆帯を２条施す。53は底部のみで網代痕が明確に残る。60はほぼ一括で遺構内から出土している小型深鉢。口縁部２か所に粘土紐の貼り付け装飾を行い、縄文を全体に施す。

■ **SK20**　68は深鉢。口縁部から全体に縄文を施している。頸部に縄圧痕を横に１条施している。

■ **SK21**　56は口縁部に縦横の半隆起文で区画を作る。区画内は櫛状用具で刺突を行う。**古府式**に相当。

■ **SK37**　54は緩い波状口縁で、口縁部から胴部に縦位の条線文を施す。57は口縁部に沈線と隆帯に爪形文を施した渦巻文。58は沈線と波状沈線を行う。59はキャリパー形の頸部。沈線と胴部に絡条体を施す。**大木式を模倣している**可能性もある。

■ **SK40**　61は深鉢。口縁部４か所に山形の二つの山の突起がある。口唇部に沈線が入る。口縁に縦位に櫛状工具で刺突を入れ、胴部にも斜状に櫛状工具で刺突を施し、口縁突起物の下に沈線で方形の文様を入れる。**古府式～古串田新式**に相当。63は口縁部に縦位に絡条体を押し当て、沈線で渦巻文を施す。**古府式**に属する。

■ **SK50**　62は**滑車状の土製耳飾り**。中央に小さなくぼみがあるが貫通していない。

■ **SK72・SP78**　64はSK72とSP78の遺構内遺物が接合した深鉢の底部。縦位に絡条体の縄文が施されている。底部には網代痕が確認できる。

■ **SK73**　65は深鉢。断面形がＳ字状の口縁。沈線と隆帯を平行に施し、隆帯上に絡条体の圧痕文を行う。

■ **SP**　66は磨きが全体施された精製土器。35・71・54は渦巻文。35半隆起線文に刻み目が入り、**新保・新崎式**、69は隆帯に爪形文を施す**上山田・天神山式**と考えられ、71は**古府式**に相当。70は胴部の縦に３本の沈線を施す。76は台付鉢の台部である。（阿部将樹・野原大輔）

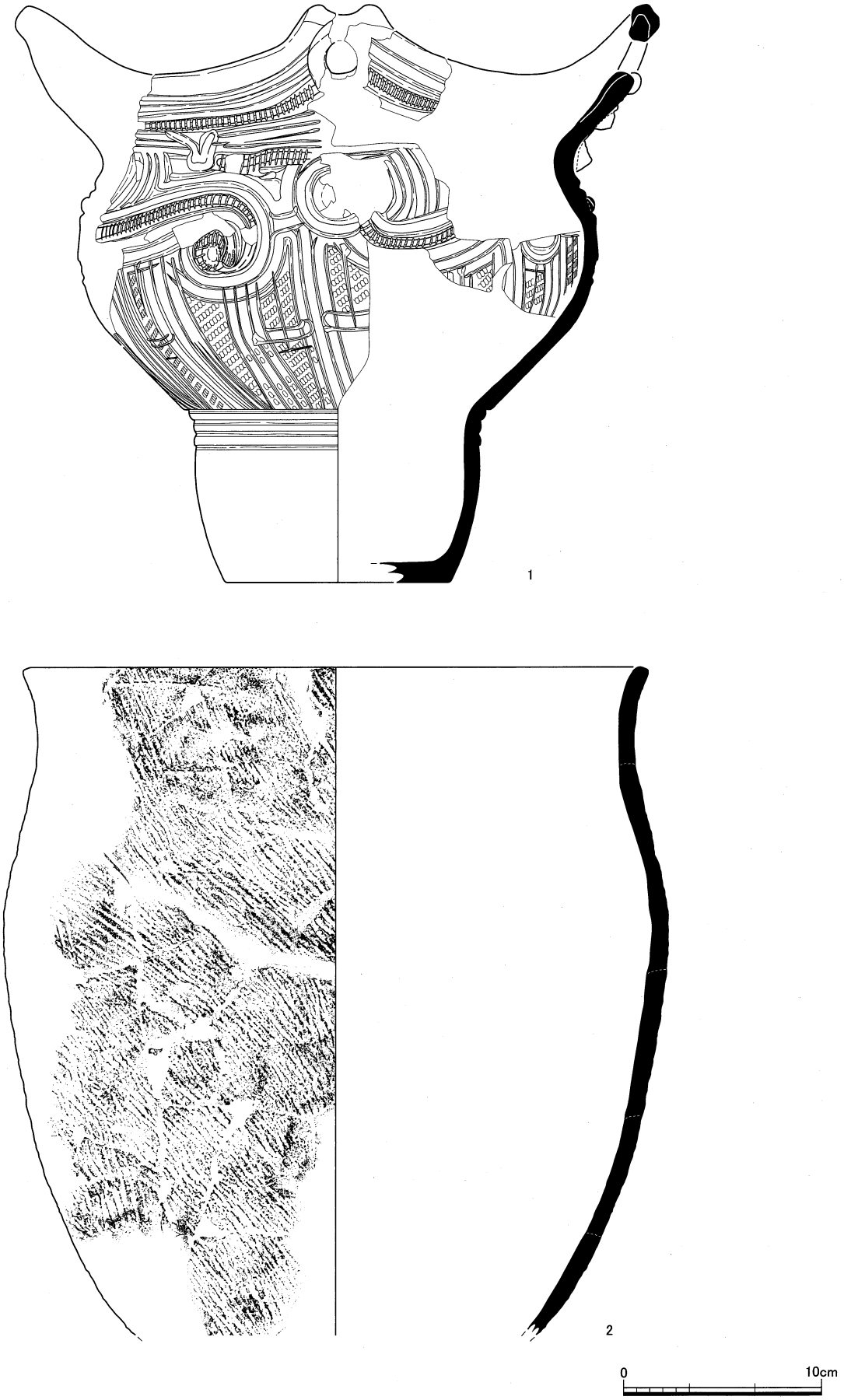


Fig.3.3.1　遺物実測図（1）　SI01　S=1:3

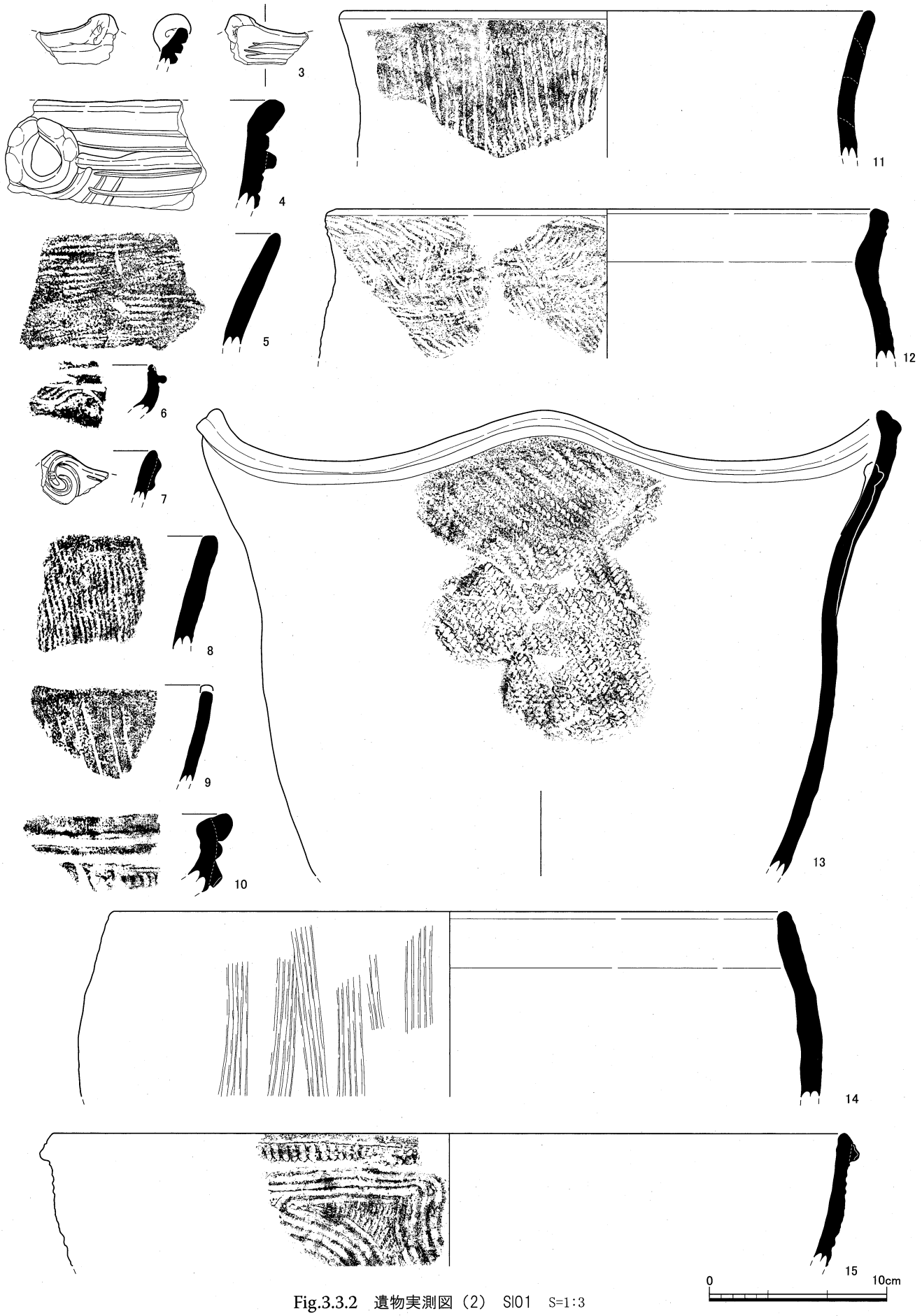


Fig.3.3.2　遺物実測図（2）　SI01　S=1:3

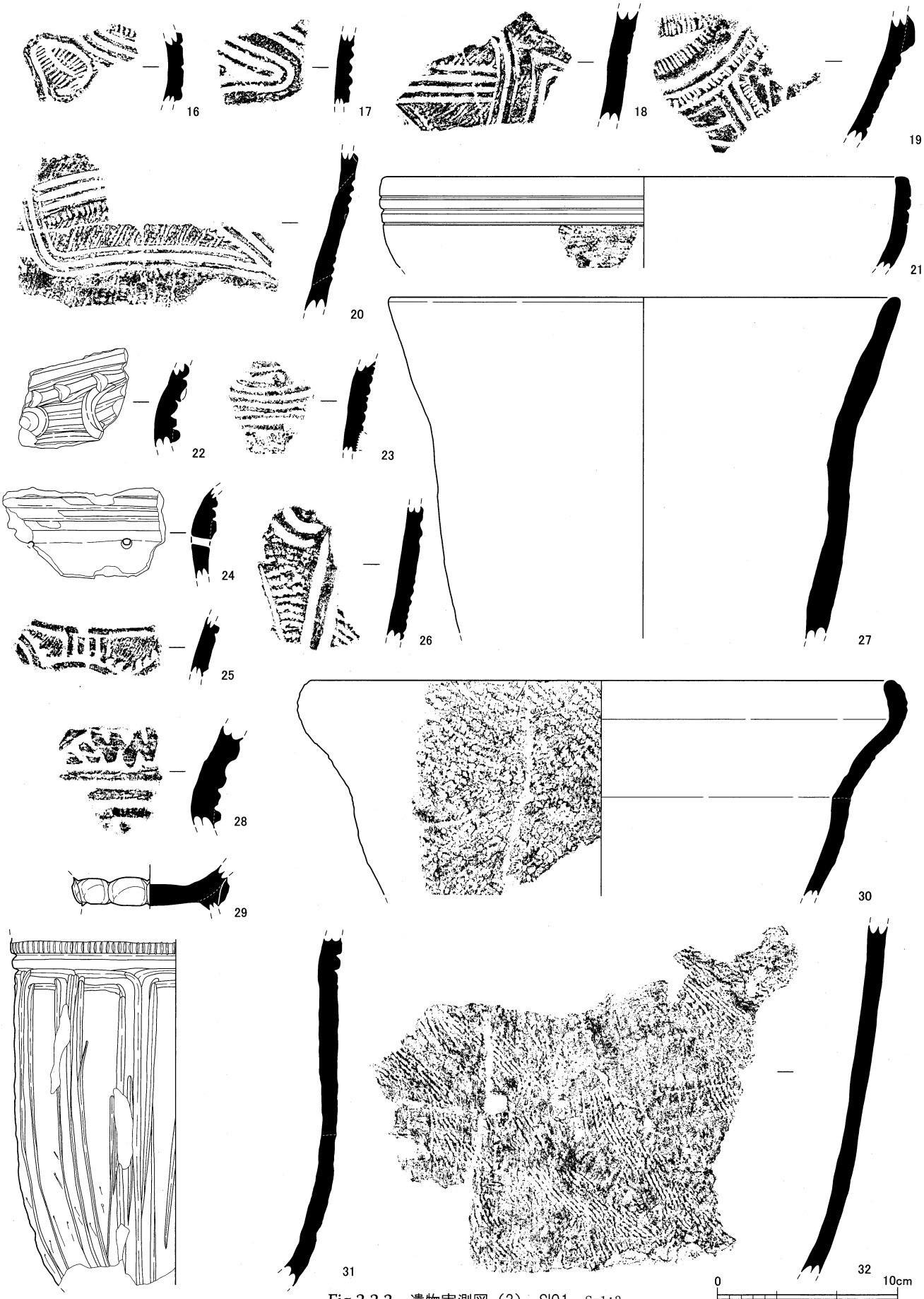


Fig.3.3.3　遺物実測図（3）　SI01　S=1:3

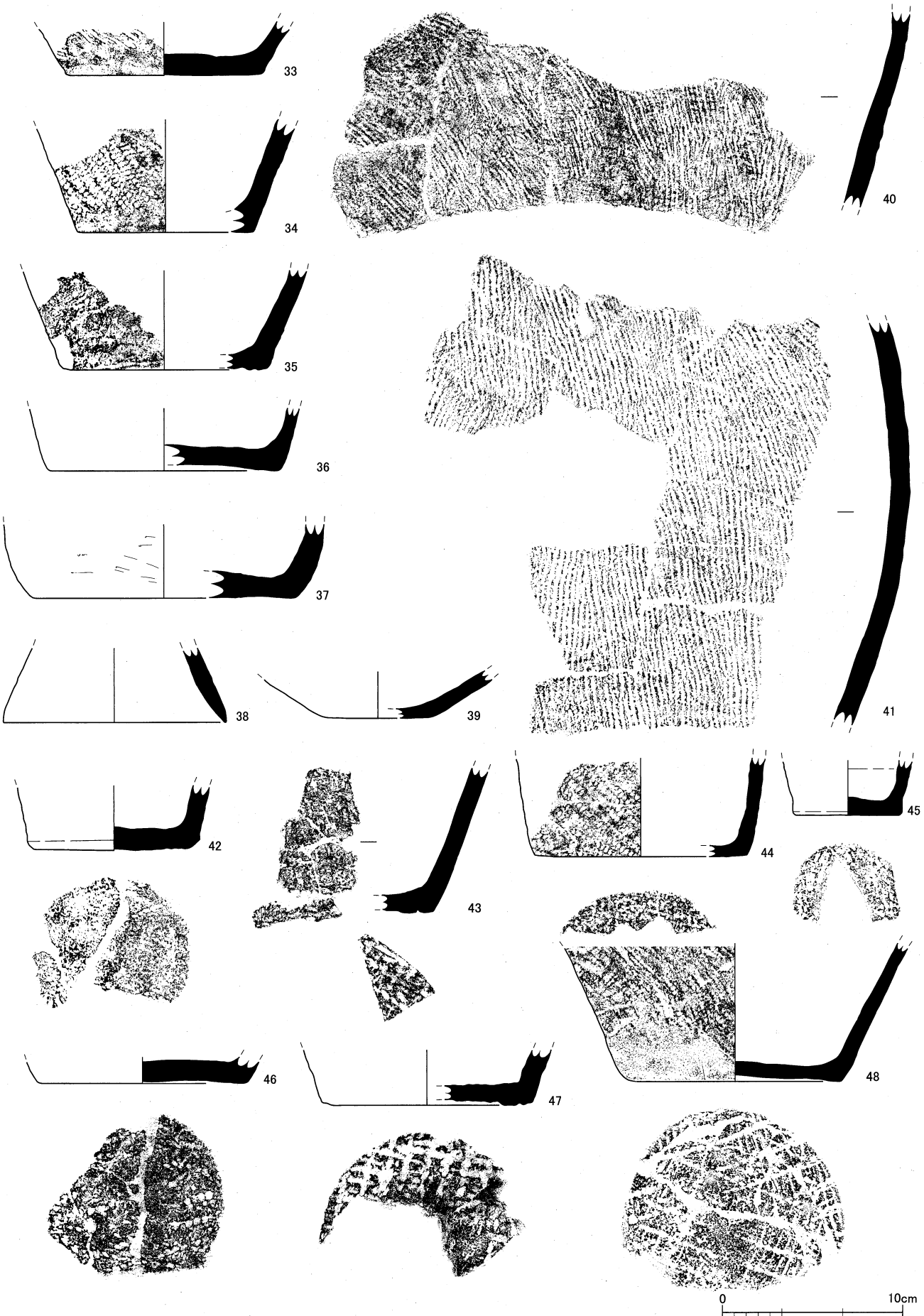


Fig.3.3.4　遺物実測図（4）　SI01　S=1:3

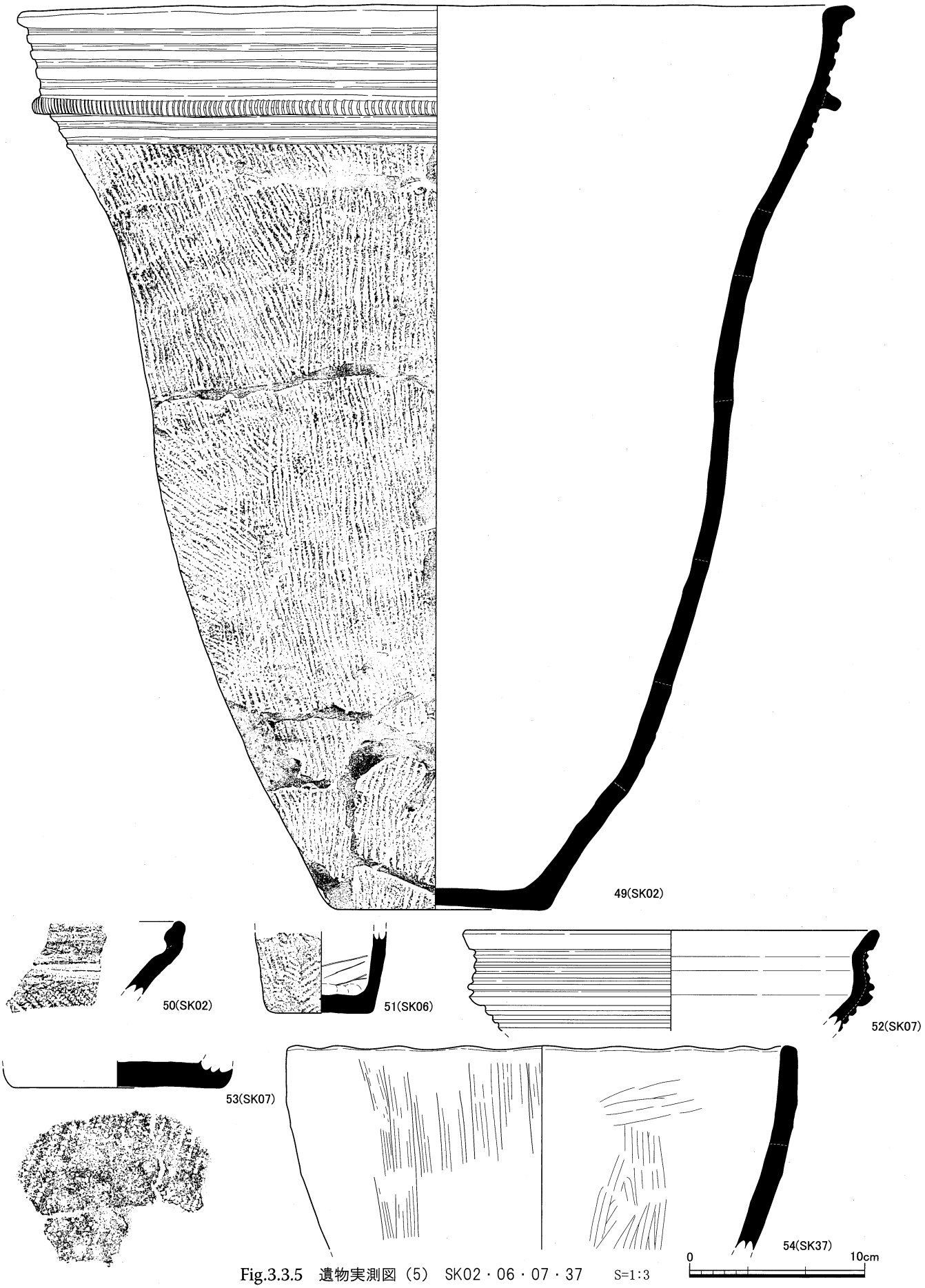


Fig.3.3.5　遺物実測図（5）　SK02・06・07・37　　S=1:3

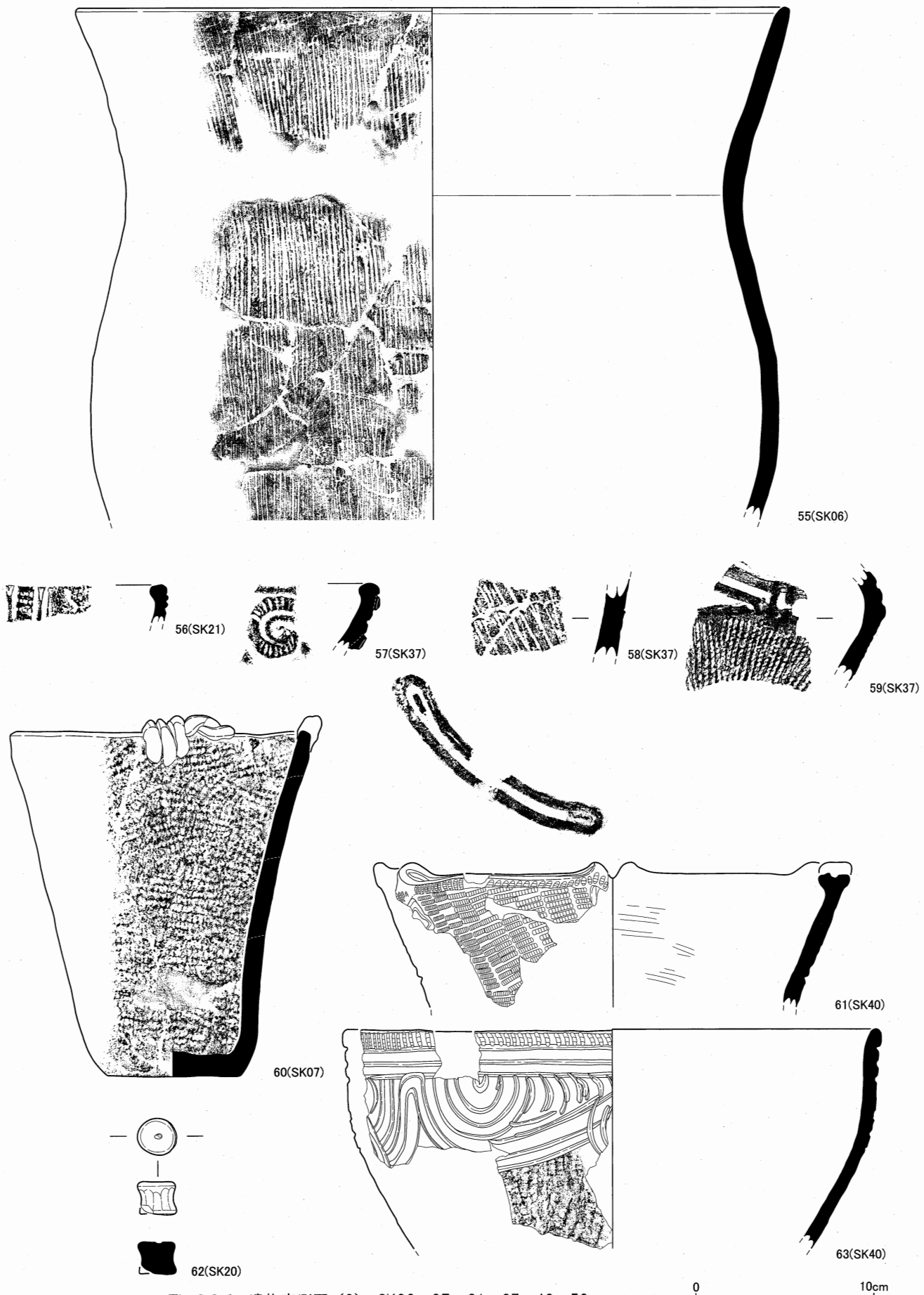


Fig.3.3.6　遺物実測図（6）　SK06・07・21・37・40・50　S=1:3

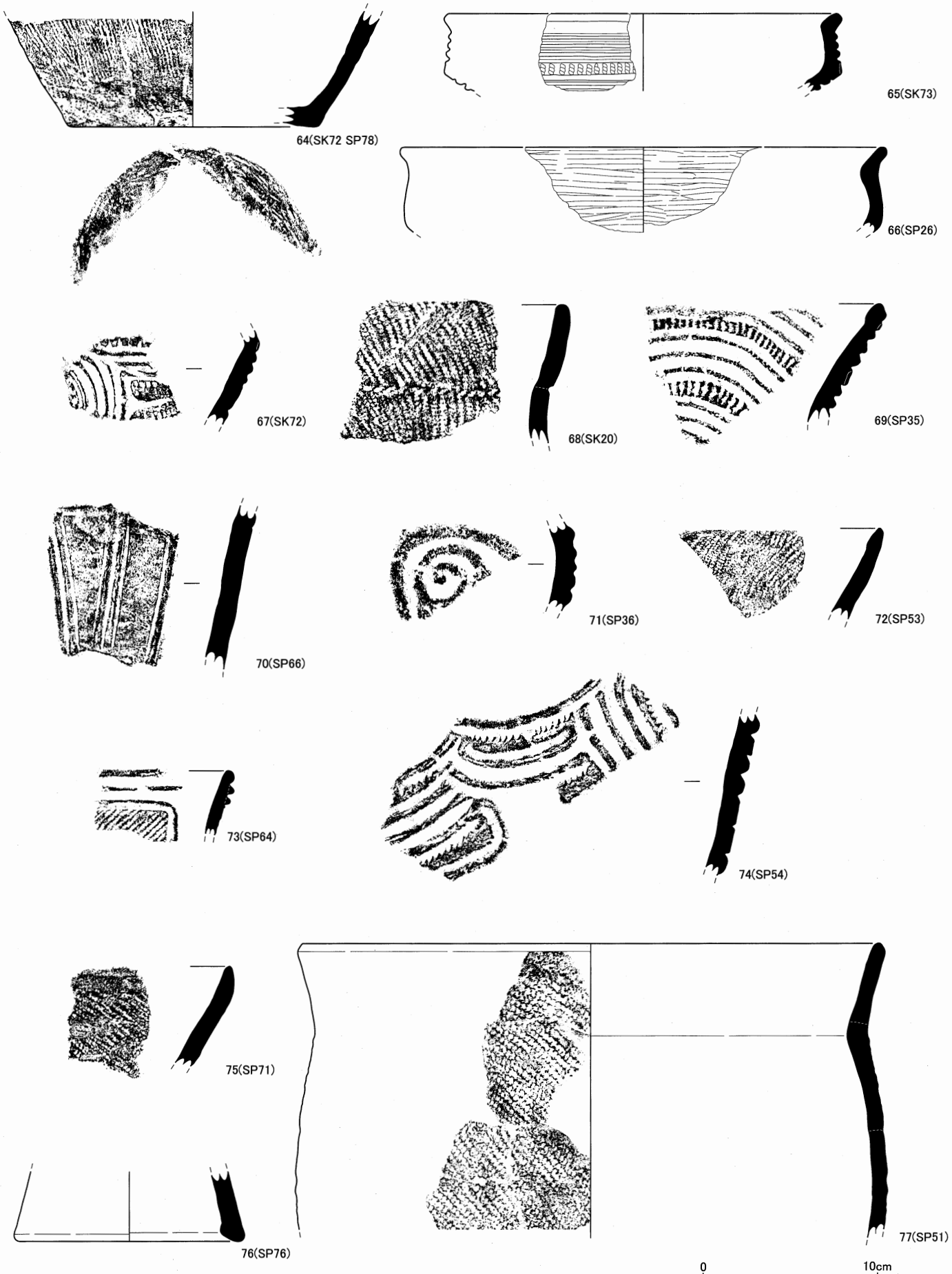


Fig.3.3.7　遺物実測図（7）　SK20・72・73・SP26・35・36・51・53・54・64・66・71・72・75

Ⅱ　遺物包含層出土遺物
〔Relics excavated from layer containing cultural remains〕

Fig.3.3.8 － Fig.3.3.19

縄文土器　遺物包含層（Ⅱ層）から大量の土器が出土し、特に調査区北側のSI01周辺からは多くの遺物を検出した。**帰属時期は、中期前葉の新保式・新崎式や中期後葉の古串田新式が若干散見されるが、主体は中期中葉の上山田・天神山式、古府式である。**

78は有孔鍔付土器。頸部に穿孔が行われ把手が貼りつけられている。胴部は全面に縄文を施す。79～84は深鉢。79は縄文を施文したのち、撫で・削りの調整を行う。80・81は口縁部から縄文を施文する。81は外面に煤が多く付着。82は頸部に縄文圧痕を1条施す。83は縦位の絡条体による撚糸文。84は沈線で区画・渦巻文を施す。区画内は櫛状工具で刺突を行う。**古府式～古串田新式**に相当。85は有孔鍔付土器。頸部の隆帯直上に穿孔を行う。86は小型鉢。口縁部は緩い波状口縁。口縁部に3条の沈線を行い、波頂部で上に向かって収束させる。胴部は全面に縄文を施す。87～91は深鉢。87は口縁部無文で2条の隆帯が口縁から頸部の眼鏡状把手につながる様相である。胴部は隆帯と沈線で渦巻文を施す。沈線での区画内に蓮華文を行う。88は頸部から口縁部まで横に沈線を施す。「C」字に隆帯を貼りつけ、頸部と胴部の境界に山の字を逆にしたような沈線を行う。胴部は縄文を全面に施す。89はキャリパー形の形状で頸部に浅い刺突を横方向に1列行う。胴部は縄文を施す。90は波状口縁で4つの波頂部を持つ。口縁から底部にかけて全面縄文を施す。91は平縁口縁。口縁部に1条の沈線を行い、ボタン状突起を貼りつけ爪形文を施した隆帯を貼りつける。隆帯と沈線で渦巻文、三叉文を施文する。87・88・90・91は**上山田・天神山式**に属する。

92は浅鉢。全体が摩耗しているが口縁部に1条の沈線がある。「6」を横にした平たい隆帯を貼りつける。

93～96・98～104・107・109は口縁部から縄文を施すものである。94･95は**補修孔**がある。96は撚糸文。99は縄文を施した後に波状沈線を行う。102は内面に磨きを施す精製土器である。107・109は鉢。105は小型の深鉢。108は無文の深鉢の口縁部、110･111は浅鉢。111は磨きを施す。112は絡条体で施文した後、頸部に半隆起線文を3条施す。

113～115は鉢。113は頸部に半隆起文線を施す。114は口縁部に沈線を1条施し胴部に縄文を施す。115は縄文を施文した後、口縁部に波状に隆帯を貼りつけている。116は両面に磨き処理をする。一部に赤彩が残っている精製土器。

117～143は口縁部片。117は口縁部の装飾突起。隆帯を口縁部に貼り付け、内面にも隆帯を貼り付け沈線を施す。118は半隆起線文を頸部に施し、胴部に長方形に沈線を施す。119は沈線で区画を作り、区画内に刺突を行う。120は縦位に沈線を行い、頸部に縄文の圧痕文を1条施す。121は口縁部に半隆起線文を2条、胴部に縄文を施す。口唇部に沈線を1条行う。122・123は波状口縁。122は波頂部で二つの山が形成され、穿孔される。沈線、刺突を施し、頸部に半隆起線文を行う。123は半隆起線文を施し、隆帯に櫛状工具で刺突を行う。124は縄文を施した後、沈線で区画を作る。区画内に刺突を行う。**新崎式**に属する。125・133は浅鉢。125は沈線と隆帯で円形文を施文する。133は口唇部に玉抱き三叉文を施し、沈線と半隆起線文で渦巻文を施文する。127・128・130・138・142は沈線と爪形文を刻んだ隆帯で渦巻文を施文する。**上山田・天神山**式に相当。126波状口縁の波頂部。口縁部に円形の穴、沈線で渦巻文を施す。132は半隆起線文で渦巻文を行う。**古府式**に該当。135・141は隆帯に櫛状工具による刺突を行う。135は**古府式**か。140の口縁部は無文。頸部に隆帯を貼り付け指頭圧痕を行う。143は火炎土器様式の中で非装飾的な**王冠型を模倣した**可能性がある。144・145は沈線で区画し、区画内に144は刺突を行い、145は蓮華文を施す。146は沈線に刻みを行う。144～146は**新崎式**に相当。147・157は区画内を櫛状工具で刺突する。古串田新式に相当。148は区画内に刻みを細かく入れる。**上山田･天神山式**と考えられる。149は沈線で三叉文を施文する。150は胴部片。縄文

を施文後に沈線を施す。新崎式に相当。151・161 頸部から胴部に横方向に沈線を行い、胴部途中まで沈線を施す。152 は隆帯に爪形文を入れ、沈線で渦巻文を施文する。151・152・161 は**上山田・天神山式**に相当。154 は縄文を施した後、波状に沈線を入れる。155 は格子目状に刻みを入れる。156 は沈線で区画し、区画内に爪形文を刻む。154・155・156 は**新崎式**に属する。157 は一部分であるが半隆起線での渦巻文。158 は縄文を施文後に沈線を行う。隆帯には爪形文が入り、渦巻文もある。157・158 は**上山田・天神山式**に相当。159 は縦位の沈線を底部まで行う。160 は縄文を施文する。162 は爪形文の隆帯が 1 条確認できる。隆帯の下から底部まで縄文を施文する深鉢。

163 は浅鉢。平たい隆帯で円形を作る。磨きが行われている。164 は縄文施文後に沈線を行う。165・166・169 は蓮華文を施す。**新崎式**に属する。171・183・192 は櫛状工具の刺突文がある。192 は円形に隆帯を貼り付ける。168・178 ～ 182 は沈線と隆帯で渦巻文を施文し、隆帯には爪形文の刻みが入る。いずれも**上山田・天神山式**に属する。170・176・177 は半隆起線、沈線で渦巻文を施文する。**古府式**に相当。184 は渦巻文が貼り付く。東北地方の**大木式の系統**が考えられる。185・187 はミニチュア土器。185 は沈線で渦巻文を施文する。186 は穿孔と眼鏡状把手が貼り付く。有孔鍔付土器。189 は波状に隆帯が貼り付く。190 は沈線が施されたのち把手を貼り付けている。193 は三つ指装飾が貼り付く。191 は浅鉢の底部で磨きを施す。

195 ～ 201 は底部でいずれも網代痕がある。202 は条痕線文を施文後、胴部下に横位に 1 条沈線が入る。

203 ～ 206 は台付鉢の台部。203 は穿孔される。208・209 は土器片転用の土製円盤。207 は装飾の把手。櫛状工具で刺突され、赤彩がある。210・211 は滑車状の土製耳飾り。いずれも中央は穿孔される。212 は用途不明の土器塊であり、手捏ね粘土塊か。

石器・石製品　石鏃 2、スクレーパー 3、石核 3、打製石斧 4、磨製石斧 2、石錘 6、敲石 7、凹石 1、擦石 2、用途不明（石棒）1 が出土している。

石鏃・スクレーパー・石核　213 は無茎の石鏃。調整はほとんど行っていない。214 は有茎の石鏃。凝灰岩のため風化が激しい。215・216・217 はスクレーパー。215・216 は鋭利な割れを刃部とする。217 は側縁部に片面調整を行う。218・219・220 は石核。いずれも全面敲打。219 は打撃の単一面が 1 面あり、220 は全面に細かい打撃を行い、不純物の多い部分を取り除く。213・215 と同じ鉄石英。

打製石斧　221 は横長剥片。打撃により鋭利な部分を刃部として一部使用する。222 は短冊形の打製石斧。横長剥片素材で調整のため側縁に細かい打撃を加える。刃部は使用のため割れ口が摩耗。223 は撥形で横長剥片素材。側縁に細かい打撃調整を行う。刃部は使用により破損。224 は両面に自然面を残す扁平の川原石を素材する。分銅形に近く、側部からの打撃で抉りを入れる。

磨製石斧　225・230 は蛇紋岩の磨製石斧。225 はほぼ完形。刃部は使用のため破損し、破損部分を再度研磨整形する。230 は刃部のみ。刃部に使用痕は見られるが大きな破損はない。刃は円刃で両凹刃。

石　錘　素材は小形の扁平な川原石。いずれも長軸方向の 2 か所に打撃を加えて抉りを入れる。同様の川原石は包含層から多く出土しており、石錘として利用していた可能性もある。

たたき石・凹石　223 は長軸方向に 2 面と側部に 3 か所使用。235 は長軸方向に 2 面、237 は長軸方向に 1 面と側部に 1 か所、234・237・238 は長軸方向に 1 面を使用。これらは細長い河原石を利用。239・241 は円形の扁平な河原石を利用。240 は凹石で、両面にくぼみがある。側部にも敲打痕がある。

擦　石　いずれも扁平な河原石を利用。242 は側面に一面を擦り面として利用。243 は短軸方向の側面 2 面を擦り面として利用し、長軸方向の一面に敲打痕が見られ、たたき石としても利用している。

石　棒　244 は大型の川原石を使用し、側面に打撃を加えて整形。根本の部分は破断されており整形面とは反対側に、破断面方向から打撃を加えている。自然面には研磨した痕跡はない。

（阿部将樹・野原大輔）

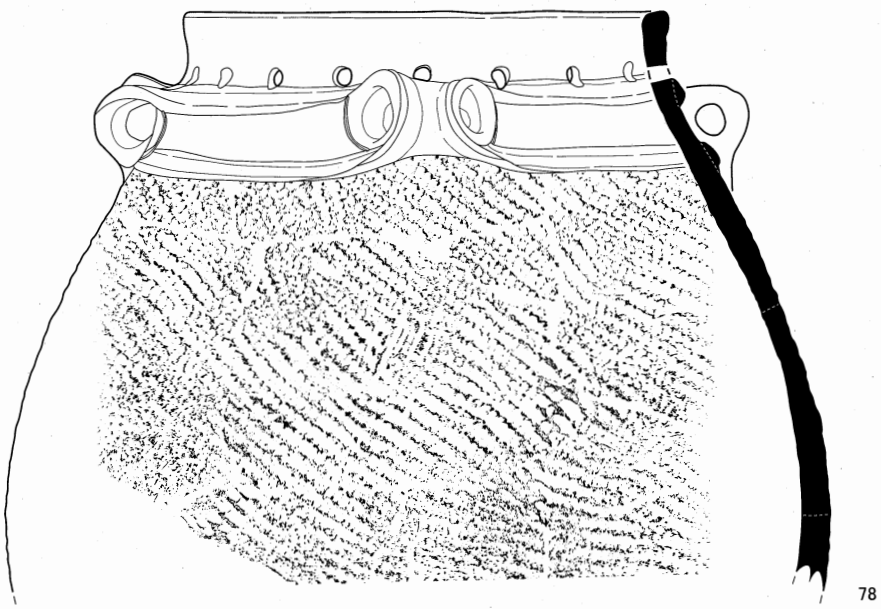


Fig.3.3.8　遺物実測図（8）　遺物包含層出土遺物　　S=1:3

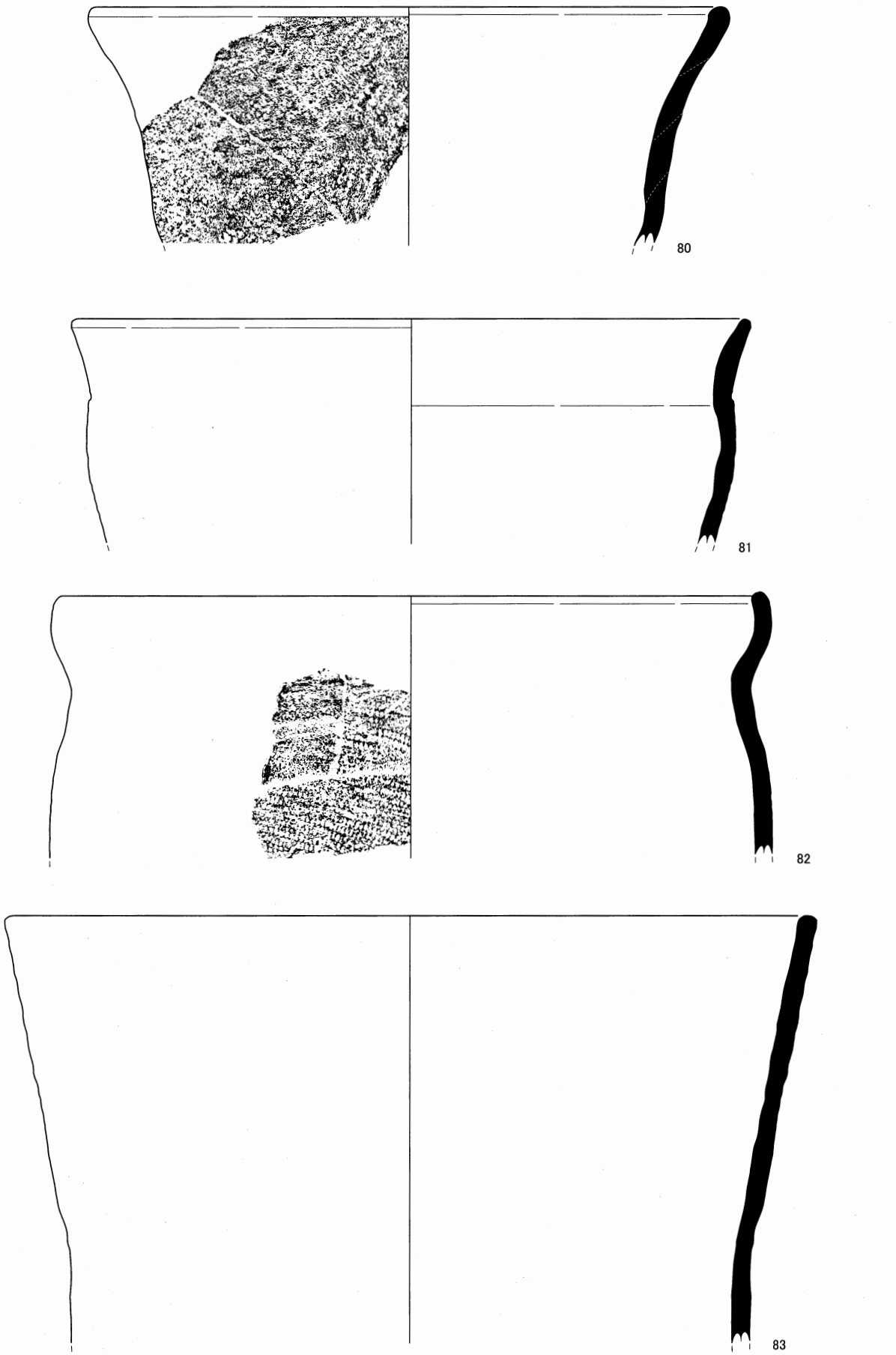


Fig.3.3.9　遺物実測図（9）　遺物包含層出土遺物　S=1:3

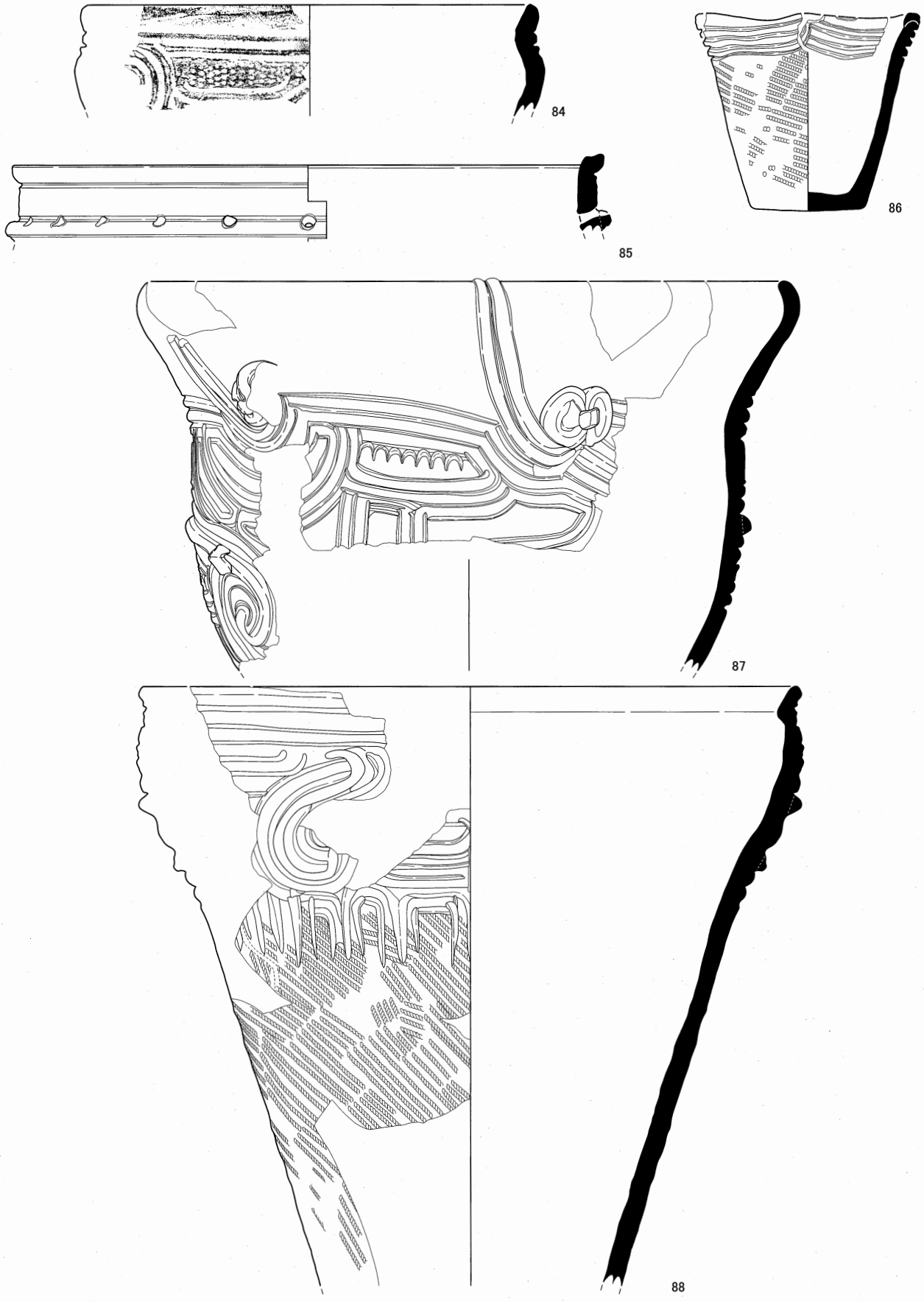


Fig.3.3.10　遺物実測図（10）　遺物包含層出土遺物　S=1:3

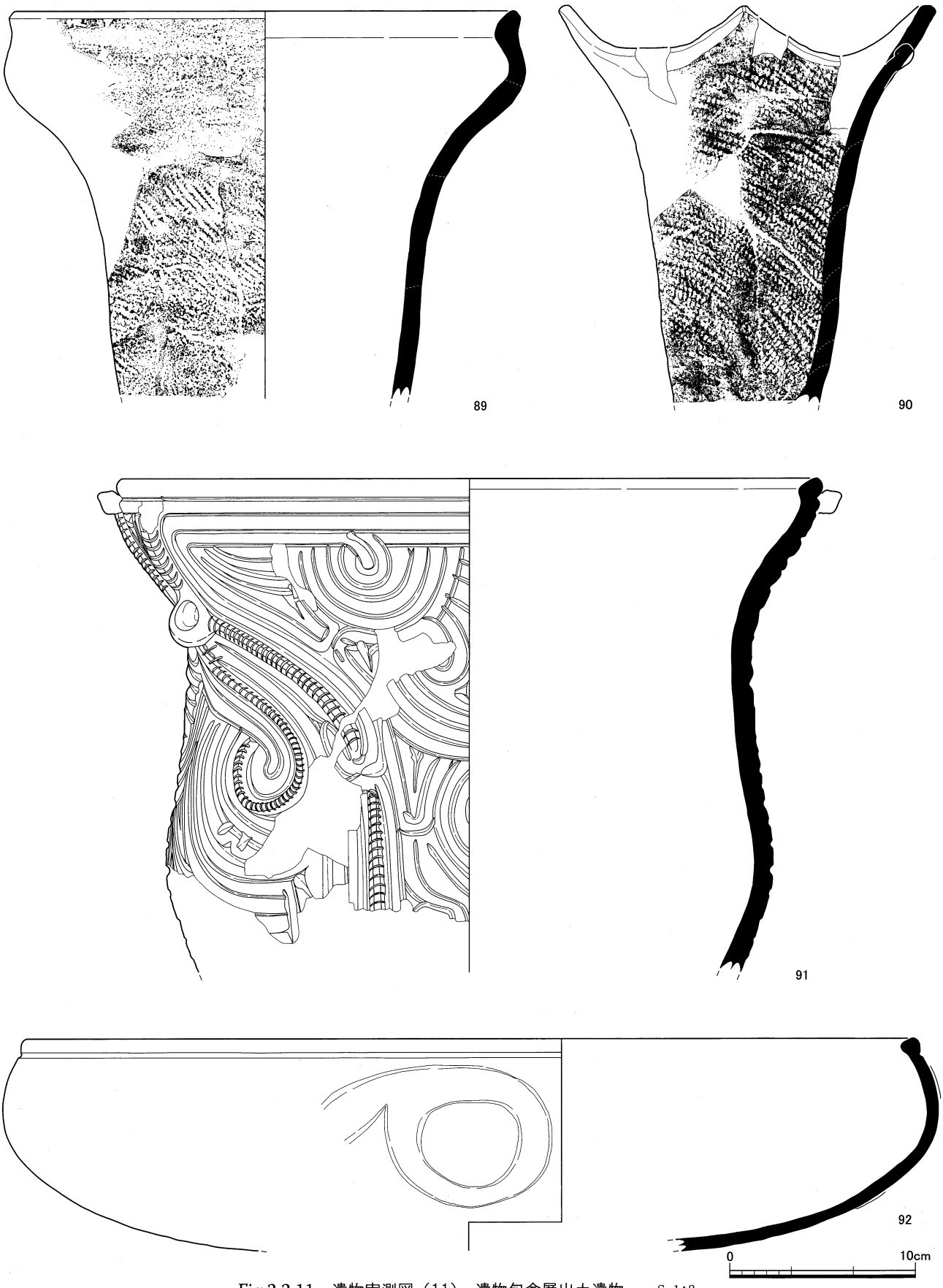


Fig.3.3.11　遺物実測図（11）　遺物包含層出土遺物　　S=1:3

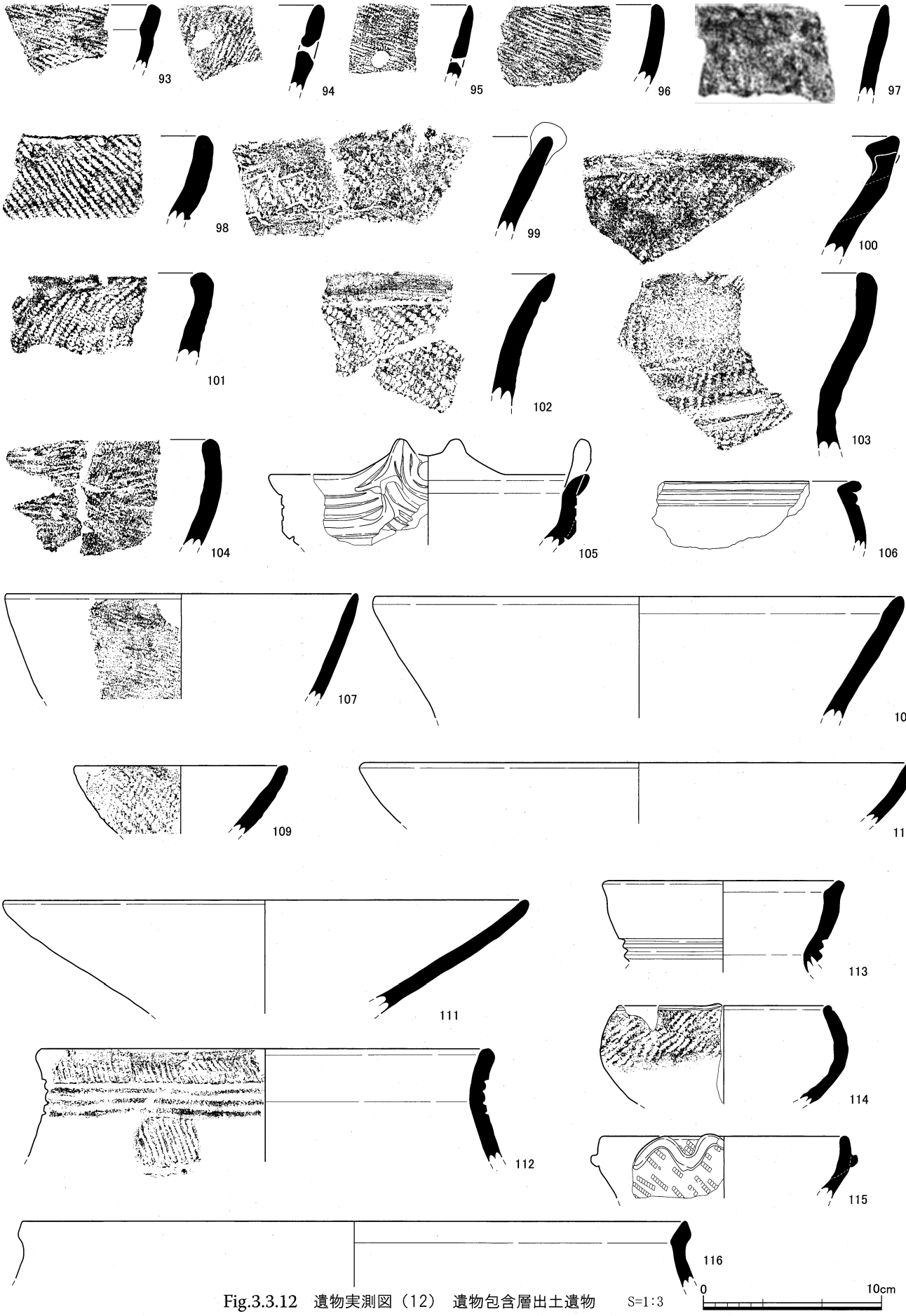


Fig.3.3.12　遺物実測図（12）　遺物包含層出土遺物　S=1:3

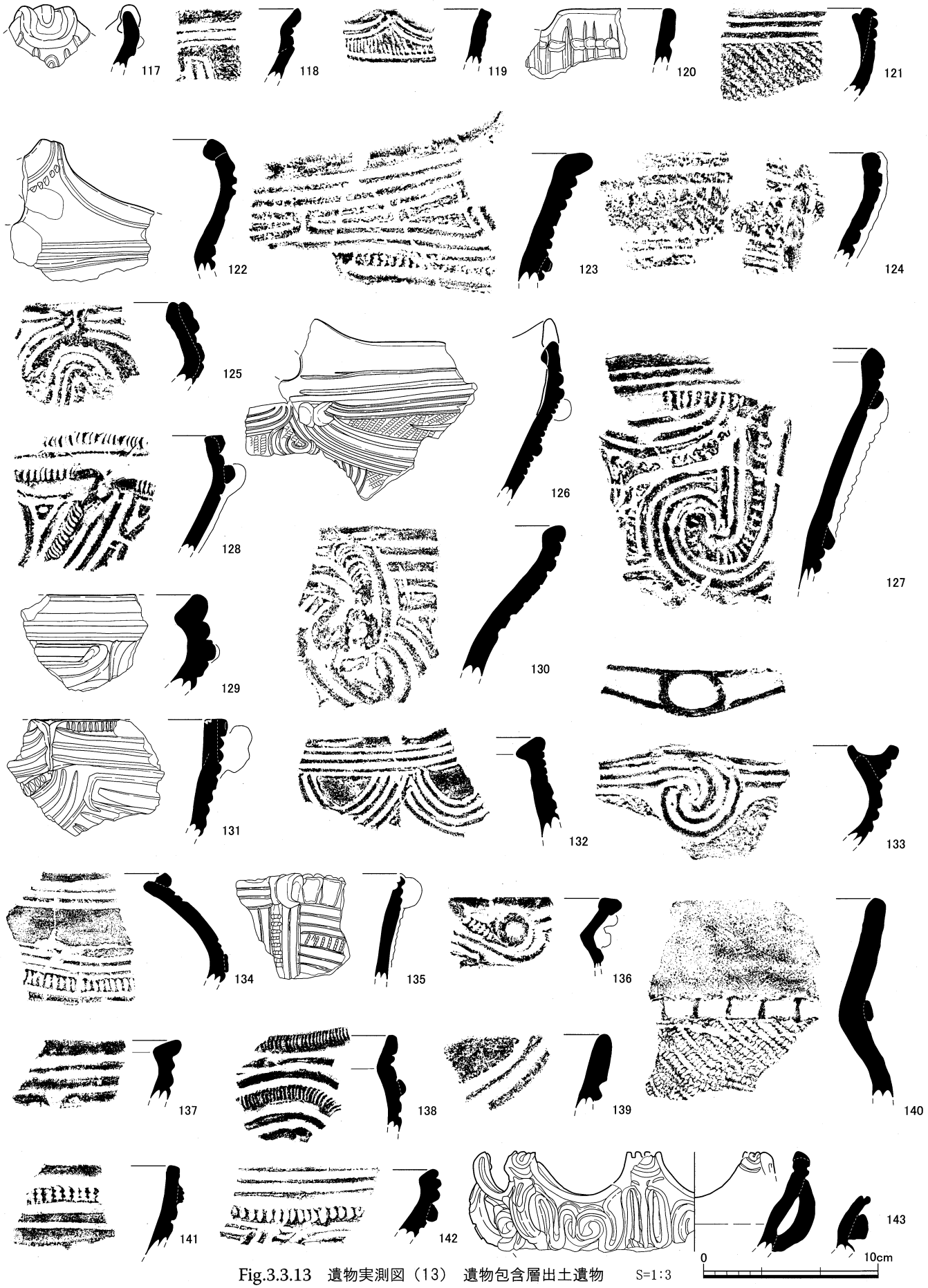


Fig.3.3.13　遺物実測図（13）　遺物包含層出土遺物　S=1:3

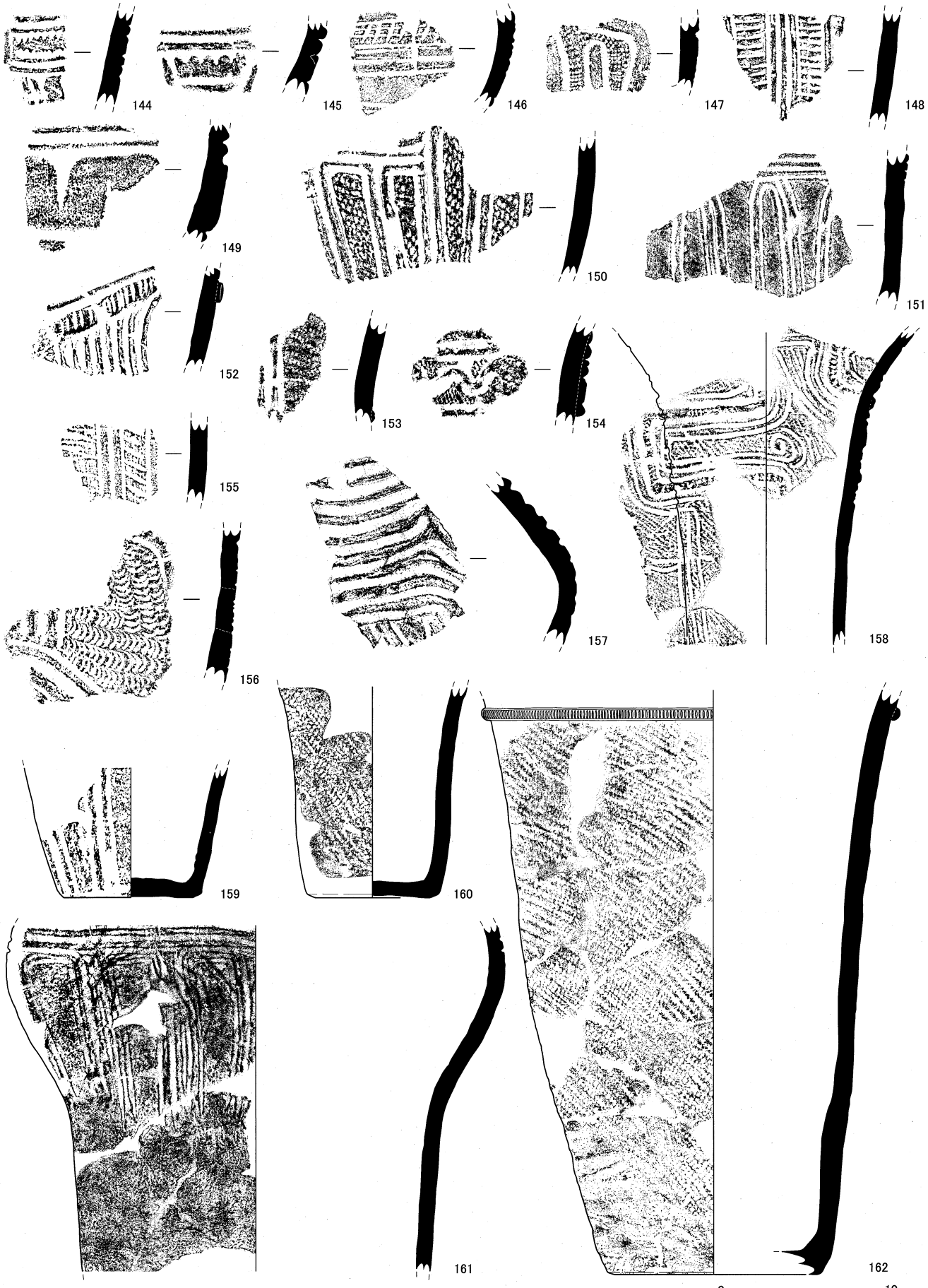


Fig.3.3.14　遺物実測図（14）　遺物包含層出土遺物　S=1:3

Fig.3.3.15　遺物実測図（15）　遺物包含層出土遺物　S=1:3

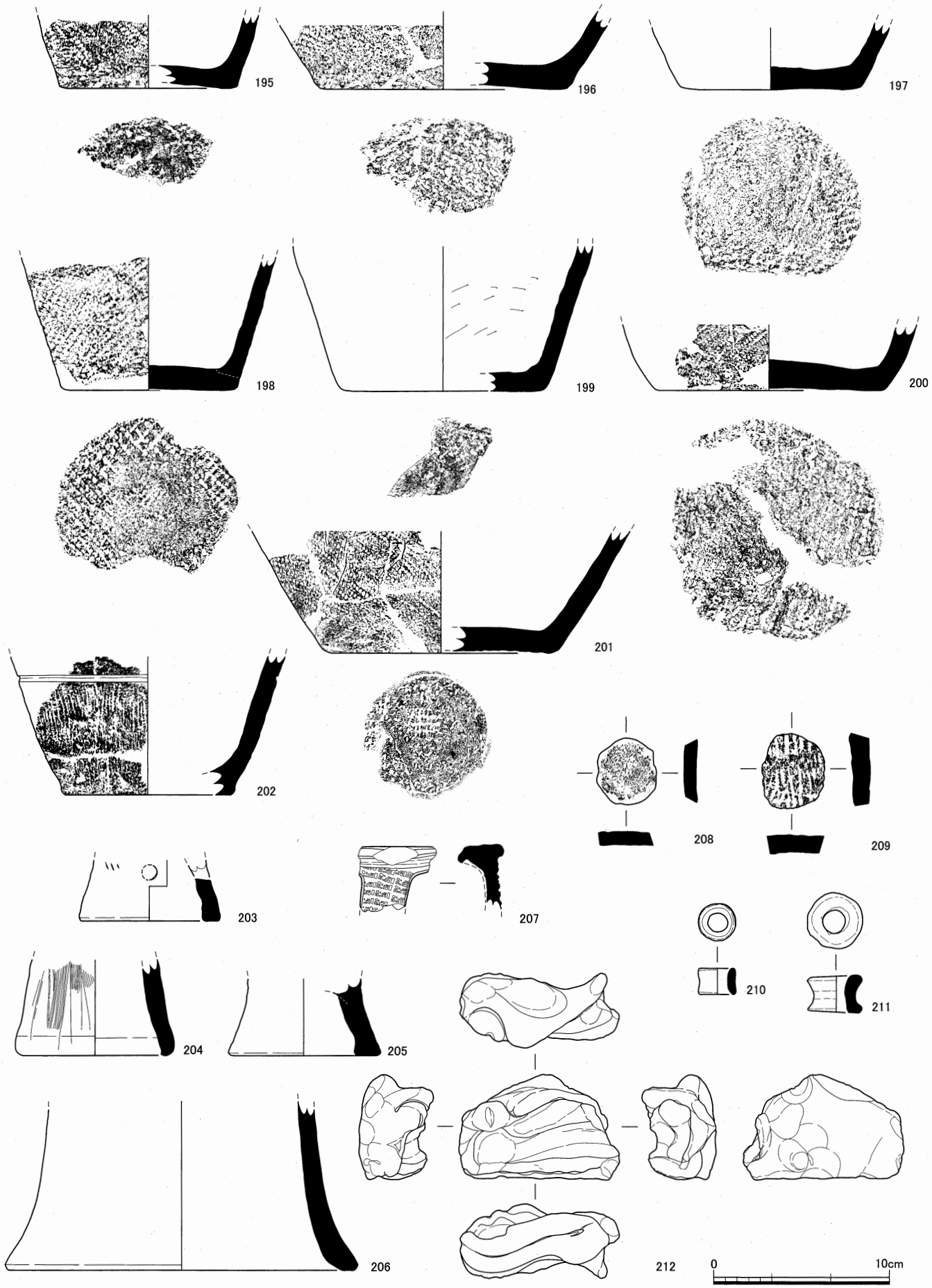


Fig.3.3.16　遺物実測図（16）　遺物包含層出土遺物　　S=1:3

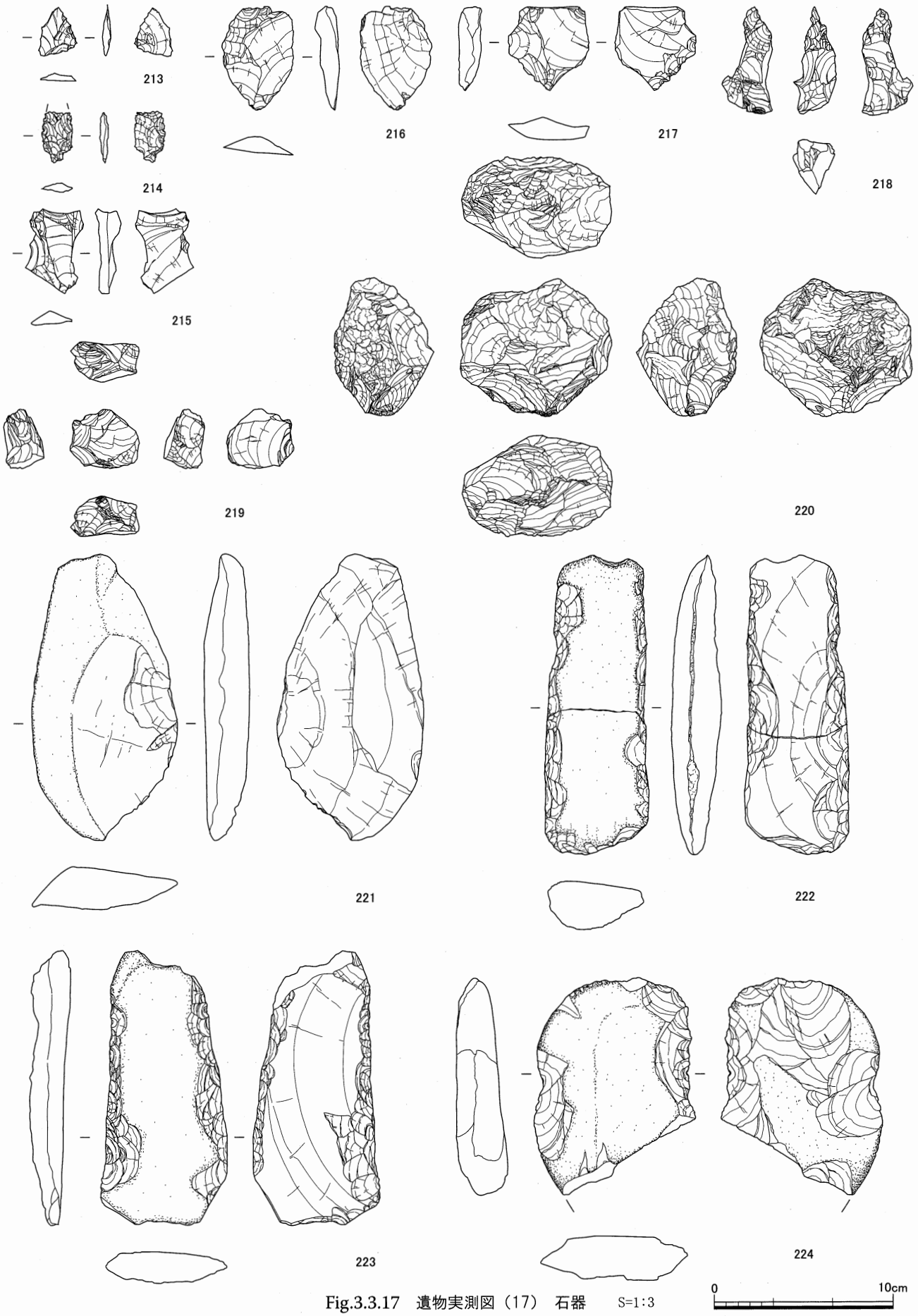


Fig.3.3.17　遺物実測図（17）　石器　S=1:3

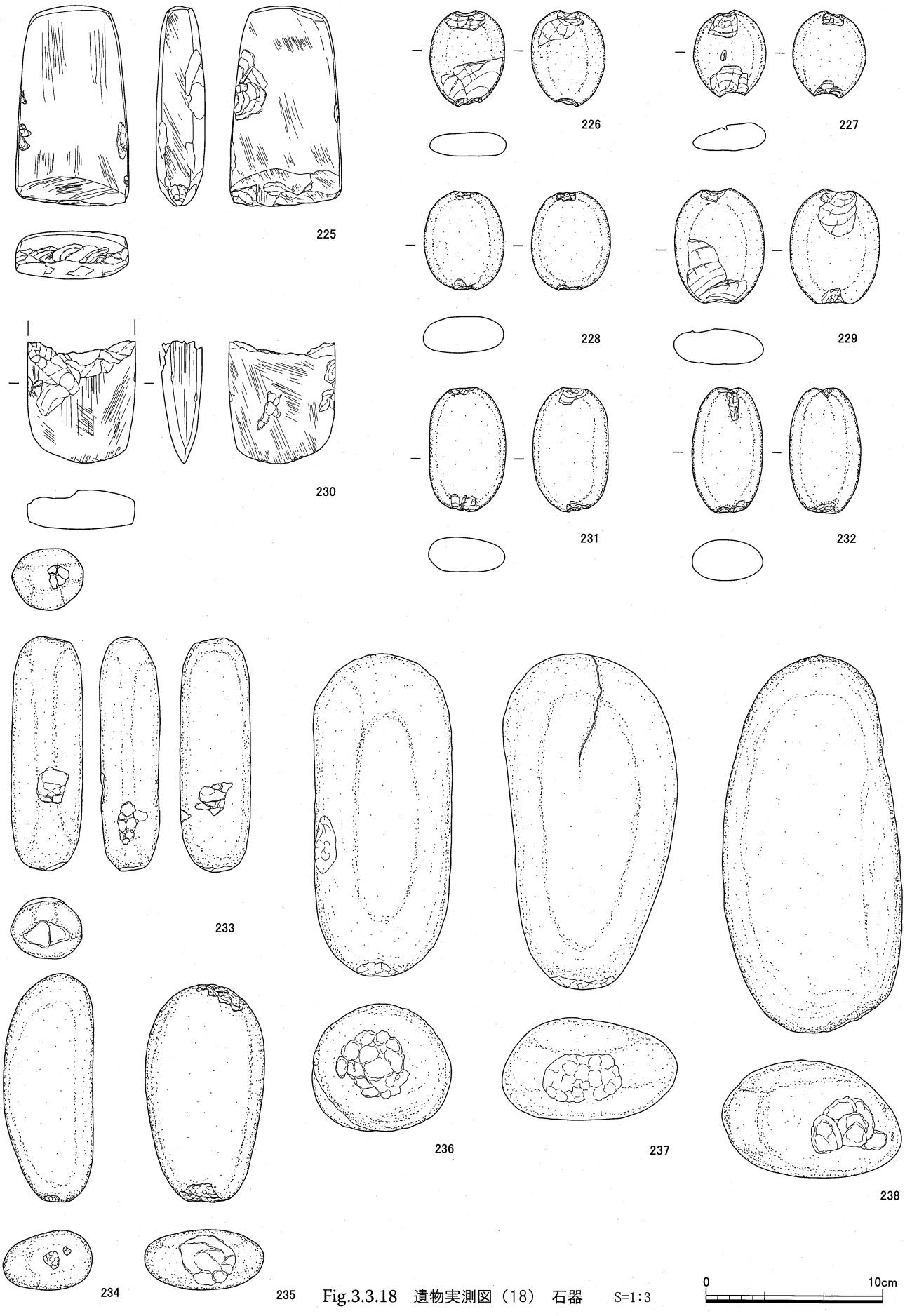
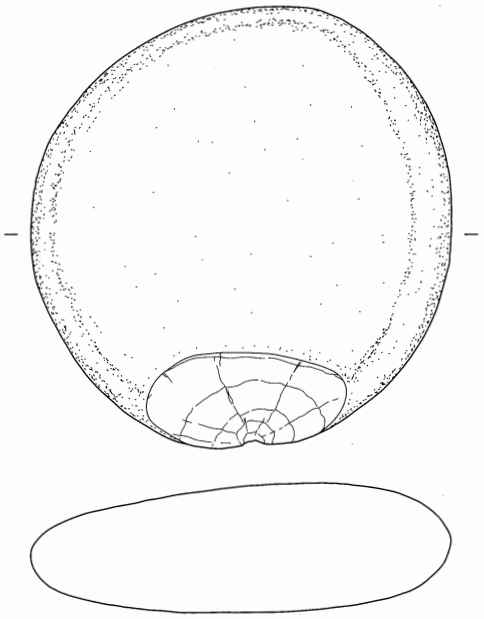
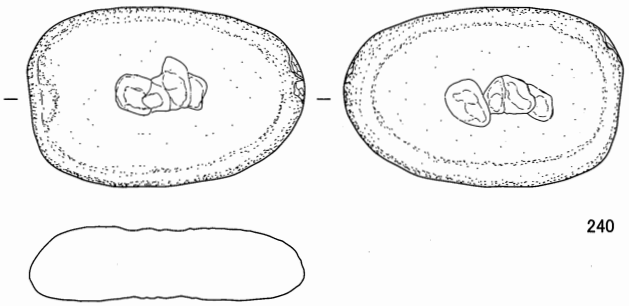
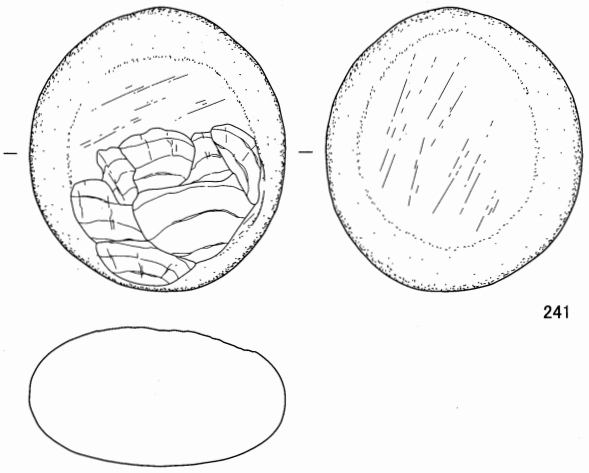
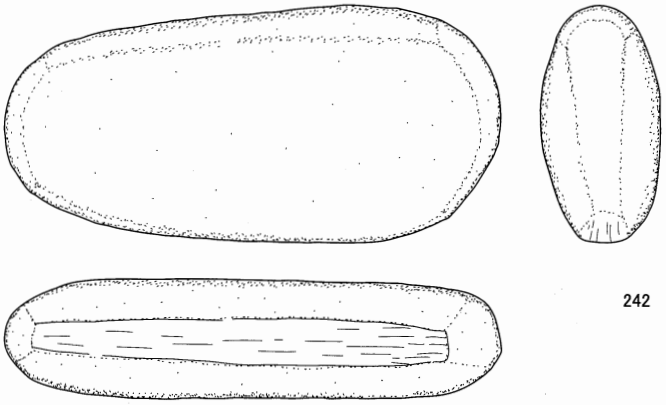


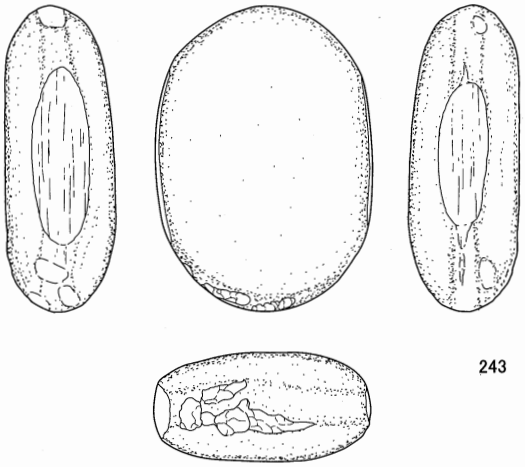
Fig.3.3.18　遺物実測図（18）　石器　S=1:3

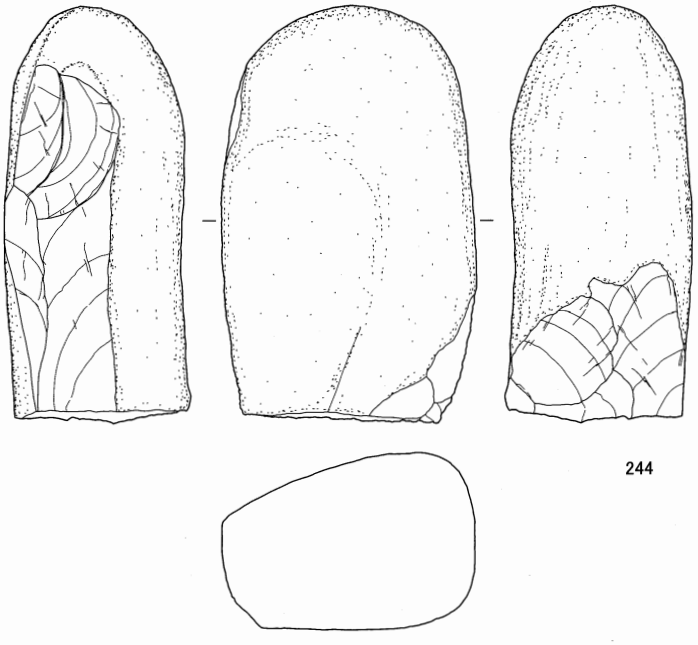

239


240


241


242


243


244

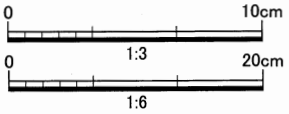


Fig.3.3.19　遺物実測図（19）　石器　　S=1:3、1:6（244 のみ）

Tab.3.3.1　遺物観察表（1）　遺構内出土遺物

No	遺構	器種	大きさ（cm）			調整・施文等	胎土	焼成	色調
			口径	底径	器高				
1	SI01	深鉢	(32.8)	(11.4)	29.45	(外面）穿孔、隆帯、刻み、横位のS字状文 RL 縄文施文、沈線、ナデ	並	普通	(内面）7.5YR5/6 明褐 (外面）5YR6/6 橙
2	SI01	深鉢	(32.0)	-	(34.0)	(内面） (外面）撚糸文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR6/6 橙 (外面）5YR6/6 橙
3	SI01	深鉢？	-	-	(2.75)	(外面）ナデ、沈線 (内面）ナデ、渦巻隆帯	並	普通	(内面）5YR6/6 橙 (外面）5YR6/6 橙
4	SI01	深鉢	-	-	(6.2)	(外面）半隆起線文、隆帯 (内面）不明	並	不良	(内面）5Y6/8 橙 (外面）5Y6/8 橙
5	SI01	深鉢	(43.0)	-	(5.3)	(外面）RL 縄文施文 (内面）ナデか？	並	良好	(内面）5YR5/6 明赤褐 (外面）5YR6/6 橙
6	SI01	深鉢？	-	-	(2.75)	(外面）波状文、LR 縄文施文 (内面）ミガキ	並	普通	(内面）2.5YR5/8 明赤褐 (外面）7.5YR6/6 橙
7	SI01	深鉢	-	-	(2.9)	(外面）隆帯　渦巻文　刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR6/6 橙 (外面）5YR6/6 橙
8	SI01	深鉢	-	-	(6.4)	(外面）撚糸文 (内面）ナデ	並	不良	(内面）10YR5/3 にぶい黄褐 (外面）7.5YR6/6 橙
9	SI01	深鉢	(12.4)	-	(5.3)	(外面）沈線 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR5/4 にぶい褐 (外面）5YR5/6 明赤褐
10	SI01	深鉢	-	-	4.45	(外面）沈線、刻み目 (内面）ナデ	密	良好	(内面）7.5YR5/6 明褐 (外面）2.5Y5/3 黄褐
11	SI01	深鉢	(29.8)	-	(8.3)	(外面）ナデ、撚糸文 (内面）ヨコナデ、ミガキ	並	良好	(内面）7.5YR5/6 明褐 (外面）7.5YR5/6 明褐
12	SI01	深鉢	(31.8)	-	(8.5)	(外面）撚糸文 (内面）ナデ、ミガキ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/6 明黄褐
13	SI01	深鉢	(39.0)	-	(26.4)	(外面）RL 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR5/4 にぶい褐 (外面）7.5YR5/6 明褐
14	SI01	深鉢	(35.2)	-	(10.6)	(外面）条痕 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/8 橙
15	SI01	深鉢	(44.8)	-	(7.6)	(外面）沈線文、刺突文、綾杉状刻み目 (内面）ナデ、ヨコナデ	密	良好	(内面）10YR5/4 にぶい黄褐色 (外面）2.5Y4/2 暗灰黄
16	SI01	深鉢	-	-	(6.2)	(外面）沈線、細沈線 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/6 明褐黄 (外面）7.5YR6/6 橙
17	SI01	深鉢	-	-	(4.0)	(外面）沈線 (内面）調整不明	並	普通	(内面）2.5YR5/8 明赤褐 (外面）7.5YR6/6 橙
18	SI01	深鉢	-	-	(6.3)	(外面）沈線、刺突 (内面）ミガキ	並	普通	(内面）10YR6/6 明黄橙 (外面）5YR6/8 橙
19	SI01	深鉢	-	-	(7.05)	(外面）隆帯に刻み、隆起線、沈線 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）7.5YR6/4 にぶい橙
20	SI01	深鉢	-	-	(8.85)	(外面）LR 縄文施文、沈線、刺突 (内面）ミガキ、ナデ	密	普通	(内面）2.5Y3/1 黒褐 (外面）10YR4/3 にぶい黄褐
21	SI01	深鉢	(29.4)	-	(5.1)	(外面）半隆起線文、RL 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR4/4 褐 (外面）10YR5/3 にぶい黄褐
22	SI01	深鉢	-	-	(4.65)	(外面）刺突、沈線、隆帯 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/2 灰黄褐 (外面）10YR8/4 浅黄橙
23	SI01	深鉢	-	-	(5.3)	(外面）玉抱き三又文、沈線 (内面）ミガキ、ナデ	並	普通	(内面）2.5Y5/3 黄褐 (外面）2.5Y4/1 黄灰
24	SI01	有孔鍔付土器	-	-	(4.6)	(外面）隆起線 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/6 明黄褐 (外面）7.5YR7/6 橙
25	SI01	深鉢	-	-	(3.3)	(外面）沈線、刺突、細沈線 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
26	SI01	深鉢	-	-	(6.2)	(外面）渦巻文、貝殻？刺突 (内面）ナデ、ミガキ	並	普通	(内面）7.5YR5/4 にぶい褐 (外面）5YR6/6 橙
27	SI01	深鉢	(28.6)	-	(19.1)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR5/4 にぶい黄褐 (外面）10YYR4/4 褐
28	SI01	深鉢	-	-	(4.9)	(外面）沈線、蓮華文、隆帯 (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR5/6 明赤褐 (外面）5YR5/6 明赤褐

Tab.3.3.2　遺物観察表（2）　遺構内出土遺物

No	遺構	器種	大きさ（cm）			調整・施文等	胎土	焼成	色調
			口径	底径	器高				
29	SI01	台付鉢	-	-	(2.5)	(外面）隆帯、指頭押圧 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR7/6 橙 (外面）7.5YR6/4 にぶい橙
30	SI01	深鉢	32.4	-	(12.5)	(外面）RL 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR6/6 橙 (外面）5YR6/6 橙
31	SI01	深鉢	-	-	(19.4)	(外面）ナデ、ケズリ (内面）調整不明	並	良好	(内面）7.5YR7/6 橙 (外面）5YR7/6 橙
32	SI01	深鉢	-	-	(19.5)	(外面）沈線　絡条体 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR7/8 黄橙 (外面）2.5Y5/2 暗灰黄
33	SI01	深鉢	-	(11.0)	(3.0)	(外面）ナデ、撚糸文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR5/4 にぶい褐 (外面）10YR5/3 にぶい黄褐
34	SI01	深鉢	-	(9.8)	(6.3)	(外面）RL 縄文施文 (内面）ナデ	密	良好	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR6/6 明黄褐
35	SI01	深鉢	-	(10.4)	(5.55)	(外面）縄文不明瞭 (内面）	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）7.5YR6/6 橙
36	SI01	深鉢	-	13.0	(3.5)	不明	粗	普通	(内面）5YR6/8 橙 (外面）5YR6/6 橙
37	SI01	深鉢	-	(14.6)	(4.1)	(外面）ケズリ (内面）ミガキ？	並	良好	(内面）7.5YR5/3 にぶい褐 (外面）2.5Y5/3 黄褐
38	SI01	台付鉢	(12.4)	-	(5.2)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR5/6 明赤褐 (外面）5YR6/6 橙
39	SI01	浅鉢	-	(6.0)	(2.65)	(外面）ミガキ (内面）ミガキ？	並	普通	(内面）10YR5/2 灰黄褐 (外面）7.5YR6/4 にぶい橙
40	SI01	深鉢	-	-	(10.9)	(外面）RL 絡条体 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
41	SI01	甕	-	-	(22.5)	(外面）絡条体 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/6 明黄褐 (外面）7.5YR5/4 にぶい褐
42	SI01	深鉢	-	8.5	(3.6)	未調整	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）10YR5/3 にぶい黄橙
43	SI01	深鉢	-	-	(8.1)	(外面）縄文施文、ナデ、網代圧痕（底部） (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/3 にぶい黄橙 (外面）7.5YR7/6 橙
44	SI01	深鉢	-	(11.9)	(5.6)	(外面）LR 単節縄文 (内面）ケズリ	並	普通	(内面）5Y6/6 橙 (外面）5Y6/6 橙
45	SI01	ミニチュア土器	-	(5.6)	(3.1)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR5/3 にぶい黄橙 (外面）7.5YR5/4 にぶい褐
46	SI01	深鉢	-	(11.6)	(1.5)	(外面）圧痕（底部） (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/6 明赤褐 (外面）7.5YR6/6 橙
47	SI01	深鉢	-	(11.6)	(3.1)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/6 明黄褐
48	SI01	深鉢	-	11.3	(7.7)	(外面）RL 縄文施文、網代圧痕（底部） (内面）ナデ	並	不良	(内面）7.5YR7/6 橙 (外面）7.5YR7/6 橙
49	SK02	深鉢	48.2	12.0	52.0	(外面）沈線、隆帯、刻み、撚糸文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/4 にぶい橙 (外面）7.5YR6/6 橙
50	SK02	深鉢	-	-	(4.0)	(外面）ナデ、RL 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR5/6 明褐 (外面）7.5YR6/6 橙
51	SK06	ミニチュア土器	-	4.9	(4.7)	(外面）縦横方向の撚糸文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR3/2 黒褐 (外面）10YR7/6 明黄褐
52	SK07	深鉢	(23.6)	-	(5.7)	(外面）ナデ、沈線文 (内面）ナデ	密	良好	(内面）10YR6/4 黄橙 (外面）10YR6/4 黄橙

Tab.3.3.3　遺物観察表（3）　遺構内出土遺物

No	遺構	器種	大きさ（cm）			調整・施文等	胎土	焼成	色調
			口径	底径	器高				
53	SK07	底部のみ	-	(12.0)	(1.1)	(外面）網代痕（底部） (内面）調整不明	粗	普通	(内面）7.5YR8/3 浅黄橙 (外面）7.5YR6/6 橙
54	SK37	深鉢	(28.0)	-	(11.7)	(外面）ナデ (内面）	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）10YR3/1 黒褐
55	SK06	深鉢	(39.0)	-	(28.9)	(外面）条痕文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）10YR6/4 にぶい黄橙
56	SK21	深鉢	-	-	(2.1)	(外面）刺突 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
57	SK37	深鉢	-	-	(3.9)	(外面）渦巻文、刻み目 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）7.5YR7/6 橙
58	SK37	深鉢	-	-	(4.3)	(外面）沈線（擬蓮華文？） (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR6/8 橙 (外面）5YR5/6 明赤橙
59	SK37	深鉢	-	-	(6.3)	(外面）沈線、撚糸文 (内面）ミガキ、ナデ	並	普通	(内面）10YR7/6 明黄褐 (外面）10YR2/1 黒
60	SK07	深鉢	16.9	7.6	20.4	(外面）縦位方向のLR縄文施文 (内面）	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
61	SK40	深鉢	(26.6)	-	(8.15)	(外面）沈線、クシ歯状刺突 (内面）ナデ、ミガキ	並	良好	(内面）5YR6/6 橙 (外面）5YR6/6 橙
62	SK50	耳飾	2.15	2.15	1.9	(外面）ナデ、指頭痕 (内面）	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）10YR6/4 にぶい黄橙
63	SK40	台付鉢？	(29.8)	-	(12.4)	(外面）渦巻文、刻み目、LR縄文 (内面）ケズリ、ナデ	並	良好	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
64	SP78 SK72	深鉢	-	(14.0)	(6.65)	(外面）撚糸文、ナデ (内面）横方向のナデ	並	良好	(内面）5YR5/6 明赤褐 (外面）5YR6/6 橙
65	SK73	深鉢	(22.2)	-	(4.4)	(外面）沈線、縄目押圧 (内面）ナデ	並	良好	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
66	SP26	浅鉢	(27.2)	-	(4.9)	(外面）ミガキ (内面）ミガキ	密	良好	(内面）10YR2/1 黒 (外面）10YR6/3 にぶい黄橙
67	SK72	深鉢	-	-	(5.4)	(外面）刺突、隆起線文、LR縄文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/6 明黄褐 (外面）5YR6/6 橙
68	SK20	深鉢	-	-	(8.0)	(外面）RL縄文施文（押圧） (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/3 にぶい黄橙 (外面）10YR5/3 にぶい黄褐
69	SP35	深鉢	-	-	(6.8)	(外面）沈線、刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR8/4 浅黄橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
70	SP66	深鉢	-	-	(9.45)	(外面）隆起線 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR7/6 橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
71	SP36	深鉢	-	-	(5.15)	(外面）渦巻文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）2.5Y5/3 黄褐 (外面）2.5Y5/3 黄褐
72	SP53	深鉢	-	-	(5.2)	(外面）LR縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR6/6 橙 (外面）5YR6/6 橙
73	SP64	深鉢	-	-	(3.7)	(外面）隆帯、LR縄文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/6 明黄褐 (外面）10YR6/4 にぶい黄橙
74	SP54	深鉢	-	-	(12.4)	(外面）隆起線、刻み (内面）ナデ後ミガキ	並	普通	(内面）5YR5/6 明赤褐 (外面）5YR5/6 明赤褐
75	SP71	深鉢	-	-	(5.7)	(外面）ナデ、RL縄文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR7/6 橙
76	SP75	台付鉢	-	-	(4.0)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	良好	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）5YR5/6 明赤褐
77	SP51	深鉢	(37.2)	-	(16.9)	(外面）RL縄文施文 (内面）ナデ？（不明瞭）	並	普通	(内面）2.5Y6/4 にぶい黄 (外面）2.5Y5/3 黄褐

Tab.3.3.4　遺物観察表（4）　遺物包含層出土遺物

No	グリッド	器種	大きさ（cm）			調整・施文等	胎土	焼成	色調
			口径	底径	器高				
78	1T	有孔鍔付土器	19.2	-	(23.0)	（外面）孔　隆帯　鍔　LR 縄文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/4 にぶい黄橙 （外面）5YR7/4 にぶい橙
79	3T	深鉢	(29.8)	(11.4)	(38.0)	（外面）LR 縄文施文、ケズリ、ナデ、網代痕（底部） （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）7.5YR6/6 橙
80	2T	深鉢	(33.4)	-	(12.6)	（外面）LR 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR7/6 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
81	6T	深鉢	(35.3)	-	(11.9)	（外面）RL 縄文施文 （内面）ナデ	粗	普通	（内面）7.5YR5/4 にぶい褐 （外面）10YR4/3 にぶい黄褐
82	X = 55 Y=-45	深鉢	(37.0)	-	(13.9)	（外面）ナデ、RL 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR6/6 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
83	X = 45 Y=-50	深鉢	(42.5)	-	(22.6)	（外面）撚糸文 （内面）調整不明	並	普通	（内面）10YR6/6 明黄褐 （外面）10YR7/6 明黄褐
84	X = 60 Y=-50	深鉢	(23.8)	-	(6.0)	（外面）隆起線文、刺突 （内面）ナデ	密	普通	（内面）10YR5/4 にぶい黄褐 （外面）10YR6/4 にぶい黄橙
85	3T	有孔鍔付土器	(31.8)	-	(4.2)	（外面）沈線、隆帯 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR6/6 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
86	X = 50 Y=-50	鉢	(11.9)	(6.0)	10.7	（外面）RL 縄文施文、沈線 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/4 にぶい黄橙 （外面）10YR6/4 にぶい黄橙
87	3T	深鉢	(34.0)	-	(21.0)	（外面）隆帯、眼鏡状突起、蓮華文、隆起線文 （内面）ナデ	並	良好	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR5/2 灰黄褐
88	6T	深鉢	(35.4)	-	(32.2)	（外面）RL 縄文施文、隆帯、隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR5/6 明赤褐 （外面）5YR6/8 橙
89	3T	深鉢	(27.0)	-	(21.0)	（外面）RL 縄文、刺突 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR5/6 明赤褐 （外面）5YR5/6 明赤褐
90	3T	深鉢	(20.4)	-	(21.5)	（外面）RL 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR5/6 明赤褐 （外面）10YR7/6 明黄褐
91	6T	深鉢	(37.8)	-	(26.8)	（外面）ボタン状突起、隆帯、爪形文、隆起線渦巻文、蓮華文、三又文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/6 明黄褐 （外面）10YR4/2 灰黄褐
92	6T	浅鉢	(48.2)	-	(11.5)	（外面）沈線、円形の貼り付け、ミガキ、ナデ （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
93	4T	深鉢	-	-	(3.6)	（外面）無節縄文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR5/4 にぶい黄褐 （外面）10YR5/4 にぶい黄褐
94	X = 55 Y=-45	鉢	-	-	(4.8)	（外面）LR 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/4 にぶい黄橙 （外面）7.5YR6/6 橙
95	X = 60 Y=-50	鉢	-	-	(4.1)	（外面）RL 縄文施文 （内面）ケズリ	並	普通	（内面）2.5Y4/2 暗灰黄 （外面）2.5Y5/2 暗灰黄
96	2T	深鉢	-	-	(4.5)	（外面）撚糸文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR7/4 橙 （外面）5YR5/6 明赤褐
97	2T	深鉢	-	-	(5.1)	（外面）ナデ （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR6/6 橙 （外面）5YR6/6 橙
98	X = 50 Y=-50	深鉢	-	-	(4.8)	（外面）RL 縄文施文、沈線 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/4 にぶい黄橙 （外面）7.5YR6/6 橙
99	3T	深鉢	-	-	(5.4)	（外面）波状文、RL 縄文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR6/6 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
100	2T	深鉢	-	-	(5.9 ～ 6.8)	（外面）LR 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）2.5Y5/2 暗灰黄 （外面）7.5YR6/6 橙
101	1T	深鉢	-	-	(4.8)	（外面）LR 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/4 にぶい黄橙 （外面）10YR4/1 褐灰
102	X = 60 Y=-45	深鉢	-	-	(7.5)	（外面）RL 縄文施文 （内面）ミガキ	並	普通	（内面）7.5YR6/4 にぶい橙 （外面）7.5YR6/4 にぶい橙

Tab.3.3.5　遺物観察表（5）　遺物包含層出土遺物

No	グリッド	器種	大きさ（cm）			調整・施文等	胎土	焼成	色調
			口径	底径	器高				
103	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(10.0)	（外面）LR 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR6/6 橙 （外面）5YR5/6 明赤褐
104	1T	深鉢	-	-	(5.9)	（外面）RL 縄文施文 （内面）ナデ、ミガキ	並	普通	（内面）10YR4/2 灰黄褐 （外面）10YR4/1 褐灰
105	2T	深鉢	18.0	-	(6.0)	（外面）隆帯、隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR7/4 にぶい橙 （外面）7.5YR7/4 にぶい橙
106	X＝60 Y=-45	浅鉢	-	-	(3.8)	（外面）隆起線文、ミガキ、ケズリ （内面）ミガキ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR5/3 にぶい黄褐
107	5T	鉢	(19.8)	-	(5.95)	（外面）RL 縄文施文 （内面）ケズリ	並	普通	（内面）10YR5/3 にぶい黄褐 （外面）10YR5/3 にぶい黄褐
108	3T	深鉢	(29.6)	-	(6.9)	（外面）ナデ （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/4 にぶい黄橙 （外面）10YR6/4 にぶい黄橙
109	6T	鉢	(5.8)	-	(3.85)	（外面）RL 縄文施文 （内面）ナデ、ミガキ	並	普通	（内面）7.5YR6/6 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
110	X＝60 Y=-45	浅鉢	-	-	(3.45)	（外面）ケズリ （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR6/6 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
111	X＝55・60 Y=-45	浅鉢	-	-	(6.4)	（外面）ミガキ、ナデ （内面）ミガキ、ナデ	並	普通	（内面）5YR2/1 黒褐 （外面）5YR5/8 明赤褐
112	X＝55・60 Y=-45	深鉢	(25.2)	-	(6.4)	（外面）隆起線文、絡条体圧痕 （内面）ナデ、ミガキ	並	普通	（内面）7.5YR5/6 明褐 （外面）7.5YR5/4 にぶい褐
113	6T	鉢	(13.6)	-	(5.2)	（外面）隆起線文、ナデ （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR6/4 にぶい橙 （外面）7.5YR6/4 にぶい橙
114	X＝55 Y=-50	鉢	(11.8)	-	(5.55)	（外面）LR 縄文施文、沈線、ナデ （内面）調整不明	並	普通	（内面）2.5Y3/1 黒褐 （外面）10YR4/3 にぶい黄褐
115	3T	鉢	(3.6)	-	(3.5)	（外面）隆帯（波状）、RL 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
116	6T	浅鉢？	(37.4)	-	(3.7)	（外面）ミガキ （内面）ミガキ	並	普通	（内面）10YR5/2 灰黄褐 （外面）10YR4/1 褐灰
117	X＝45 Y=-50	深鉢	-	-	(3.6)	（外面）沈線、隆帯 （内面）隆帯	並	普通	（内面）7.5YR5/4 にぶい褐 （外面）7.5YR7/4 にぶい褐
118	X＝50 Y=-50	小型鉢	-	-	(4.0)	（外面）隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/4 にぶい黄橙 （外面）10YR6/4 にぶい黄橙
119	6T	鉢	-	-	(3.1)	（外面）刺突、沈線 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR5/6 明赤褐 （外面）5YR2/1 黒褐
120	1T	鉢	-	-	(3.2)	（外面）沈線　押圧文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR4/2 灰黄褐 （外面）10YR4/1 褐灰
121	X＝60 Y=-45	浅鉢	-	-	(5.0)	（外面）隆起線文、RL 縄文施文 （内面）ミガキ、ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/3 にぶい黄橙
122	6T	深鉢	-	-	(7.6)	（外面）刺突、沈線、隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR6/6 橙 （外面）7.5YR5/4 にぶい褐
123	X＝60 Y=-45	深鉢	-	-	(7.3)	（外面）隆帯、刻み、隆起線文 （内面）ミガキ、ナデ	並	不良	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
124	5T	深鉢	-	-	(6.1)	（外面）隆帯、沈線、刺突、LR 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/6 明黄褐 （外面）7.5YR7/6 橙
125	X＝60 Y=-50	浅鉢	-	-	(4.7)	（外面）隆帯、隆起線文 （内面）ミガキ、ナデ	並	普通	（内面）2.5Y5/2 暗灰黄 （外面）2.5Y5/2 暗灰黄
126	X＝60・50 Y=-50	深鉢	-	-	(10.3)	（外面）隆帯、細沈線、渦巻文、ボタン状突起 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
127	6T	深鉢	(28.6)	-	(13.6)	（外面）隆起線文、蓮華文、隆帯、刻み （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
128	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(6.5)	（外面）隆帯、刻み、隆起線文 （内面）ミガキ、ナデ	並	良好	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
129	X＝55 Y=-45	深鉢	-	-	(5.4)	（外面）隆起線文、LR 縄文施文、橋状突起 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR5/6 明赤褐 （外面）5YR6/8 橙

Tab.3.3.6　遺物観察表（6）　遺物包含層出土遺物

No	グリッド	器種	大きさ（cm）			調整・施文等	胎土	焼成	色調
			口径	底径	器高				
130	3T	深鉢	-	-	(8.6)	（外面）隆起線文、隆帯、刻み （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/6 明黄褐 （外面）10YR4/2 灰黄褐
131	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(6.7)	（外面）隆帯、刻み、沈線 （内面）	並	普通	（内面）10YR5/3 にぶい黄褐 （外面）10YR6/3 にぶい黄橙
132	2T	深鉢	-	-	(5.7)	（外面）細隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）2.5Y5/2 暗灰黄 （外面）2.5Y8/3 灰黄
133	6T	浅鉢	-	-	(5.7)	（外面）玉抱き三叉文、渦巻文、RL 縄文施文 （内面）ケズリ、ミガキ	並	普通	（内面）10YR6/3 にぶい黄橙 （外面）10YR4/2 灰黄褐
134	X＝60 Y=-45	浅鉢	-	-	(6.3)	（外面）隆帯、刻み、隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）2.5Y6/4 にぶい黄 （外面）2.5YR5/2 暗灰黄
135	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(6.1)	（外面）粘土貼付、隆起線文、隆帯、刻み （内面）	密	普通	（内面）10YR7/6 明黄褐 （外面）10YR6/4 にぶい黄橙
136	X ＝ 55・60 Y=-45	深鉢	-	-	(4.0)	（外面）隆帯、刻み、隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR6/6 橙 （外面）5YR6/6 橙
137	6T	深鉢	-	-	(3.4)	（外面）沈線 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR5/6 明褐 （外面）7.5YR4/1 褐灰
138	4T	深鉢	-	-	(5.5)	（外面）隆帯、隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5Y5/6 明赤褐 （外面）7.5YR5/4 にぶい褐
139	1T	深鉢	-	-	(4.2)	（外面）沈線 （内面）不明	並	普通	（内面）7.5YR7/6 橙 （外面）7.5YR7/6 橙
140	X＝50 Y=-50	深鉢	(15.5)	-	(11.4)	（外面）隆帯、指頭押圧、RL 縄文施文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
141	6T	深鉢	-	-	(5.2)	（外面）隆帯、刻み、沈線 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR7/6 橙 （外面）7.5YR8/4 浅黄橙
142	X＝55 Y=-50	深鉢	-	-	(3.9)	（外面）沈線、隆帯、刻み （内面）ミガキ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
143	X＝50 Y=-50	深鉢	(19.8)	-	(5.7)	（外面）隆帯　把手　隆線 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR5/6 明褐 （外面）7.5YR5/4 にぶい褐
144	X＝55 Y=-45	鉢	-	-	(5.3)	（外面）沈線、刺突 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR6/4 にぶい黄橙 （外面）7.5YR6/6 橙
145	X＝55 Y=-50	深鉢	-	-	(4.5)	（外面）沈線、蓮華文 （内面）ナデ	並	良好	（内面）7.5YR7/6 橙 （外面）7.5YR7/6 橙
146	X＝60 Y=-45	深鉢	-	-	(5.3)	（外面）沈線　刻み （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR5/3 にぶい黄褐 （外面）10YR7/4 にぶい黄褐
147	X＝60 Y=-45	深鉢	-	-	(3.95)	（外面）沈線　押型文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR5/6 明赤褐 （外面）5YR5/6 明赤褐
148	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(6.0)	（外面）沈線　刻み （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR7/6 橙 （外面）10YR6/4 にぶい黄橙
149	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(6.6)	（外面）隆線　刻み （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR6/6 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
150	3T	深鉢	-	-	(7.60)	（外面）隆起線文、RL 縄文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR7/4 にぶい黄橙
151	2T	深鉢	-	-	(8.3)	（外面）隆起線文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR7/4 にぶい黄橙 （外面）10YR4/1 褐灰
152	X＝60 Y=-45	深鉢	-	-	(5.45)	（外面）隆帯、刻み、隆起線文 （内面）ナデ	密	良好	（内面）2.5Y5/2 暗灰黄 （外面）2.5Y5/2 暗灰黄
153	1T	深鉢	-	-	(5.85)	（外面）刺突、沈線 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR5/6 明赤褐 （外面）5YR6/6 橙
154	2T	深鉢	-	-	(5.7)	（外面）隆帯、波状文、RL 縄文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR6/6 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
155	5T	深鉢	-	-	(5.5)	（外面）沈線、格子目文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）10YR5/2 灰黄褐 （外面）10YR7/4 にぶい黄褐
156	X＝60 Y=-50	深鉢	-	-	(8.6)	（外面）隆線　爪型文 （内面）ナデ	並	普通	（内面）5YR6/8 橙 （外面）7.5YR6/6 橙
157	2T	深鉢	-	-	(9.4)	（外面）沈線 （内面）ナデ	並	普通	（内面）7.5YR5/6 明褐 （外面）7.5YR4/4 褐灰

Tab.3.3.7　遺物観察表（7）　遺物包含層出土遺物

No	グリッド	器種	大きさ（cm）			調整・施文等	胎土	焼成	色調
			口径	底径	器高				
158	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(17.5)	(外面）隆帯　刻み　R 撚糸文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR5/6 黄褐 (外面）7.5YR6/6 橙
159	6T	鉢	-	8.0	(7.3)	(外面）隆起線文、沈線、刺突（三又文?） (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 ～ 10YR6/6 明黄褐 (外面）5YR6/6 橙
160	6T	深鉢	-	(7.2)	(11.8)	(外面）ナデ、RL 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR6/8 橙 (外面）5YR6/6 橙
161	2T	深鉢	-	-	(19.4)	(外面）隆起線文、ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR5/2 灰黄褐
162	3T	深鉢	-	(12.2)	(32.8)	(外面）RL 縄文、ナデ、隆帯、刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR7/6 橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
163	X＝55 Y=-45	浅鉢	-	-	(4.0)	(外面）ミガキ、ケズリ、ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）10YR4/1 褐灰
164	1T	深鉢	-	-	(5.7)	(外面）沈線、LR 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
165	X＝60 Y=-45	深鉢	-	-	(6.0)	(外面）隆起線文、蓮華文、斜沈線 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
166	X＝45 Y=-55	瓶	-	-	(7.4)	(外面）沈線　蓮華文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）2.5Y5/2 暗灰黄 (外面）5YR6/6 橙
167	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(4.1)	(外面）沈潜　絡条体 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）10YR5/2 灰黄褐
168	4T	深鉢	-	-	(7.2)	(外面）LR 縄文施文、沈線、隆帯、刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR5/6 明褐 (外面）7.5YR4/2 灰褐
169	6T	深鉢	-	-	(5.75)	(外面）沈線、蓮華文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）7.5YR6/6 橙
170	4T	鉢	-	-	(4.5)	(外面）渦巻文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/6 明黄褐 (外面）10YR6/6 明黄褐
171	2T	深鉢	-	-	(6.3)	(外面）隆起線文、刺突 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
172	X＝45 Y=-50	深鉢	-	-	(5.5)	(外面）渦巻文、沈線、刺突、LR 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR4/1 褐灰 (外面）7.5YR7/4 にぶい橙
173	X＝55 Y=-45	深鉢	-	-	(5.9)	(外面）隆起線文、刺突、蓮華文、隆帯、刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）5YR5/6 明赤褐
174	X＝50 Y=-50	深鉢	-	-	(5.7)	(外面）隆帯　隆線　渦巻文　刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR6/4 にぶい黄橙
175	3T	深鉢	-	-	(8.95)	(外面）渦巻文、隆起線文、短沈線 (内面）ナデ、ミガキ	並	普通	(内面）5YR5/6 明赤褐 (外面）5YR6/6 橙
176	3T	深鉢	-	-	(8.4)	(外面）渦巻文、隆帯 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR7/6 橙
177	3T	深鉢	-	-	(11.2)	(外面）渦巻文、隆起線文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
178	X＝55 Y=-45	深鉢	-	-	(6.0)	(外面）隆帯　隆線　渦巻文　刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）2.5Y5/2 暗灰黄 (外面）10YR6/4 にぶい黄橙
179	X＝55 Y=-50	深鉢	-	-	(5.4)	(外面）渦巻文、沈線、隆帯、刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR4/1 褐灰 (外面）7.5YR7/4 にぶい橙
180	3T	深鉢	-	-	(9.2)	(外面）隆起線文、隆帯刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
181	X＝60 Y=-45	深鉢	-	-	(10.9)	(外面）隆帯　隆線　渦巻文　刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR5/3 にぶい黄褐 (外面）7.5YR6/6 橙
182	6T	深鉢	-	-	(8.5)	(外面）渦巻文、隆帯、刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR6/8 橙 (外面）5YR6/6 橙
183	2T	深鉢	-	-	(5.3)	(外面）渦巻文、隆帯、刻み (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR5/6 明褐 (外面）7.5YR6/6 明褐
184	X＝60 Y=-50	深鉢	-	-	(5.6)	(外面）突起（渦巻状） (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR7/6 橙 (外面）5YR6/6 橙

Tab.3.3.8　遺物観察表（8）　遺物包含層出土遺物

No	グリッド	器種	大きさ（cm）			調整・施文等	胎土	焼成	色調
			口径	底径	器高				
185	2T	ミニチュア土器	-	(5.0)	(2.5)	(外面）渦巻文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
186	X = 45 Y=-45	有孔鍔付土器	-	-	(6.6)	(外面）隆帯、刻み、メガネ状突起 (内面）	並	普通	(内面）10YR6/6 明赤褐 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
187	西トレ	ミニチュア土器	-	(4.0)	(2.8)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/3 にぶい黄橙 (外面）10YR6/4 にぶい黄橙
188	2T	鉢	-	4.5	(5.1)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR5/6 明赤褐 (外面）5YR6/8 橙
189	X = 50 Y=-50	深鉢	-	-	(5.1)	(外面）隆帯 (内面）不明	並	普通	(内面）10YR8/4 浅黄橙 (外面）10YR8/4 浅黄橙
190	X = 60 Y=-50	深鉢	-	-	(5.5)	(外面）隆起線文、LR 縄文施文、橋状突起 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/6 明黄褐 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
191	X = 50 Y=-50	浅鉢	-	(8.2)	(3.65)	(外面）ミガキ (内面）ミガキ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）10YR6/3 にぶい黄橙
192	1 T	深鉢	-	-	(7.6)	(外面）隆帯、刺突、隆起線文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）5YR6/6 橙
193	6T	深鉢	-	-	(3.8)	(外面）LR 縄文施文、隆起線文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR7/6 橙 (外面）7.5YR7/6 橙
194	1 T	浅鉢	-	(13.0)	(2.9)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）2.5Y6/3 にぶい黄 (外面）2.5Y6/3 にぶい黄
195	2T	深鉢	-	(10.0)	(4.2)	(外面）RL 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/6 明黄褐 (外面）7.5YR7/6 橙
196	X = 60 Y=-50	深鉢	-	(14.0)	(4.5)	(外面）ナデ、LR 縄文施文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR6/4 にぶい黄橙
197	X = 55 Y=-45	深鉢	-	(10.3)	(3.85)	(外面）ケズリ、網代圧痕 (底部) (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR5/4 にぶい黄褐
198	X = 60 Y=-45	深鉢	-	(10.0)	(7.60)	(外面）LR 縄文施文、網代痕（底部） (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）5YR6/6 橙
199	X = 60 Y=-45	深鉢	-	(10.8)	(8.3)	(外面）ナデ (内面）ケズリ、ミガキ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）10YR4/3 にぶい黄褐
200	X = 45 Y=-50	深鉢	-	(13.0)	(3.8)	(外面）沈線、LR 縄文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR6/4 にぶい黄橙
201	6T	深鉢	-	(13.2)	(7.0)	(外面）ナデ、RL 縄文施文、網代痕（低部） (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/4 にぶい橙 (外面）7.5YR6/6 橙
202	2T	深鉢	-	(4.7)	(7.9)	(外面）条痕文？、沈線、ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）5YR5/6 明赤褐
203	X = 50 Y=-50	台付鉢	-	(8.0)	(3.5)	(外面）ナデ、穿孔 (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
204	撹乱 b	台付鉢	(8.9)	-	(5.2)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR6/3 にぶい黄橙
205	X = 45 Y=-50	台付鉢	-	(8.4)	(4.4)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/4 にぶい黄橙
206	6T	台付鉢	-	(19.6)	(9.7)	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR6/6 橙 (外面）7.5YR6/6 橙
207	X = 60 Y=-45	有孔鍔付土器	-	-	(3.7)	(外面）刺突、沈線 (内面）ミガキ	並	良好	(内面）10YR7/3 にぶい黄橙 (外面）10YR7/3 にぶい黄橙
208	X = 45 Y=-55	円盤	長径 (3.8)	短径 (3.4)	厚さ 0.8	(外面）擦痕 (内面）ナデ　ミガキ	並	普通	(内面）10YR7/4 にぶい黄橙 (外面）7.5YR6/6 橙
209	表採	円盤	長径 (4.3)	短径 (3.6)	厚さ 1.1	(外面）縄文 (内面）ナデ	並	普通	(内面）10YR6/4 にぶい黄橙 (外面）10YR7/3 にぶい黄橙
210	調査区内北側	耳飾	2.1	2.1	1.5	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）7.5YR5/4 にぶい褐 (外面）7.5YR5/4 にぶい褐
211	X = 60 Y=-45	耳飾	3.1	3.1	2.1	(外面）ナデ (内面）ナデ	並	普通	(内面）5YR5/6 明赤褐 (外面）5YR6/6 橙
212	X = 45 Y=-55	手捏ね粘土塊	縦幅 6.0	横幅 9.1	厚さ 4.1	(外面）調整なし	並	普通	(外面）10YR7/4 にぶい黄橙

Tab.3.3.9　遺物観察表（9）　石製品

No	出土層位	グリッド	遺構	器種	規模（cm）			重量（g）	石　材
					長さ	幅	厚さ		
213	Ⅱ層（下層）	X60　Y-50	－	石鏃	2.7	2.0	0.4	1.8	鉄石英
214	Ⅱ層（下層）	X60　Y-45	－	石鏃	2.8	1.7	0.5	2.0	凝灰岩
215	Ⅱ層（下層）	X50　Y-50	－	スクレイパー	4.8	3.0	1.2	12.1	鉄石英
216	Ⅱ層	X60　Y-45	－	スクレイパー	5.9	4.1	0.9	21.9	頁岩
217	覆土		SP40	スクレイパー	4.7	4.5	1.3	26.5	凝灰岩
218	Ⅱ層	X60　Y-45	－	石核	5.9	2.5	2.9	20.5	頁岩
219	Ⅱ層	調査区北部分	－	石核	3.9	3.3	2.1	24.0	頁岩
220	Ⅱ層	X45　Y-50	－	石核	8	7.5	4.9	348.4	鉄石英
221	覆土		SP29	削器 （打製石斧の未製品）	16.1	8.2	2.3	329.8	砂岩
222	Ⅱ層（下層）	X50　Y-50	－	打製石斧（石鍬）	16.8	6.7	2.7	333.4	安山岩
223	Ⅱ層	調査区北部分	－	打製石斧（石鍬）	15.4	7.1	2.2	293.3	砂岩
224	Ⅱ層	X50　Y-50	－	打製石斧	12.2	9.1	2.8	354.9	安山岩
225	覆土		SP11	磨製石斧	11.3	6.3	2.7	368.3	蛇紋岩
226	覆土		SP12	石錘	5.4	4.2	1.3	42.3	凝灰岩
227	覆土		SP37	石錘	4.9	4.1	1.5	37.9	凝灰岩
228	覆土		SP37	石錘	5.6	4.5	2.0	76.7	安山岩
229	排土		－	石錘	6.5	5.1	2.0	95.6	安山岩
230	Ⅱ層	X60　Y-50	－	磨製石斧	6.9	6.0	2.2	142.2	蛇紋岩
231	Ⅱ層	X55　Y-50	－	石錘	7.0	4.3	2.0	78.6	凝灰岩
232	表採		－	石錘	7.1	4.0	2.3	94.2	凝灰岩
233	底面		SI01	敲石	13.3	4.0	3.4	309.1	凝灰岩
234	覆土		SP40	敲石	12.9	5.0	3.4	376.7	凝灰岩
235	Ⅱ層	X55　Y-45	－	敲石	12.3	6.7	3.4	432.3	凝灰岩
236	Ⅱ層・下層	X60　Y-45	－	敲石	18.2	7.7	7.2	1766.5	安山岩
237	覆土		SP52	敲石	19.0	9.9	5.8	1639.0	凝灰岩
238	覆土		SP40	敲石	21.3	10.2	6.6	2126.7	凝灰岩
239	覆土		SP29	敲石	17.5	16.7	5.1	2099.3	砂岩
240	炉付近　底面		SI01	くぼみ石（敲石）	7.1	11.0	2.9	374.9	砂岩
241	覆土		SP40	敲石（磨石）	11.3	10.2	5.4	884.1	砂岩
242	覆土		SI01	磨石・敲石	9.4	19.8	4.7	1405.2	凝灰岩
243	排土		－	磨石	12.1	8.6	4.4	740.4	凝灰岩
244	覆土		SP21	石棒	33.0	20.0	13.8	16100.0	花崗岩

第4章　自然科学分析の成果

The result of natural science analysis

パリノ・サーヴェイ株式会社 *

1　遺構の年代（放射性炭素年代測定）

1. 試料

試料は、SI01より出土した炭化材2点（SI01 No.2一括土器下炭化物①、S01 炉よこ 土器集中②）と、土坑（SK37）から出土した炭化材1点（SK37 炭化物③）である。これらの炭化材試料は、いずれも小破片（最大長1～2cm程度）である。

2. 分析方法

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによるアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBY の半減期5,568 年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5,730 ± 40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 6.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、暦年較正結果はσ・2σ（σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲）の値を示す。また、表中の相対比は、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果および考察

（1）放射性炭素年代測定

SI01およびSK37から出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、SI01 No.2一括土器下が4,400 ± 20yrBP、SI01 炉よこ 土器集中が4,360 ± 30yrBP、SK37 炭化物が4,200 ± 30yrBPを示す(Tab.4.1.1)。これらの補正年代に基づく暦年較正結果(σ)は、SI01 No.2がcalBC 3,084-calBC 2,931、SI01 炉よこがcalBC 3,011 -calBC 2,918、SK37がcalBC 2,881-calBC 2,708である（Tab.4.12)。

以上の暦年較正結果を参考とすると、SI01のNo.2一括土器下と炉よこ 土器集中の炭化物は概ね同時期の資料と推定され、SK37の炭化物はSI01試料よりもやや新しい資料と考えられる。また、これらの3試料が示した年代は、小林編著（2008）によると、縄文時代中期中頃～後期初頭とされる。

* 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町1-10-5

Tab.4.1.1　放射性炭素年代測定結果

試料		樹種	補正年代	δ 13C	測定年代	測定機関
遺構名 / サンプル名	性状		(yrBP)	(‰)	(yrBP)	Code No.
SI01 No.2 一括土器下炭化物	炭化材	クリ近似種	4,400 ± 20	-24.97 ± 0.36	4,400 ± 20	IAAA-110862
SI01 炉よこ 土器集中炭化物	炭化材	クリ近似種	4,360 ± 30	-24.46 ± 0.49	4,390 ± 30	IAAA-110863
SK37 炭化物	炭化材	オニグルミ	4,200 ± 30	-24.28 ± 0.49	4,180 ± 30	IAAA-110864

Tab.4.1.2　暦年較正結果

試料名	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)		暦年較正年代 (cal)		相対比	測定機関 Code No.
SI01 No.2 一括土器下 炭化物 (炭化材;クリ近似種)	4,397 ± 24	σ	cal BC 3,084 - cal BC 3,065	cal BP 5,034 - 5,015	0.209	IAAA-110862
			cal BC 3,028 - cal BC 3,007	cal BP 4,978 - 4,957	0.224	
			cal BC 2,988 - cal BC 2,931	cal BP 4,938 - 4,881	0.566	
		2σ	cal BC 3,091 - cal BC 3,042	cal BP 5,041 - 4,992	0.267	
			cal BC 3,039 - cal BC 2,923	cal BP 4,989 - 4,873	0.733	
SI01 炉よこ 土器集中 炭化物 (炭化材;クリ近似種)	4,361 ± 26	σ	cal BC 3,011 - cal BC 2,977	cal BP 4,961 - 4,927	0.455	IAAA-110863
			cal BC 2,966 - cal BC 2,948	cal BP 4,916 - 4,898	0.204	
			cal BC 2,944 - cal BC 2,918	cal BP 4,894 - 4,868	0.341	
		2σ	cal BC 3,081 - cal BC 3,068	cal BP 5,031 - 5,018	0.036	
			cal BC 3,026 - cal BC 2,907	cal BP 4,976 - 4,857	0.964	
SK37 炭化物 (炭化材;オニグルミ)	4,195 ± 25	σ	cal BC 2,881 - cal BC 2,862	cal BP 4,831 - 4,812	0.247	IAAA-110864
			cal BC 2,807 - cal BC 2,758	cal BP 4,757 - 4,708	0.650	
			cal BC 2,717 - cal BC 2,708	cal BP 4,667 - 4,658	0.103	
		2σ	cal BC 2,890 - cal BC 2,848	cal BP 4,840 - 4,798	0.260	
			cal BC 2,842 - cal BC 2,841	cal BP 4,792 - 4,791	0.003	
			cal BC 2,813 - cal BC 2,738	cal BP 4,763 - 4,688	0.555	
			cal BC 2,731 - cal BC 2,692	cal BP 4,681 - 4,642	0.168	
			cal BC 2,688 - cal BC 2,679	cal BP 4,638 - 4,629	0.015	

2　古植生および植物利用

1. 試料

試料は、SI01 や SK37 から採取された土壌と炭化物（炭化材）、さらに基本土層から採取された土壌である。

以下に、試料の概要を記す。

（1）土壌

土壌試料は、SI01 の炉内から採取された土壌（SI01 炉内部；A）と調査区北東端の堆積層より採取された土壌（基本層序Ⅱ；B）、SK37 から採取された土壌（SK37;C）の 3 点である。これらの試料の観察では、SI01 炉内部は暗褐～黒褐色を呈する泥分が混じる砂（細粒～中粒砂）からなり、亜円～亜角状の礫が混じる。基本土層Ⅱは 18cm × 8cm × 7cm の柱状で採取されていたが、本来の形状を保っておらず採取時の状態（堆積構造など）の観察には至らなかった。当試料は、黒褐色を呈する泥分が混じる中粒砂からなり、最大径 1.5cm の亜円～亜角状をなす岩質礫が混じる。SK37 は、暗褐色を呈する泥分が混じる細粒砂である。

（2）炭化材

炭化材試料は、上述した放射性炭素年代測定に供した炭化材片より分割した 3 試料と、SI01 炭化物（識別コード a）より別途抽出した炭化材 2 点、さらに上記した SI01 炉内部の水洗選別（土壌約 1,000g を対象）により検出した炭化材 3 点の計 8 点である。

本項目では、上記した試料のうち土壌を対象に花粉分析、微粒炭分析、植物珪酸体分析を、炭化材を対象に炭化材同定を実施する。

2. 分析方法

（1）花粉分析・微粒炭分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛, 比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9, 濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。

同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）などを参考にする。

微粒炭分析は、花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井（1996）、井上ほか（2002）などを参考にする。計数は、山野井（1996）などを参考にし、長径が約 20μm 以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭含量は、山野井（1996）などを参考とし、分析土壌量（cc）、分析残渣量（ml）、プレパラート作成量（μl）を測定し、堆積物 1cc あたりに含まれる個数を一覧表に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。

（2）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 100 単位として表示し、100 個 /g 未満は「＜100」と表示する。また、各分類群の植物珪酸体含量について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

（3）炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

（1）花粉分析

結果を Tab.4.2.1 に示す。分析に供された 3 試料は、いずれも花粉化石の産出状況が悪く、定量解析に有効な個体数は得られなかった。また、花粉化石は、花粉外膜が破損・溶解しているなど保存状態が悪いものが多い。

検出された花粉化石についてみると、SI01 炉内部および基本層序Ⅱは、木本花粉ではマツ属や、ニレ属－ケヤキ属、草本花粉のイネ科が、1 ～ 2 個体確認されたのみである。

SK37 は、他の 2 試料と比較すると花粉化石が多く検出され、木本花粉の割合が高い。木本花粉では、マツ属、コナラ属コナラ亜属がやや多く、モミ属、クルミ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、キハダ属、ウルシ属、トチノキ属、タニウツギ属が検出される。また、草本花粉は、イネ

科、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属が検出される。

（2）微粒炭分析

微粒炭含量は、SI01 炉内部が約 41,400 個 /cc、基本層序Ⅱが約 18,100 個 /cc、SK37 が約 39,100 個 /cc である（Tab.4.2.1）。確認された微粒炭には、木材組織である分野壁孔とみられる特徴を有するものが認められたが、大部分が不明に属するものである。また、微粒炭中には斜めから光を当てると光沢を示すが、典型的な微粒炭と比べ透過光を通すことから、完全に炭化していないものも含まれると考えられる。

（3）植物珪酸体分析

結果を Tab.4.2.2、Fig.4.2.1 に示す。各試料から検出される植物珪酸体は少なく、概して保存状態も悪い。

SI01 炉内部は植物珪酸体含量が低く、800 個 /g 程度である。タケ亜科、ヨシ属、ススキ属などがわずかに検出される程度である。

基本層序Ⅱの植物珪酸体含量は 3,300 個 /g である。タケ亜科、ヨシ属、ススキ属が認められるが、多くは短細胞由来の不明である。

SK37 の植物珪酸体含量は 3 試料中で最も低く、400 個 /g 程度である。タケ亜科やススキ属などが認められるのみである。

（4）炭化材同定

結果を Tab.4.2.3 に示す。炭化材は、広葉樹 4 分類群（オニグルミ、クリ、エノキ属、ケヤキ）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura）　クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または 2-3 個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1-3 細胞幅、1-40 細胞高。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

なお、小片で年輪界が認められず、組織がよく似たコナラ節の可能性がある試料については、クリ近似種とした。

・エノキ属（Celtis）　ニレ科

試料は、早材部から晩材部への移行部付近で、早材部の始めや晩材部、年輪界を欠く。道管は単独または 2-6 個が塊状に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小径の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-50 細胞高で鞘細胞が認められる。

・ケヤキ（Zelkova serrata (Thunb.) Makino）　ニレ科ケヤキ属

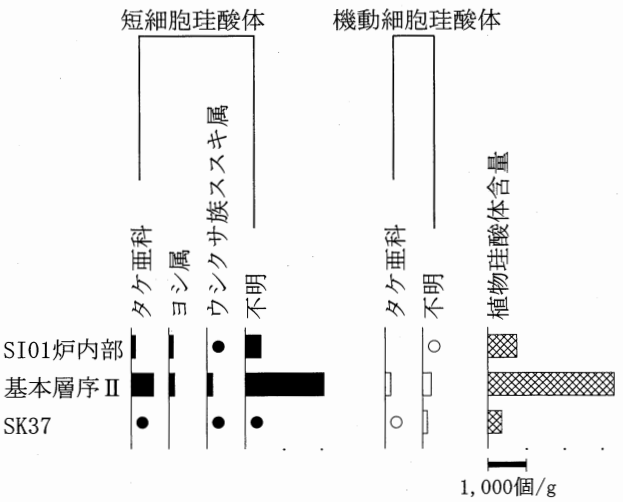
環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-50 細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

Tab.4.2.1　花粉分析・微粒炭分析結果

種類	SI01 炉内部 A	基本層序Ⅱ B	SK37 C
木本花粉			
モミ属	-	-	1
マツ属	2	1	11
クルミ属	-	-	2
ハンノキ属	-	-	1
コナラ属コナラ亜属	-	-	21
ニレ属－ケヤキ属	-	1	1
キハダ属	-	-	1
ウルシ属	-	-	4
トチノキ属	-	-	5
タニウツギ属	-	-	7
草本花粉			
イネ科	2	-	4
カヤツリグサ科	-	-	1
セリ科	-	-	1
ヨモギ属	-	-	2
不明花粉			
不明花粉	-	-	8
シダ類胞子			
シダ類胞子	-	3	16
合　計			
木本花粉	2	2	54
草本花粉	2	0	8
不明花粉	0	0	8
シダ類胞子	0	3	16
合計（不明を除く）	4	5	78
1cc あたりの微粒炭量 [個]	41,400	18,100	39,100

Tab.4.2.2　植物珪酸体含量

分類群	SIO1 炉内部 A	基本層序Ⅱ B	SK37 C
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケ亜科	100	600	<100
ヨシ属	100	100	-
ウシクサ族ススキ属	<100	100	<100
不明	400	2100	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケ亜科	-	100	<100
不明	<100	200	100
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	700	3000	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	<100	400	200
植物珪酸体含量	800	3300	400



乾土1gあたりの個数で示す。○●は100個未満を示す。

Fig.4.2.1　植物珪酸体含量

4. 考察

基本層序および遺構覆土試料（SIO1 炉内部、SK37）は、花粉化石・植物珪酸体のいずれも産状が悪く、保存状態も不良であった。花粉化石は、一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村,1967; 徳永・山内,1971; 三宅・中越,1998 など）。また、植物珪酸体も、土壌の風化によって溶解する可能性が指摘されている（近藤,1988）ほか、pH 値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所では風化が進みやすいと考えられている（江口,1994;1996）。本遺跡の立地を考慮すると、検出された微化石は堆積後の経年変化の影響を受けていると考えられる。

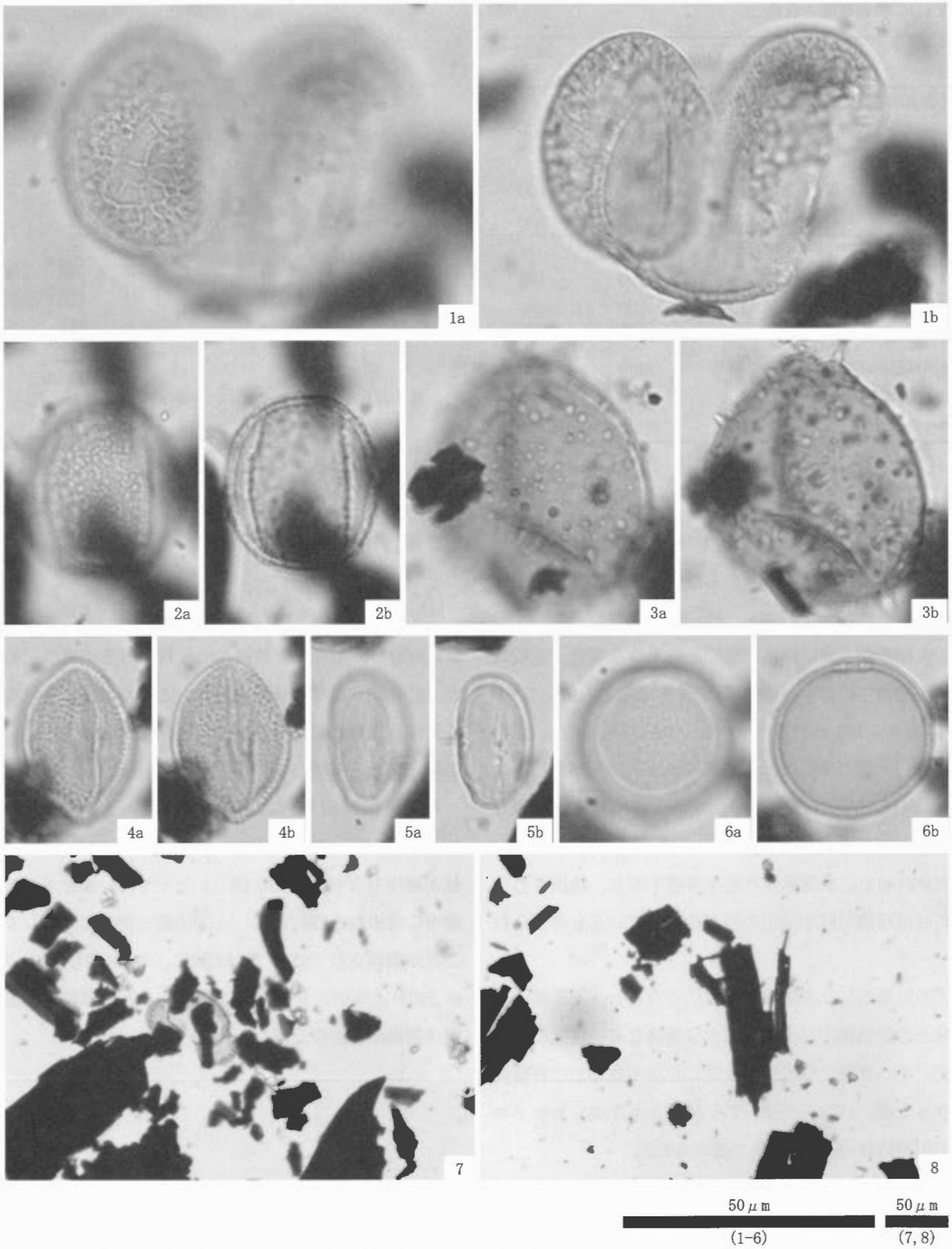
わずかに産出した木本花粉についてみると、モミ属、マツ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹林要素、キハダ属、ウルシ属、タニウツギ属などの林縁要素、クルミ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属などの河畔林・湿地林要素が認められた。また、SIO1 炉内部や SK38 から出土した炭化材には、河畔林・渓谷林を構成する落葉高木のオニグルミ、二次林や河畔林などに生育する落葉高木のクリ、エノキ属、ケヤキが確認された。これらの結果から、**遺跡周辺には二次林や河畔林などの林分が分布したと推定**され、これらの樹木が燃料材として利用した可能性がある。さらに、クリやケヤキは強度が高い木材であることから、部材などとして利用されたことも想定される。

次に、草本類についてみると、イネ科（タケ亜科、ススキ属を含む）、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属などの花粉および植物珪酸体が確認された。これらは、いずれも明るく開けた場所に群落を形成する種類を含むことから、**周辺の草地環境を反映**していると考えられる。

なお、微粒炭分析の結果を見ると、SIO1 炉内部が約 41,400 個 /cc、SK37 が約 39,100 個 /cc であるのに対し、基本層序Ⅱが約 18,100 個 /cc とやや低い値を示した。土壌中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが指摘されており（例えば安田,1987; 山野井,1996; 井上ほか,2002）、今回の対照結果を考慮すると、微粒炭含量の差異は遺構の用途を反映している可能性がある。

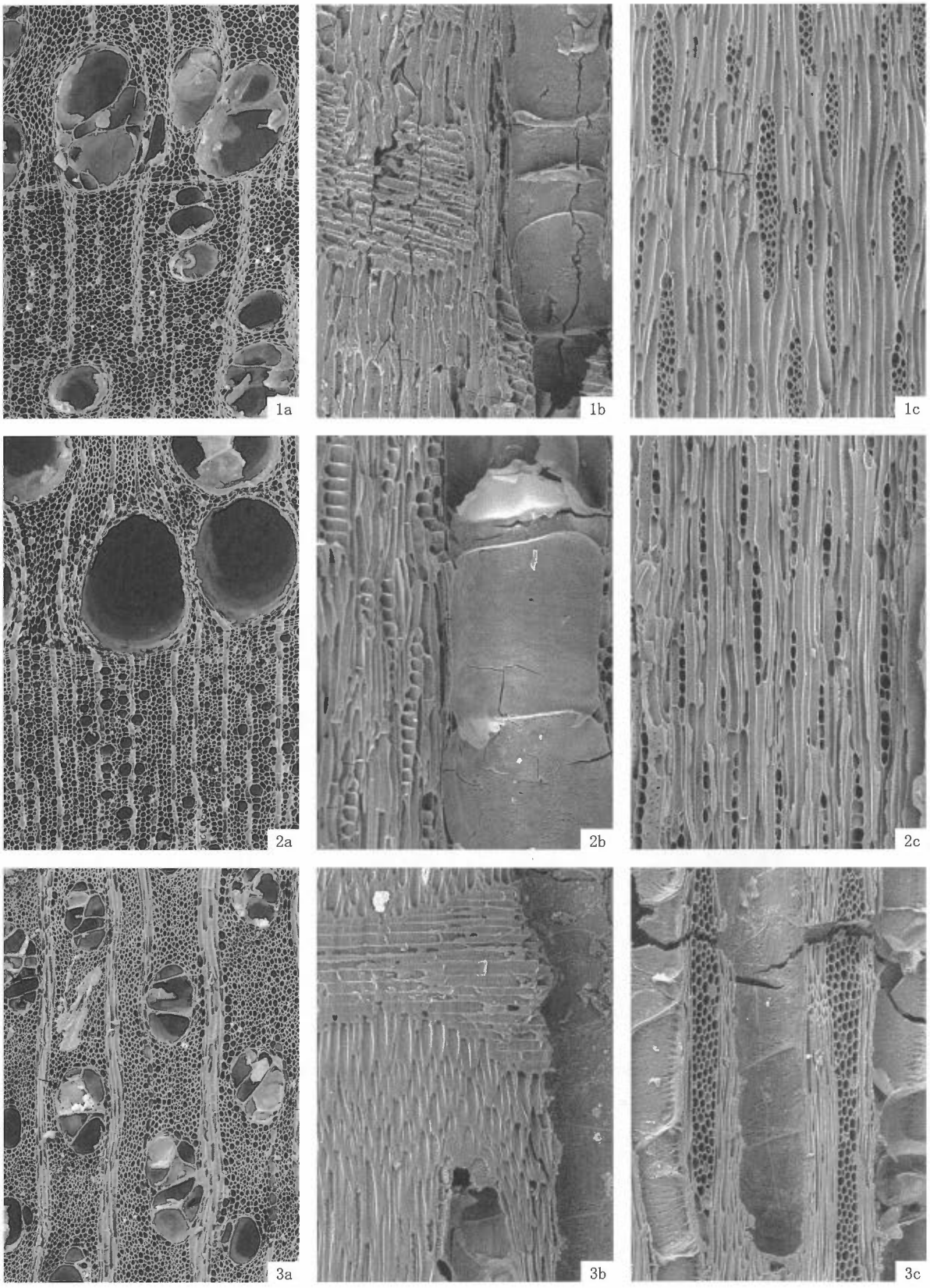
Tab.4.2.3　炭化材同定結果

試料名	樹種	備考
SIO1 No.2 一括土器下	クリ近似種	放射性炭素年代測定試料
SIO1 炉よこ土器集中	クリ近似種	放射性炭素年代測定試料
SK37 炭化物	オニグルミ	放射性炭素年代測定試料
SIO1 炭化物	クリ（1）、ケヤキ（1）	
SIO1 炉内部土壌サンプル	クリ近似種（2）、エノキ属（1）	



1. マツ属(SI01炉内部;A)
2. コナラ属コナラ亜属(SK37;C)
3. タニウツギ属(SK37;C)
4. ウルシ属(SK37;C)
5. トチノキ属(SK37;C)
6. イネ科(SK37;C)
7. 微粒炭の状況(SI01炉内部;A)
8. 微粒炭の状況(基本層序II;B)

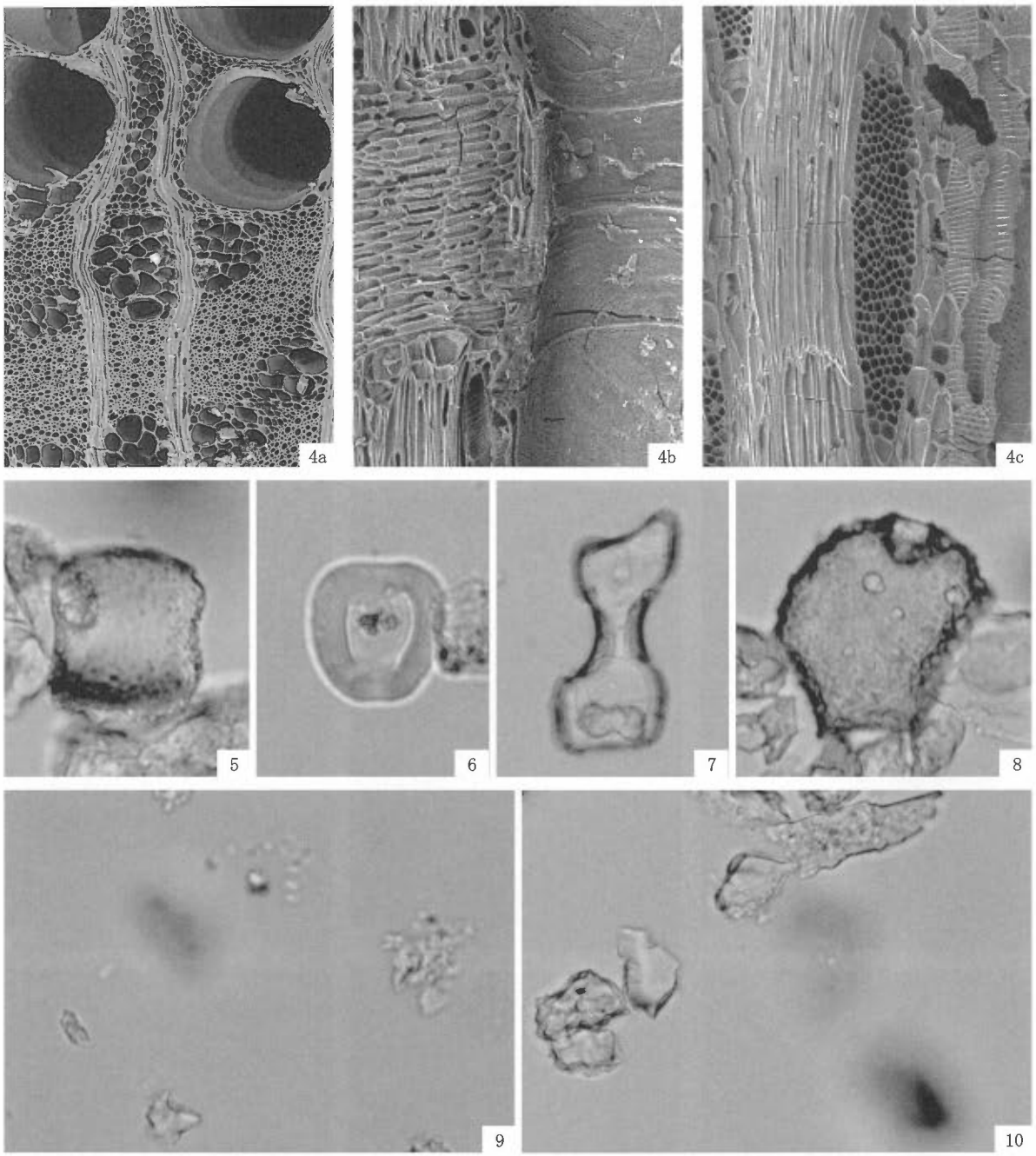
Fig.4.2.2　花粉化石・微粒炭



1. オニグルミ(SK37炭化物;③)
2. クリ(SI01炭化物;a)
3. エノキ属(SI01炉内部;A)
　a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

Fig.4.2.3　炭化材（1）



4. ケヤキ(SI01炭化物;a)　a:木口, b:柾目, c:板目
5. タケ亜科短細胞珪酸体(基本層序II;B)
6. ヨシ属短細胞珪酸体(基本層序II;B)
7. ススキ属短細胞珪酸体(基本層序II;B)
8. タケ亜科機動細胞珪酸体(基本層序II;B)
9. プレパラート内の状況(鉱物粒子が散在)(SI01炉内部;A)
10. プレパラート内の状況(鉱物粒子が散在)(SK37;C)

Fig.4.2.4　炭化材（2）・植物珪酸体

3　基本層序および遺構覆土の土壌特性

1. 試料

試料は、上述したII. で用いた土壌3点（SI01 炉内部；A、基本層序Ⅱ；B、SK37;C）である。本項目では、基本層序より採取された土壌を対照としてSI01 炉内およびSK37 埋積物の土壌の特性について、検討を行った。

2. 分析方法

腐植含量はチューリン法（土壌標準分析・測定法委員会,1986）で、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解 - バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解 - 原子吸光法でそれぞれ行った。以下に各項目の操作工程を示す。

（1）分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

（2）腐植含量

粉砕土試料0.2000 ～ 0.2500 g を100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N 硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土%）を求める。これに1.724 を乗じて腐植含量（%）を算出する。

（3）リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料1.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約5ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3. 結果および考察

結果をTab.4.3.1 に示す。野外土性（ペドロジスト懇談会編,1984）は、基本層序ⅡがSCL（砂質埴壌土）、SI01 炉内部およびSK37 がSL（砂壌土）と砂質な土壌である。土色は10YR2/1 黒色～ 10YR2/2 黒褐色である。

腐植含量は、SI01 が1.28%、基本層序Ⅱが2.16%、SK37 が1.60% であり、土色から判断すると腐植が少ない。リン酸含量は、SI01 が3.09mg/g、基本層序Ⅱが3.07mg/g と多く、SK37 は2.34mg/g と少ない。カルシウム含量は、SI01 が2.48mg/g、基本層序Ⅱが2.21mg/g、SK37 が1.65mg/g である。土性が砂質土であることを考慮すると、ややリン酸含量が高い。

土壌特性の検討として測定した項目のうち、リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれる。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成する。特に活性アルミニウムの多い火山灰土壌ではリン酸の固定力が高いことが知られている。なお、土壌中に含まれるリン酸の給源としては、土壌腐植の元となる植物遺体などが主なものである。そのため、土壌中のリン酸含量と腐植含量は類似した推移を示す傾向があり、腐植含量が高いほどリン酸含量も高くなる。カルシウムは、日本のように土壌が酸性化しやすい環境では、土壌の負荷電に引きつけられるカルシウムイオンが塩基溶脱作用により溶脱しやすい元素であることが知られている。ただし、多量の腐植が供給される層位では、カルシウムと安定的な結合が起こり、カルシウム含量が多くなる。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例（Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980; 川崎ほか,1991; 天野ほか,1991）があり、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P_2O_5mg/g（川崎ほか,1991）

Tab.4.3.1　土壌理化学分析結果

名称	土性	土色	腐植含量（%）	P_2O_5 (mg/g)	CaO (mg/g)
SI01 炉内部土壌サンプル	SL	10YR2/2　黒褐	1.28	3.09	2.48
基本層序Ⅱ	SCL	10YR2/1　黒	2.16	3.07	2.21
SK37	SL	10YR2/2　黒褐	1.60	2.34	1.65

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
SL; 砂壌土（粘土 0 ～ 15%、シルト 0 ～ 35%、砂 65 ～ 85%）
SCL; 砂質埴壌土（粘土 15 ～ 25%、シルト 0 ～ 20%、砂 5 ～ 85%）

という報告例がある。カルシウムの天然賦存量は普通 1 ～ 50CaOmg/g（藤貫，1979）と言われ、含量幅がリン酸よりも大きい。そのため絶対量による評価は難しいが、骨片が残存するような状況においてはリン酸に追従した含量の変化が見られるため、遺体痕跡を検証する上での補助となる。

本遺跡の土壌特性についてみると、基本層序Ⅱは、腐植含量が約 2%、リン酸含量が約 3mg/g であり、上述した天然賦存量と同程度である。ただし、砂質土壌であることを考えるとやや高い値と言える。カルシウム含量は約 2mg/g であり、こちらも天然賦存量の範囲内にあり、とりわけ高い値とはいえない。

SI01 炉内部土壌は、基本層序Ⅱと比較すると腐植含量が低い。両試料に認められた土性と土色の違いは、腐植含量の差から起きたと考えられる。リン酸含量とカルシウム含量は、同程度の値を示すことから、SI01 炉内部土壌にリン酸やカルシウムが多く富化された状況を示唆することは困難である。次に、SK37 は、基本層序Ⅱと比較すると腐植含量、リン酸含量、カルシウム含量のいずれも低い。SK37 もリン酸やカルシウムの富化を支持することはできないため、動物遺存体や植物遺体などが埋積された可能性は低い。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信，1991，中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省
農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，28-36.
Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980，土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，学会出版セ　ンター，309p.
Bowen,H.J.M.,1983，環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -．浅見輝男・茅野充男訳，博友社，297p.
土壌標準分析・測定法委員会編，1986，土壌標準分析・測定法．博友社，354p.
江口誠一，1994，沿岸域における植物珪酸体の分布　千葉県小櫃川河口域を例にして．植生誌研究，2,19-27.
江口誠一，1996，沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物の pH 値．ペトロジスト，40,81-84.
藤貫　正，1979，カルシウム．地質調査所化学分析法，52,57-61.
林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．
井上　淳・吉川周作・千々和一豊，2002，琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について．日本第四紀　学会講演要旨集，32,74-75.
伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.
伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176.
伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.
伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.
伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.
川崎　弘・吉田　澪・井上恒久，1991，九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省　農林水産技術　会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，23-27.
小林達雄（編著），2008，総覧　縄文土器．株式会社アム・プロモーション，1322p.
近藤錬三，1988，植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代．ペトロジスト，32,189-202.
近藤錬三，2010，プラント・オパール図譜．北海道大学出版会，387p.
松中照夫，2006，土壌学の基礎，229p.
中村　純，1980，日本産花粉の標徴　Ⅰ Ⅱ（図版）．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集，91p.
農林省農林水産技術会議事務局監修，1967，新版標準土色帖．
ペドロジスト懇談会，1984，野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック，博友社，39-40.
庄川町教育委員会，1974，富山県庄川町　松原遺跡試掘調査報告書．庄川町教育委員会，6p.
庄川町教育委員会，1975，富山県庄川町　松原遺跡緊急発掘調査概報．庄川町教育委員会，20p.
島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.
島倉巳三郎，1973，日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集，60p.
庄川町教育委員会，1974，富山県庄川町　松原遺跡緊急発掘調査概報．庄川町教育委員会，20p.
富山県，1992,10 万分の 1 富山県地質図説明書．内外地図株式会社，201p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］．
山野井　徹，1996，黒土の成因に関する地質学的検討．地質学雑誌，102,526-544.
安田喜憲，1987，文明は緑を食べる，読売新聞社，227p.

第5章　総　括

Generalization

(1) 竪穴建物

〔発掘成果〕 **竪穴建物が２棟（SI01・SI84）見つかった。SI01は縄文時代中期中葉の上山田・天神山式を主体とする。SI84は遺物を伴わないが、切り合い関係からSI01に先行することが判明した。**

過去の調査事例と比べると、調査面積当たりの建物数は少ない。長軸5.23m・短軸4.02mというSI01の規模は、既往の調査で11mを超える規模の建物跡（1974年調査・第4号住居跡）があるので決して大きい部類ではない。北陸の縄文中期の竪穴建物では標準的な規模といえる。

またSI01からは石組炉が見つかった。これは長方形の単式石組炉である。これまで本遺跡では地床炉もあるが、長方形の石組炉が卓越するので、SI01の炉は本遺跡では一般的な在り方の炉型式といえる。

これまで本遺跡は出土土器量が膨大で、建物内から**完形品が出土することが多く、いわゆる「吹上パターン」を示す事例も過去に報告されているが、今回は比較的完形に近い土器の出土は少なかった。**

以上、建物に関して特殊性や特徴的な事象は見られない。注目すべき成果は放射性炭素年代測定の結果である。SI01の土器下と炉の脇の土器集中箇所から検出された炭化物を測定したところ、① calBC3,084-calBC2,931、② calBC3,011-calBC2,918という年代値が得られた。**SI01に限れば紀元前3,000年前後に構築された可能性が高いことが判明した**ことになる。これまで本遺跡では土器編年による相対的年代観しか示されていなかったが、暦年による絶対年代が得られたのである。この年代は縄文時代中期中葉から後期初頭にあたり[i]、出土した土器の型式（上山田・天神山式、中期中葉）と年代的齟齬はない。

Tab.5.1.1　縄文土器編年表

大別	略別	地域区分 北陸	関東・東北	近畿・中国
早期	後半	桜峠 〔常世〕	田戸上層 子母口 野島 鵜ヶ台 茅山下層 茅山上層	高山寺 穂谷
前期	前葉	佐渡・極楽寺	花積下層 関山	羽島下層Ⅱ 北白川下層Ⅰ
	中葉	朝日C 福浦下層 蜆ヶ森Ⅰ 蜆ヶ森Ⅱ	黒浜 諸磯a 諸磯b 諸磯c	北白川下層Ⅱa 北白川下層Ⅱb 北白川下層Ⅱc
	後葉	福浦上層 朝日下層	十三菩提	北白川下層Ⅲ 大歳山
中期	前葉	新保Ⅰ 新保Ⅱ 新崎Ⅰ 新崎Ⅱ 新崎Ⅲ	五領ヶ台	船元Ⅰ・鷹島
	中葉	上山田・天神山Ⅰ 上山田・天神山Ⅱ 古府	阿玉台 勝坂 加曾利EⅠ　大木8a	船元Ⅰ 船元Ⅱ
	後葉	古串田新 串田新Ⅰ〔大杉谷〕 串田新Ⅱ （+）	加曾利EⅡ　大木8b 加曾利EⅢ　大木9 加曾利EⅣ　大木10	里木Ⅱ・醍醐Ⅱ 里木Ⅲ・醍醐Ⅲ
後期	前葉	前田・岩峅野 気屋Ⅰ 気屋Ⅱ	称名寺 堀之内Ⅰ 堀之内Ⅱ	中津 福田K・四ツ池 北白川上層
	中葉	（+） 酒見・井口Ⅰ	加曾利B1 加曾利B2 加曾利B3	一乗寺K 元住吉山Ⅰ
	後葉	井口Ⅱ （井口Ⅲ） 八日市新保Ⅰ 八日市新保Ⅱ	安行Ⅰ 安行Ⅱ	元住吉山Ⅱ 宮滝 滋賀里Ⅰ
後期	前葉	御経塚Ⅰ・勝木原 御経塚Ⅱ （御経塚Ⅲ）	大洞B　（東北） 大洞B-C　（東北）	滋賀里Ⅱ 滋賀里Ⅲ
	中葉	中屋Ⅰ 中屋Ⅱ （中屋Ⅲ）	大洞C1　（東北）	滋賀里Ⅳ
弥生	後葉	下野Ⅰ 下野Ⅱ・長竹	大洞C2　（東北） 大洞A　（東北）	船橋 長原
		柴山出村・大境Ⅴ	大洞A′　（東北）	

小矢部市教育委員会2006『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書　縄文土器・石器編Ⅰ』34pより転載

(2) 立石を伴う土坑群

〔発掘成果〕 **調査区南側から土坑を19基、集中的に検出した。土坑には立石状の大型礫を伴うものが多い。**

土坑からは深鉢、ミニチュア土器、耳飾りなどの遺物が出土しているが、その性格を示す資料はなかった。SK02からは口径48.2cm・器高52cmという特大の深鉢が一括して出土したが、SI01内にあることと完形に近い遺存状況から、貯蔵穴と捉えたい。

i 小林達雄編2008『総覧縄文土器』、1322p

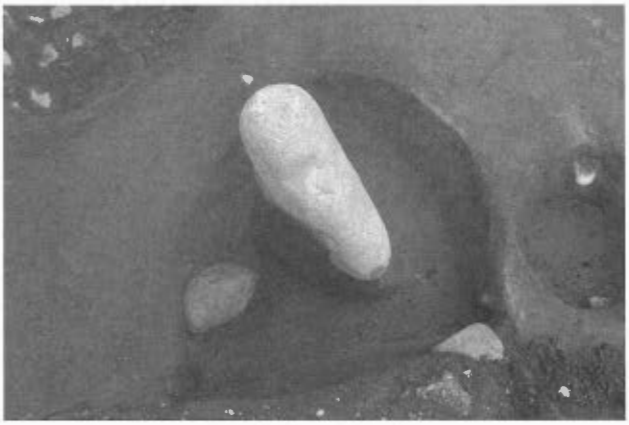
土坑の規模は最小径が76cm・最大径159cmと総じて大型である。深さは最小値が26cm・最大値が74cmを測るが、ほとんどの遺構がⅡ層から掘り込まれていると推定出来るので、誤差が大きいと思われる。時期は中期中葉の古府式に属するものが多く、竪穴建物よりも新しい時期に構築されたとみられる。

土坑に多く共通するのは、礫を含む点である。礫は川原石であり、遺構の中心付近で見つかることが多い。あたかも人為的に置かれたもの、もしくは投げ込まれたという印象である。また、SK21では大型の川原石の側面に打撃を加えて整形した石棒状の石器が見つかっている。他の遺構では加工痕はないものの、大型で細長い川原石が入っている。SK37では長さ50cm・幅20cmほどの礫が入り、SK15には縦方向に割った礫があり、SK18では検出面に近い所で細長い礫が横たわるようにして見つかった。径1m前後の擂鉢形状の土坑数基に、細長い形状の川原石が入るという状況は偶然とは考え難く、何らかの行為の所産と考える方が自然である。

この諸相から思い起こされるのは、立石を伴う墓坑である。日本考古学事典の「立石」の項には「細長い自然石を単独ないし配石遺構のなかに立てた縄文時代のものをいう」[i]とある。本遺跡の場合は配石と呼べる遺構は伴わないものの、立石が単独で置かれる型式に当たる可能性がある。SK19では細長い川原石が斜めに立った状態で出土し、まさに「立石」を思わせる状況だった。

墓坑といえば、昭和49年（1974）調査の「第2号穴」について、池野正男は「第3号穴・第5号穴は、貯蔵穴・墓穴の区別は即断できないが、第2号穴は墓穴的な性格が強い」と報告している[ii]。この判断根拠は、「第2号穴覆土上面には完形品及び一括土器4～5個体分が、あたかも供献された状態で出土した」ことによる。しかし、礫を伴う今回の土坑群とは性格が異なるようである。

状況証拠的には立石を伴う墓坑の可能性は否定できないが、遺物・骨などの直接証拠はない。ここで、自然科学分析の結果について触れておきたい。SK37覆土のリン酸分析の結果、リン酸やカルシウムの含有量が少ないため、動物遺存体や植物遺体などが埋積された可能性は低いことが分かった。



SK19の立石状の礫

結果として土坑群は現状では墓坑と断定出来ないが、本遺跡において土坑群は初検出であるので、少なくとも居住域とは別の役割をもつ空間が存在したことを認識しておく必要がある。

（3）松原遺跡の評価について

今回の調査区は昭和48年（1973）調査の第3地点にあたる。同じ地点での発掘では狭い範囲に11棟もの建物跡が検出されたので、今回も建物が密集する状況を想定したが、結果は建物2棟に過ぎなかった。代わりに調査区南側には土坑群が広がっていた。土坑群の性格は、今後周辺の調査を重ねて明らかにすべきである。

本遺跡は庄川に近く、以前から石錘が多量に出土し、漁労に依存した集落と評価されてきたが、今回は石錘は非常に少なかった。しかし、遺物包含層には石錘と形状の似た扁平の小型礫が多数出土しており、これらを石錘と同様に使用した可能性も考慮しておく必要がある。

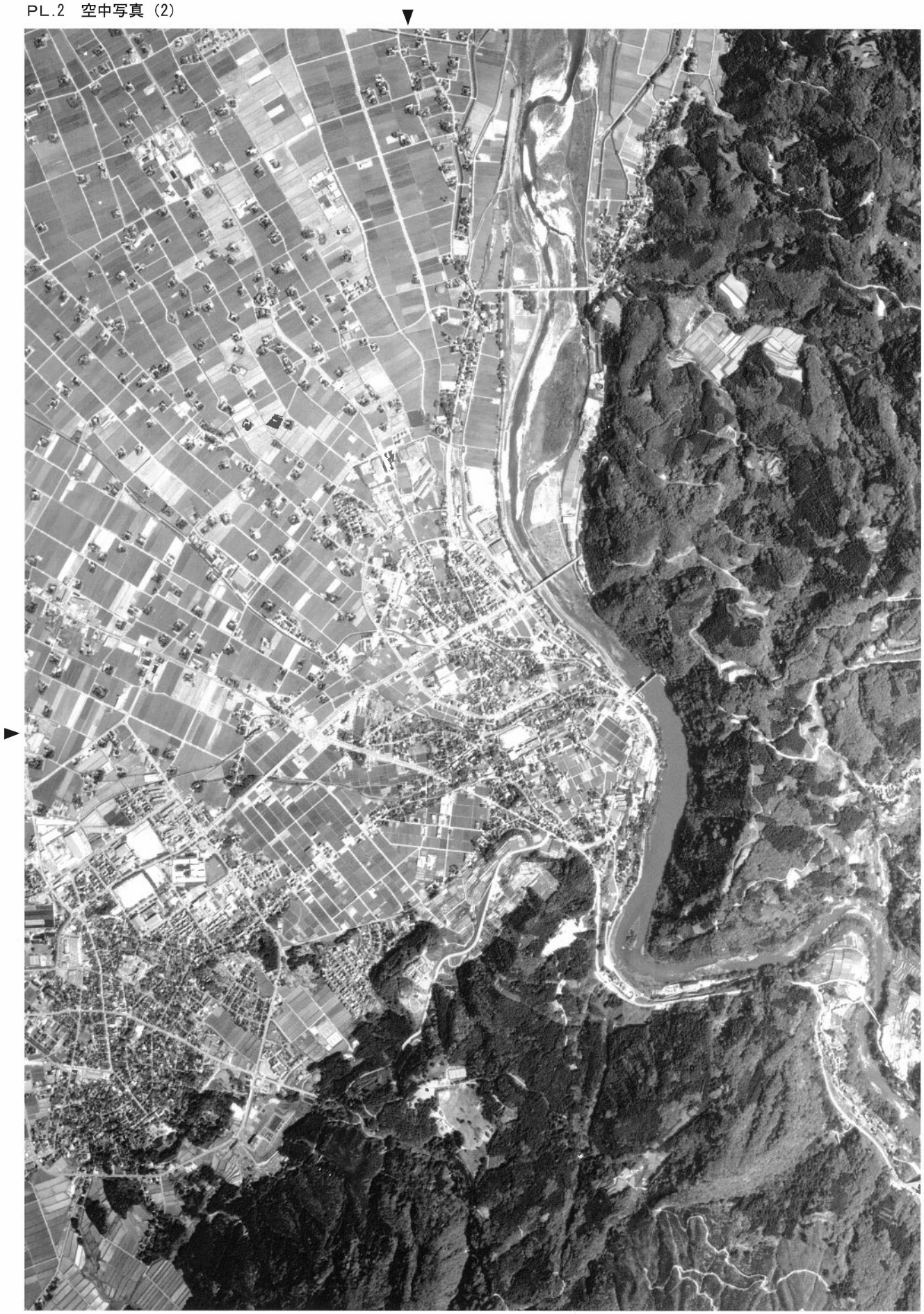
また、土器は上山田・天神山式、古府式、古串田新式、新崎式など、北陸一円でみられる在地色の強い土器型式が大半だが、馬高式の火炎型土器と対をなす王冠型土器を模倣したと思われる破片や、馬高式に影響を与えた東北の大木式系統の土器が少量見られた。これまで論じられることが少なかったが、遺物などから他地域との交流を紐解いていくことで、本遺跡の研究がより深化するものと思われる。（野原大輔）

i　鈴木保彦2002「立石」『日本考古学事典』三省堂

ii　池野正男1975「2 遺構」『富山県庄川町松原遺跡緊急調査概報』庄川町教育委員会

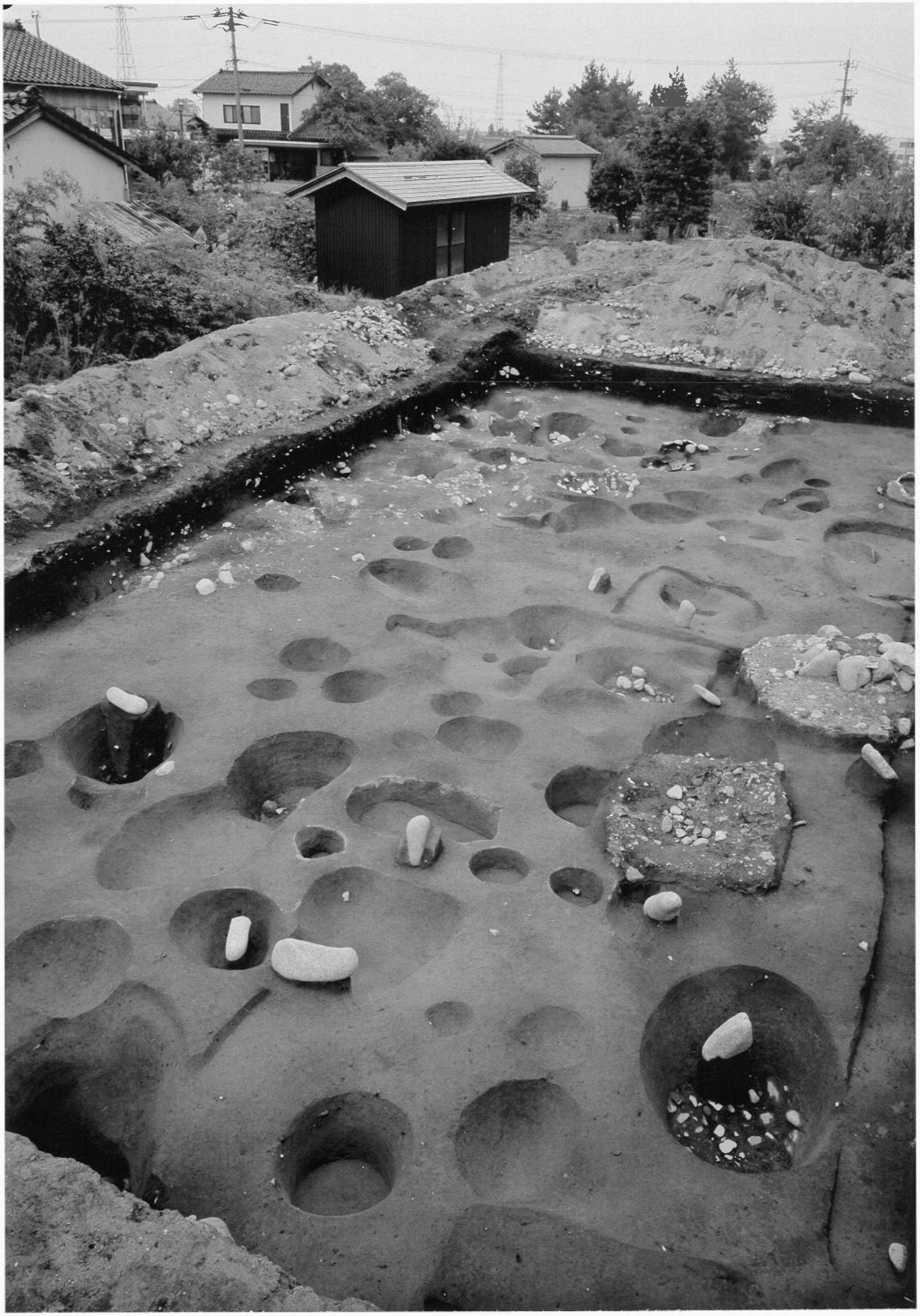
この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真（昭和 24 年）を複製したものである。（承認番号）平 18 北複、第 151 号

PL.2　空中写真（2）



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真（平成 13 年）を複製したものである。（承認番号）平 18 北複、第 151 号

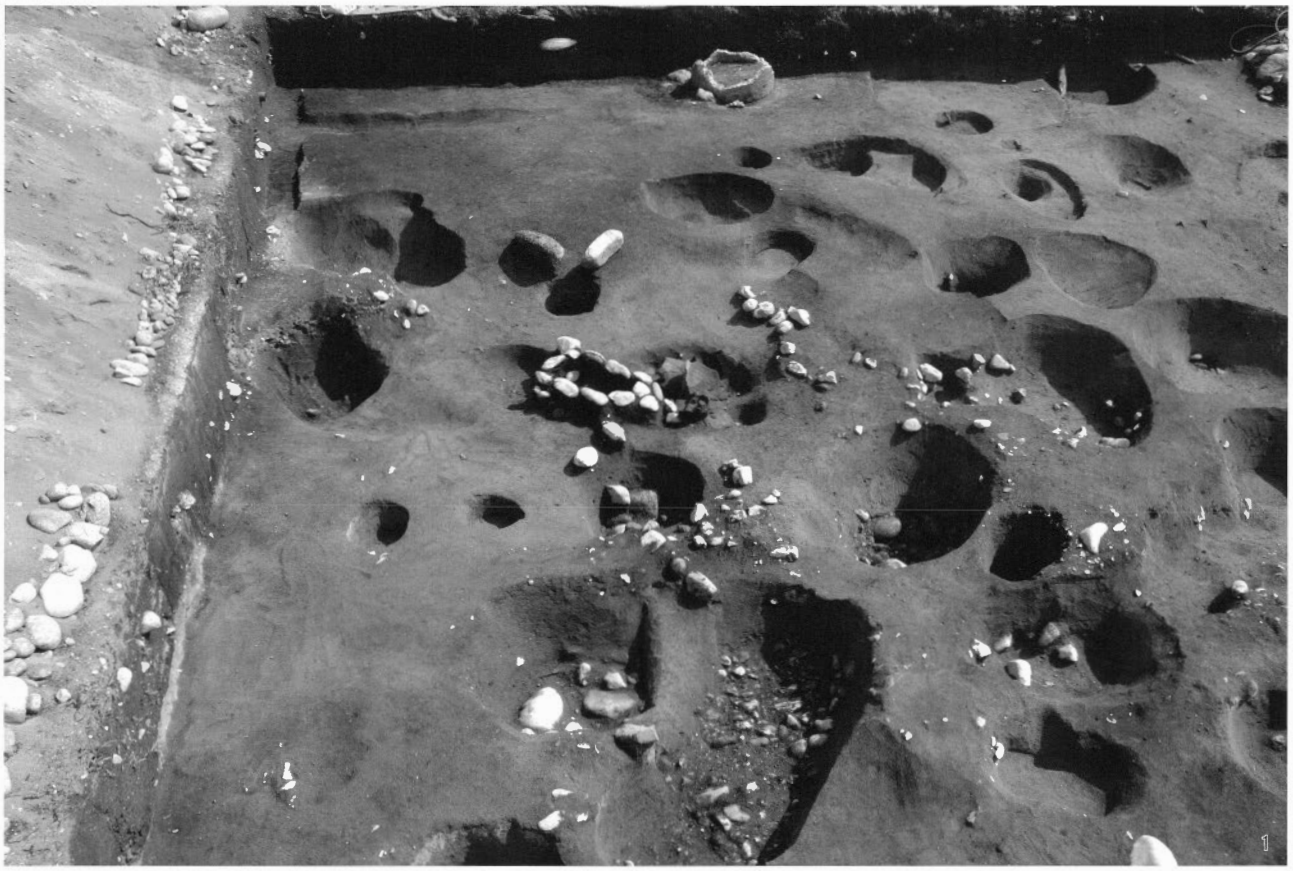
PL.3　**全景**（縄文時代中期）

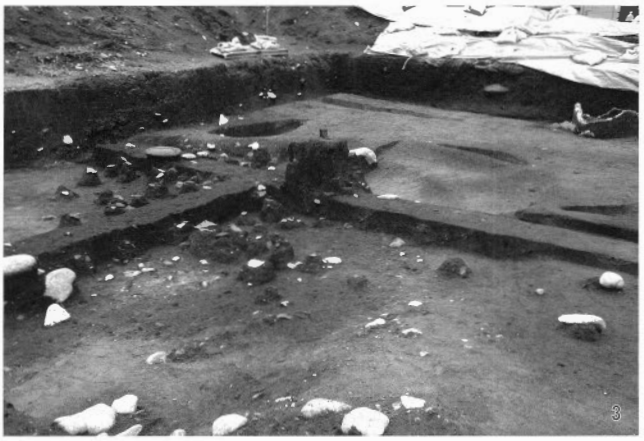


手前には長石を伴う土坑群が密集し、奥の角に竪穴建物が存在する。

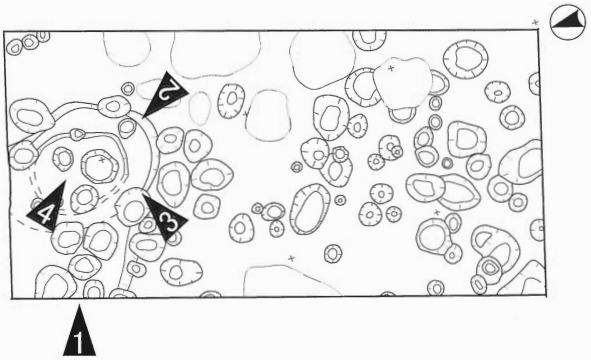
PL.4　全景

1　調査区全景(検出)　北東から
2　調査区全景(完掘)　南西から

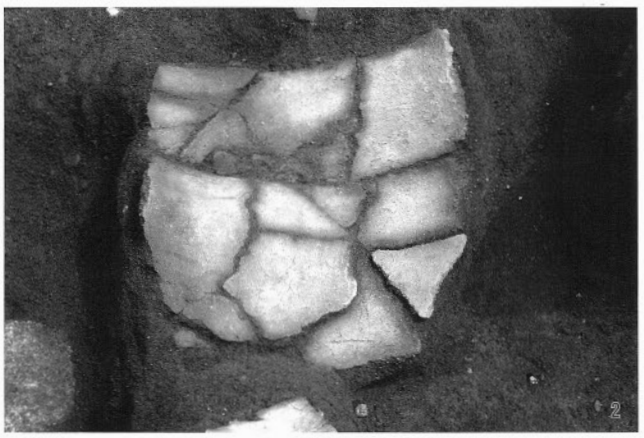




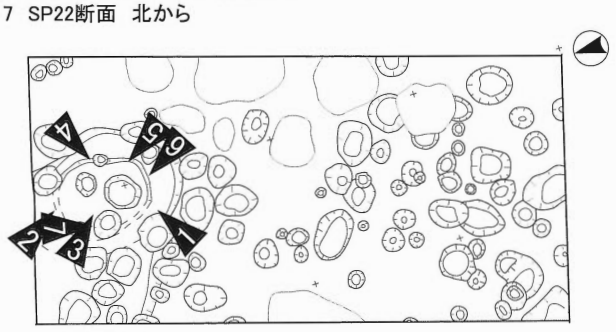
1　SI01・SI82完掘（全景）　西北から
2　SI01・SI82東西ベルト断面　南東から
3　SI01・SI82南北ベルト断面　西南から
4　SI01南北・東西ベルト断面（下層）　北西から

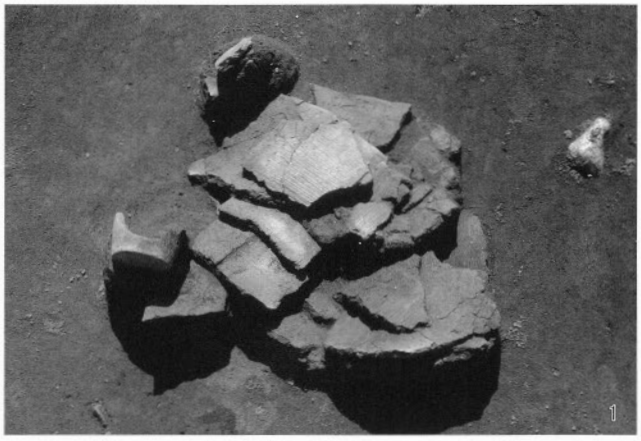


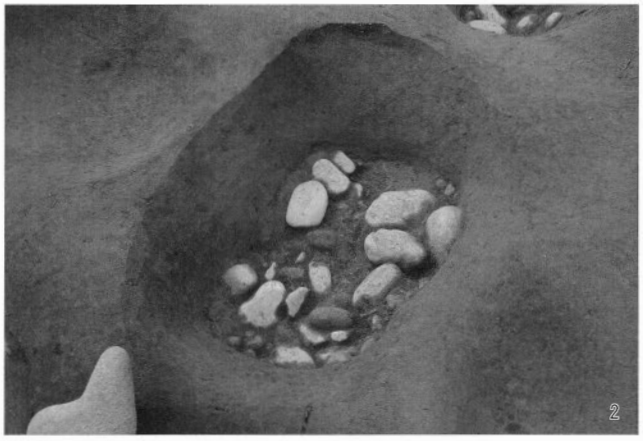
PL.6　竪穴建物（SI01）・土坑（SK02）

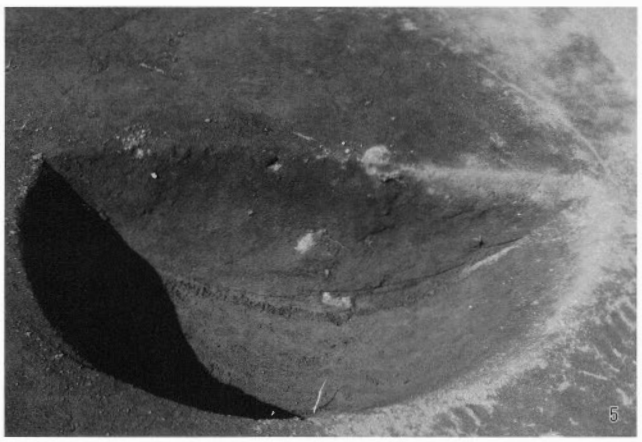


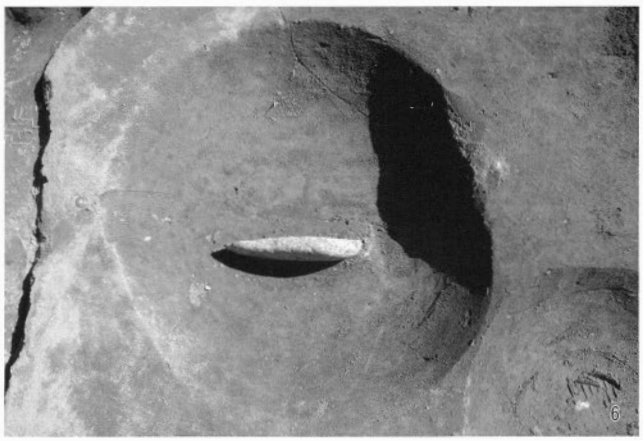
1　SI01遺物出土状況　西南から
2　SI01土器出土状況(№2)　北西から
3　SI01土器出土状況(№48)　北西から
4　SI01炉出土状況　東北から
5　SI01炉内部断面　南東から
6　SK02遺物出土状況　南東から
7　SP22断面　北から





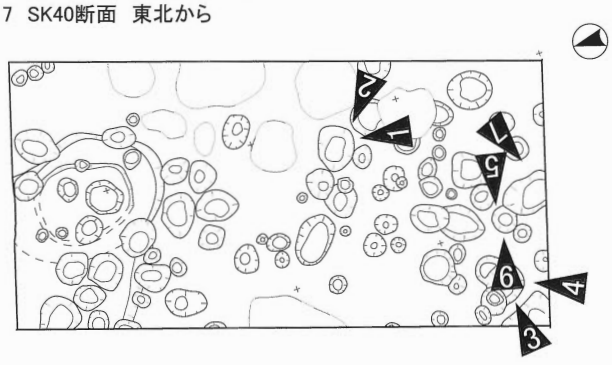




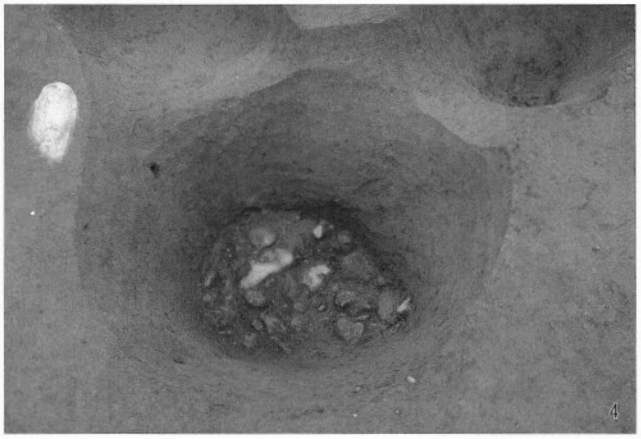


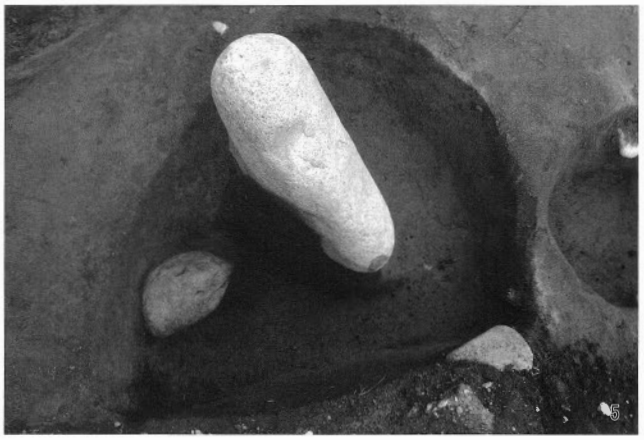
1　SK06土器出土状況(No.51・55)　南から
2　SK06完掘　南東から

3　SK07・SP60断面　西から
4　SK07・SP60遺物出土状況　南西から
5　SK15断面　東から
6　SK15礫出土状況　西から
7　SK40断面　東北から



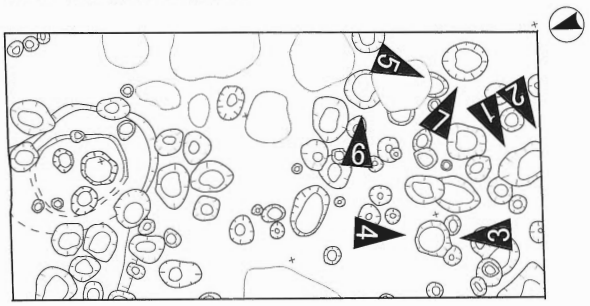
PL.8　土坑

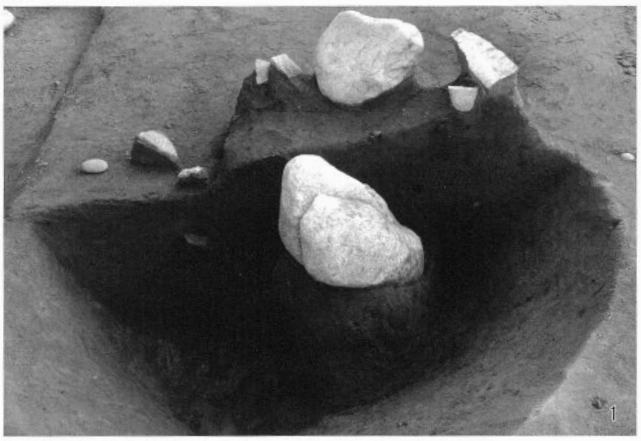


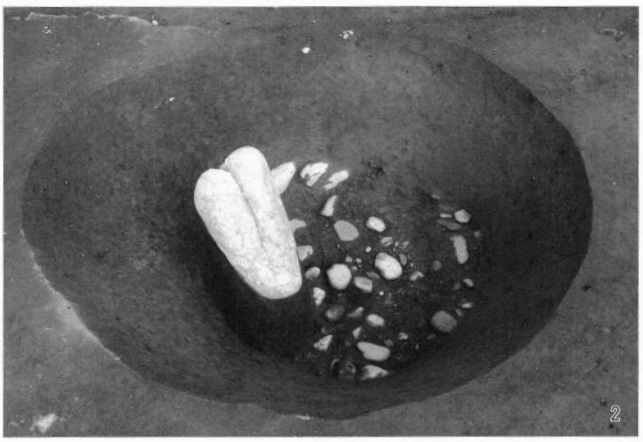


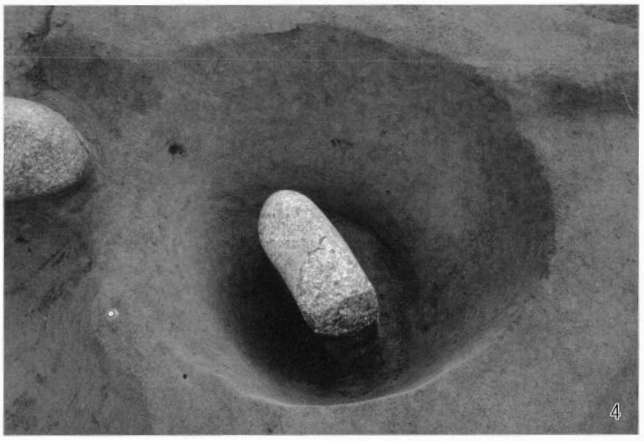
1　SK40遺物出土状況　東から
2　SK40完掘　東から

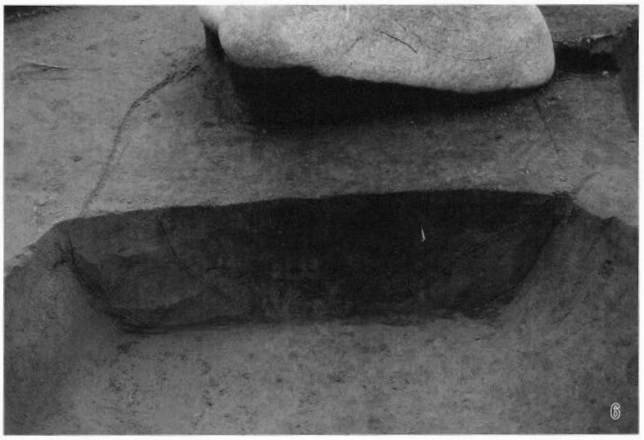
3　SK18断面　南西から
4　SK18完掘　北東から
5　SK19礫出土状況　北東から
6　SK20礫出土状況　西北から
7　SK37・SK19検出　北西から

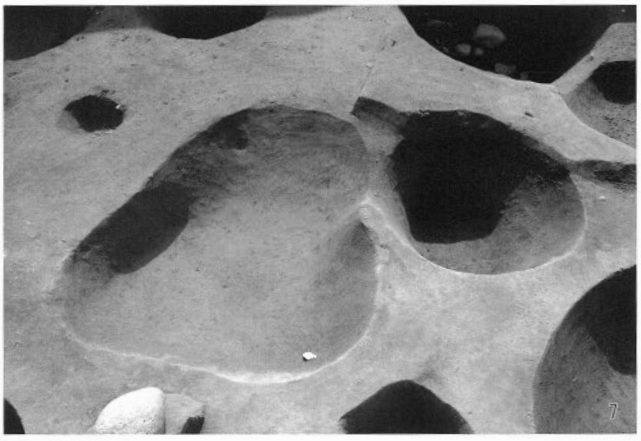




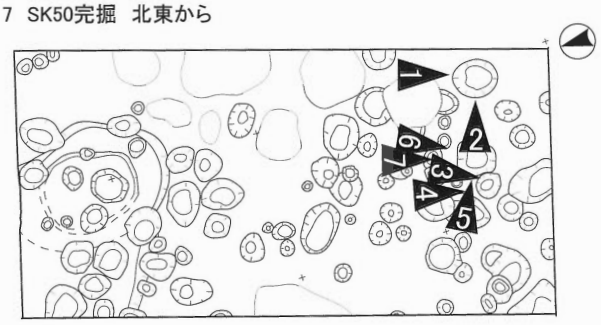




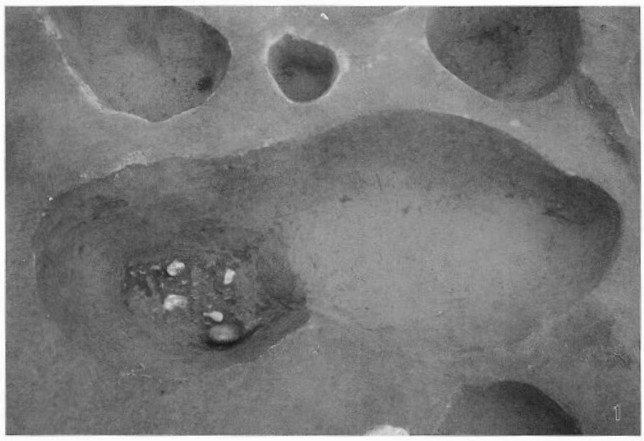


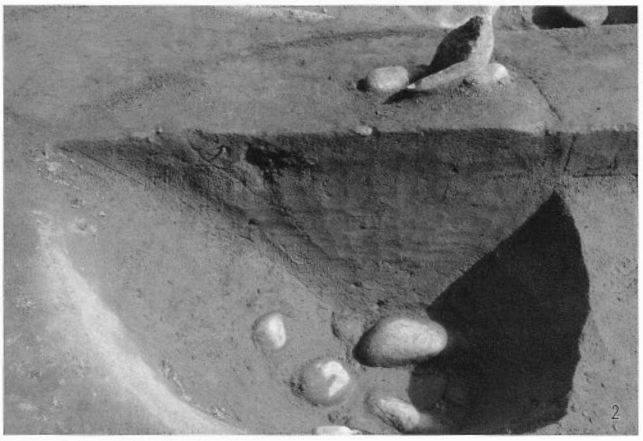


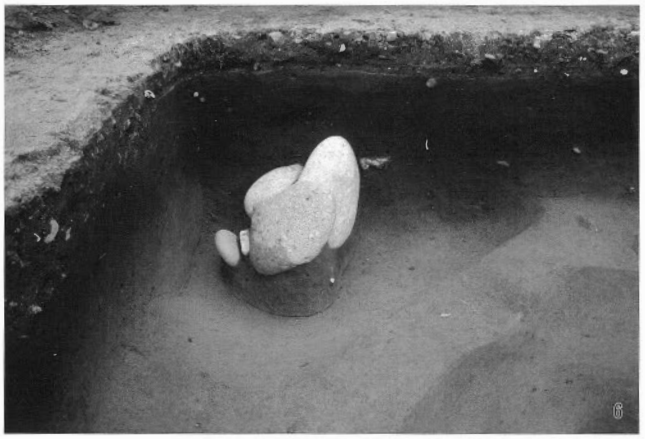
1　SK37断面　北東から
2　SK37礫出土状況　西北から
3　SK21礫出土状況　北東から
4　SK21礫(№244)出土状況　北東から
5　SK50検出　西北から
6　SK50断面　北東から
7　SK50完掘　北東から



PL.10　土坑

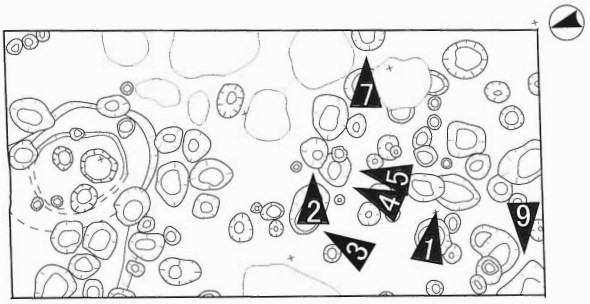






1　SK39・SK70完掘　西北から
2　SK52断面　西北から

3　SK58完掘　南西から
4　SK72断面　南西から
5　SK72遺物出土状況　南西から
6　SK59礫出土状況・断面　東南から
7　SK65断面　西北から



PL.11　縄文土器（集合）

PL.12　縄文土器（立面①）

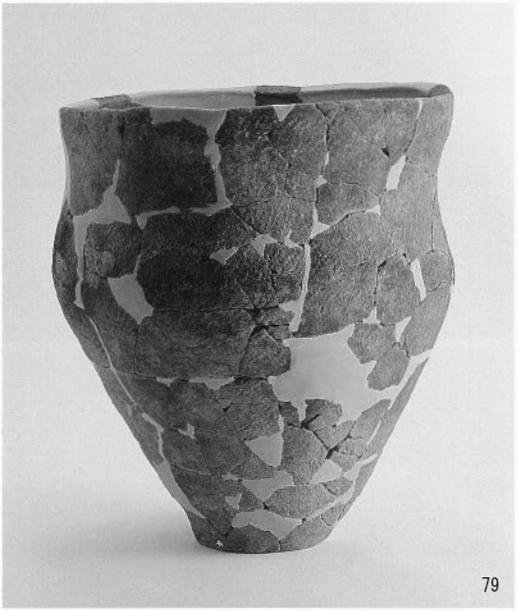
89

87

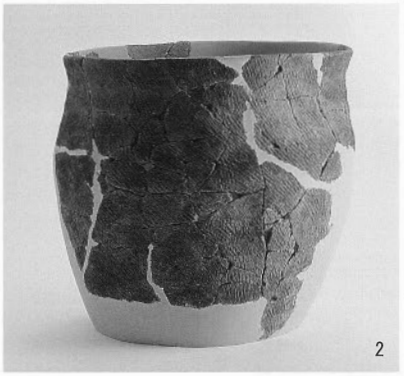
55

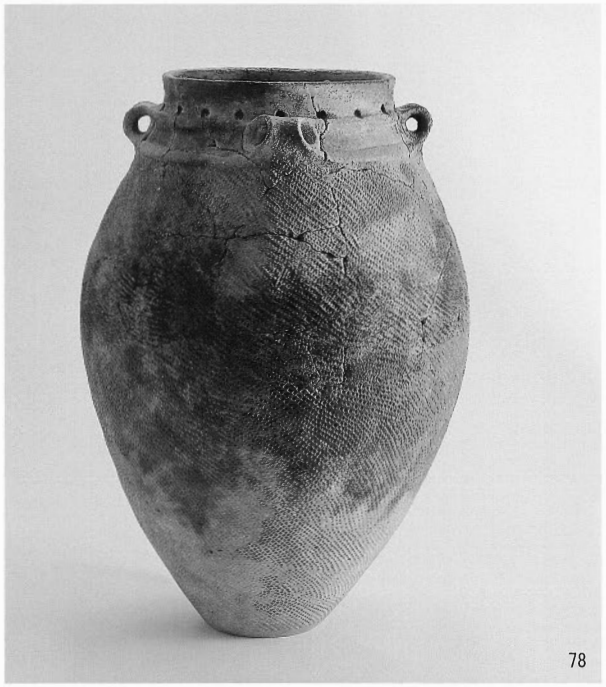
1

91


79

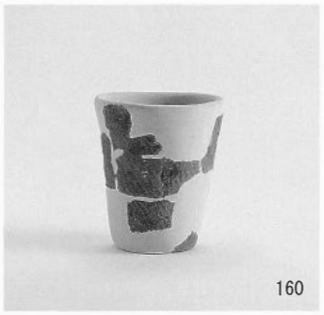
13


2

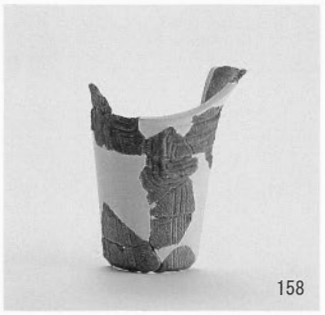

78

49

86


160

48


158

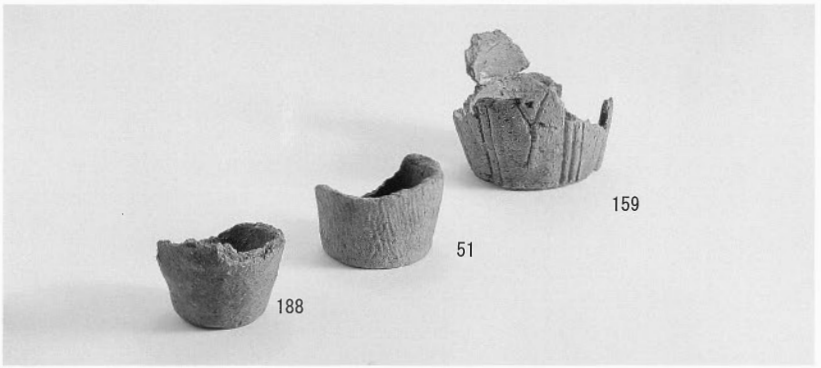
60

90

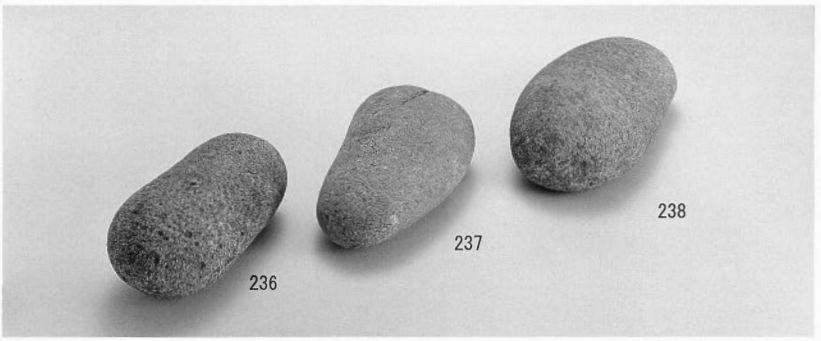
162

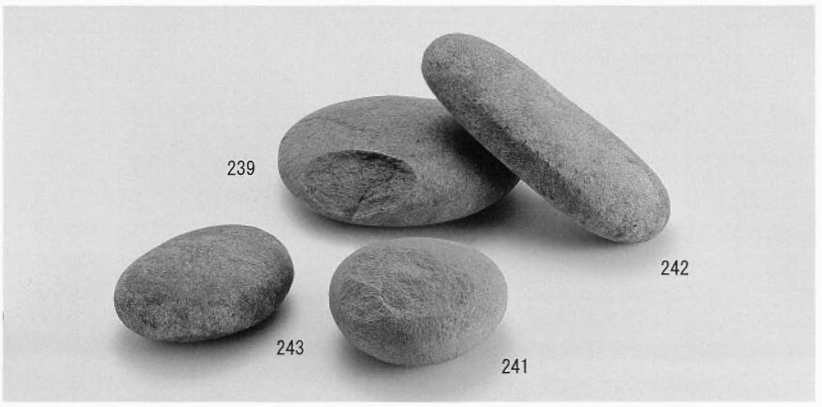
244

83

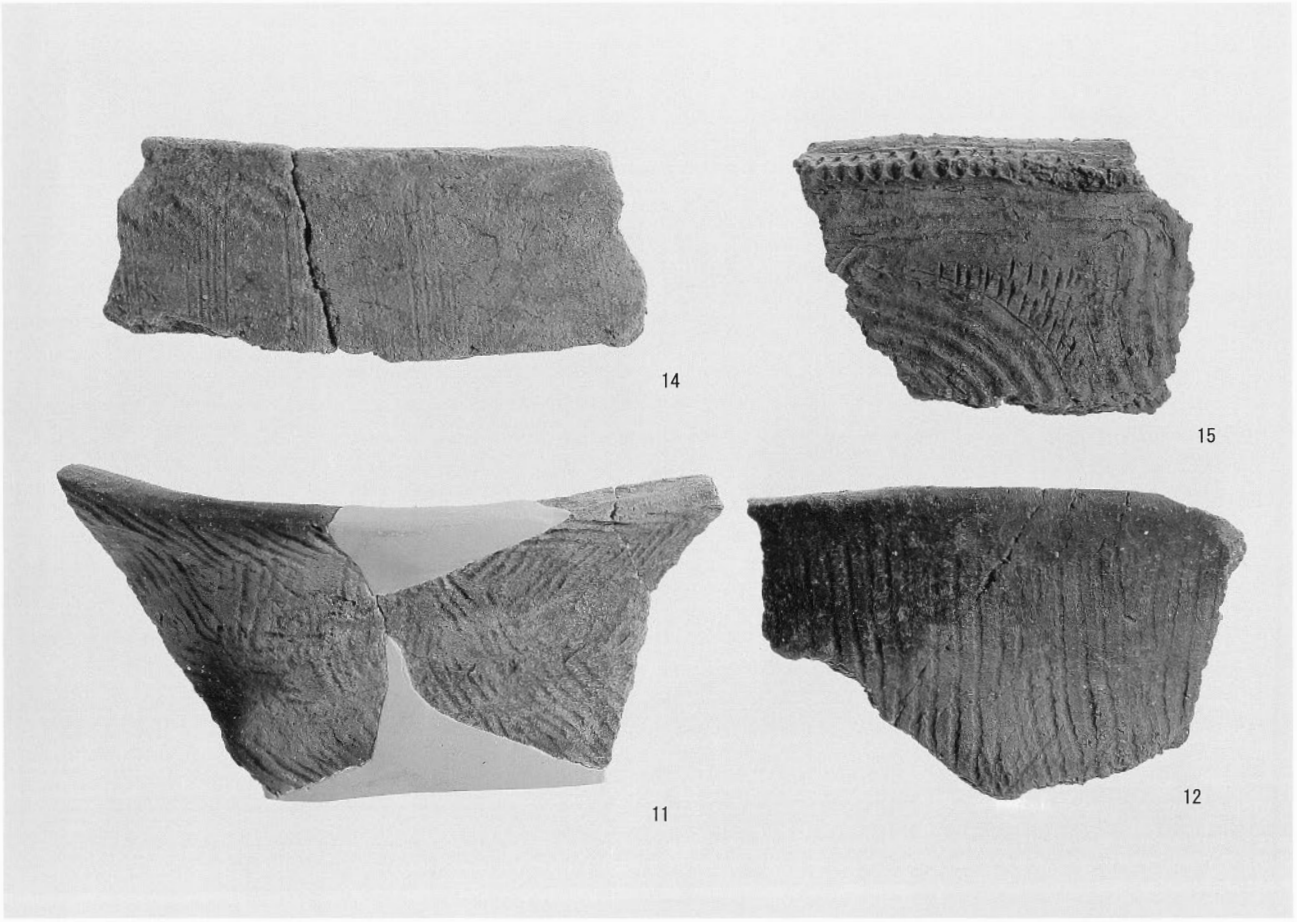

159
51
188

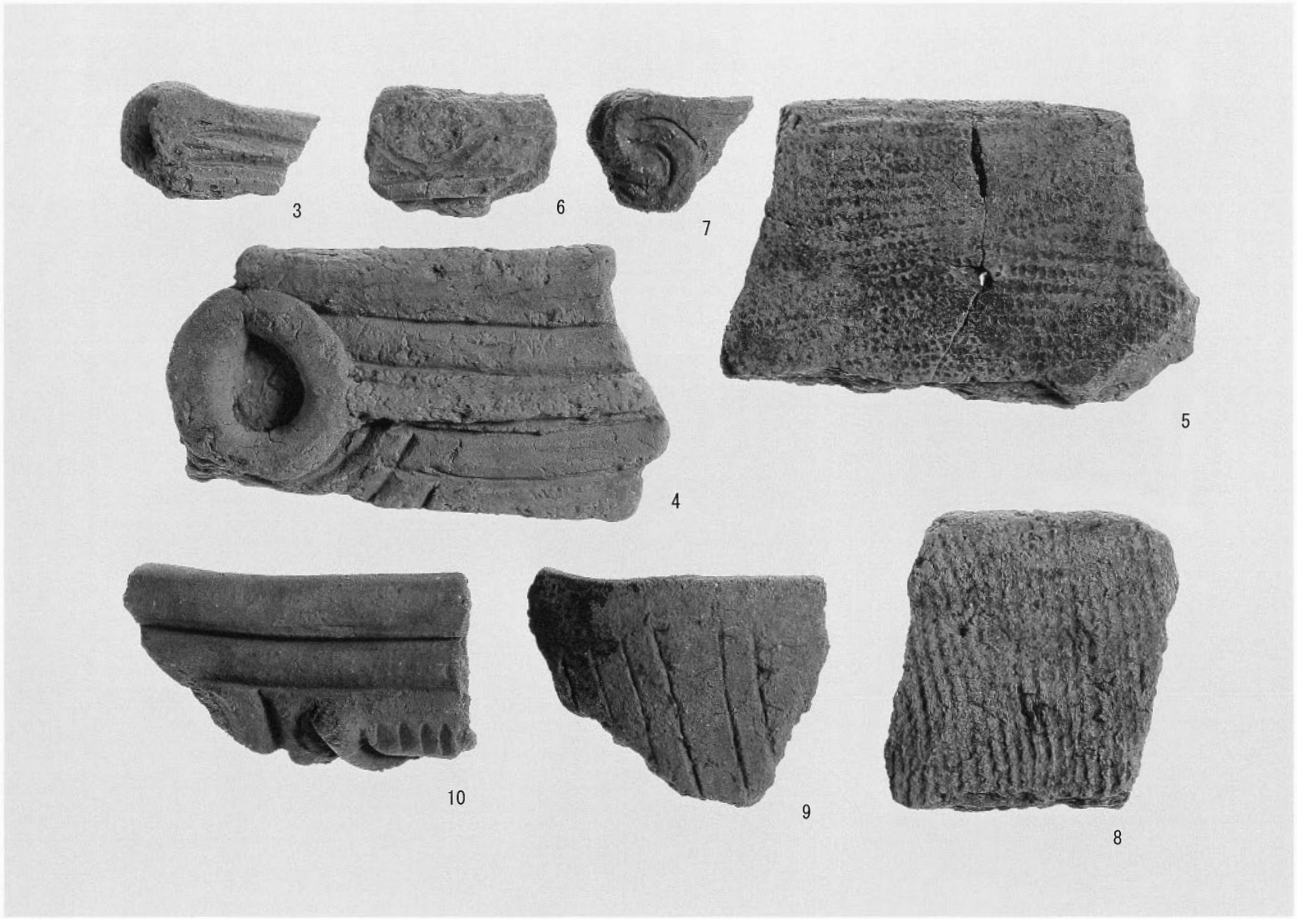
88

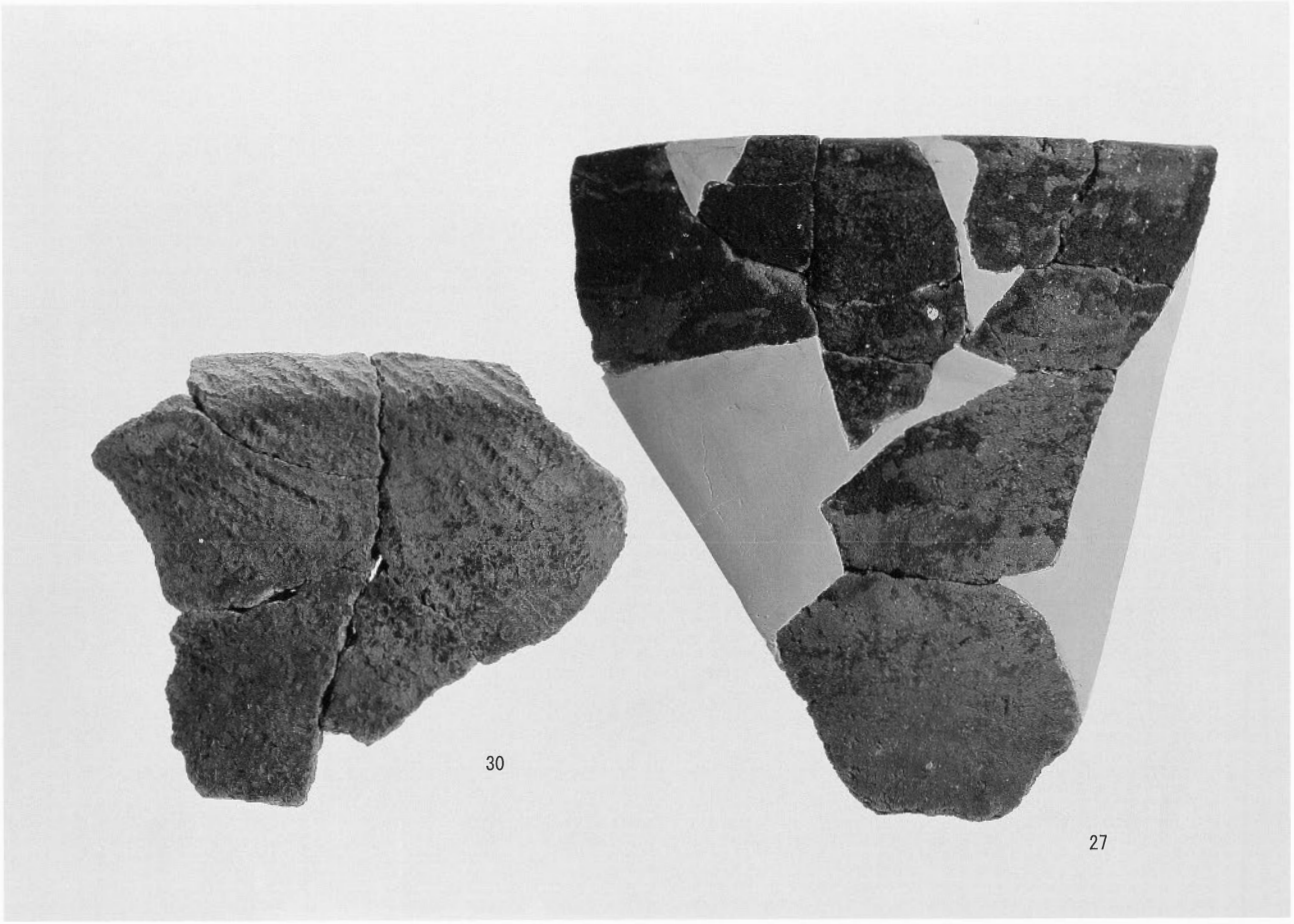

238
237
236

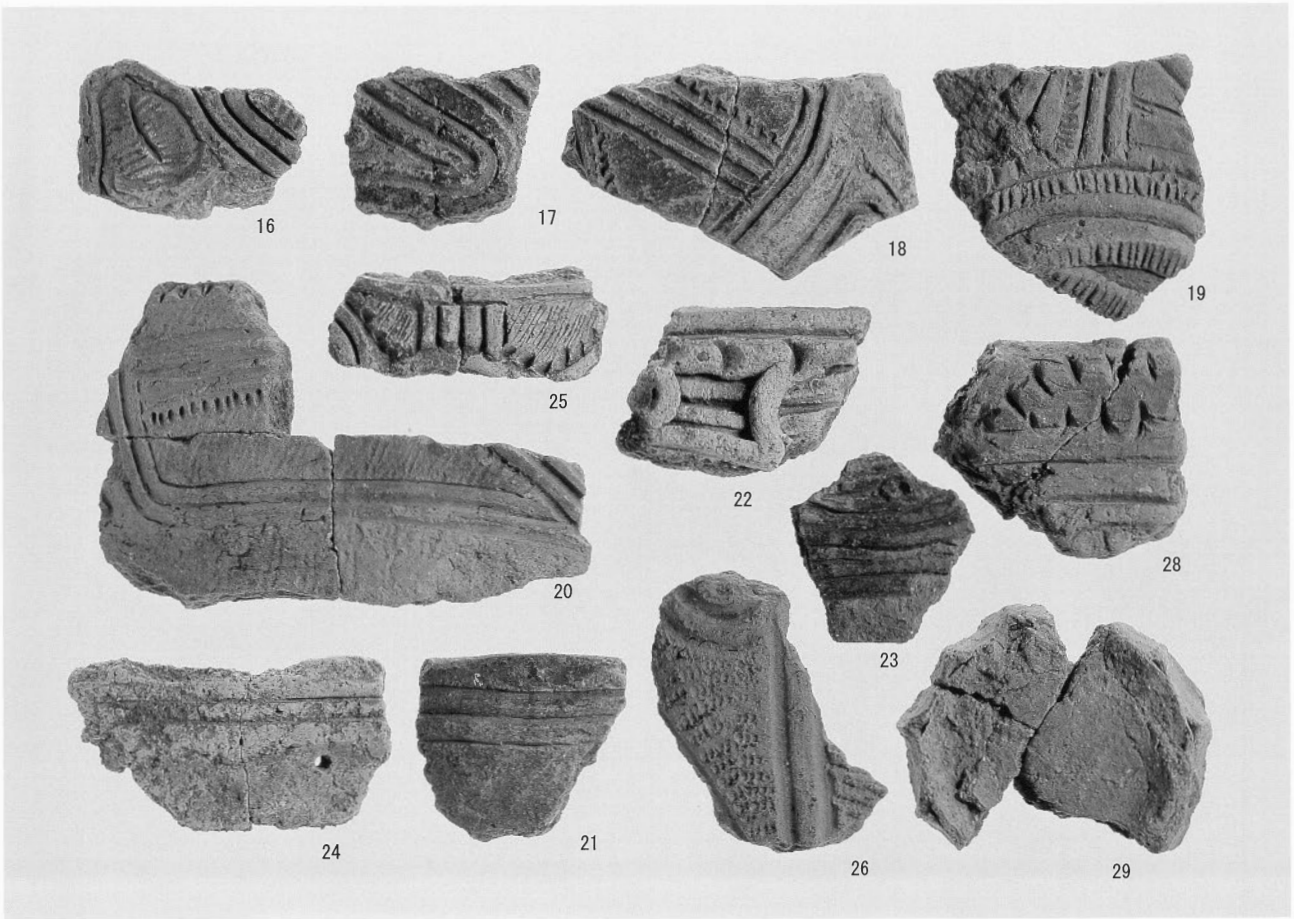

239
242
243
241

PL.14　縄文土器（俯瞰①）

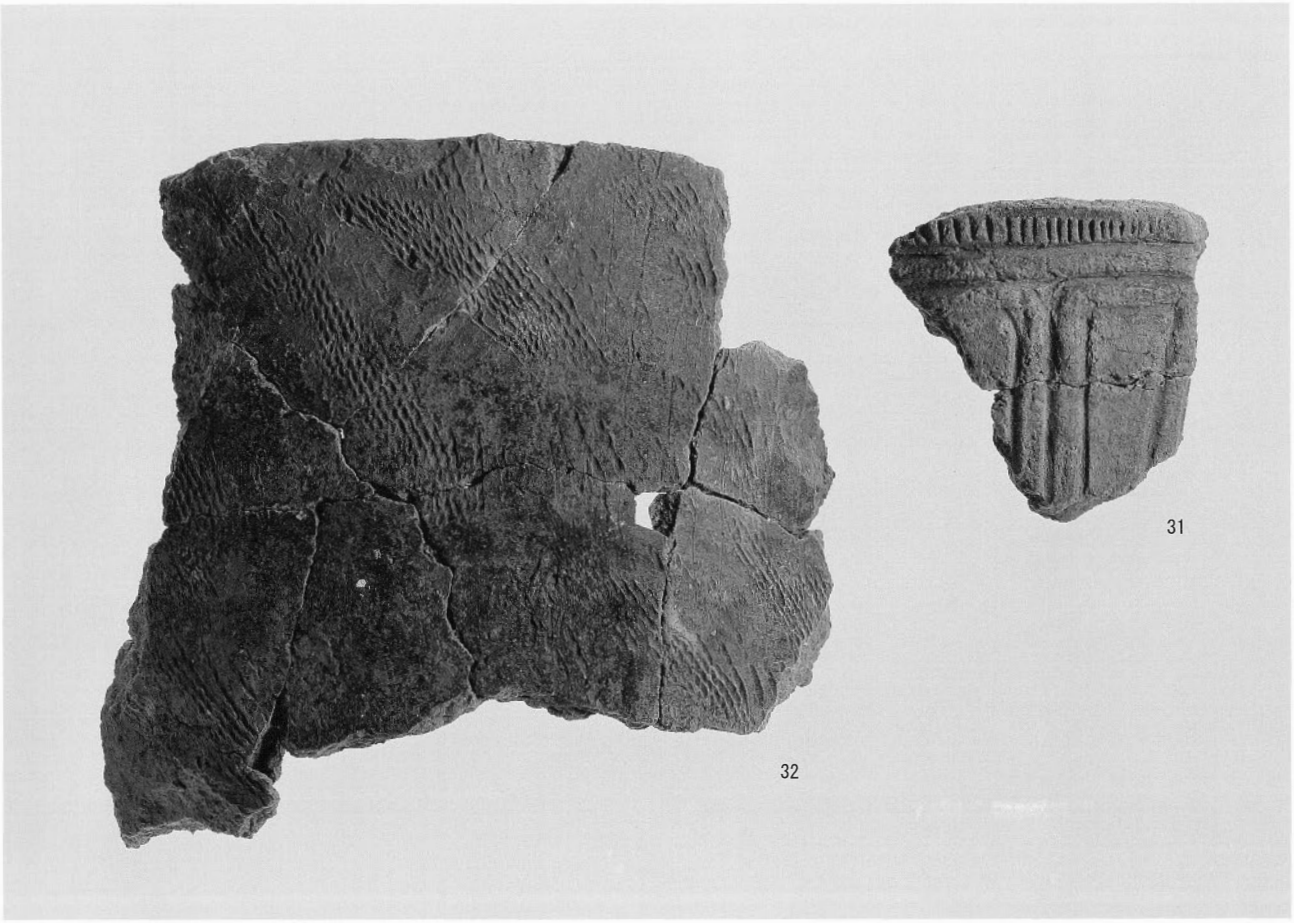


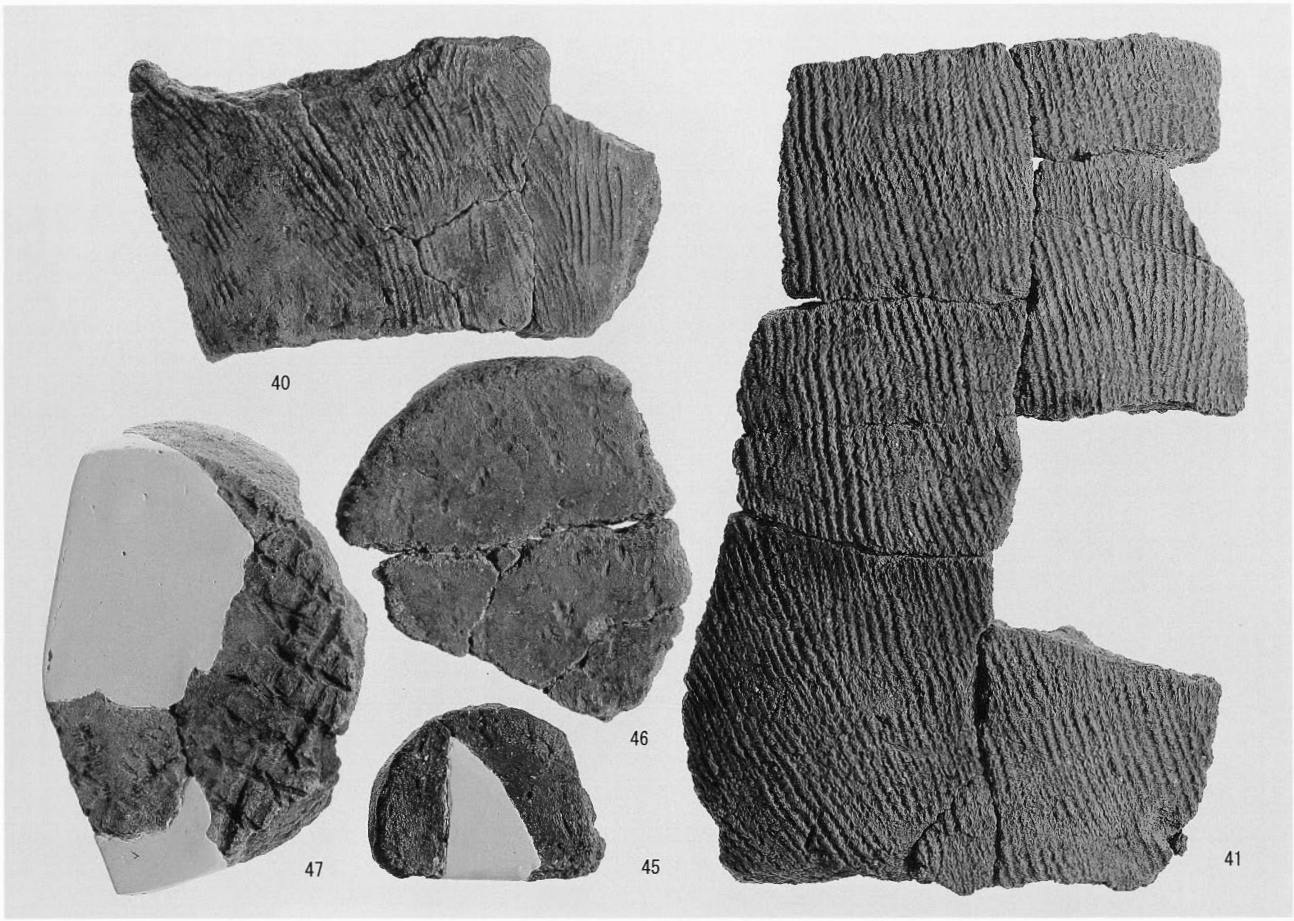


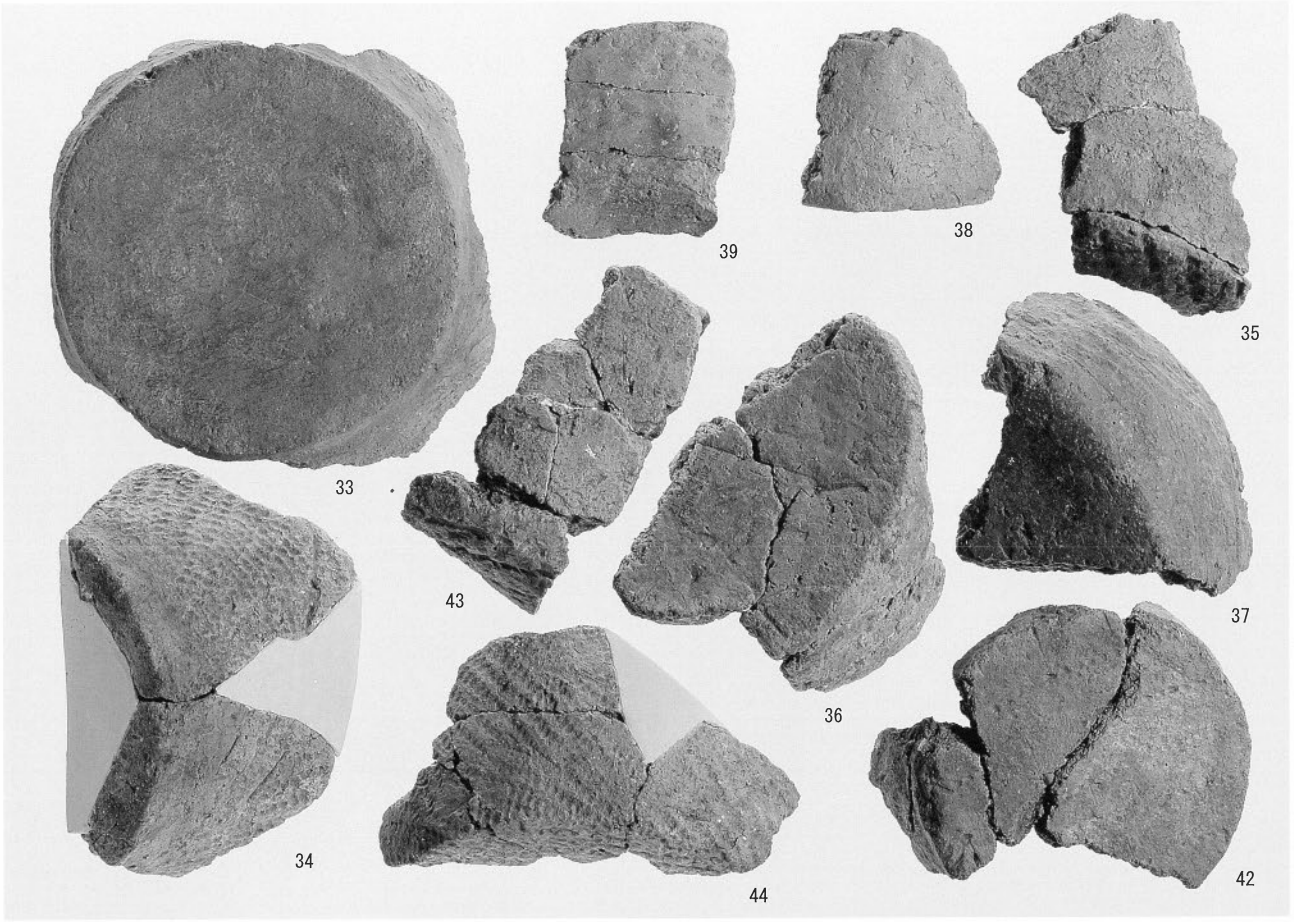

30
27

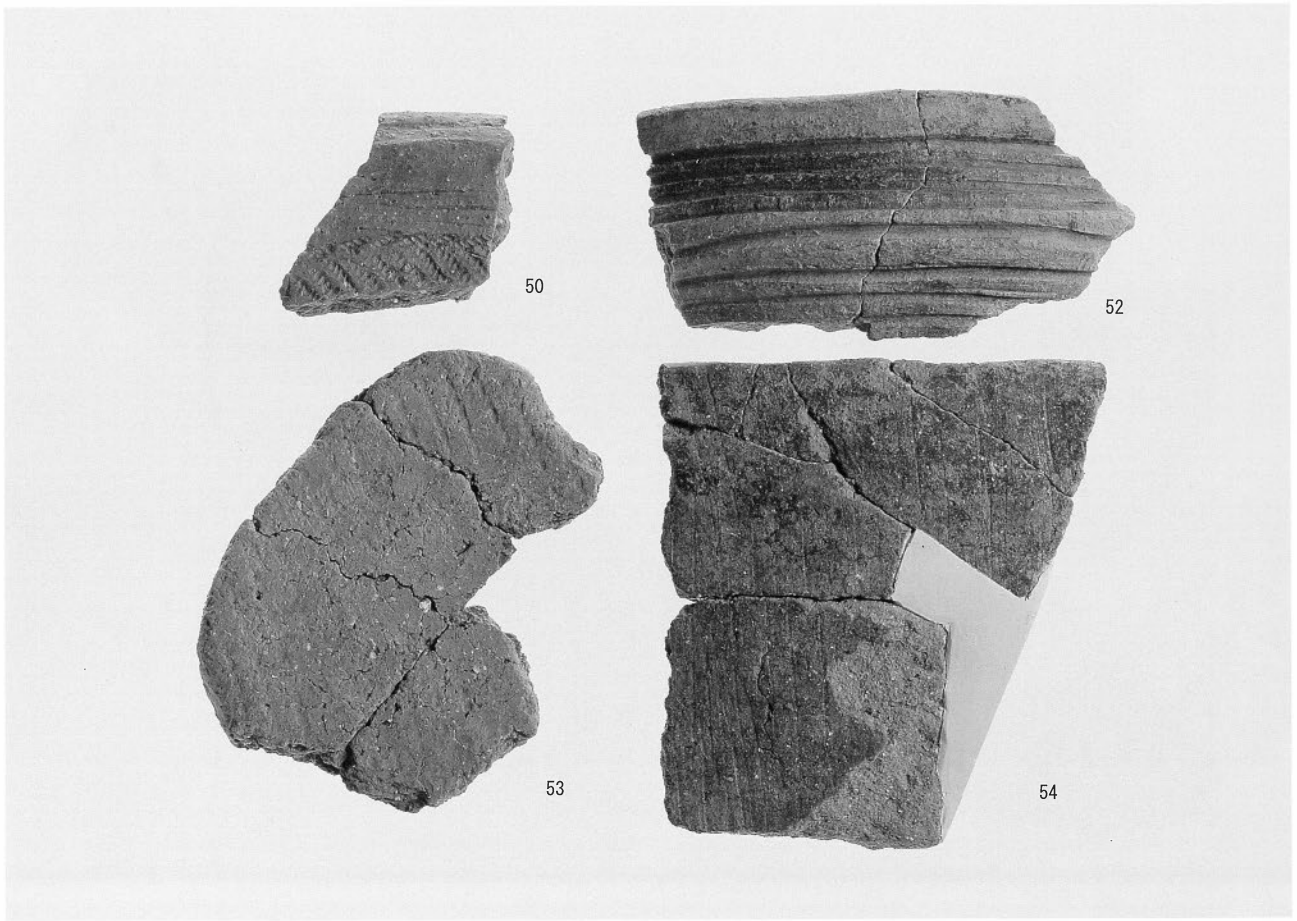

16
17
18
19
25
22
20
28
23
24
21
26
29

PL.16　縄文土器（俯瞰③）

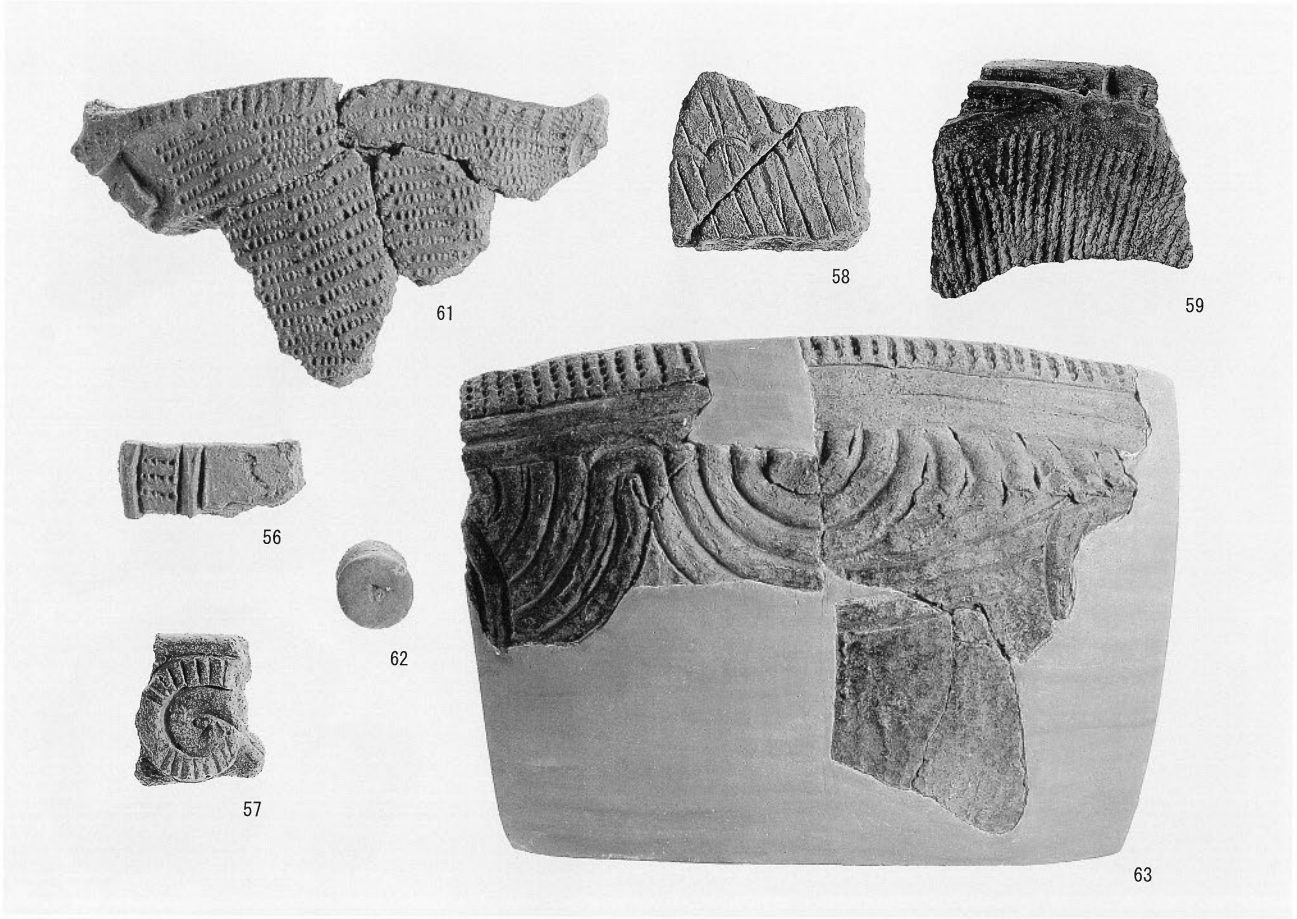


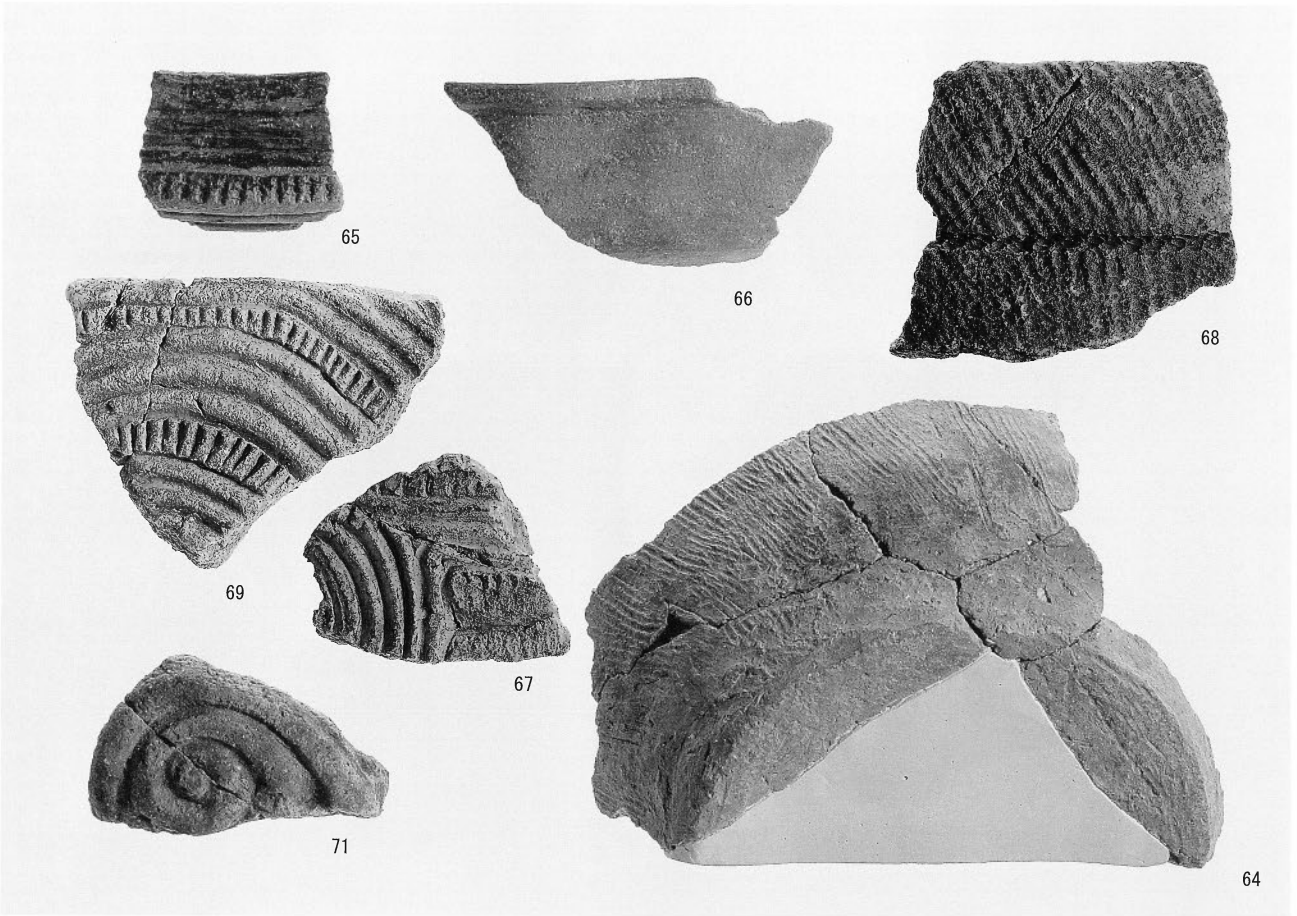



33
39
38
35
43
36
37
34
44
42

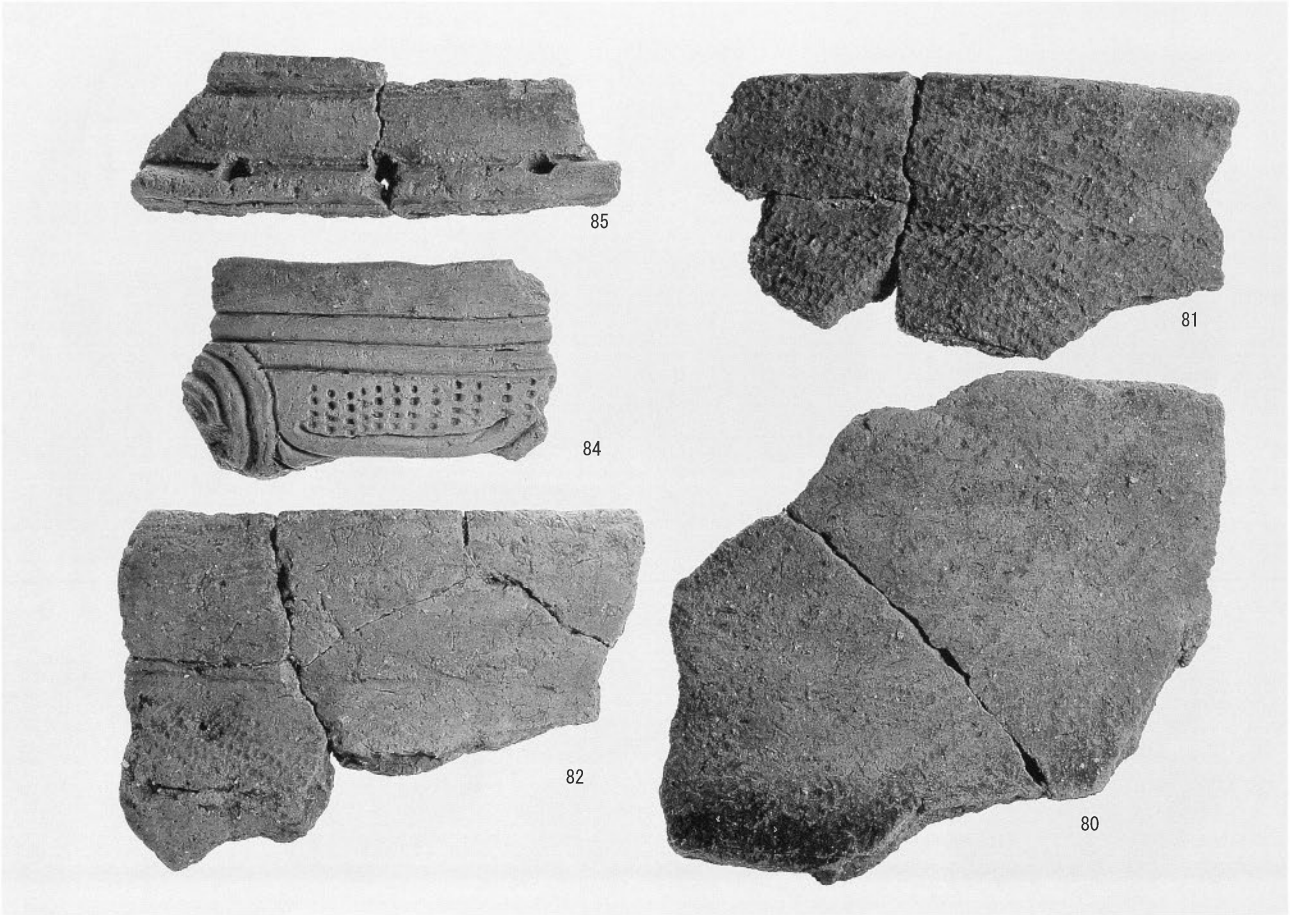

50
52
53
54

PL.18　縄文土器（俯瞰⑤）

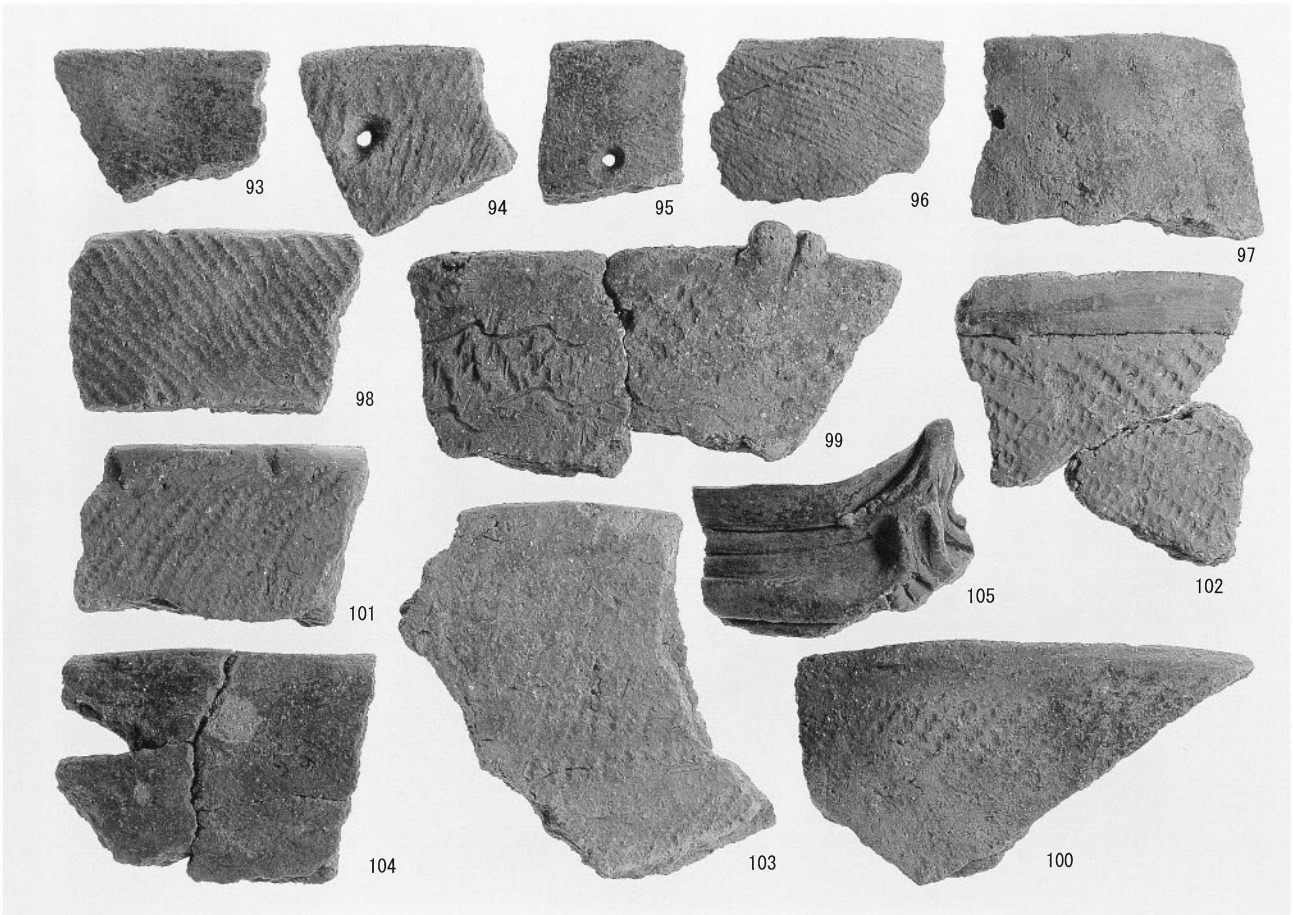


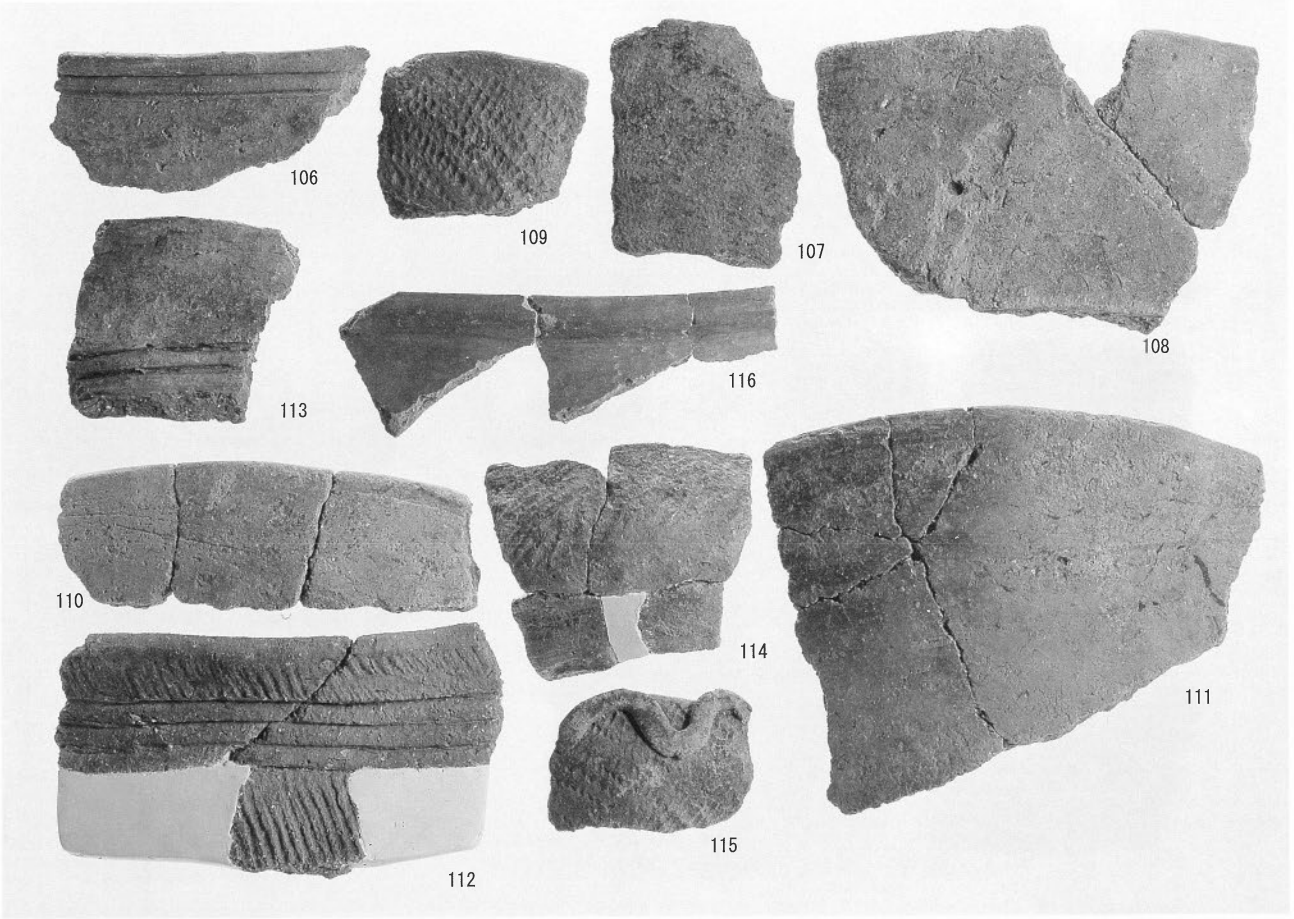


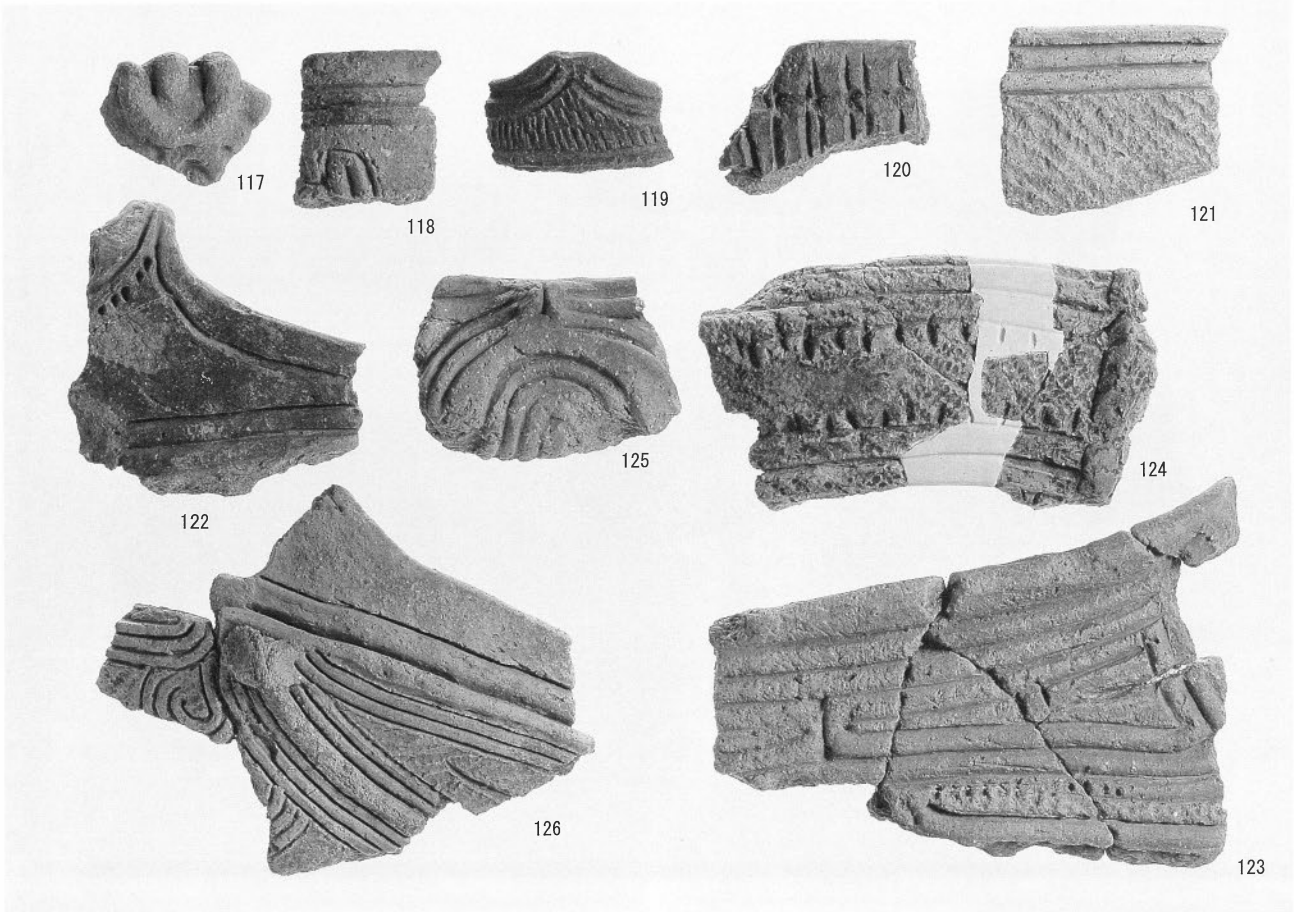
73
76
75
72
70
77
74


85
81
84
82
80

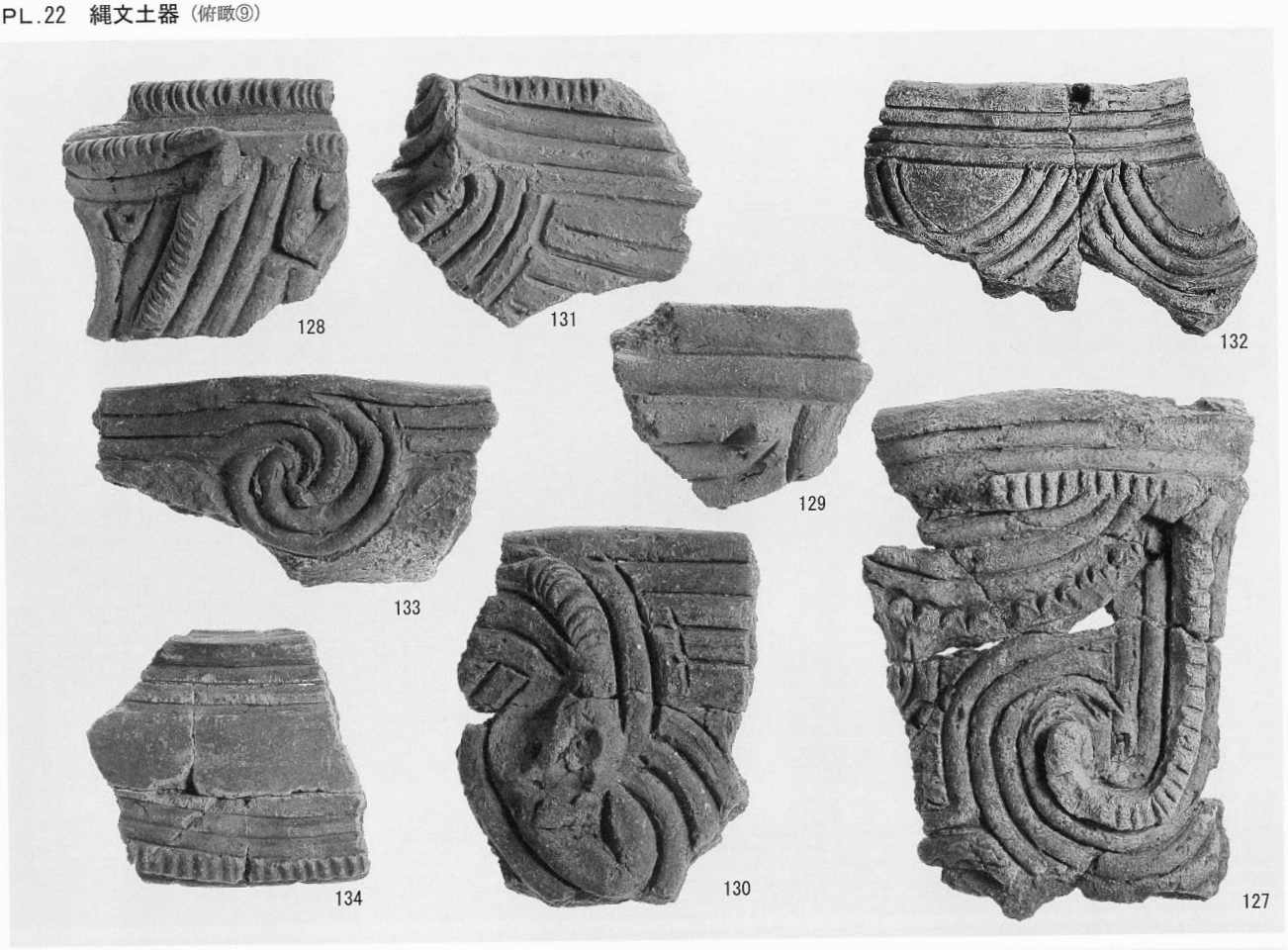
PL.20　縄文土器（俯瞰⑦）

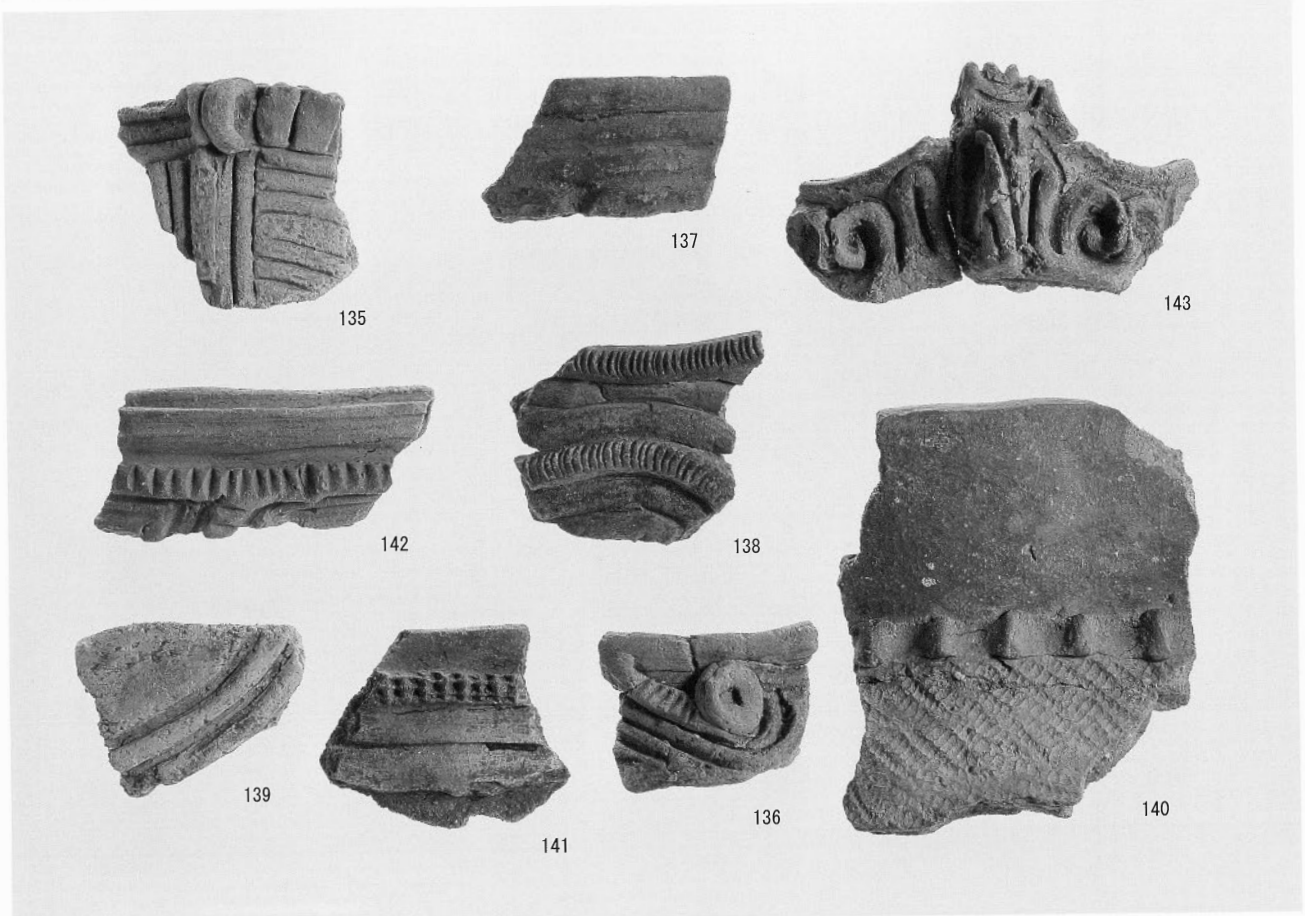


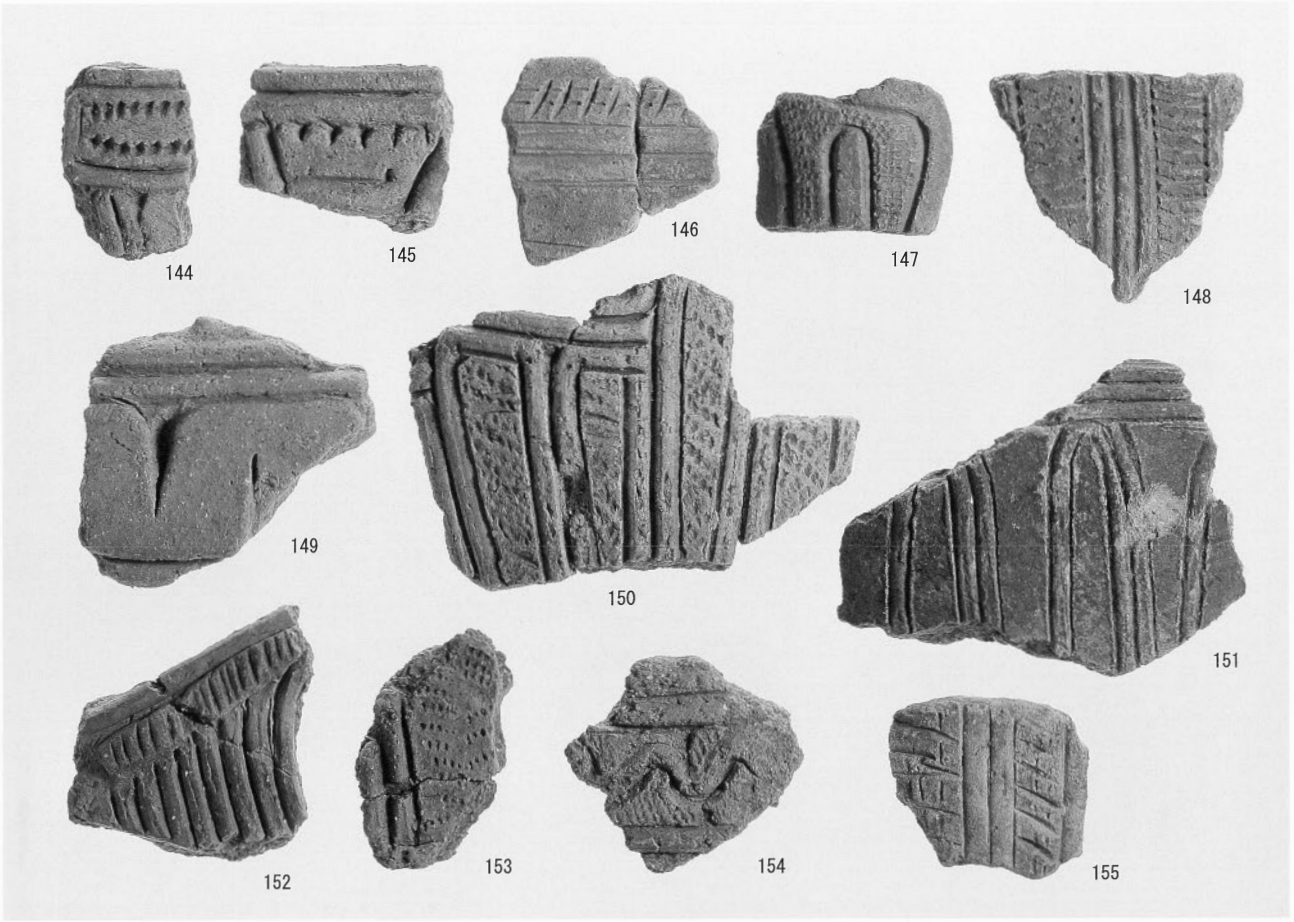

106
109
107
108
113
116
110
114
111
112
115

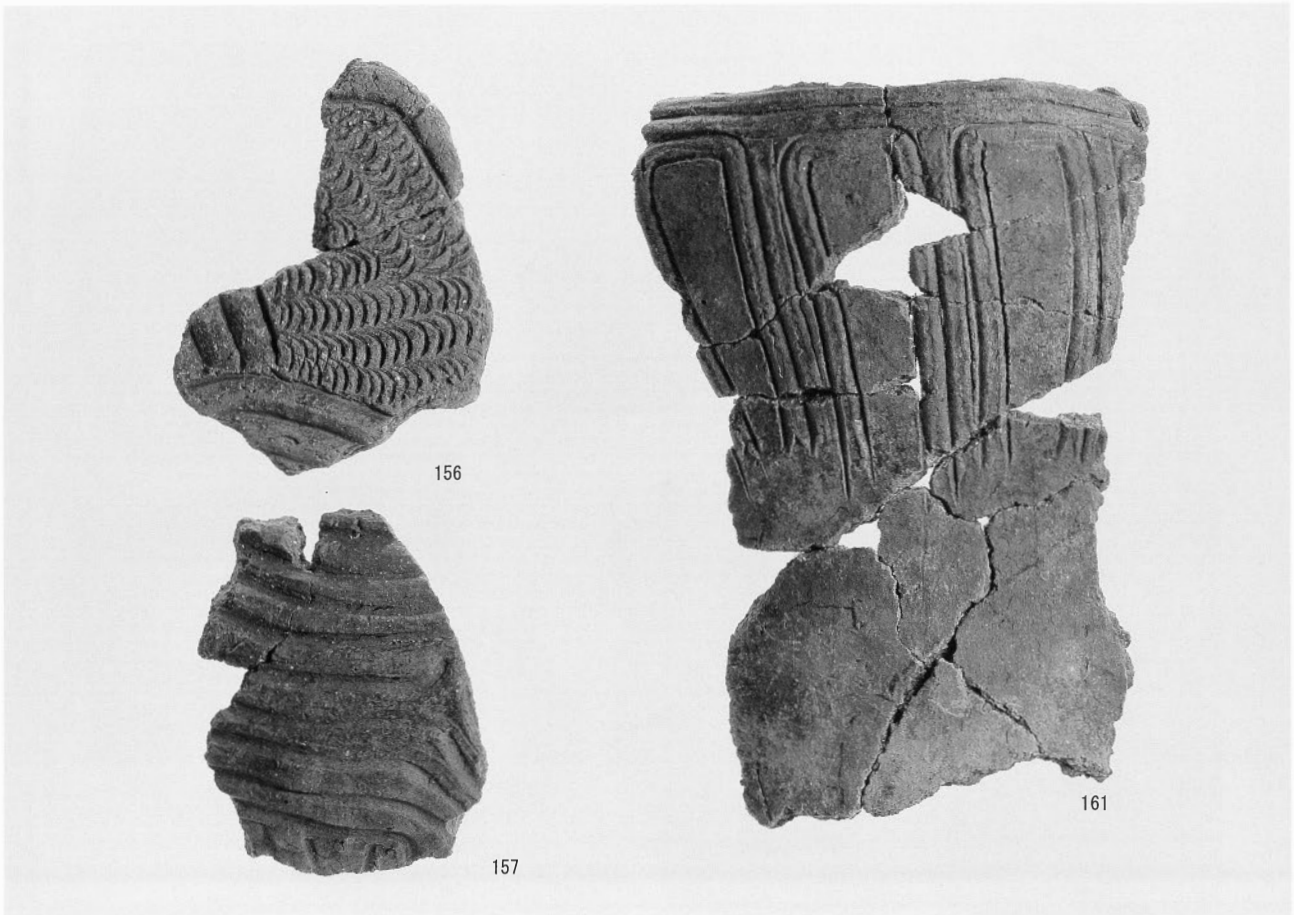

117
118
119
120
121
122
125
124
126
123

PL.22　縄文土器（俯瞰⑨）

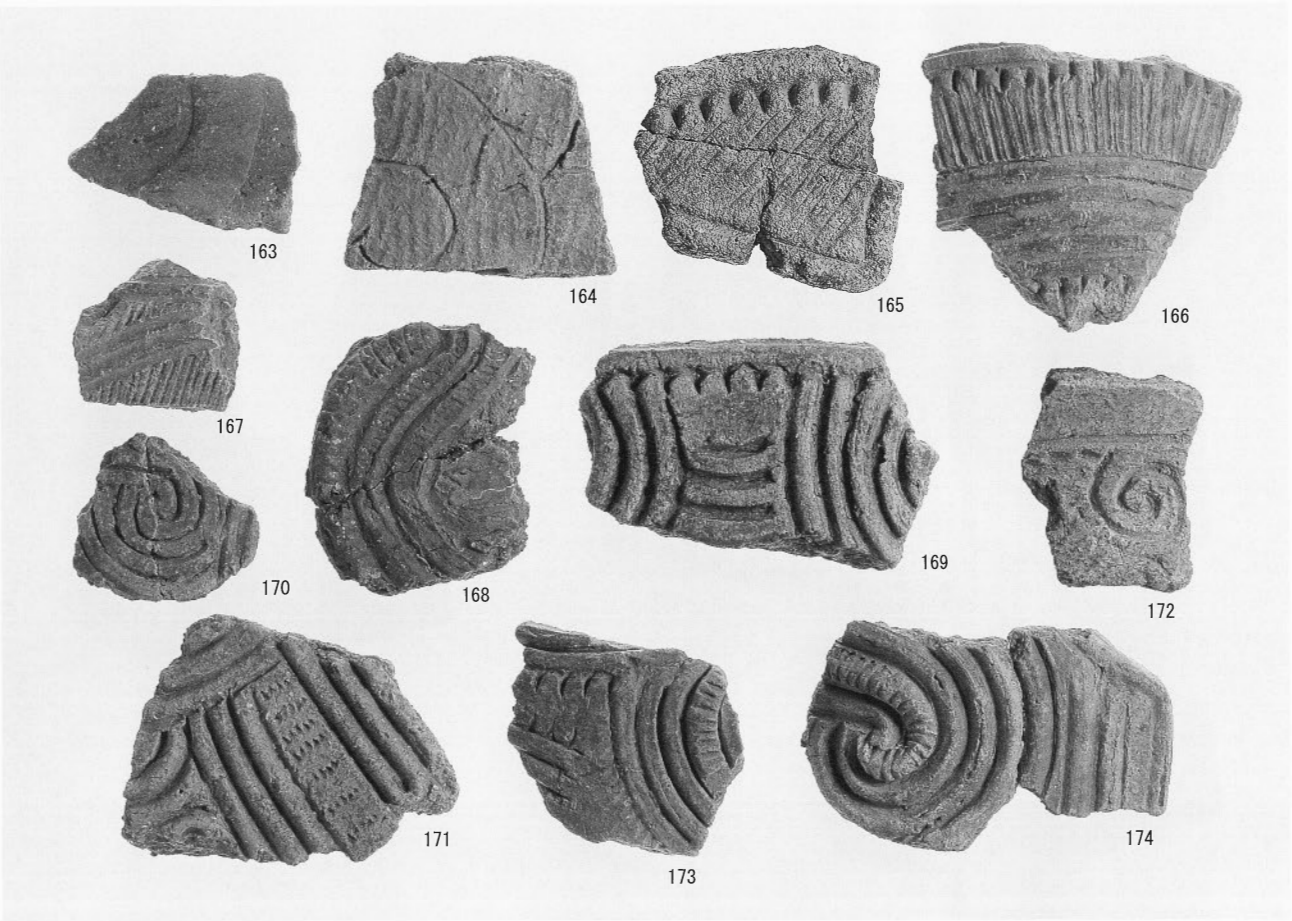


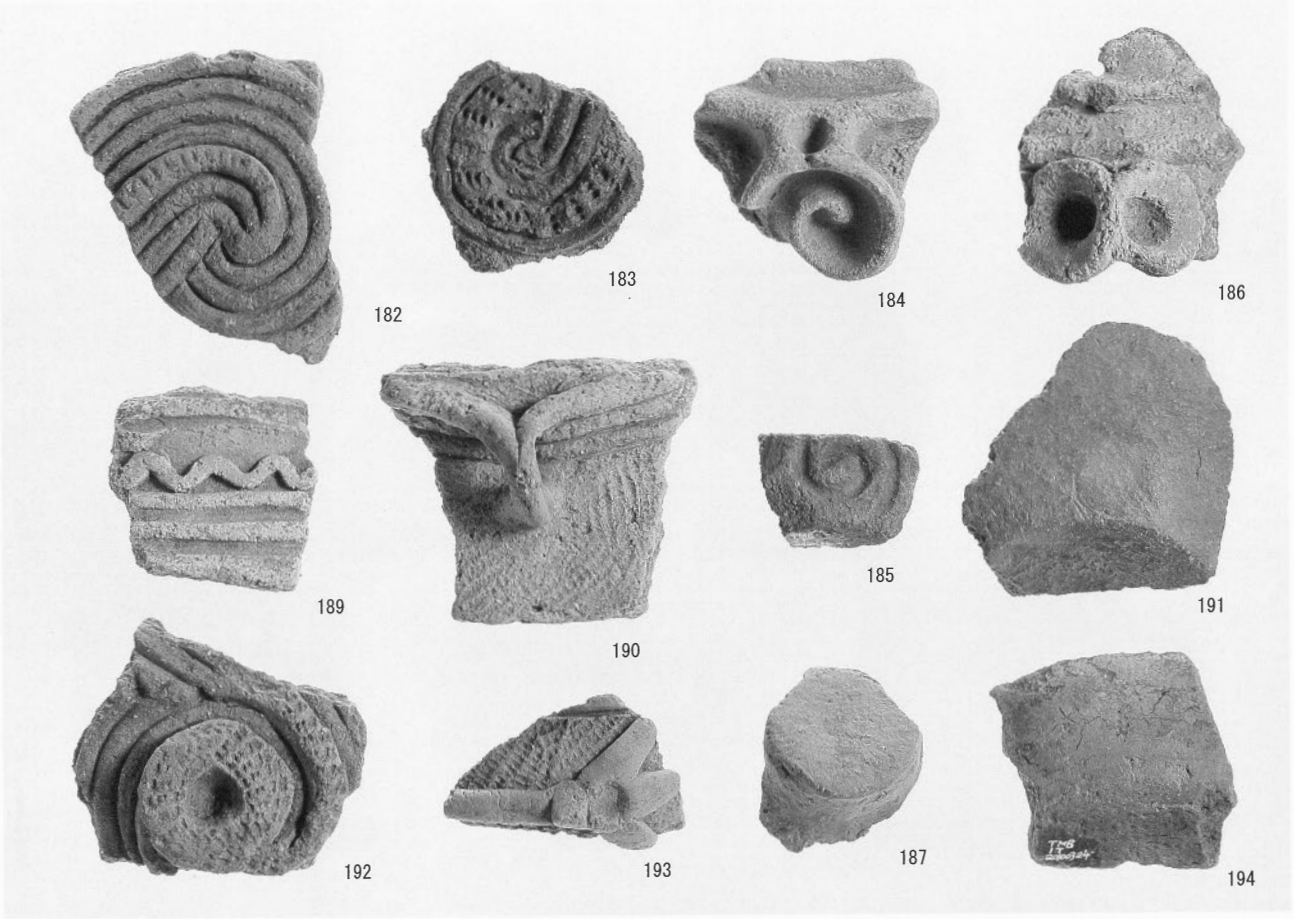


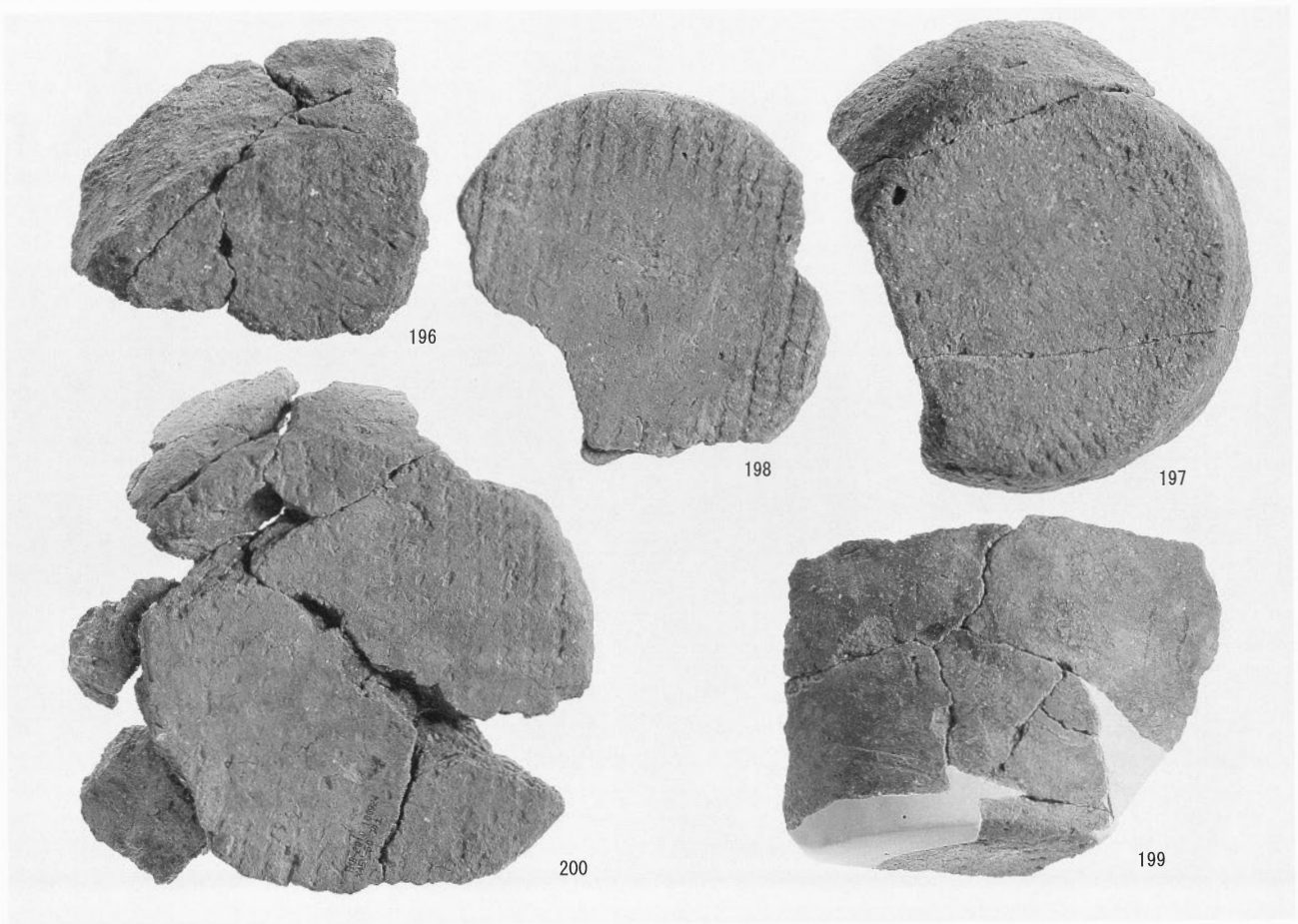

144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155


156
157
161

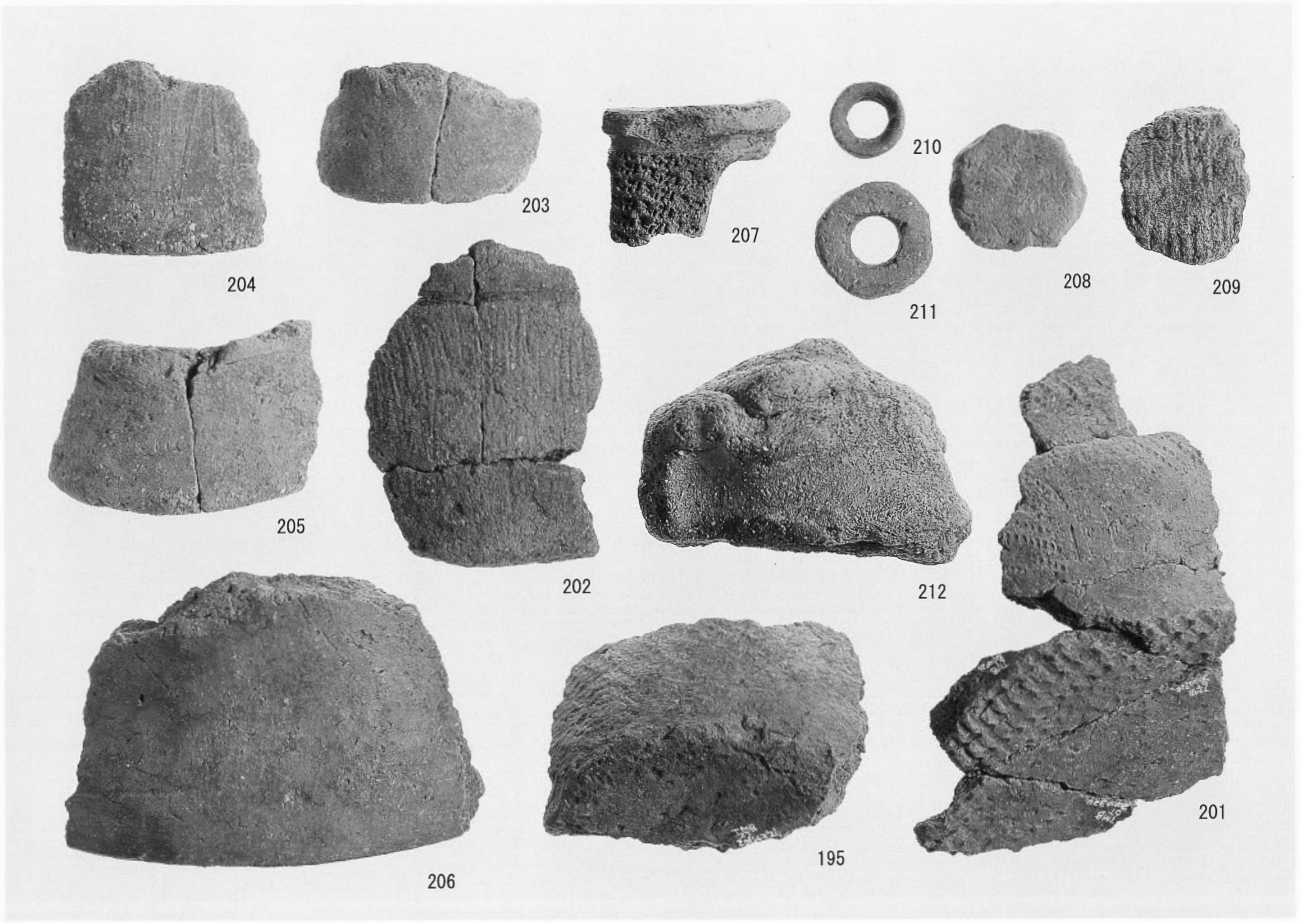
PL.24　縄文土器（俯瞰⑪）

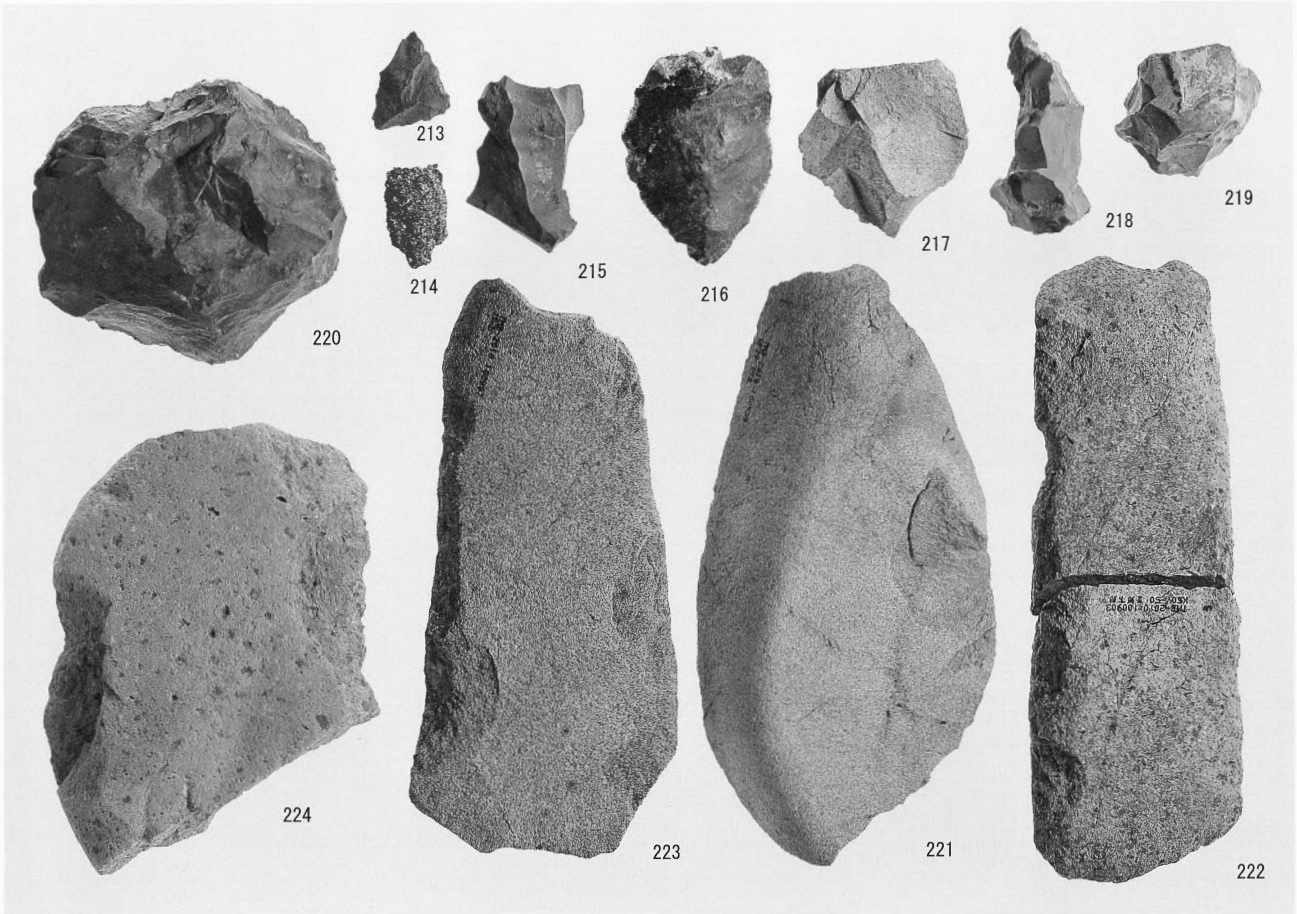


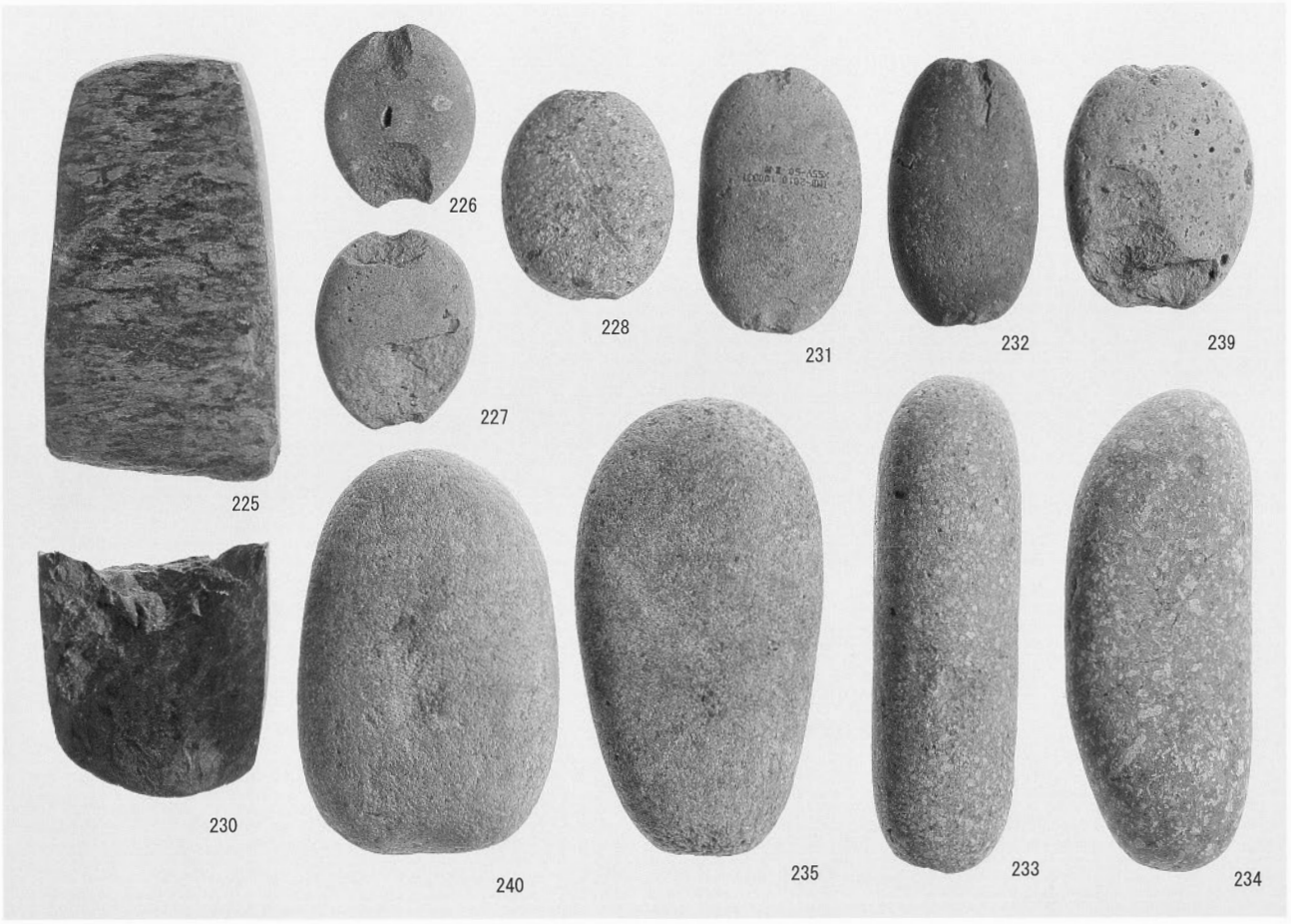

182
183
184
186
189
190
185
191
192
193
187
194


196
198
197
200
199

PL.26　縄文土器・石製品（俯瞰⑬）






225
226
227
228
231
232
239
230
240
235
233
234

報告書抄録

ふりがな	まつばらいせきはっくつちょうさほうこく
書名	松原遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	野原大輔、阿部将樹、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	①砺波市教育委員会 ②株式会社アーキジオ
所在地	①〒932-0393　富山県砺波市庄川町青島401　TEL0763-82-1904　FAX0763-82-3521 ②〒933-0824　富山県高岡市西藤平蔵581　TEL0766-63-8850　FAX0766-63-8851
発行年月日	2012年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まつばらいせき 松原遺跡	とやまけん 富山県 となみし 砺波市 しょうがわまち 庄川町 しめの 示野	162086	405005	36°34′25″	136°59′6″	2010.8.20～ 2010.10.18	156.39㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松原遺跡	集落	縄文時代中期	竪穴建物2、土坑19、ピット63、風倒木痕	縄文土器、土製円盤、耳飾り、石鏃、スクレーパー、石核、石錘、打製石斧、磨製石斧、叩石、凹石、擦石、石棒	竪穴建物の絶対年代が紀元前3,000年前後であることが判明した。

調査の要約	縄文時代中期中葉を主体とする集落跡の調査である。遺構は竪穴建物が2棟が検出された他、礫を伴う土坑群が調査区南側に広がっていた。土器型式は中期中葉の上山田・天神山式と古府式が中心であるが、中期前葉の新崎式や中期後葉の古串田新式も若干認められた。在地以外の土器型式では、馬高式の中の火炎型土器と対をなす王冠型土器の模倣品や、東北の大木式系統の土器がわずかに出土した。

本書の仕様
●判型……Ａ４判
●頁数……120頁
●組版……写真植字（13級明朝基本）
●印刷……オフセット印刷
●製版……巻頭カラー図版　フェアドット２
　　写真図版（白黒，Ｓトーン）　フェアドット２で製版
●用紙……表　紙　　アートポスト紙　153kg
　　カラー図版　アート紙　70.5kg
　　本文　　書籍用紙　46.5kg
　　写真図版　　アート紙　70.5kg
●製本……左無線綴じ
●表紙加工‥マットP.P.（ポリプロピレン）加工

松原遺跡発掘調査報告

－庄川流域における縄文時代中期の集落遺跡の調査－

2012年（平成24年）3月27日発行

編集　砺波市教育委員会
〒932-0393　富山県砺波市庄川町青島401
TEL0763-82-1904　FAX0763-82-3521

株式会社アーキジオ
〒933-0824　富山県高岡市西藤平蔵581
TEL0766-63-8850　FAX0766-63-8851

発行　砺波市教育委員会

印刷　株式会社チューエツ

EXCAVATION REPORT OF MATSUBARA SITE
Copyright © Tonami-City Board of Education
410 Aoshima Syogawa-machi Tonami-City Toyama 932-0393.Japan

No parts of this publication may be reproduced or copied by any means
without prior permission of the copyright owner.

松原遺跡発掘調査報告

富山県砺波市教育委員会